二次元へいきまっしょい！

にぱいき

本田透 × アニメ会

NIJIGEN he IKIMASSHOI!

KKベストセラーズ

主要登場人物

羽場 もてる
有明亜季に片思い中の非オタク少年。亜季に今までの「モテ」のための生き方を全否定されて衝撃を受け、彼女に好かれるためにオタク道の修行を開始する。

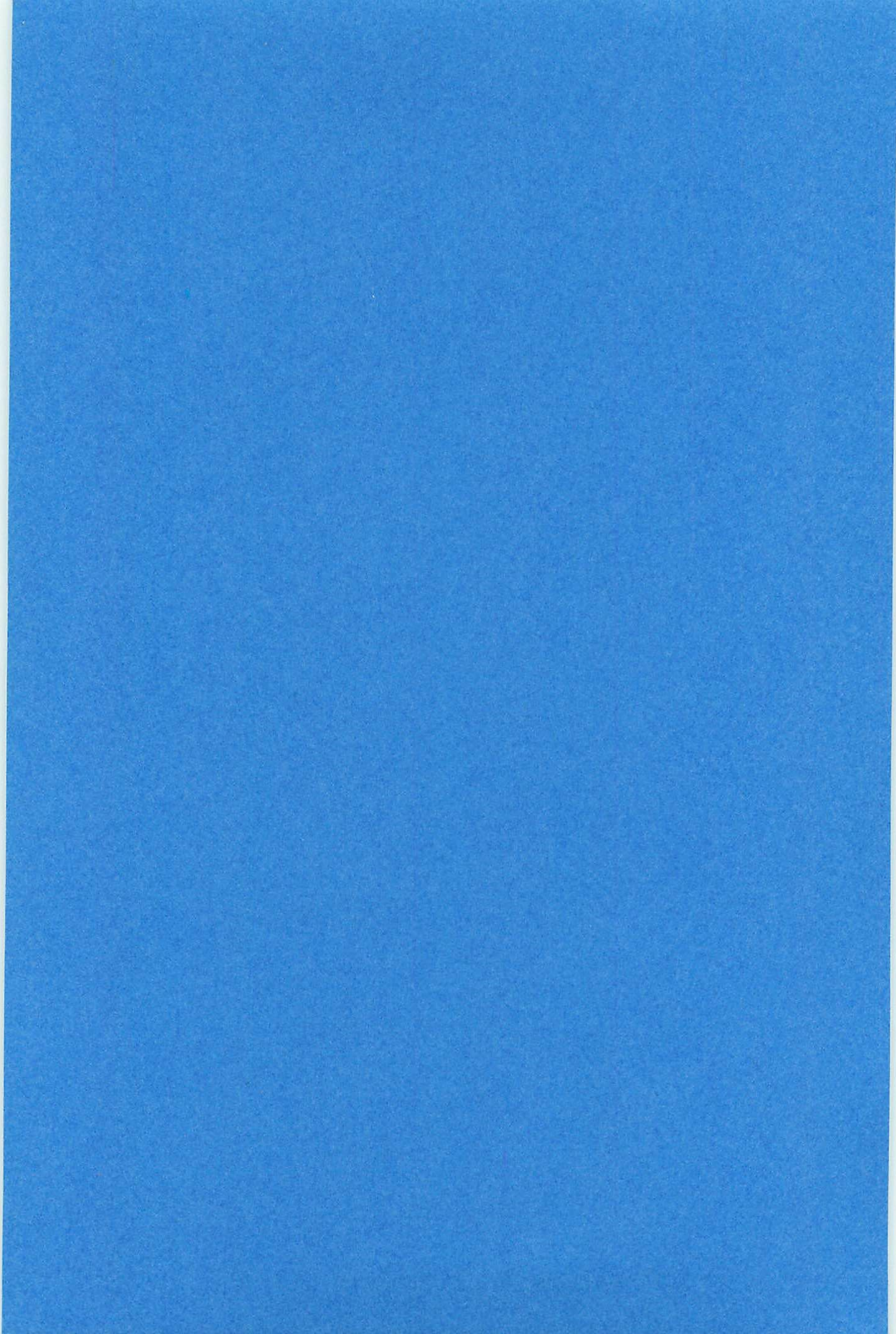
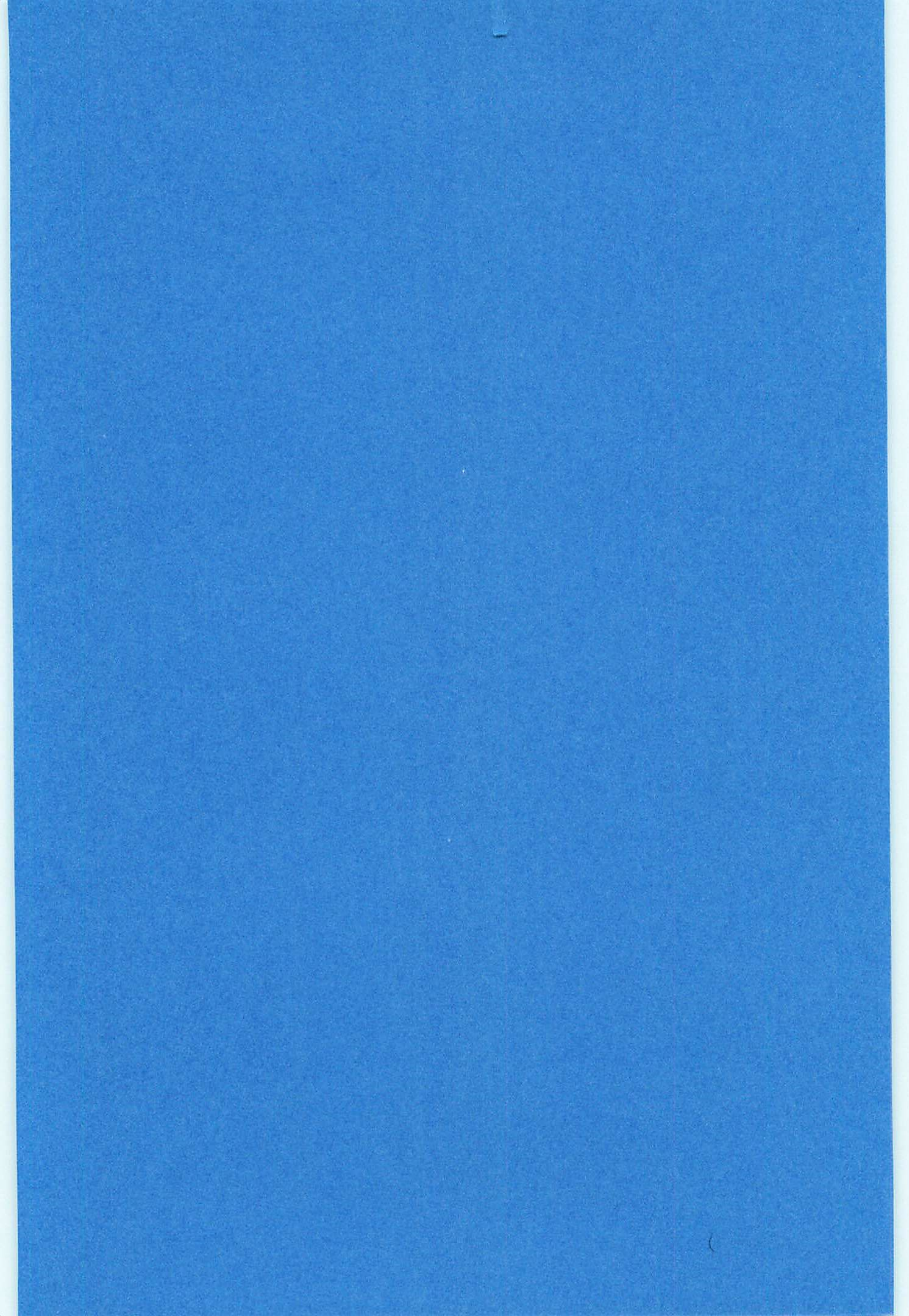
有明 亜季
ツンデレ系のオタク娘で『しりとり☆スケープゴート』という作品に夢中になっている。三次元男である主人公に興味はないが、オタク道の師匠としてレクチャーするのは大好き。

羽場 しぶや
毒舌素直クールのちょいゴスロリ娘。アンチオタク少女。極度のブラコン、お兄ちゃん大好き娘なので亜季とはケンカしてばかり。

ラー店長
巨大なねこのぬいぐるみ。中に人が入っているらしいが詳細は不明。なぜか街で一番大きなオタクショップを経営する。常連客の亜季とは顔なじみ。

カバー&カットイラスト／吉井ダン（メディアクリップ）
カラー&モノクロマンガ／井冬　良（かえでの丘）
コラム&座談構成／みやじまこ（アニメ会）
ブックデザイン／小松　昇（Pencil Studio）

二次元へいきまっしょい!
にじいき

本田 透
×
アニメ会

NIJIGEN he IKIMASSHOI!

KKベストセラーズ

オタクとは、生きざまである
萌えとは、動機である
——アニメ会

オタクとは、
電脳社会に適応進化した新しい人類
萌えとは、
人に頼らず自分で自分を救う漢の道
——本田 透

この本のねらい

萌えとは何ぞやー、オタクとは何ぞやー！

混迷する現代社会に燦然と光り輝く秋葉原とは、何ぞやー。

いろいろな観点からあれこれ語られているアキバ系ですが、しかしてその実体は？　ということになると、メディアというフィルターを通してしまうとなかなかダイレクトに伝わっていないのではないのかー。ないのかー。ないのかー。

というわけで、Ｐｏｄｃａｓｔで中人気絶賛配信中の手弁当ゲリラネットラジオ**「二次元へいきまっしょい」**で毎週好き放題喋っている自称ラノベ作家の僕・本田透と、オタクがこうじて団体を超えたオタクユニットを結成してしまったアニメ会とがですね、「これがオタクライフだーっ！」という生の生態を面白おかしく紹介しようというのが、この本の骨子なんですよ。こんな野放しな本を出しちゃって担当さんは大丈夫なんでしょうかー。なんでしょうかー。なんでしょうかー。

オタク生活は楽しいです！　いや実際楽しい。なんでこんなに楽しいんだ！　やばいんじゃないのか俺。秋葉原に辿りつくまでは、毎日ネガティブなことばかり考えて鬱々としてなんとかかんとか生きていた筈だったのに、二一世紀のガンダーラことアキバに巡り合った途端、なんだ人生楽しいことばかりぢゃないか！　アニメ、同人誌、ゲーム、ライトノベル、世界にはこんなに楽しいことがいっぱいあったんぢゃないか！　と開眼しました。オタクライフとは、ポジティブライフ。萌えとは、ポジティブシンキング。小難しい理屈とか要らないんですよ。

「好きなことは好きだと無邪気に萌えられる心が好きさ」

という精神ですよ。「考えるな、萌えるんだ！」ですよ。

そんなわけで、マンガ＋小説＋コラムのトリプル三位一体で構成されたこの物語は、一人の少年が立派な二次元オタクに成長していく過程をドラマティックに描いたビルドゥングス・ロマンなのです（大げさ）。萌えとは、オタクとは何ぞや、という深い哲学的疑問は、この一冊を読めばたちどころに氷解して、そんなことはどうでもよくなるのです！　**今を生きろ、人生を楽しめ！　人間復興！　アキバへ来たれ、そして愛を取り戻せ！**

NIJIGEN he IKIMASSHOI!

CONTENTS

掲載画像著作権表示(アルファベット&五十音順)

章扉&コラム写真(第1章ラノベって今ブームなの?　第5章いざアキバ!・日曜日のアキバ・メイド喫茶!・アキバのイベント)
　高野祥光(写真家)
カバー&カットイラスト／吉井ダン(メディアクリップ)
カラー&モノクロマンガ／井冬　良(かえでの丘)
コラム&座談構成／みやじまこ(アニメ会)
ブックデザイン／小松　昇(Pencil Studio)

にじもて
2006年×月
羽場もてるは
オタクの焔に
包まれようとしていた
これは そんな彼の
成長の軌跡を
つづった物語である
何この
花びら大回転

キーンコーンカーンコーン

ってわけで亜季
俺とつきあわね？
妹がついて
きちゃったけど
これは無視してさー

BAKA DA・NE

っ　そんな……
細心の注意を払って
足音を消してきたのに
気づかれてるなんて

この近さで
足音とか
関係なくね？

ハ？ なんで
あんたみたいな
ダサいのと
つきあわないと
なんないのよ

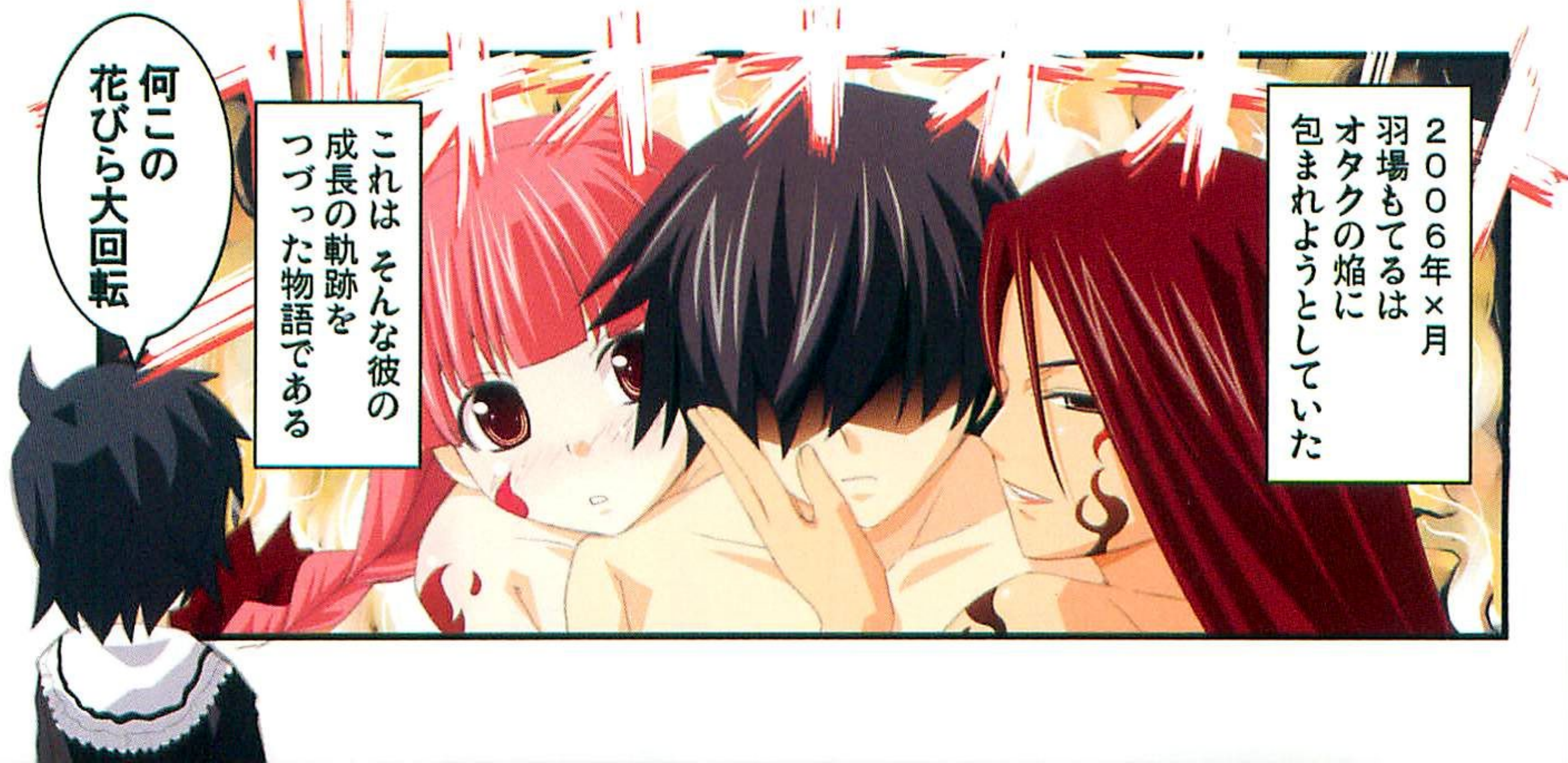
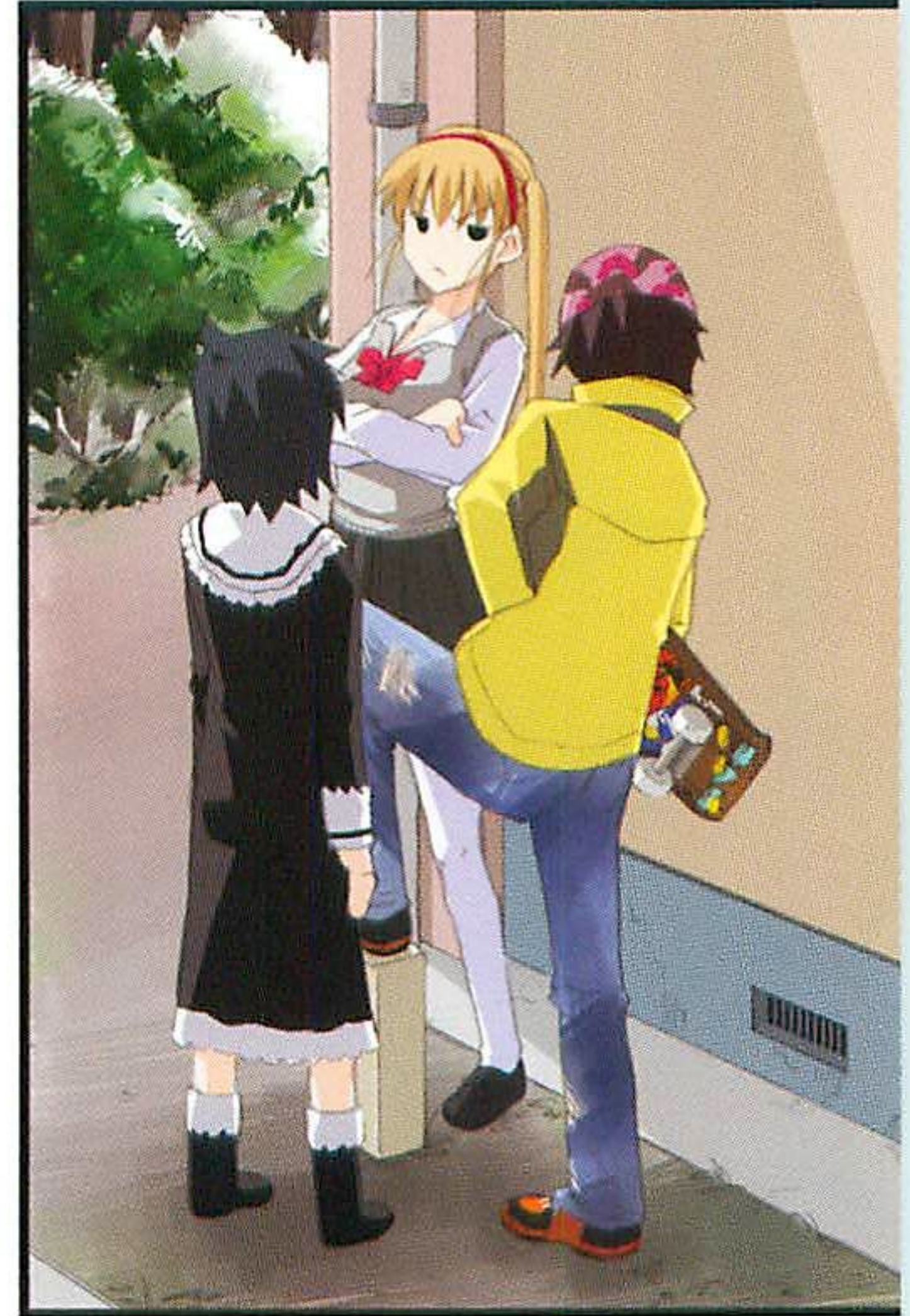
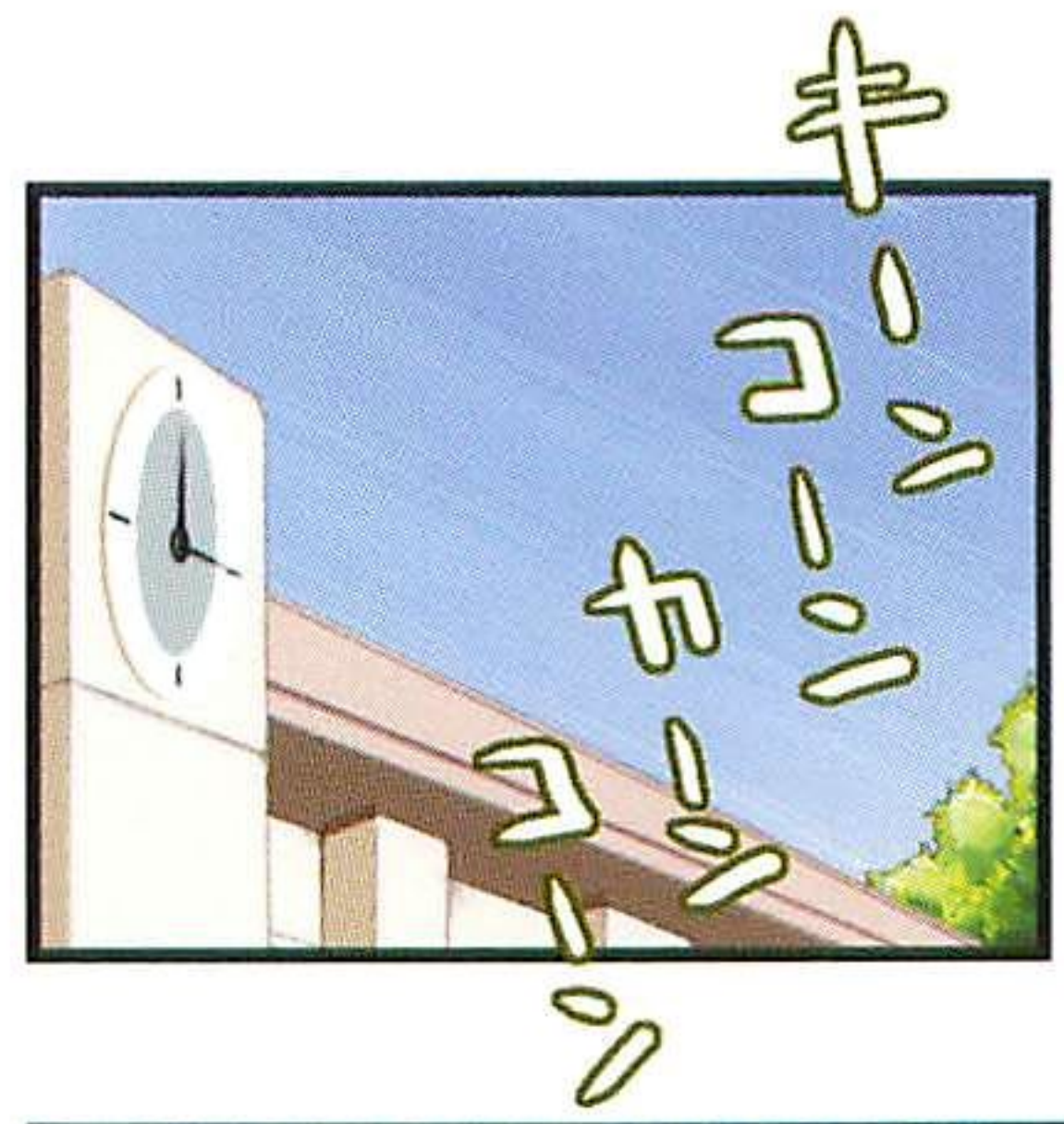
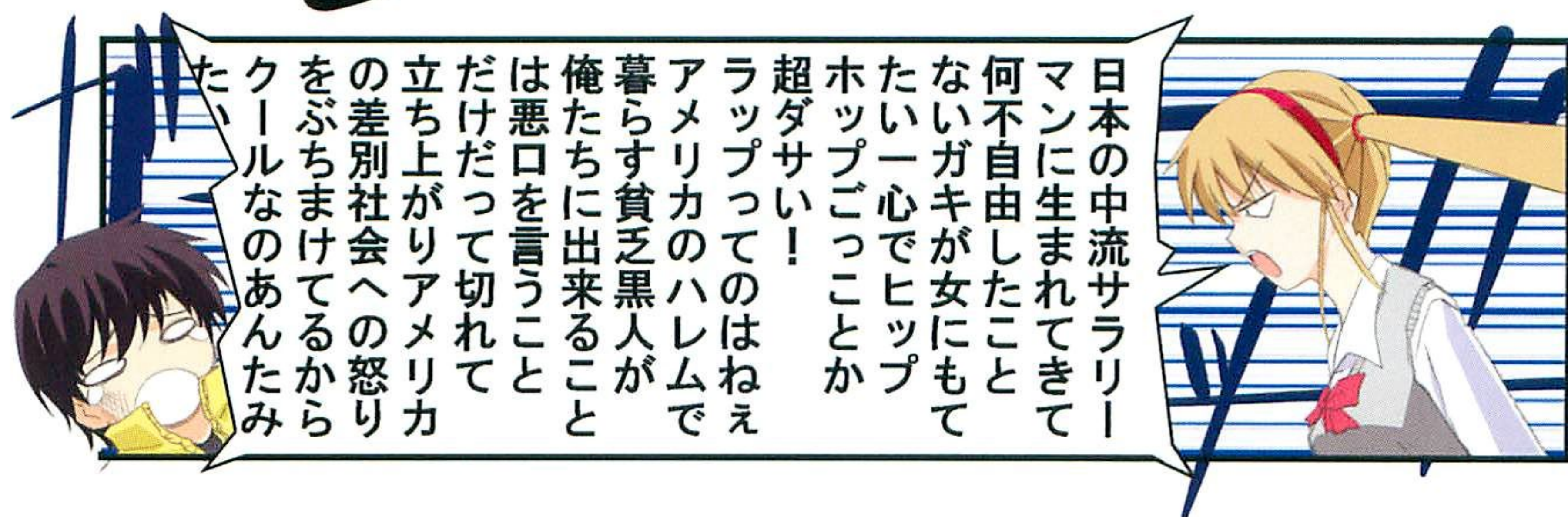
キッ

なんで好感度
下げようと
してんのぉぉ！

なっ……
俺のことならともかく
何の関係もない
妹を馬鹿にするなんて

え？ じゃあ
俺がダサい
ってのかよぉ
超イケてる
じゃん！

ガシッ

触るなぁ!

ぐはっ!

日本の中流サラリーマンに生まれてきて何不自由したことないガキが女にもてたい一心でヒップホップごっことか超ダサい!ラップってのはねぇアメリカのハレムで暮らす貧乏黒人が俺たちに出来ることは悪口を言うことだけだって切れて立ち上がりアメリカの差別社会への怒りをぶちまけてるからクールなのあんたみたい

…大丈夫
あんな長い文
誰一人として
読んでいないわ
だから今は
実質互角よ

どんだけ
ご都合主義だ

アウアウアー

いいこと!
カッコいい男とは
こういうものよ!

どう？カッコいいでしょ！

青白い肌

ボサボサ

フィギュア

ビームサーベル

すみません のど元にナイフが突きつけられてない今 全く賛同できません

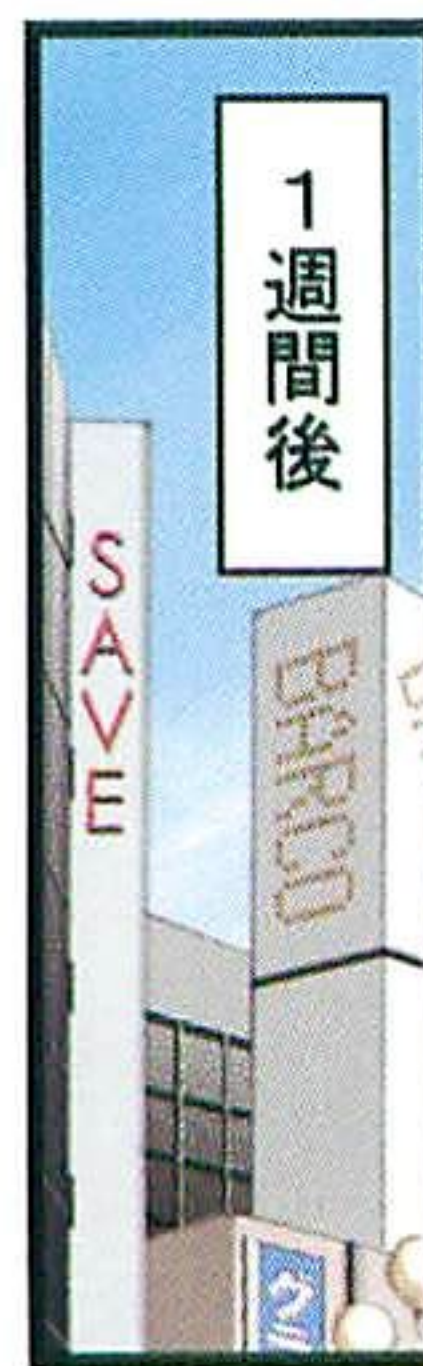
ああーっ これよっ これこそあたしの理想の眼鏡少年だわっ！

あ あれが… 亜季ちゃんの理想の男っ？ もはやダサいのを一周して超クールなのかも？ でも… ハードル超たけぇ！

いや 地中深くに埋まってると思うけど…

1週間後

ふふ やった 亜季とデートにこぎつけたぜ やっぱあいつも普通の女の子なんだな さようなら俺の童貞

ん？

呼び捨てにすんなっ！
ひぃいいいいっ！
俺って言うのも禁止 自分のことは僕！ あたしのことは亜季様！ 高田のことは 総統と呼ぶのよ！
そして童貞は むしろ大事にしろ！ いつくしみ はぐくんでやれ！
はぐくむの？
うう 無理です とりあえず呼び方は 亜季ちゃんで 勘弁してください
まあ それでも いいけど……
……へぇ
その格好は この前よりだいぶ マシになったじゃん

ってそっち俺じゃねぇ!

ガーン

ここまで経済的にしてくるとはね

しかしこの服は結構良いね 超安上がりだし 気が楽だよ

でも いまいち態度が チャラついてるのよね

もっと友達いなさそうな ダンゴムシ臭い雰囲気を 出さないとお別れね

シッ シッ

今ちょっと冷静になったんだが すごいこと言ってるぞ

エヴァングリオンみたいに

これが正しい立ち方よ!

この角度

いやズボンは はかせとこうよ

んー…このエヴァングリオンってなに?

ええっあんた そんなことも知らないのっ?

あたしと つきあいたいなら それくらい 勉強しなさいよ

あんた馬鹿ぁ?

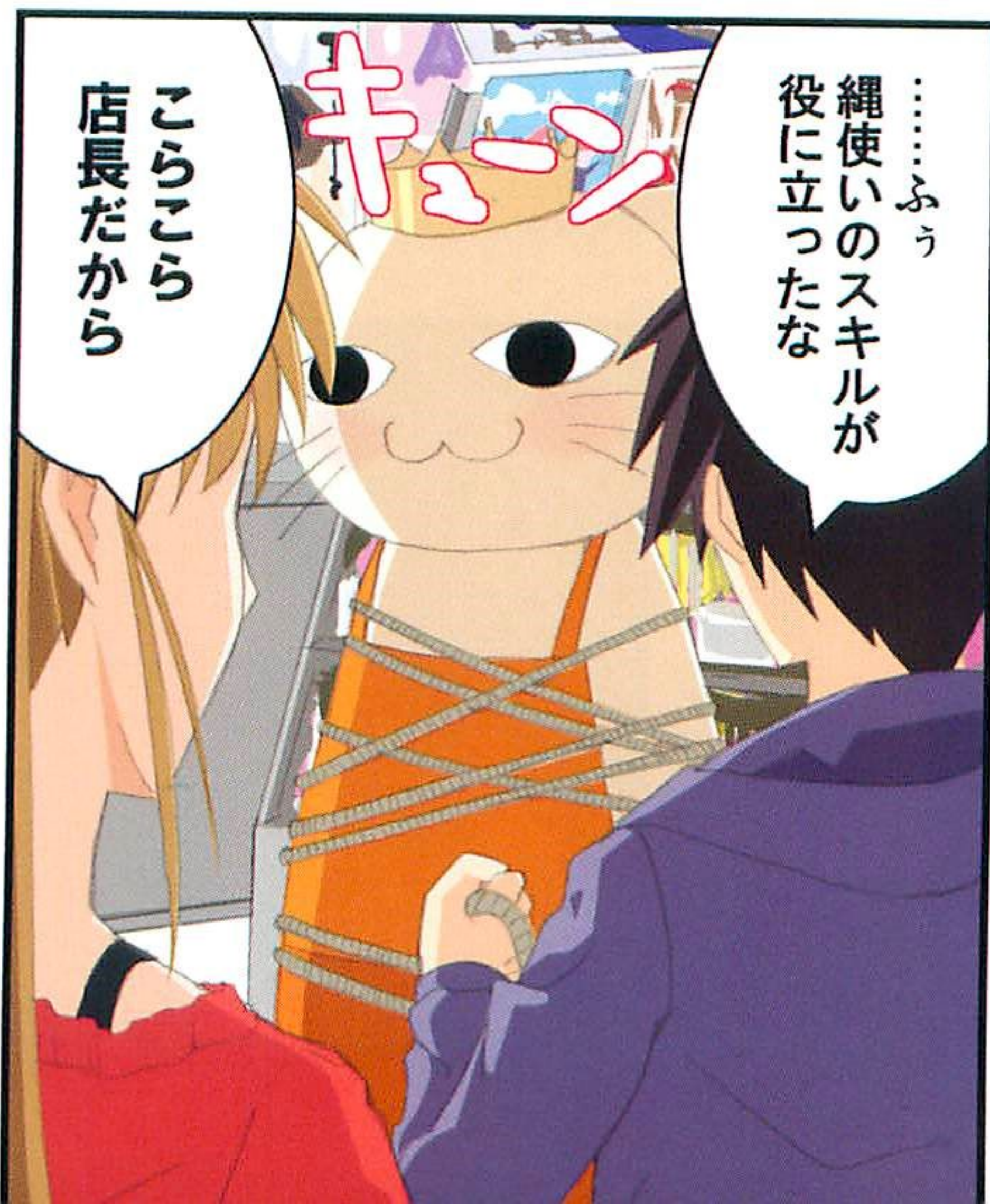
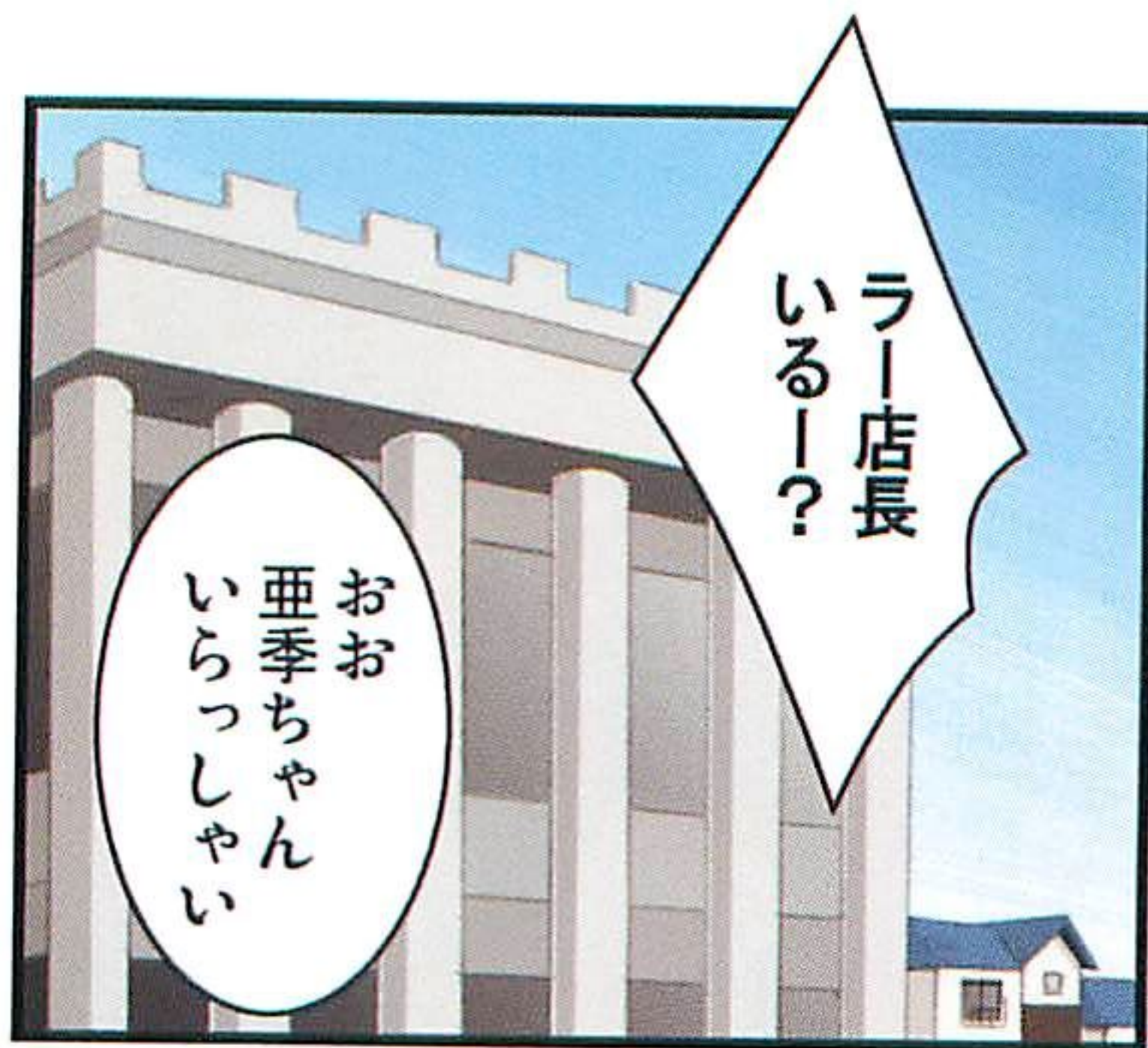
うわっ本当に反応がない! 言ったこっちが恥ずかしい!

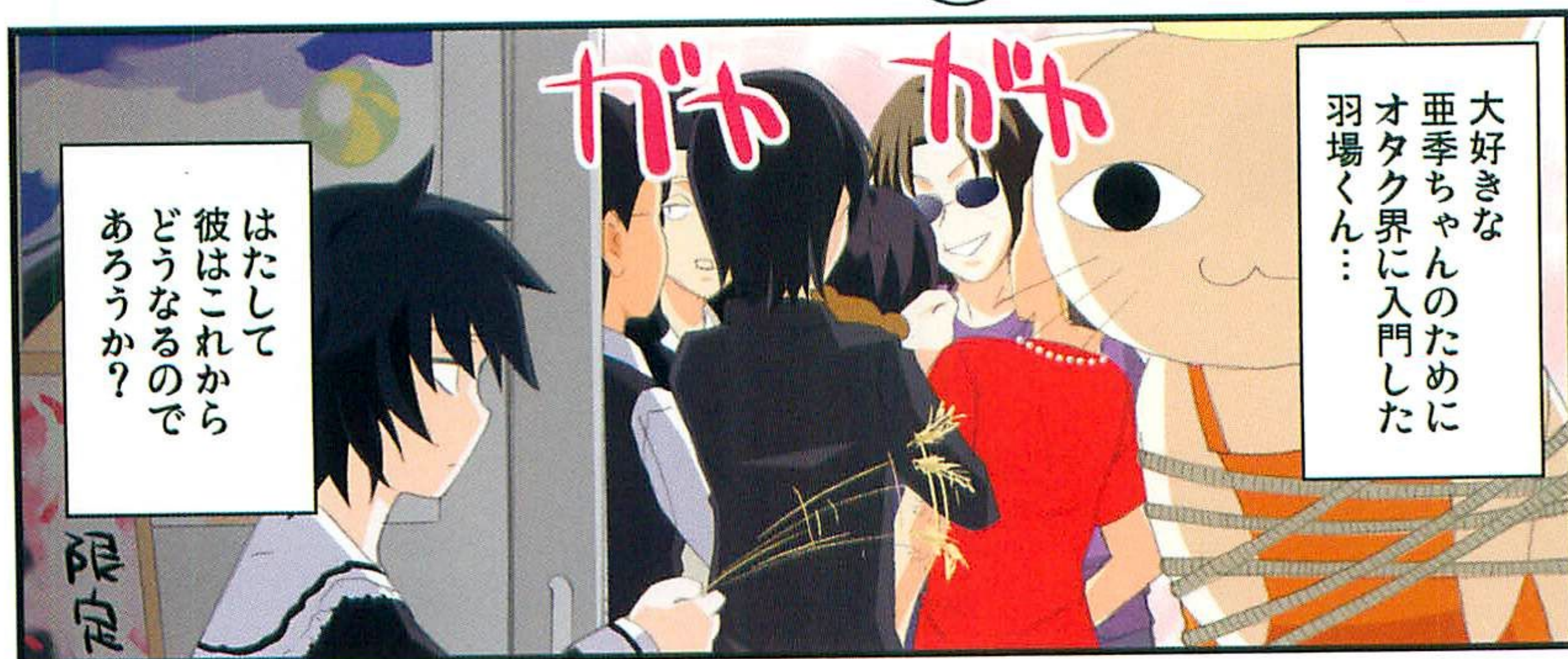
ズル ズル

仕方ないわ あたしが とっておきの場所に 連れて行ってあげる

ラー店長いるー？
おお亜季ちゃんいらっしゃい
ドサッ
こいつ新入りオタクだから仕込んでやって
お任せあれ
珍獣うぅ？
……ふぅ
縄使いのスキルが役に立ったな
キューン
こらこら店長だから
私は多忙ゆえ詳細なレクチャーはアニメ会の駅前秋葉原留学講座で勉強してくれたまえ
多忙というか捕まってますけどね
シャッ

どうもーー!!

なんだこの人たちは
いい歳してみんな
目が幼子のように
かがやいているっ？

いや初対面でそこは
強調しないように

…これはまずいわね
兄さんは自分という
ものがない
カラッポ人間だから
あっさりオタクに
染まってしまうかも

大好きな
亜季ちゃんのために
オタク界に入門した
羽場くん…

がや　がや

はたして
彼はこれから
どうなるので
あろうか？

限定

第1章

ラノベのとびら

NIJIGEN he IKIMASSHO!!

～ライトノベル編～

Light Novel

東京メトロ
Tokyo Metro
秋葉原駅
Akihabara Sta.

俺の名前は「羽場もてる」。一応、それなりにオサレな高校生だ。俺がどうしてこんなヘンな名前に生まれついてしまったのかというと、やっぱり親が今流行りのＤＱＮ（ドキュン）(ヤンキー系)だったからだろう。物心ついた時から、俺は親父に「男の価値は、どれだけ女にモテるかで決まるのだ！　もてるよ、お前はモテだ、モテだ、モテになるのだー」と洗脳教育を施されてきた。

「しかと聞け！　父さんはな、若い頃さっぱり女にモテなくて、人生を台無しにしてしまったんだあ！　三十過ぎても独身だったので周囲からヘンな目で見られて出世もかなわず、仕方なく見合い結婚っ…恋愛経験ゼロのまま中年に、そして老境に突入っ…！　父さんはな、父さんはな、お前にだけは、父さんのような哀れな人生を歩ませたくないのだっ！　わが息子よ、お前には父さんが果たせなかった夢『甘酸っぱい学園生活』を送ってもらいたいんだあっ！　父を恨まば恨めっ！」

と親父に泣きつかれては文句も言えず、「テレビアニメはドラえもん以外全部視聴禁止、ゲーム機は任天堂だけＯＫでＳＥＧＡは禁止、プレステは要・ソフト検閲、マンガはジャンプ・マガジン系のみ可、しかし赤松健作品だけは禁止だ」という実に厳しいコンテンツ制限を受けてきた。その上、

「サーフィンに興味がなくても、サーフボードを持ち歩けっ！」

と強制される始末。親父が若い頃は、サーフボードが「モテ」趣味の頂点にあったそうだ。とはいえ、今はサーフィンよりスケボー、スノボー。サーフボードなんて徒歩で学校に通ってる俺には持ち歩けないよ。

「あと、プロレス格闘技は全部禁止だ！　Ｋ-１はミドル級のみ許可！」

「映画雑誌は『ＣＵＴ』を読め！　『映画秘宝』は禁止だ！」

こんな感じで、親父は俺を「オタ趣味」から徹底的に隔離して育ててきたのだ。その結果、それなりにチャラチャラしてそこそこに女の子にモテ

る、俺という人間が完成しつつあったのだが…。
しかし、元々親父の遺伝子を継いでいるだけあって、たいしてイケメンでもないしさ。顔のベースがさ。どれだけファッションで糊塗（こと）したって、やっぱり限界あるよ。
それに、超やばい。
俺、実は将来の夢が、何もねぇ。
売りは顔だけ、しかも微妙。親父の劣化ペースを鑑（かんが）みるに、俺だって、あと何年もつか…。
勉強苦手だし、これといった趣味もないし。
しょっちゅうスノボー担いでるけど、実はあんまり滑れないし。
実家は金持ちどころか実に庶民的だし。
学校を卒業したら…ホストにでもなるか？
でも…容姿なんて、どうせすぐに劣化する。その後は…？
やばい。超やばい。どうする、俺。
ちなみに、妹の名前は「しぶや」。こちらは兵庫県神戸市北区有馬温泉旅館街出身の母が考えた名前らしい。母はことあるごとに、
「しぶやちゃん、女の子はお洋服で決まるのよ。母さんみたいに一張羅のエプロン姿をトレードマークにしてしまっては、おしまいよ。売れ残って、最後はこんな甲斐性なしの男と結婚する羽目になってしまうのよヨヨヨ」
と言い出しては、しぶやを原宿や渋谷に連れ出してあれこれと服を買ってあげるのだ。我が家の出費の大部分は、しぶやの服に使われている。
ここまで来ると、俺たち兄妹の両親はこの世に何らかのルサンチマンを抱いているとしか思えない。
まあしかし、俺は別に自分の人生に何の不満も持ってはいなかった。「学校を出たあと、どーしよう。将来に何の希望もないなあ。いわゆる下流社会まっしぐらかなあ」という不安はあったが、周囲を見渡しても同じような奴ばかりだったし。
まぁ、まだ若いし、趣味なんてなくても別にいいかぁ、と思っていたのだ。

そう、あのヘンな女、『有明亜季』に出会うまでは…。

「って、誰が『ヘンな女』なのよっ！　あんたねぇ、自分を『俺』って呼ぶの禁止って何度言ったら判るのよっ！」

「はうあーっ？　俺、また、独り言を口に出してしまっていましたかっ？」

「あーっ！　また『俺』って言ったぁっ！」

ビシバシ、ビシバシ。

亜季ちゃんの容赦ない関節蹴りが俺の…じゃなかった、僕の膝に確実にダメージを与え続ける。

亜季ちゃんは、俺…違った、僕の彼女だ。僕と同じ学校に通っている、ツリ目とツインテールが目印のハイテンション娘。今日も放課後に二人でデートする約束を取り付け、こうして校門前で亜季ちゃんを待っていたのだ。

「彼女じゃない。師匠と呼べ！」

「えー、だって、俺たち…じゃなかった。僕たち、つきあってるんじゃないの？」

「つきあってなど、いない！　あたしは、愚か者で人生負け組確定のあんたに、人として楽しく生きるオタク道をレクチャーしてあげてるだけなのよ！　調子に乗らないでよねっ！」

そう。僕がうかつにも好きになってしまった亜季ちゃんは…。

…オタク女子だったのだ。

それも、ドロドロの。

だから、彼氏にする男に対する条件が、異常に厳しい。

『自分よりもハイレベルのオタク少年じゃなきゃ絶対にダメ』

なのだそうだ。

故に僕は、日々オタク知識の習得のために努力させられる羽目に…。

と嘆いていると、妹のしぶやが僕の背後からすうっ…と現れた。

「ああ、いやだ。このツインテール女、腐臭を放

っているわ」
「それを言うなら、腐女子と言ってちょうだい！　って、また妹がくっついてきてる？　羽場、あんた、実は重度のシスコンなんでしょ」
「さ、誘ったわけじゃ…しぶや、お兄さんのデートについてきちゃダメだよー」
僕が亜季ちゃんとデートする時には、常にしぶやが突然どこからともなく湧いてくるのだ。その理由は…、
「兄さんがこの女に洗脳されてオタクになったら大変。たちまち兄さんは非モテに転落して一生結婚できなくなるのよ。これは羽場家のお家断絶の危機よ。私には、妹として兄さんをオタク女の魔手から守る義務があるのよ」
「ケッ。あんたみたいな電波ゴスロリ女を妹に持った羽場がかわいそうだわ。あんた、ガイナックスのアニメなら『フリクリ』イチオシってタイプでしょ？　『まほろまてぃっく』は不可なんでしょ？　で、愛読書は『クイック・ジャパン』と『スタジオ・ボイス』なんでしょ？　いやねえー」
「…やけに詳しいわね…」
亜季ちゃんの喋っている専門用語が、僕には全く理解できない。
だが、しぶやには通じているらしい。
うーん、なんだか疎外感。
あっ、そうだ。
今日は、小説を買って読もう、というインドアデートを楽しむ予定だったんだ。
「オタクのデートと言えば、読書よっ！　さっそく『ラーの神殿』に行くわよっ」
ラーの神殿というのは、わが町で一番大きなオタク系ショップの店名。ビル全体がまるごとオタクショップなのだ。亜季ちゃんに連れ込まれるまでは怖くて近寄ったこともなかったが、意外にも店内は連日超満員。
「亜季ちゃん…普通の大型書店に行ったほうが品揃え良くない？」
「ダメダメ！　あたしにとって、本とは『マンガ』

と『ラノベ』と『ゲーム本』だけなのっ！　今日はいろいろなラノベの新刊が出揃う日なのよ！　初回限定特典つきのコミックスも買わなくちゃいけないしっ！　というわけで、羽場、限定グッズをゲットするために列に並びなさい」
「何だか判らないけど、亜季ちゃんがそういうなら」
　地道に得点を稼げば、今はツンツンしている亜季ちゃんも、そのうち僕の親切さにほだされて……ふっふっ……、
「兄さん、これはデートじゃないわ。兄さんは、単に荷物持ち兼並び屋として召集されているのよ。騙されているのよ」
　しぶやが醒めたツッコミを入れるが、亜季ちゃんは、
「やい妹、あんたも並ぶのよっ。『ＫＫＫにようこそ！』新刊の初回特典フィギュアを三バージョンコンプしないといけないんだからっ」
　いつも通り、唯我独尊なのだった。
　うーん、なんてワガママなんだ。かわいいじゃないか。
　口では横暴なことばかり言うけど、とりあえずデートしてくれるわけだし、このまま僕がオタクになったフリを続けていれば、いずれは「弟子」から「彼氏」に格上げされて、そして……。
　亜季ちゃんと第三種接近遭遇だ！

　一時間後。
「あー、疲れた…狭い店内に、なんであんなに客がぎっしりと…」
「…新調したお洋服が、汗でびっしょり…」
　ラーの神殿の書店フロアに並んで亜季ちゃんに指示された新刊を買い終えた僕としぶやは、亜季ちゃんから次なるミッションを下されていた。
「お疲れー。それじゃ、今からそれぞれ好きなラノベを買ってきなさい。喫茶コーナーでサッと読んでから寸評会を開催よ。やい羽場、ただ列に並んだだけでオタクスキルがアップしたと思ったら

大間違いよ！　あんたのラノベ鑑定眼をあたしがチェックしてあげるから、あたしを感動させる名作を掘り出してチョイスしなさいよ」
「えっ？　あの…ラノベってそもそも何？」
「かーっ！　ラノベつったら、ライトノベルの略称に決まってるジャン！　あんたがカス引いたらもう絶交だからね！　でも、ハイレベルな隠れた名作を見事に発掘できたら、誉めてあげる」
「マジですか？　うおおー、頑張って面白い作品を探すよ！」
「…兄さん。作家によっては、ラノベと略されると怒る先生もいるので、注意が必要よ…あと、版元によっては『ライトノベル』という呼称自体を禁止しているところもあるわ」
しぶや、お前が俺にオタ知識を植え付けてどうする。
「っていうか、そもそも、ライトノベルって何？何がライトなんだ？　紙が薄くて軽いとか？」
「んなわけ、あるかっ！　ライトノベルとは、現代の最先端文学なのよっ！　一言で言えば、アニメっぽい表紙イラストと挿絵が入っていて、かわいいキャラクターがいっぱい出てきて、マンガみたいなラブコメ展開とかセカイ系とかファンタジーとか女子高生が日本刀振り回すとか魔物と超能力で闘うとか…そーゆーものの総称が『ライトノベル』なの！」
亜季ちゃんが、すごく語弊（ごへい）のある説明をしてくれた。きっと間違っているというか、どこかズレていると思う。
「すみません、全然判りません。セカイ系って何…？」
「あーもう、羽場、あんた、オタク道をナメてるでしょっ？　適当に頷いてればあたしを誤魔化せると思ったら大間違いよっ！　ラノベとは何だ、なんて言われても困るのよ！　1＋1はなぜ2になるのか、なんてこと説明できないでしょ？　それと同じよ！」
「つまり説明できないのね。…この女、やっぱり、

バカ…」
「うるさーい！　人をバカって言った奴がバカなのよ！　バーカ、バーカ、バーカ！　あたしは屁理屈をこねるのが大嫌いなのよーっ！　あたしの尊敬するモーフィアス様も言ってるでしょ！『考えるな、感じるんだ！』ってね。やいゴスロリ女、あんた、自分が頭いいと思っていい気になってるんでしょっ！　ハヒフヘホー！」
亜季ちゃんは竹をナタで叩き割ったような性格なので、あまり細かい蘊蓄(うんちく)を述べるのは得意じゃないらしい。本能だ。本能でオタクをやっているんだ。それだけ強敵ということだ。付け焼刃では見抜かれてしまう。
「そうよ兄さん、兄さんみたいな『人は見た目が9割』を地で行くうわべだけの男には、野生の本能で生きる彼女の攻略は無理。諦めなさい」
「イヤだっ、諦めたくないっ！　亜季ちゃん、超かわいいしっ！　無理でも何でも、オタクスキルをあげて好感度を稼ぐんだーっ！」
「なっ…店内で恥ずかしいこと叫ばないでよぉ…とっ、とにかく三〇分だけ時間をあげるから、その間に名作を発掘しなさいよ！」
亜季ちゃんは頬を赤く染めて、ぴゅーっと走り去ってしまった。
「…あっ、逃げた…」
やばい。かわいい。やはり脈はある。とにかく、面白いラノベを探し出すというミッションをクリアすれば、一歩前進のはずだ…！　だがしかし。
「どうしよう、しぶや。僕、ライトノベルどころか、そもそも小説じたいほとんど読んだことがないんだ。愛読書は親父に押し付けられた『蟹工船』だし…ああ、資本主義社会における労働者の疎外と搾取という現実を描いたプロレタリア文学しか知らない僕が、現代文学の最先端であるライトノベルを理解できるはずが…！　このままじゃ亜季ちゃんに破門されてしまうぅっ！」
「…父さんも、息子をモテにしたいと言いながら、根本的なところで負け組の精神を伝承させちゃっ

てるわね…私もライトノベルなら少々読んでるけど、あの女が嫌いそうな作品しか知らないし」
「えー？　ライトノベルだったら何でもいいわけじゃないの？」
「そうなのよ。一口にライトノベルと言っても、それはあくまで『イラスト入りノベル』群の総称。実際にはとても幅広い世界なの」
「そんなの三〇分で理解できないよーっ！」
頭を抱えていると、大柄な猫の縫いぐるみ…ラー店長が、ポンと僕の肩を叩いてきた。この人…いや、この猫は、ラーの神殿を一匹で仕切っている偉い店長さんらしい。ちなみに声は妙に渋い。
「当店では現在、アニメ会による『駅前秋葉原留学講座』を授業料三割引で開催しているよ。是非、ライトノベルについてのレクチャーを受けたまえ」
アニメ会というのは、地球を征服するために宇宙からやってきた五人組の謎の軍団だという。ところが、最初に降り立った地が秋葉原だったため、オタク文化に免疫のない彼らはあっという間にオタク化。今ではラーの神殿の駅前講座の講師のバイトなどでコツコツ働きながら、秋葉原に通ってアイテムを買い漁る日々なのだとか。
ただし、見た目は全員地球人、っていうかベタベタの日本人なので、たぶんそういう設定で活動しているオタク団体なのだろう。そもそも宇宙人とかＵＦＯとかそういう二次元の世界観を日常に平然と持ち込むのはやめてほしい！　ぼ、僕は信じないぞ。ＵＦＯなんてプラズマだ！
とにかく、彼らはラーの神殿の店内各所に配置されているプラズマテレビのモニター越しに、オタク知識の講義をしてくれるわけだ。
「それじゃお願いします。ライトノベル入門講座を申し込みますー。で、講師は誰でしょうか」
「ライトノベルであれば、歴戦のツワモノであるアニメ会五人組を借り出すまでもない。時給の安いマスコットのくまで充分だろう」
「えー、あれって、国井代表が操ってるパペットじゃ…」

『違う！　中の人など、いない！　ぼくはぼくだ！』

プラズマテレビの画面に、くまパペットがアップになった。

こいつは、アニメ会総帥・国井代表が常に手にハメているパペットだ。

こんなモノにレクチャーされてしまうなんて、人間様として少々抵抗があるが…背に腹はかえられない。

『ちなみに、ぼくの名前はプッチャンではないぞ。くまと呼べ』

「…ヴィンセント…」

しぶやがボソッと呟いた。ヴィンセントって…何？

『違う、くまだ！　ちなみにぼくは毎月二〇冊以上のライトノベルを立ち読みしているぞ！』

「買ってくださいよ、お客さん」

ラー店長が怒ったような唸り声を出したが、縫いぐるみなので表情は変わらない。

『国井代表が小遣いをくれないいんだっ！　さあ、何でもいいからライトノベルについて判らないことを教えてやるぞ、人間。質問は一〇個までだ』

「それが…そもそも、何が判らないのかすら、判らない…」

「兄さん、しっかりして。私が代わりに質問してあげるわ」

僕のオタク化を防ぐと言いつつ、いざ僕が苦悩しはじめるといつもの習性で助け舟を出してしまうしぶや。無愛想で無表情だが、なかなか頼りになる妹だ。

「それじゃ…亜季が喜びそうなライトノベルのタイトルを教えなさい」

『そんなこと、知るかっ！』

ああ、ダメだ。そんな付け焼刃では、すぐに亜季ちゃんに見抜かれてしまうっ。もうちょっと真面目に勉強しなければ。

「そ、そうだ！　ライトノベルって、いったい何が『ライト』なんだ？　やっぱり紙の重さが…」

「…兄さん。だから、紙は関係ないのよ」

くまが得意気に、
『ほほう。一見単純なようで深い、なかなか良い質問だな。ぼくのありがたい講義をとっぷりと聞かせてやるとするか』
「違うわ。兄さんは一見単純なようで、本当に中身がないのよ」
「しぶや…全くもってその通りだが、いちいち訂正を入れなくても…」

「ライト」って、そもそもなんなの？

ライトノベルは英語でLIGHT NOVEL。直訳すれば「軽い小説」となる。一般文芸よりもランクが低いというニュアンスもあるため、その呼称を好まないファンもいる。

しかし、このように考えてはどうだろうか。例えばコカコーラ「ライト」（がぶがぶ飲んでも糖尿病にならないよ）。例えば「ライト」セーバー（青春の輝きを放つ剣で時代を切り

Let's imagine !!

開くよ)。「ライト」という言葉が、どこか希望に満ちた素敵な音色で響いてくる。さあ叫ぼう、ライト！　ライト！

…なんだか「ライ」という名の、もこもこ&ふわふわした生命体（性別不明）と寝食を共にしているような幸福感が得られるではないか！　あるいは、自分が「礼（らい）」という名の中華武闘青年となって、修行の旅の途中に偶然ある村の危機を救う。その際、世話になった宿屋の娘と恋に落ちるが、結局旅を続けることを選ぶ。そんな別れの朝…娘は三姉妹の長女なのだが、末の妹（とても自分に懐いていた。ある時急に「いっしょに入る!」と言ってお風呂に入ってきた時は驚いたものだ）の「らいといっしょにいくの！　らいと！　らいと!」と号泣しながらごねる声が背後から聞こえてくる…そんなハートのウォーミング&ムーヴィングさえも得られてしまうではないか!

何を以て「ライト」と言うかは、「そう思ったら、それがライトノベル」という、ネットで定着している定義が盤石だろう。極論すれば、ドストエフスキーに比して「ライト」でない小説など、どこを探してもないのだから。

ライトノベル基礎編

くまの講義に耳を傾けてみた僕だったが、さっぱり判らなかった。

「お前、あまりにもクリティカルな質問をされたので、誤魔化しただろ！　授業料返せ！」

『そ、そんなことはないクマ！　クマを疑ってはいけないクマ！』

「…語尾変わってるし。動揺しまくりね」

「まあつまり、結論は『考えるな、感じるんだ』ということだね」

ラー店長が頷いているが、こっちは授業料を払ってるので全くもって納得いかない。しかし、確かに、1＋1はなぜ2なのかとか、3フォールしたらなぜ勝ちなのかとか、押さえられたレスラーは2・5カウントで必ず返すのはなぜなのかとか、

そういうことを疑問に思っても仕方がない。ああそうだ、実は僕は親父に隠れてけっこうプロレスを観戦していたりするのだった。もしや僕の体には、熱いオタクのＤＮＡが…？　そもそも親父自身、どれだけ隠そうとしても元第一世代オタク丸出しだもんなあ。
「兄さん、もう時間がなくなってきたわ。こんな安物のパペットは放置して、早くライトノベルコーナーでブツを探すのよ」
「そうするか！」
『ちょっと待て、あと九個質問していいんだぞっ』
　僕たちはパペットを放置して、ライトノベルコーナーにすっ飛んだ。そこは、新書と文庫の山、山、山。おおむね八割ぐらいは文庫本で、表紙はほとんどがいわゆるアニメ絵だ。一方、少しだけある新書サイズの小説は、表紙のイラストがややオシャレっぽかったりする。まあ、オシャレっぽいといっても、アニメ絵であることにかわりはないが。それにしても。
「レーベルがたくさんあって、どこからチェック入れればいいのか…さっぱり判らないや～」
「兄さん、まずは平積みされている新刊をチェックよ。レジに持っていく際には、上から三冊目あたりを抜けばいいわ。一番上の本は立ち読みされて指紋がついている可能性が高いのよ」
「お前やっぱりオタクだろ！　…おや？　男の子が表紙になっている本のエリアと、女の子が表紙になっている本のエリアがある」
「男の子が表紙になっている本は女の子向け…兄さんが読んだら精神汚染されてしまうわ。女の子が表紙になっている本こそが男の子向けなのよ」
　その時。背後の壁に埋め込まれたプラズマテレビの電源がいきなりオンになって、くまパペットが画面に大写しになった。
『はぁはぁ、やっと追いついた。複雑なライトノベルのレーベルについて、ぼくが教えてやるよっ！』
「…くまも鳴かずば、撃たれまいに…」
「そういえば、お前、本当はどこにいるんだ？」

レーベル多すぎ！　どう覚えればいいの？

『たたかえ！　ラノベ戦争！』(＊0)

GOGO　LIGHT　GOGO　NOVEL

スニーカー(＊1)履いてさあ進め　スーパーダッシュ(＊2)でさあ進め

(セリフ)「電撃(＊3)、バリバリ！」　パワーみなぎるぜ

勝利をつかめビクトリー　MF文庫(＊4)だファクトリー

オレはフジミだぜ　(セリフ)「OH！　ファンタジア!!(＊5)」

たまに凹(おちこ)むこともある　(セリフ)「また、あいつの夢を見てしまった……。(＊6)」

(かけ声)「ジャケ買いアタック！　全巻買いフラッシュ！」

はっはっは　日っ日っ日(＊7)　笑い飛ばせ　読み倒せ　健康をも顧みず

GOGO　MEN　GOGO　GOOD

メンマ　ソノラマ(＊8)チョモランマ　ナルト　コバルト(＊9)　カタパルト

（セリフ）「さあ、ラーメンも食ったし！」　パワーみなぎるぜ

未来（あした）へ向かってワン・ツー　ワン・ツー　青い背表紙ファミ通（＊10）　ファミ通

オレはフジミだぜ　（セリフ）「OH！　ミステリアス!!（＊11）」

たまに戸惑うこともある（セリフ）「師匠（せんせい）、乙一はラノベに入るんでしょうか??（＊12）」

（かけ声）「ジャケ買いアタック！　全巻買いフラッシュ！」

はっはっは　日っ日っ日　笑い飛ばせ　読み倒せ　血反吐を吐くまで

（＊0）ビギナーでも覚えやすいよう、ヒーローソングを作ってみたよ。みんなで歌って覚えよう！（＊1）角川スニーカー文庫（谷川流『涼宮ハルヒ』シリーズ他）（＊2）集英社スーパーダッシュ文庫（倉田英之『R・O・D』本田透『アストロ！乙女塾！』他）（＊3）電撃文庫（時雨沢恵一『キノの旅』他）（＊4）MF文庫J（桑島由一『神様家族』他）（＊5）富士見ファンタジア文庫（賀東招二『フルメタル・パニック！』他）（＊6）レーベルごと休刊状態になってしまい、看板作家の作品もそのまま…というケースは決して少なくない。（＊7）日日日（あきら）＝ラノベ系新人賞で前代未聞の五冠を達成した超大型ルーキー作家。覚えておいて損はない名前。（＊8）ソノラマ文庫（菊池秀行『吸血鬼ハンター"D"』シリーズ他）（＊9）コバルト文庫（今野緒雪『マリア様がみてる』他）（＊10）ファミ通文庫（木村航『ぺとぺとさん』他）（＊11）富士見ミステリー文庫（影崎由那『かりん　増血記』他）（＊12）乙一＝ジャンプノベル大賞受賞でデビュー後、『GOTH-リストカット事件』で第3回本格ミステリ大賞を受賞、ラノベの枠を越えて活躍する若手作家。

『どうだ、歌にしてやったぞ。よく判っただろう』

「『日っ日っ日っ』のフレーズは、『ひっひっひっ』って歌っちゃダメよ、兄さん。『アッキラッ』って歌うのよ」

「これって、まんま『語呂合わせで覚える英単語』じゃないかっ！　嗚呼ーっ、ますます判らなくなったーっ！　富士山麓にオウム鳴くっ？　一夜ひとよにひとみごろっ？」

僕は、僕は、英単語の暗記と歴史イベントの発生年の暗記が、極端に苦手なんだーっ！　特に語呂合わせはダメだ！　語呂は覚えられても、本当に覚えるべき情報のほうを覚えられないっ！
「兄さん、落ち着いて。初心者はまず、文庫本よ。新書はライトノベルなのかどうなのか微妙な文芸寄りの作品も多いので、ステージがアップしてからでいいのよ」
「じゃ、この、本田透の『キラ×キラ』でいいや。表紙の女の子のイラストがかわいいし」
「兄さん、それはエロ小説よっ！　でも従来の官能小説と違ってライトノベル色が濃いから、いわば『エロラノベ』とでも言うべきジャンルね。それはもっとステージをアップしてから読むべきだわ、初心者しかも未成年の兄さんにはハードルが高すぎるわ、えっちなのはいけないと思うわ」
「ええっそうなの？　表紙を観ても全然判らないや。うーん、アニメっぽいかわいいイラストが表紙になっている小説を『ライトノベル』と呼ぶのだと思っていたのに、またしても判らなくなってしまった…」
「まずは絵の好みで選んでいいわ。ライトノベルでは、文章と同等、あるいはそれ以上にイラストの比重が高いのよ。そこが従来の小説とは異なるところなのよ」
しぶや、なんでそんなに詳しいんだ。もしかして、オタク…？
「違うわ兄さん。私はオタクじゃないわ。微妙だけど断じて違うのよ」
なぜ僕の心が読めるっ？

イラストはなぜ必ずつくの？

大半がオタクマスターであるラノベ作家の脳内で魅力＆リアリティを発揮して行動するヒロインは、例えば「エビちゃん系」等、三次元女性をモデルに生まれたものではない（女性作家の場合も大同小異だろう）。

中には、テレビで活躍するアイドルとか、幼き日の初恋の相手とかいう場合もあるのだが、同じアイドルでもおんぷちゃん（アニメ『おジャ魔女どれみ』に登場するチャイドル。とてもかわいい）や、そもそも初恋の相手がアニメキャラである場合のほうが多い。作家の年齢が若くなるほどに、この傾向は強くなる。
つまり、ラノベ作家の脳内で動く人物像を、可能な限り忠実に再現したものこそ、イラストレーター（絵師）の描いたイラストなのだ。つまり絵師の手によって初めて、脳内だけで活躍するキャラクターを、現実世界で目にすることができるというわけだ！　絵師とは恐山の「イタコ」のようなもの…と書いた端から、ぼくの中では青森弁を話すイタコのキャラクター（中2）が、バレンタイン大作戦を敢行しているイメージが脳内キャンバスにぶわっと広がっており、紙の上に降り立ちたいと暴れているほどだ。ラノベの表紙に作家と絵師が併記されるのは当然と言える。
もちろん「絵があるほうが売れる」というオトナの事情も絡んでくるわけだが、もっとコアな部分で、イラストというのはラノベを支えているのである。

『というわけで、イラストの重要性を判ってるレーベルでは、文章を書いた作者だけじゃなくてイラストを描いた作者の名前もちゃんと表紙にクレジットするんだ。イラストレーターの原稿料もレーベルによって異なるんだぞ』
「そうか、ライトノベルとは…原作付きマンガが原作と作画に別れているように、文章とイラストの分業体制が確立している小説なんだ！　オマケで絵がついてるというわけじゃないんだ！　文字だけの小説ではビジュアルをイメージしづらいから、イラストをがっちり入れることで読者の想像力をサポートするんだ。やっと判ってきたぞっ！」
「マンガ文化が世界一発達した日本だからこそ登場した新しい文芸表現手法と言えるわね。でも、考証や設定がでたらめだったりしがちなのよ」
『ちっちっ。ありえない設定や非常識なキャラクターが出てきても、突っ込んではいけないんだ。それはマンガ文化が長年かけて作り上げてきた

『お約束』ってやつだ。ライトノベルの設定やキャラクターとは、音楽で言えばコードだ。高度なテクとしてコードをわざと解体する手法もアリだが、通常はコード進行の基本を守らなければならない。だから、ぼくがパペットだということにもツッコミを入れてはならないんだぞ』

うーむ。だいたい基本は判った。しかし…。

僕は、もう一度ライトノベルの棚を見回してみた。

ダメだ。数百冊のタイトルがずらーっと並んでいる。ああ、誰が誰やら、何が何やら。そうだ、「1+1=2」というお約束を覚えても、現実の応用問題を解けるわけではない。ああーっ、そうだよ、僕は単純計算は得意なんだけど「みかんが五個、バナナが三個ありました。そこにAさんがやってきてみかんを二個とって、かわりにりんごを五個置いていきました。さて、問題です。この部屋には何個のぶどうがあるでしょう」みたいな応用問題は全然わからないんだーっ！

僕はつまり…バカなんだっ！

「兄さん、兄さん。その問題、絶対回答できないから」

「ああ、もうタイムリミットだ。ここは、いわゆるジャケ買いしかない。表紙を観ただけで中身をチェックする方法はないのかな?」

『それが、実はあるんだぞ』

発売点数多すぎ！　どう選べばいいの？

ペット店で可憐なチワワ君と目が合ってしまった時のような、運命的な出会い。あなたはそのようなラノベとの出会いを望んでいるはず。しかし書店には毎月百タイトル近くもの新刊が…。手当たり次第買ってしまっては、それこそチワワでお馴染みの所に駆け込む羽目になる。

そこであなたに、タイトルだけで読みたい作品を選別する技術を伝授しよう。例えば「ちょっと重めのが読みたいかなぁ」と思っていたなら、ラブコメはやめてセカイ系(=主人公の恋愛が世界そのものの運命を左右するような物語。壮大さと感情移入のしやすさで、ラノベの主流の一つとなっている)作品を選べばよい。ざっと棚を眺めて絵が好みだった本のタイトルが、例えば『ねぎだく!』と「かな四文字」のパターンは高確率で王道のラブコメなのでスルー(内容は牛丼屋の店長が主人公のバイトっ娘ハーレム物だろう)。それが『ネギ×ダク』であれば、セカイ系の濃度がやや増してくる(一杯の牛丼に世界の運命が!?)。また『ネギダク☆エデュケーション』であれば学園魔法物(魔法少年が女子校の担任に?)。『ねぎだく?・エデュケーション』であれば、押しかけ女房系・ほのぼのラブコメ(ちびっこカテキョ天使が僕の家に?)に違いない。

このように選んでゆけば、前世からの縁すら感じさせる一冊との出会いが、必ず訪れるはずだ。

毎月大量の新刊が並ぶ様は圧巻。コミックとらのあな秋葉原1号店にて

「そうか、タイトルかーっ！　ラブコメはひらがな四文字！　ラブコメはひらがな四文字！」
「例えば『かしまし』『まぶらほ』『まほらば』『つよきす』『まほらば』などがあげられるわ」
「しぶや、同じタイトルが混入しているような…」
「ちなみに、このタイトルの法則を適用すれば、一つの作品をベースにいろんなアレンジ作品を書くことが可能よ。例えば…『とけいじかけの☆おれんじ』とか…」
「ああっ。あの殺伐とした映画が…ひらがなと☆マークだけで、なんとなく学園ラブコメっぽく聞こえるっ？」
「『しべりあ！ちょうとっきゅう！』とか」
「ああっ、マイク水野がラブリーなキャラに見えてくるうっ」
なるほどなるほど。
絵柄とタイトルを観れば…ストーリーまでは判らなくても、だいたいの作品の雰囲気はつかめるようになっているわけだ。

「兄さん、ここはとりあえず超王道の学園ラブコメを選べば大きな失敗はないわ。…それに、大成功もないだろうし…ニヤリ」
「ちょっと引っかかるけど、うむ、判った」
僕は、最新刊の平台の後ろのほうにちんまりと平積みになっている新刊『しりとり☆スケープゴート』を手に取ってみた。置かれている場所はあまり良くないし、冊数も少な目だが、タイトルに惹かれたのだ。「ひらがな、☆、カタカナ」という並びは、タイトルの法則に基づけば、鉄板のほのぼのラブコメ。しかも学園魔法モノであるに違いない。作者名が「ひがスィー」というのも実にそれっぽい。ひがスィー先生に限って、『カラマーゾフの兄弟』みたいな重い小説は書いていないに違いない。絶対にほのぼのした小説のはずだ。表紙イラストの絵柄も、ほのぼのでかわいらしいぞ。
『待て待て。帯の推薦文も要チェックだぞ』
「えっ、帯？」
「帯が無いラノベはないと言われているほど、帯

は重要なのよ」
「えーと…『しりとり☆スケープゴート』の帯には…マンガ化決定、アニメ化計画中、って書いてあるな。えーっ、マンガ化・アニメ化って、この作品、超メジャーなんじゃないの?」
『それが、そうとも言えないんだ。ライトノベルのマンガ化・アニメ化ってのは今、流行ってるからな』
　くまパペットは、質問してもいないのに講義を開始した。
　まあ、いいか。どうせ一〇個までは質問しなきゃお金の無駄になるんだ。

なぜマンガ・アニメ化が多いの?

　ヒットしたラノベ作品がコミック・アニメ・ゲーム化と、他のメディアへと超特急で展開してゆくことを「メディアミックス」と呼ぶ。コミックやアニメ、時には映画発でラノベが発売されるというケースもある。端的に言ってしまえば、そのようなシステムが前提となって、ラノベを含むオタク系ソフトは流通し、俗に「ン百億円産業!」と謳われる一大市場をなしているのだ。メディア超特急のインフラは整っている、というわけだ。
　一方で、汽車=作家にしてみれば、自分の頭の中にしかいなかったキャラクターに声が当てられ、動き、下敷きやラミカードになり、さらには映画化して『王様のブランチ』で紹介され…、末広がりで多くの人の目に触れてゆくというのは、夢のような疾走感に違いない。もちろん経済的にも潤う。ニートや引きこもりが一夜にして億万長者。まさに人生の大どんでん返し!
　超特急の終着駅はどこか。それは作家(一オタク)の妄想が一般ユーザーの目にも留まるようになり「裾野が広がる」ことによって、オタクの生きやすい社会(2・5次元社会)が形成されることだ。いやぁ、オタクって、ホント、素晴らしいですね!

2.5次元社会
人気クリエイター
ミリオネア

実写映画・ハリウッド
↑
アニメ
↑
コミック
↑
ラノベ
↑
オタクの妄想

下流社会
引きこもり
ニート

これが「メディア超特急」だ！
（注：多少の飛躍がございます）

な…なんと…「メディアミックス」なんて広告代理店用語を、ラーの神殿で耳にするなんてっ？
お…オタク界はあなどれねえ！　確かに、小説の印税だけではアガリがしれているとしても、マンガやアニメの原作ともなれば…メディアミックスの波に乗れば、重版！　印税！　がっぽがっぽ…。
「今、アニメ業界はコンテンツ不足なの。毎シーズン、三〇作や四〇作といった大量の作品をテレビでオンエアしなければいけないのよ。当然オリジナル企画だけじゃ制作が追いつかないので、原作が必要なの。でももうマンガだけじゃ原作が足りないので、ライトノベルを原作に使うケースが増えているの」
『昔はマンガをライトノベルとして小説化するケ

ースが多かったけど、今は逆になってるんだな』
「つまりそれだけ書き手がオタク化しているということね、嘆かわしい」
「じゃあ、『しりとり☆スケープゴート』は、アニメ化計画中と帯に書かれているからといって超メジャーというわけでもないのかな?」
「メジャー化する可能性は大きいけど、まだまだこれからね。いわば、ギリギリ駆け込みの先物買いというチョイスだわ、兄さん」
「だとすると、ちょうど亜季ちゃんに喜ばれる選択かもしれない」
わざとマイナーなものを持っていったら「初心者のくせにツウぶるな」と叱られそうだし、大メジャーなものを持っていったら「そんなのもう古いわよ」とか言われそうだ。
このあたりの作品が一番良さそうだ。
こうして、僕は『しりとり☆スケープゴート』を購入し、喫茶コーナーに入った。亜季ちゃんは山のようにライトノベルとマンガを買い込んで、クリームソーダを飲みながら僕たちを待っていた。
「遅いっ! さあ、早く戦利品を見せるのよっ! あたしがお宝度を判定してあげるわっ」
何故か店内のプラズマテレビの画面が切り替わって、またしてもくまが出てきた。
『それでは、ぼくのオススメ作品を紹介してやろうっ』
「あんたは、関係ないでしょっ」

オススメ作品ってないの?

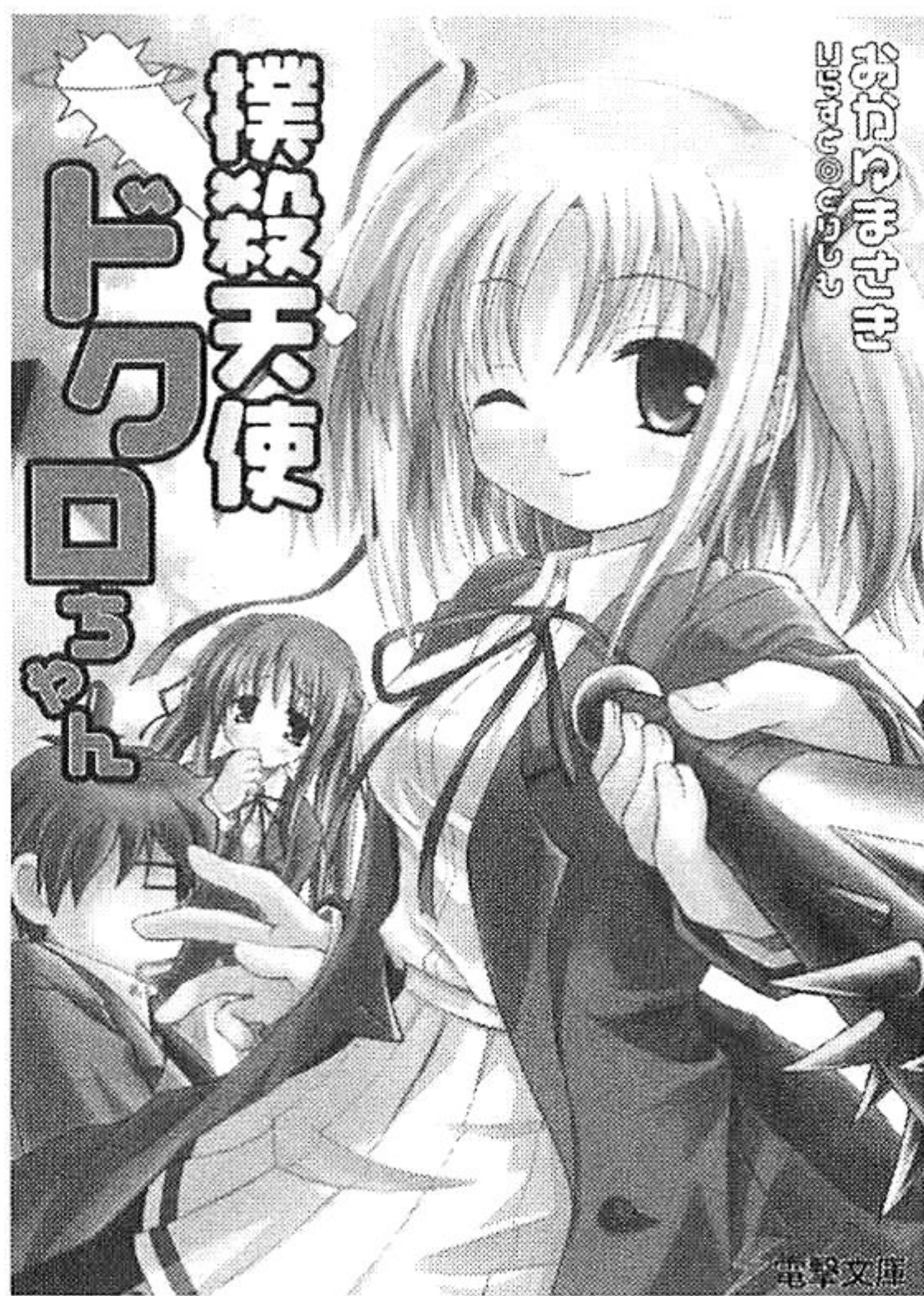
『前略。お母さん、お元気ですか。お母さんに手紙なんて書くの初めてだから、少し照れます。今年は広島もかなり雪が降っているようですね。盆にも暮れにも帰れなくてごめんなさい。どうしても外せない用事があったので…。さっき、送ってくれた荷物が届いたよ。ホカロンが五〇個くらい入っていたけど、あんなに

ライトノベル応用編

たくさんは要らないよ。イソジンも、徳用のだと多すぎて使い切れないよ。でも、ありがとう。

　さて、この前電話でラノベの話をしたら、お母さんは意外と興味津々でしたね。そこで今日は僕からオススメの作品を紹介したいと思います。だってほら、お母さんがレンタルしてくるビデオってほぼ一〇〇%面白くなかったから（ある時借りてきて、家族みんなで観た『キラーコンドーム』は、一周して面白かったよ）。

　オススメ作品は『撲殺天使ドクロちゃん』です。桜くんという主人公の家に天使のドクロちゃんがやってくる話なんだけど、そのドクロちゃんがうっかり者で、トゲトゲのバットですぐに桜くんをぐしゃぐしゃに撲殺してしまうんです。…お母さんは今、顔をしかめているでしょうか。でも安心してね。ドクロちゃんは天使だから、桜くんを元通りに治せるんです。そうして殺す→治すを延々と繰り返してるだけの『ドクロちゃん』、ぜひ買って読んでみて。スピード感あふれる文体に圧倒されると思います。僕はお母さんとお父さんに、県外の大学に行かせてもらって、四年間たっぷり日本文学を学んだわけだけど、『ドクロちゃん』はラノベにとどまらず、日本文学の最先端だと本気で思っています。ごめんなさい。

　それでは、身体に気を付けて、元気でやってください。盆と暮れ以外になら、帰省したいと思ってます。盆と暮れ以外にならず。草々』

『撲殺天使ドクロちゃん』著／おかゆまさき
イラスト／とりしも（電撃文庫で好評発売中！）

な…なんだ、撲殺天使髑髏ちゃん…全然理解できねーっ！

これはもう、純粋芸術。シュルレアリスム。アールヌーヴォー。
恐るべし、ライトノベル。僕はまだ、ライトノベルを舐めていたっ！
「髑髏ちゃんじゃないわ、兄さん。ドクロちゃんよ」
「ああ、それにひきかえ、僕が選んでしまった作品は、あまりにも無難、あまりにもお約束っ……！　抑えでもう一冊買っておけばよかった…」
しぶやは、僕が立ち直るまでの時間を稼ぐために、自分が買った本を取り出して亜季ちゃんに自慢しはじめた。
「ちなみに、私が選んだのは、東野圭吾『容疑者Xの献身』よ」
「それラノベじゃないじゃん！　ミステリーじゃん！　直木賞作品じゃん！」
「でも、主人公が超キモメンで喪男（モテない男）なの。感動のキモイ系文学なのよ」
『キモイ系』なんて聞いたことないジャンルを捏造するなっ！　で、羽場、あんたは何を選んだの？　はやく見せなさいよぉ」
慌てて『しりとり☆スケープゴート』を隠そうとしたが、亜季ちゃんに奪われてしまった。ああ、もうダメだ…こんなヌルいもの選びやがって！って怒鳴られるよぅ。
…と思いきや。
『しりとり☆スケープゴート』の表紙を見るなり、亜季ちゃんはいきなり瞳をキラキラと輝かせながら、
「こっ…これは、『しりスケ』の最新刊じゃないのっ？　初回限定のしおりまで入ってるわっ？　刷り部数少ないのに、よくぞゲットしたわねっ……！」
と大喜び。隣では、しぶやが「ちっ…」と舌打ちしている。
「え…それって、そんなに人気がある作品なの？　タイトルと絵で適当に選んだんだけど」
「一般的な知名度は低いけど、コアなファンがついているカルト的名作なのよ！　いきなりこんな

ものを選び出すなんて、あんた、ひょっとして才能あるかもよっ」
ああ、亜季ちゃんに誉められた……！
「じゃ、じゃあ、やっぱり…内容は、学園ほのぼの魔法ラブコメディなの？」
ビシイーッ！
亜季ちゃんのツインテールの尻尾で思い切り頭をはたかれてしまった。
「いたたた」
「あんた、アホじゃないの？『しりスケ』はそんな話じゃないわよっ！これはねぇ、深いリアリズム溢れる鬱デレ超大作なのよっ！飛び散る肉塊っ！吹き飛ぶ電波っ！串刺しにされて焼かれるひよこ！蛇に飲み込まれる縫いぐるみ！『諸君、私は幼女が好きだ！』と演説しまくる謎のオヤヂ！そして…『しりスケ』最萌えキャラといえば、百合百合しぃ電波オーラをゆんゆん飛ばしている人類虐殺少女、ペレストロイカちゃん！きゃーっペレちゃんかわいいーっ！あたしがツインテールにしてるのも、ペレちゃんに一歩でも近づきたいからなのっ！ああ、ペレちゃん…最新刊でも愚かな大衆どもを虐殺しまくってくれているのかしら？」
「ゲッ。そんなゲテモノ小説だったのかっ」
こんなにも「らぶりぃ☆」な絵柄で、そりゃないよ。子供が間違って読んだらどーするんだ。トラウマだぞ。
でも…偶然亜季ちゃんが大好きな作品だったらしくて、ラッキー。
しかし、亜季ちゃんのツインテールって、ラノベのキャラの真似だったのね。
今まで（ぱっと見はオタクっぽくないなー）と思っていたけど、実は「日常これコスプレ」だったわけだ。やはり、亜季ちゃんのオタク度数の高さはただものではない。
「ゲテモノじゃないわよっ！これこそがライトノベルの最先端っ！あんた、もしかして表紙のイラストのイメージに騙されたクチ？ああー、

心配ねぇ…アニメ版が、こういう層向けのヌルい作りにされなきゃいいんだけど…ちゃんと原作に忠実にアニメ化してもらえるのかしら」

「アニメ化されるだけで幸せじゃないか。贅沢だなあ」

『メディアミックスも良し悪しなんだ。下手なアニメを作られてしまうと、原作まで死んでしまうこともあるんだぞ』

アニメ化などでイメージとギャップが！　いったいどう埋めるの？

大好きな作品がアニメ化決定。喜びはあるが、不安も否めない。「あのシーンってテレビで大丈夫なのかな？」「あの少年キャラ、ちょっと萌えてたのに野太い声だったら醒めるなあ」等。それはちょうど、『世界ウルルン滞在記』で見知らぬ国に旅立つ若手タレントの緊張感とシンクロする…。

下條アトムのナレーションが響く、「ダニ族の朝はぁ、早いぃ」。アニメ放送開始。不安が的中し、キャラデザや演出などで、イメージと違ったものが呈示されることもある。「げ、この芋虫食うの？」。しかし、大好きな作品だ。観続けないわけにはいかない。若手タレントがゴールデンで顔を売るチャンスをフイにするわけにいかないのと同じだ。そこで我々はどうすればよいか。答えは一つ、「楽しむ」ことだ。たまに飛び出す神作画、チ○コキャップを装着して踊り明かす夜、好みの声優の奮闘、現地娘への淡い恋心、アニメオリジナルキャラの活躍、狩猟の仕方を教えてくれる気のいい兄貴…それらの「グッジョブ」を積極的に拾い、楽しめばよいのだ。

やがてその時は訪れる。そして…「別れのぉ、朝ぁ」。最終回だ。涙の理由を尋ねるのは野暮というものだ。最初はどんなに違和感を持っていても、そのうち情が移り、美しい思い出に変わる…。原作とのギャップを埋めるキーワードは、ズバリ「ウルルン」だ。

（※このキーワードを書いてハガキを送っても海外旅行のプレゼントは御座いません）

『そういう感じで、原作ファンはアニメを観る際に最大限の脳内補完を行う能力を必要とされることもあるんだ』

なぜか、亜季ちゃんとしぶやが目を潤ませながら「うんうん」と頷いている。亜季ちゃんはともかく、しぶやがなぜ？　やっぱ、こいつ、実はオタクなのでは？

「違うわ。断じてオタクとは違うのよ。敢えて言えば、ミクスチャー系？」

「だから、なぜお前は俺の思考を読むんだっ」

亜季ちゃんが興味なさそうに足をじたばたさせて、

「いいから、買った本を回し読みして寸評会しましょうよー」

あっ。僕が妹ばかり相手にしてるから、すねているのでは？

かっ…かわいい…

明らかに脳が沸いているのではと疑わせる発言も多々あるけど、やっぱりこの子はかわいい！

小説のキャラに憧れて髪をツインテールに縛ってるというのも、良く言い過ぎれば『夢追い人』？

「お、おう！　じゃあ、亜季ちゃんの買った『うらぬす☆天気予報』を読むとしようかな」

「あーっ、汚い手であたしの本に触っちゃダメ！　指紋がつくっ！　わーっ、そこのゴスロリ女、本をがばっと開いて折り目をつけるなーっ！」

「ケチ臭いなあ〜」

「あんたらねぇ、ライトノベルの文庫本は、本自体が芸術作品なんだからねっ！　手荒に扱わないでちょーだいっ！」

「単にあなたが貧乏性なだけよ。汚れたら買い直せばいいのに」

「有難いアイテムを粗末にする奴は地獄に落ちるのよーっ！　やい、くま、こいつらにライトノベルの正しい読み方を教えてあげなさいよっ」

『ええっ？　そんなの、フツーに目を使って読めば…』

「とっとと説明しなさいっ！」

ツウはラノベをどう読むの？

《準備編・ラノベを読む前に》
①手を洗う（清潔な環境でねっ）　②ケータイの電源をＯＦＦに（集中が、大事だぞっ）　③チョコなどの甘い物を用意（イマジネーションを強力サポート！）　④手を洗う（念には念をっ！）　⑤服を着る（素っ裸だと、風邪を引いちゃうからねっ♪）。

《実践編・電車内で読む場合の注意点》
①必ずカバーを掛ける（車内には雑菌がうようよ！）　②ピンナップは見たくても我慢（吊り広告と間違えられて、一斉に凝視されるぞ！）　③近くに、不良に絡まれているエルメスがいないことを確認（ごたごたに巻き込まれては大変だからねっ！）

《達人編・プロはこう読む！》
①目を閉じる（えぇっ!?）　②チャクラを開く（そうきたか！）　③本と身体を一体化させる（ば、化け物だぜ！）　④宇宙（そら）へ…（おーい、帰ってこ～い！）。

…以上、参考になったかな？　ココで挙げているのは、あくまで一つのスタイルに過ぎない。そのままマネするのではなく参考にとどめ、いつかキミだけのオリジナルな読み方を見つけてくれ!!

「確かにあたしほどのベテランともなれば、たいていの作品は読まなくてもだいたい内容判っちゃうのよねー。そんなあたしを驚かせた斬新な作品で、しかもエンターテイメント精神にも溢れた『しりスケ』は、間違いなく超ヒットするわ。アキ

『…とまあ、そんな感じだクマ』
「なんか、達人にいたるまでの過程が全部省かれているような気がするぞ」
「兄さん。チャクラの開き方を説明していたら、それだけでこの本が終わってしまうわ」

バを席巻するわ。ひがスィー先生、超天才！　そして、そんな作品にいちはやく注目してるあたしも、超天才！」
　そ、そうなのか？
　しかし、亜季ちゃんがこれほど熱狂する作品って、いったいどういう話なんだろう。表紙を観る限りでは、普通に学園ラブコメって感じのほんわかムードなのに、さっきの話だと血が滴り肉が飛び散り鳥が焼き鳥にされるというハードな内容らしい。うーむ、純粋に興味が湧いてきた。
「『しりとり☆スケープゴート』って、どういう内容なの？　さっきの説明だけでは、よく判らなかったんだけど…」
「『しりスケ』って呼びなさいよー。一口では説明しづらいのよねー。やっぱり、自分で全巻揃えて読むしかないんじゃない？」
「そこをなんとか。亜季ちゃん流に素人の僕に説明してよー」
「んもう、しょうがないわねぇ」
　僕は、「教えてよー」とおねだりする際に〈素人の僕に〉という枕詞をつけると、亜季ちゃんのツインテールの尻尾がぴょんぴょんと跳ねることを発見した。これは…喜んでいるんだ！　亜季ちゃんは自分と同じ趣味の持ち主、つまりオタクとしかつきあわないと常々言っている。しかも口では「あたしよりハイレベルのオタクじゃないとダメね」と言っているわけだが、実は超ビギナーの僕みたいな奴を虐げながらレクチャーするほうが好きなのでは…。
「兄さんはただ、犬のごとく調教されているだけよ」
「だから、僕の考えを読むなっ！」
　とりあえず僕は『しりスケ』を手に取ってパラパラとめくってみた。が…わっ…判らない…耳慣れない何かの専門用語のオンパレードだ…！　その上、状況描写がまったくないシーンとか、ひたすら台詞だけのシーンが続々。さらに、登場人物がやたら多くて、誰がどの台詞を喋っているのか

判らない！　そして、得体の知れない擬音の波状攻撃っ……！
「やべえ。レベル高すぎ。全然判らねぇ。キャラクターの顔が全部同じに見える。なぜ、みんな、ヘンな語尾をつけて喋るんだ？　各ページの挿絵に必ずＵＦＯが飛んでいるのは、何か意味があるのかっ？　あああ、プロレタリア文学と全然ノリが違うっ！　ストーリーすら判らんっ！」
「ダメねぇ。あんたにはまだ、『しりスケ』は早過ぎるのよ。ま、とにかくたくさん読むことね。読んで読んで読みまくれば、そのうちあんたにもライトノベルってものが判ってくるわよぉ」
そうなのだろうか。
本当に、僕にも『しりスケ』の面白さが判る日が、来るのだろうか。
ああ、たかが小説と侮るなかれ。なんと厳しい世界なんだ。
しぶやが肩を揺さぶってきた。ここが説得どころと見たのだろう。
「兄さんにはオタクは無理だわ。はやく諦めておうちに帰りましょう」
そこへ、ラー店長が現れた。ラー店長はうむうむと頷きながら、苦悩する僕の頭をぽんぽんと叩いてきた。
「いきなり『しりスケ』かね？　これは言ってみれば、格闘ゲーム初心者がいきなりゲージを溜めてスーパーコンボ技を決めようとするようなものだ。まずは昇竜拳のコマンドの入れ方から覚えないといかんね」
「店長…ライトノベルは非オタクの僕には敷居が高すぎるような気がするのですが」
「確かに、あまりにもジャンルが先鋭化してしまうと、一見さんが入ってこられなくなるからね。かつての格ゲーがそうだった…」
「裾野を広げるという意味では、今のバブル状態と化しているライトノベルブームにもメリットはあるかもしれないわねー」
…ブームだったのか。

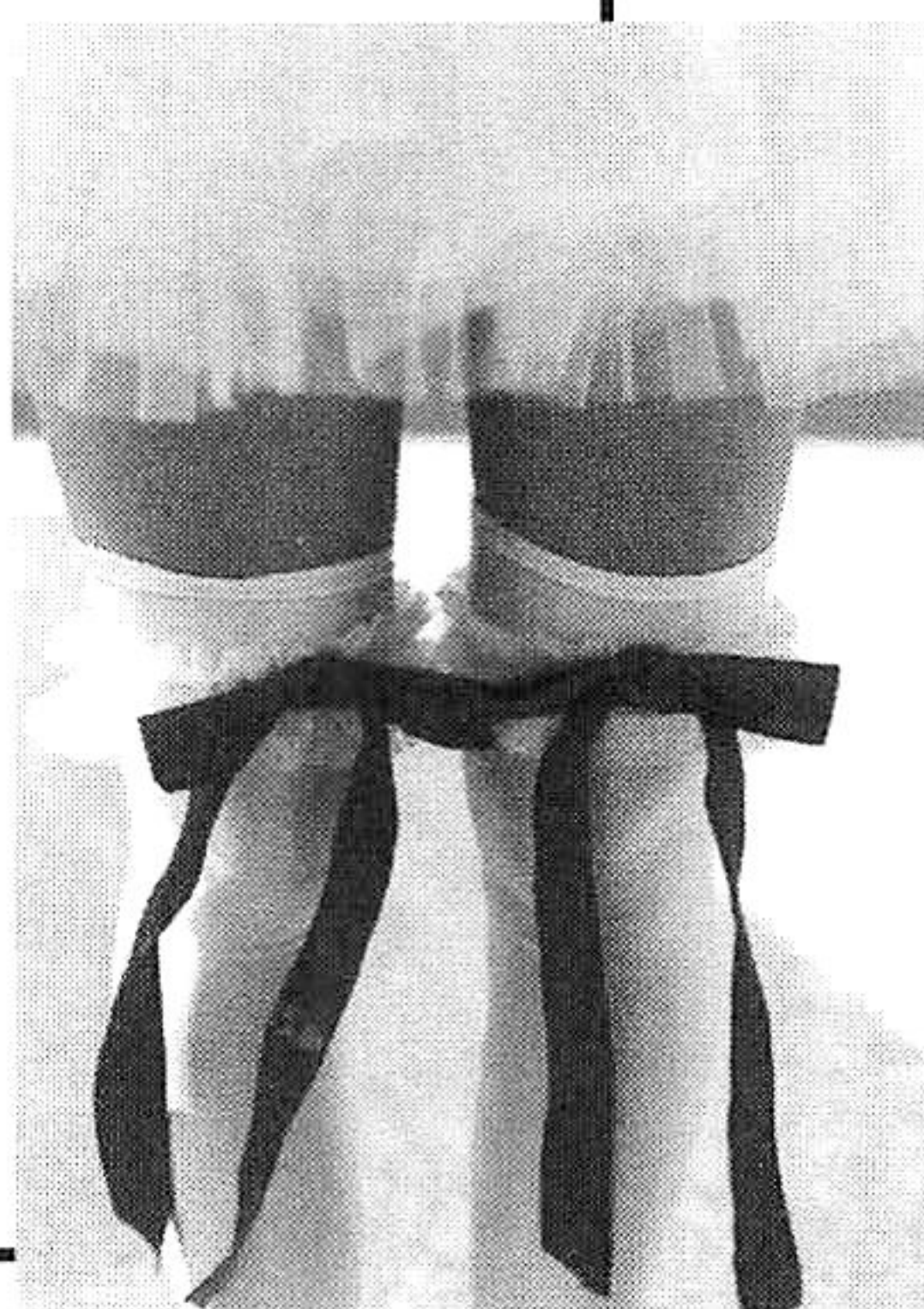
ラノベって今ブームなの？　いつまで続くの？

ラノベブームと呼ばれて久しいが、『ファウスト』第6号SIDE-B（講談社）によると、二〇〇六年には、なんと八つもの出版社がラノベレーベル新規立ち上げを企てているという。八社って！　どんな優等生でも就職活動（したことないけど）で八社内定は出ないよ！　競技人口の増加にはつながるかもしれないが、「八社も新規参入するなら、俺みたいなニートが書いた与太話でも出版にこぎ着けられるんじゃ…？」と思う輩が出てきて、「悪貨は良貨を駆逐する」との言葉通り、ラノベ界の衰退にリンクすることは明白だ。パン見せヒロインのスカートの中より明白だ。また、その八レーベルが一〇年後には半分を下回っていることは火を見るよりも、セカイ系ヒロインが覚醒時に放つ光を見るよりも明らかだ。打ち切り同然で生殺しにされる作家＆作品が増えるとなると、それは無視できない。抜き差しならない事情でメイド姿になったツンデレヒロインの絶対領域くらい、無視できないのだ。

しかし、これだけは確かに言える。「出る物は出るし、残る物は残る」。新規参入、大いに結構ではないか。一人でも良い作家が、一つでも名作が出ればと良いというくらいに、新興の萌え要素「ぽちゃ」系のヒロインくらい、ドンと構えていれば良いのである。

ミニスカートとニーソックスの狭間が「絶対領域」です！　モデル／桜井桃花さん

「そうよ、今は史上空前のラノベブームなのよ。集ってきてるんだからっ！　ひがスィー先生みたいなジャンルを超えた天才は、ライトノベルでなきゃ絶対に登場しえなかったもの！」

亜季ちゃんがなぜか自分の腰に手を当てて大威張りをはじめた。別に亜季ちゃんが偉いわけではないのに。

「ま、ちょっと売れると各社がどーっと参入してきて、粗製乱造で市場を枯らしちゃうってのが出版界の悪しき習慣なんだけど、ラノベは大丈夫よ！　なにしろ日本各地から選ばれしオタク勇者たちが

ないのでは…うん？　そうだ。僕がもしライトノベル作家になったら…亜季ちゃんは、僕に夢中？　もてる先生、天才！　とか言い出して…、
「兄さん、甘いわ。オタク経験ゼロの兄さんにライトノベル執筆なんて絶対に無理よ。だから、早く私とおうちに帰りましょう」
「うわっ、だから思考を読むなってば！」
「えーっ？　あんた、自分でライトノベル書くつもりなのっ？」
「だ、だって、絵は下手だけど、文章ならなんとか…書けるし…後は知識と経験を積めば僕だって」
「どーかしらねー？　あんた、ドラえもん以外のアニメを知らないんでしょ？　こういうのは子供時代からの英才教育が欠かせないのよ？」
ラー店長が、まあまあ、と亜季ちゃんを制して、
「まずは夢を持つことからスタートしなければ。千里の道も一歩から、見ない夢は叶わない、買わないラノベは読めないというではないかね」
「でもでも、こいつ、『しりスケ』の内容全然判らないって嘆いてるしぃ。じゃあ、あたしがライトノベル作家としての適性をチェックしてあげる。問題でーす！　ここに幼稚園時代の主人公の男の子と、その幼なじみの女の子がいまーす！　あっ、二人で遊んでいたら、町のいじめっこたちが襲ってきました！　主人公の男の子は、この後、どう行動しますか？」
なんだ、簡単な問題だな。僕は即答した。
「男なら迷わず、女の子を守って、そいつらをやっつける！」
「ブッブー！　はずれーっ！　答えは『女の子の影に隠れてメソメソ泣いて、女の子に守ってもらう』よ！　あんた、何も判ってないわねっ！」
「えええええええええ」
「いいこと！　男子向きライトノベルの基本は、『主人公はよわよわ、女の子のほうが強い』これよーっ！　中には豪屋大介みたく全然違うパターンもあるけど、基本は『女尊男卑（じょそんだんぴ）』なのよーっ！　あくまでもラノベ世界の中心は『女の子』なの

っ！　男はみんな、女の子の下僕なのっ！」
「えーっ？　そっ、そうなのか？　なっ…なんて軟弱なっ…」
「むきー、あんたはやっぱりあたしの彼氏失格ね！　びしばし！」
「ああっ、亜季ちゃんのツインテールで叩かれると、なんだか幸せ…」
「ちっ…意外に奴隷の素養があるわね、兄さん」
……。
こうして、僕のハードなオタク修行がはじまったのだった。

ラノベって、もしかして僕（私）でも書けるんじゃないの？

ここまで読んできて、あなたは「ラノベって、もしかして僕（私）でも書けるんじゃ…？」と思ったかもしれない。答えはイエスだ。学歴と教養がなければエリート官僚にはなれない。絵が描けなければマンガ家になれない。しかし、オタクでありさえすれば、そして若さ（実質、自称問わず）さえあれば、あなたにはラノベ作家になれる可能性があるのだ。特別な技術は必要ない。オタクマスターへと続く街道の通行手形は、初代『がんばれゴエモン』の一面並に、カンタンに入手可能なのだ。ちょっとだけ、オタク世界という名のダンジョンを探索すればいい。後は、際限なく広がる脳内のキャンバスに、妄想の絵の具で自由に描くだけ。そうすれば、プロの絵師さんが実際に描いてくれる！　それをマンガ家さんが描き、アニメーターさんが描きはじめた日には、あなたはもう億万長者だ！
「つーかあんた、さっきからダジャレばっかだし、ぜんぜん説得力ないよ！」と、あなたは思っているかもしれない。ぐさささささ！　あいたたたたた！　ぎゃふんぎゃふん！　あへあへあへ！
……ふふふふふ、勝ったと思ったら大間違いだよ。こんなこともあろうかと、ちょっとした保険を用意しておいたのだよ。ふふふ。さあ、とっとと次のページを見るがいいよ！

おもてる君
ラーの神殿に
馴染んできたね

少しは
良くなったぞ
人間

国井さんは
馴染みすぎです

しかしちょうど
いい所にきたな

倉田顧問が
来店されてるぞ

色々伺うチャンスだ
お前ラノベ作家に
なりたがってたろ

わっ
僕みなさんを
完全に見下して
ましたけど
心を入れ
替えます!

完全に
見下して
たのかよ

倉田英之顧問
『R・O・D』
『かみちゅ』を手がけた
人気小説脚本家

…いやーでも
そんな方に
会えるなんて
すごいですね

感謝しろよ
ぼくたちの
紹介あっての
ことだぞ

いらっしゃった

初めまして！
いつも素晴らしい作品ありがとうございます！
ぼくは止めたのですがあの馬鹿がどうしても質問したいって聞かないんですぅぅ

STAFFROOM

それでは作品を作るうえで楽しいことやつらいことを是非

そうだね…自分でもいいと思えるアイデアが出たときとかは嬉しいかな

色々な資料を集める上で知る楽しみもあるね

あとは世に作品を出すことの大きさも喜びだね

自分たちの知らない間に海を越えたアメリカで有名になってたりとか

なるほど先生もやはり亜季ちゃんのツインテールで叩かれる事ですか

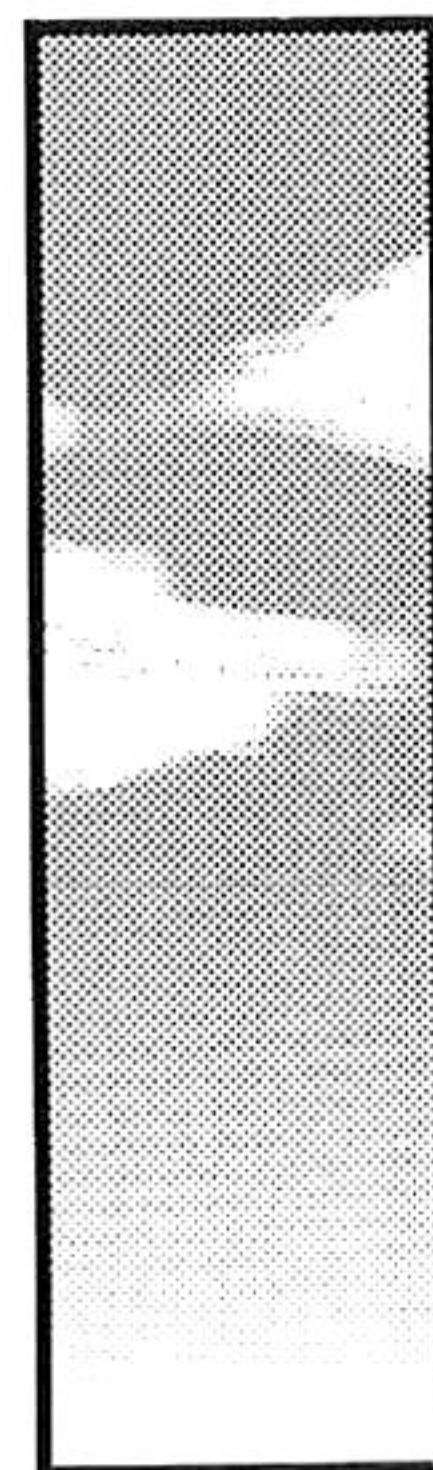
ねつ造にもほどがあるわ

つらいことは…
話が思いつかない
ときかな
先を思いつかない
不安は考えないように
するけど
でもそうやって
苦労して考えても
自分の思い通りには
使われなかったり
するんですよね？
自分だけじゃ
ただの妄想だからね
そこで話に
説得力を持たせて
周りを納得させるとか
はぁ…
とかいいながら
自分好みに
軌道修正とか
考えることが
多くて
大変ですね…
まあ ほっといても
色々考えちゃうし
これしかできないし
う うわあぁぁぁ

やっぱり駄目だ！僕にはラノベを書くなんて無理だ！
僕みたいなカラッポな人間は倉田先生のように立派になれません！
いいこと言った
ポンッ
いやいいことは言ってないです
もてる君 なにも頭まで引きこもることはない
思い出と執着心で道を切り開くんだ
ぴかーーん
な なるほど！頑張ってみます！
というわけで亜季ちゃんの徹底密着から始めようと思うんだけど
ストーキングせんでいいからラノベ読んどけ！

第2章

NIJIGEN he IKIMASSHO!!

めちゃ×2録れてるッ!

～アニメ編～

Animation

亜季ちゃんの境地に少しでも近づくため、日夜ライトノベルを濫読(らんどく)する生活を続けているうちに、一ヶ月が過ぎた。今では少年向きだけでは少々飽き足らなくなり、コバルト文庫をはじめとする女の子向けレーベルにも徐々に手を出しつつある有様だ。

そうか、「レイニー止め」か…！

ああ、小説といえば『蟹工船』しか知らない昔の僕、さようなら。

そんなある日。いつも通り、ラーの神殿で亜季ちゃんが楽しみにしている新刊を買い込まされた僕は…、

「亜季ちゃん、今月の新刊買い込んでおいたから、代金をお願い」

「はぁ？　何言ってるのよ、あんたが勝手に買い込んだんでしょ？　これは、あたしが当分預かってあげるから、よこしなさいよね」

「ええっ？　酷いやっ…それに、マンガとラノベと雑誌をあわせて三〇冊も買っちゃったんだけど、亜季ちゃん自分で担(かつ)いで帰れるの？」

「ぐっ…確かに…お、重いわね…じゃ、下僕、あんたが担いであたしの部屋まで運びなさい」

えっ？　亜季ちゃんの…部屋っ…？

こっ…これって…もしかして、もしかする展開なのかっ？

「ちっ、違うっ！　フラグなんか立ってないからねっ！　違うんだってばーっ！」

「…フラグって何？」

びしっ。

ツインテールの尻尾で頬をぶたれてしまった。

「あんた、この一ヶ月いったい何を学んできたのよっ？　そんな基本的なことすら判っていないなんて…あたしは、あんたを買いかぶっていたようねっ」

「すいませんすいません！　で、フラグって何なの？」

「いいから新刊を担いでついてきなさいってば！　げ、下僕の分際でおかしな真似をしたら即刻破門

だからね！　か、勘違いしないでよね！」
「はいはい」
かくして、僕はとうとう亜季ちゃんのお家にお呼ばれされるどころか、いきなり亜季ちゃんの部屋に入れてもらったのだった。亜季ちゃんの家は古めの一軒家で、内装・外観ともにごく普通の一般家庭という感じ。家族はまだ外で仕事しているらしく、家には誰もいないようだ。
ということは…二人きり…？
これって…ドキドキ…？
「あ、あたしに触ったら殺すからね！」
「大丈夫だよぅ」
口では乱暴な言葉ばかりを並び立てる亜季ちゃんだが、妙に態度がもじもじしていて実に愛らしい。なんだろう、この横暴なジャイアニズム溢れる発言と、その正反対とも言えるような女の子らしい態度…この格差、このギャップが、実にかわいい。見たまえ、亜季ちゃんの部屋の中を。日頃はあんなにも乱暴でガサツで女王様なのに、お部屋の中はファンシーなどうぶつの縫いぐるみでいっぱいだ！　きっと誰も見ていないところでは、これらの縫いぐるみにほっぺたをすりすりして「きゃーっ、かわいいー」とか言ってるに違いない。いっ、今時こんな乙女ちっくな女の子が実在するだろうか？　しかも、我々の前では、決してそのような乙女なそぶりを見せようとはせず、敢えてどこぞの野武士のような乱暴者として振る舞い続けている…！
信じようが信じまいが、亜季ちゃんは実在する！
ところが僕の周囲の男友達は、みんな（顔はかわいいけど、あんな素直じゃない女、難易度高そうだし扱いが面倒臭いよー）と嫌がって亜季ちゃんにアタックしないのだ。なぜだ、なぜ僕だけこんなにも言語コミュニケーションとノンバーバルコミュニケーションの落差が激しい亜季ちゃんに惹かれるのだ？
「それは、兄さんがツンデレ属性だからよ」
「うわっ、しぶや？　なぜ、亜季ちゃんの部屋

に？　しかも、縫いぐるみの中に入ってるしっ」
「ぎゃーっ？　あたしのお気に入りのクマが、クマが…着ぐるみにされちゃってる…！　あんた、中の綿を勝手に抜いたわねっ？」
　クマの着ぐるみを被ったしぶやが縫いぐるみの群れの中からとことこっと歩いてきて、亜季ちゃんが入れたお茶とお菓子を勝手に頂きはじめた。
「しぶや、属性って何だ？」
「ま、細かいことは駅前秋葉原留学講座で勉強してちょうだい。あら、このお茶、ぬるいわね…入れ直しなさい」
「きーっ、勝手に部屋にあがりこんでおいて、何を偉そうにっ。ちょっと羽場、こいつ、あんたの妹なんでしょ？　なんとかしなさいよっ！　調教とか洗脳とかしてさぁ」
「そっそんなことできないよー」
「なんでよ？　秋葉原の法律では、兄は妹を奴隷のように扱っていいのよ！」
「へー、そんな法律があったのか」
「ふふふ…うちの兄は妹属性なので、私に頭があがらないの。朝は私が起こしてあげないと起きられないし…」
「そっ、それは言わない約束だろっ？」
　ぽこっ。
　なぜか、目を三角に吊り上げた亜季ちゃんに頭をはたかれた。
　ど、どうして？
「はぁ、とことんダメ人間ねー。まぁいいわ。やい下僕、さっさとあんたの買ってきた新刊をテーブルの上に広げてあたしにプレゼンしてみなさい。あんたの新刊鑑定眼がどこまで鍛えられたかチェックしてあげる」

『属性』ってなんなの？

〝属性〟とは、自分が好きなキャラクターがどんな分類（性格／設定）かという事だ。

簡単に自身の属性を判断する方法として、私が考案したのが〝起床法〟である。自分が学校への遅刻ギリギリまで寝坊をしたと仮定（妄想）した時、まず最初に「自分を起こすのは誰か?」から導き出す手法である。

「おにいちゃん」と妹が優しく起こすイメージが浮べば『妹』（朝倉型）の属性であり、起こさずに隣でぐーすかいびきをかいているイメージであれば、間違い無く『姉』属性（葛城型）だと言えるだろう。また「くぉらぁ～」と布団をはぎとられたなら『幼馴染み』（腐れ縁型。高瀬型とも私は呼ぶ）。ベッドまでは来ないが、玄関先で自分をちゃんづけで呼ぶ声が聞こえたなら、『幼馴染み』属性でも神岸型だ。これが、血縁や御近所的人間関係から飛躍して「メイドさんに」と願ったなら、立派な『メイド』属性（マリエル型）だ。

だが自分の属性が判ったからといって、それに縛られる必要などない。お姉さんがメイドさんでも良いし、妹だったのに宇宙船のウラシマ効果（相対性理論）でお姉さんになってた、もOK。幼馴染みがネコ耳のヴァンパイアだってアリな世界なのだ。二次元の可能性は無限なのだから、イコール、〝属性〟も無限に存在するのだ!

余談だが、最近では『百合』『生徒会長』がその派閥を拡大しつつある。気を抜いてはいけない。注目だ!

なにが一番萌えるかな～?

「どうして亜季ちゃんの部屋のテレビで、駅前秋葉原留学講座が見られるんだ?」

「細かいこと言わないのっ」

なし崩し的に、三人で新刊をチェックして「これはいい仕事していますねー」と唸（うな）りあう展開になってしまった。しぶやめ…せっかく亜季ちゃん

と二人きりになれたのに。呪ってやる。恨んでやる。祟ってやるぅ。
ところが、事態は意外な方向に。
今日発売のアニメ雑誌をチェックしていた亜季ちゃんが、突然、
「きゃあああああああ」
と悩ましげな悲鳴をあげたのだ。
「どうしたの、亜季ちゃんっ？　ページの間に虫でも挟まってたのっ？」
「見て見て、新作アニメ情報のページを！　ひがスィー先生の『しりスケ』がついにテレビアニメ化されるんですって！」
「へえ。よかったね」
「何そのつれない返事？　もっと驚きなさいよっ！」
ボコッ。
顎にアッパーを入れられた。
脳がぐらぐらと揺れてバランスを失った僕は正座していた亜季ちゃんの膝の上に「ふもっふ！」と顔を埋めてしまった。
「きゃあああっ！　何やってるのよっ！　どきなさいよっ」
「大変だわ。兄さんがわいせつなオタク女に誘惑されているっ…」
「違うっ！　どこをどう見たら、そーなるのよっ」
亜季ちゃんに強引にひっぺがされ、喉につま先蹴りを入れられた僕は、ゲボオオッと呻きながら床の上を転がった。
「いたたたた…」
「兄さん、顔がニヤけているわ。オタク女による調教がここまで進んでいたなんて…」
「ああ、本当に『しりスケ』がアニメ化される日が来たのね！　放送時間は…げっ…木曜日の深夜じゃないの…！　まずいわ、各局のアニメ番組が被ってオンエアされる魔の時間帯だわ。しかも毎週のように放送時間がズレること請け合い…翌朝には学校があるから徹夜するわけにもいかないし…徹夜したら、あたし、にきびができちゃうから…W録できる『アレ』はプレゼント用に買った

モノだし…ううっ、どうすれば…」
珍しく、亜季ちゃんが深刻な表情で悩んでいる。
励ましてあげなければ。でも、どう言えば…。
僕は、亜季ちゃんの部屋の書棚を一通り観察してみた。
本もたくさんあるけど、ＤＶＤの箱が目立つ。一枚ずつトールケースに入っているＤＶＤも多いが、幅広のボックスに何枚ものＤＶＤがまとめて入っているモノもいっぱい飾られてあった。
そうだ、これだ。
「亜季ちゃん、テレビで観れなくても、ＤＶＤを買えばいいじゃないか。どうせ『しりスケ』のＤＶＤが出たら買うんだろ?」
「アホかーっ!」
びしいっ。

またまたツインテールの尻尾でぶたれてしまった。
「あんた、バカじゃないのっ? テレビ版とＤＶＤ版とでは、バージョンが違うのよっ、バージョンがっ! 例えばテレビ版では入っていたＢＧＭがＤＶＤ版では抜けていたり、テレビ版では真っ白だった温泉シーンがＤＶＤ版ではばっちり観えていたり、といったバージョン違いがあるのよーっ! 深夜アニメは特にそうなのっ! 他にも、オンエア中には大人の事情でクオリティがいまいちだったパートの動画がＤＶＤではリテイクされてたり…! テレビでオンエアされるバージョンは、まさに一期一会! 録画しそこねたら、もう永遠に観られないかもしれないのよーっ!」
何も泣きながら叫ばなくても。

TV版とDVD版って、なにが違うの?

DVDには〝映像/音声〟のおまけがつく。副音声で制作陣のトークが楽しめたり、放送ではカットされた部分の再収録や新しいシーンなどが映像特典として追加されたりする。未放映部分だけにスタッフさ

んの遊び心が溢れている場合が多く、例えば『かみちゅ！』では『R・O・D』のキャラをちらっと見かける事ができるので、両作品のファンとしては、嬉しくて仕方ない！　また、TV放送では表現として「隠さないといかん」的なものがきちっと隠されているので、逆にストレートな描写をされるより、フンガフンガしてしまう場合があるのだ！

いち例として『フルメタル・パニック？ふもっふ』における「女神の来日～温泉編～」を観てほしい。地上波放送だけに、フルメタ女性陣のすんばらすぃー裸体が絶妙な構図や小道具によって見事に〝みえない〟状態で描かれている。「見えないからみたい！」というこちらの気持ちが、彼女達の入浴場面をのぞこうと必死になる男性陣キャラ達と見事にシンクロして、作品をさらに楽しめるのだ。当然、最初から〝みえない〟構図になっているので、この作品の場合はDVDでも〝みえない〟。「じゃ、TV版だけでいいじゃん」だって？　とんでもない。そこまで熱が入った作品（場面）である。「高画質」であるDVDは絶対なのだ！

そう、時代は高画質。要は画質だ！　高画質でかなめちゃんや大佐殿があぁぁっ…つまり、「どっちも必要」と言う事だ！

『フルメタル・パニック？　ふもっふ　第4発』：第4発と第5発に「女神の来日」は収録されている。刮目して見よ！

そ…そうだったのか…！
今までなんとなく「アニメってどうせ全部DVD化されるんだから、無理してテレビで観なくてもいいのに」と思っていたけど、まさか、バージョンが違うだなんて…！
「…パンツが見えたり見えなかったりといった程度のことで、何をそんなに大げさに騒ぐんだか…」
「わーっ！　しぶや、亜季ちゃんを怒らせちゃダメだ。僕が殴られる、わーっ！」
「…あまりにも情けないわ、兄さん」
「他にもテレビ版はアスペクト比4対3だったのがDVDだと16対9のワイド画面になっていたりだとか、そーゆー違いもあるのよっ！　『ローゼンメイデン・トロイメント』なんて、地上デジタル版・地上アナログ版・BSデジタル版・DVD版の全部が微妙に違うのよっ！　だからあたしはテレビでオンエアされているアニメは可能な限り全部録画することにしてるのっ」
「さすがは亜季ちゃん、凄いよ！　でも、全部録画しちゃうんだったら…何も、高額なDVDを無理して買わなくても…？」
「DVDにはいろいろオマケもついてるしっ。それに、DVDの魅力は何といってもボックスそのものっ！　箱よっ、箱がほしいのよーっ！　箱を本棚に並べて初めて、ああー私はこのアニメのDVDをコレクトしたんだなーって達成感を味わえるんじゃないの！　自分のDVDレコーダーで録画して焼いたDVDには、箱がついていないでしょっ？」
「…箱だけ買えばいいのに」
「わーっ、しぶや！　亜季ちゃんを怒らせると僕が殴られ…」
ぽこっ。
言い終わる前に、僕の頭蓋骨の上へ亜季ちゃんの手刀が落ちてきた。
ぐはっ。
だんだん快感になってきている自分自身が、恐ろしい。

「箱」はなぜ魅力的なの？

〝箱〟の魔力が最大限に発揮された例として、いちばん印象深いのは一九九五年の『新世紀エヴァンゲリオン』第一巻に付属した箱である。当時のソフトのメディア（容れ物）はDVDではなく、LD（レーザ・ディスク）。作品の異常とも言える人気から、予約時期が遅かった場合は箱がつかない事態になり、箱を熱望する輩が一部暴徒化。ゲームのコントローラをロンギヌスの槍に持ち替えて「絵々じゃないか、絵々じゃないか～」と秋葉原の中央通りを練り歩く一揆を起こした。慌てた政府が、事態沈静化の為にオマケのはずだった箱を後日販売し、何とかことなきを得たのは記憶に新しい。これが世に言う「はこよこせ騒動」である。

そもそも〝箱〟はソフトのオマケとしてつけられていたが、その箱に描き下ろしのイラストなどが描かれるようになると「箱欲しさにソフトを買う」という強者が現れるようになった。つまり、「絵があれば、すべて作品のグッズ」となる秋葉原特有の原理が働いたのだ。現在、ハードケースに入るDVDの〝箱〟は、実は容れ物としてはさして利便性がなく、意味はない。しかしなくなる事はありえないと断言しよう！　なぜならケースとあわせて屏風絵のように展開する『ローゼンメイデン』シリーズ！　木製というのが泣かせる『蟲師』！　…もうおわかりだね？　〝箱〟そのものがすでに独立した素晴らしい作品グッズなのだよ！

▲『ローゼンメイデン・トロイメント　1〈コレクターズエディション〉初回限定』「箱」は初回限定が主。店頭で見たら迷わず買うべし！

▲『ローゼンメイデン　1〈初回限定版〉』

アニメ基礎編

亜季ちゃんの部屋で、お茶会は続く。
「というわけで、『しりスケ』アニメ化決定を記念して、羽場、あんたのアニメオタク度を測定してあげるわ」
「えっ？」
「もうオタク道に入門して一ヶ月になるんだから、少しはアニメについても勉強してるんでしょ？」
「えええっ？　ご、ごめんなさい、マンガとライトノベルを読むだけで精一杯でしたっ」
僕の返事が想定外だったからだろうか。亜季ちゃんは真っ青になって、わなわな震え出した。
「それじゃ…未だに…『あんたバカァ？』の元ネタも判らないのっ？」
「うん！」
ビシイーッ。
バシイーッ。
あぐうっ。亜季ちゃんのツインテールが左右から波状攻撃を。
「そんなことでアニメ版『しりスケ』の面白さが理解できるとでも思ってるのっ？　だいたい、あんた…『ケロロ軍曹』観てるのっ？」
「観てない！」
ビシバシ、亜季ちゃんのツインが、以下同文。
亜季ちゃんはおろおろと涙まで流しはじめた。そして、勉強机の上に飾ってあった「にょろにょろ」の縫いぐるみに祈りを捧げはじめた。
「ああ…秋葉原の二次元の神さま、あたしの指導が間違っていました。根本的なことを何も教えていませんでした、このアホに」
「見て兄さん、この女は異教徒よ。異教徒は殺していいのよ」
「異教徒って言われても、うち、無宗教だしなー」
「にょろにょろ」に祈りを捧げて癒されたのだろう。気を取り直した亜季ちゃんは、ＤＶＤボックスを次々と書棚から取り出しはじめた。
「いいこと？　『しりスケ』は過去の膨大なアニメ

作品のパロディから構成されている、とってもハイレベルな作品なのよ。その全部を習得しようとすると何年かかるか判らないので、とりあえず絶対に鉄板なアニメだけでも鑑賞しなさい！　その鉄板なアニメとは…『機動戦士ガンダム』と『新世紀エヴァンゲリオン』よ！」

さすがの僕も、ガンダムぐらいは知っている。…名前だけ。

エヴァンゲリオンは、えーと、昔、幼なじみのユウくんがどっぷりハマっていたような…彼、あの後、ひきこもりになっちゃったけど…どうしてるんだろう、今頃…。

『ガンダム』『エヴァ』は、やっぱり偉大なの？

現在のオタクを語る上で外せない作品が『ガンダム』と『エヴァ』だ。これはもう避けては通れない。英語が喋れなければ、世界の大海には出られないのと同じレベルだと思って良い。経済界でのパーティーの基本話題が株やWBSであれば、こっちの世界でこの二作品を知らないと、自分の立場は厳しいものになると考えたほうが良いのだ。しかし逆に考えれば、きっちりこの作品を押さえておけば、会話の糸口に困る事はないと断言できる。

とりあえず「綾波ですか？　アスカですか？」と問えば間違いなく会話は盛り上がる。もしパーティーでスピーチを頼まれたなら、「逃げちゃ駄目だ」と繰り返すだけで周りのアキバ貴族達は好意の眼差しを向けてくれるであろうし、ビンゴ大会での景品を「これは、いいものだ！」と言い、それが電化製品であれば「僕がいちばん上手くつかえるんだ！」と壁を叩けば、会場から歓喜の拍手が起こるはず。だが、それと同時に周囲から「あんた、バカァ？」「この軟弱者！」といったツッコミが予想されるので、動揺しないように。

しかし、『エヴァ』の場合は「あの最終回」、『ガンダム』なら「女の子向けのガンダムってどうよ？」というテーマになってしまうと、会話どころか喧嘩寸前の〝朝まで生激論〟になる可能性がきわめて高い。

それだけ皆の心の中に強大な影を落としている偉大な作品だ。注意だぞ！

「例えばお子様に大人気の『ケロロ軍曹』だって、ガンプラを知らないと判らないネタが多いのよ。つまり、子供マンガとガンダム文化がすでに融合してしまっているわけ。それくらいガンダムはスタンダードなの。まあ、ガンダムシリーズを全部観てると間に合わないから、とりあえずファーストガンダムの映画版三部作だけでも観なさい。それとエヴァね。エヴァはテレビ版全部と、映画版は夏エヴァだけ見ればだいたいOKよ」

「判ったよ！　で、ガンダムとエヴァって、どう違うの？」

　ツインテールが以下略。

「そんなもん観れば判るわよっ！」

「初心者の僕のために、一言で説明してくれてもいいじゃないかー。亜季ちゃん、オタクマスターなんだろっ」

「そっそれは…えーと…タイトルが違う？」

しまった。亜季ちゃんは理屈をこねるのが苦手なのだった！

「しぶや、お前なら説明できるはずだ」

「ガンダムは、宇宙でプラモデルが戦って、電波が飛び交うアニメよ。エヴァは、もっともっと電波が飛び交って、ショタ少年がオナ●ーするアニメよ」

「その悪意に満ちた説明は何よぉーっ！」

「…じゃ、あなたが兄さんに説明すれば？」

「やっぱりこの女、アニメをバカにしてるのねっ？　やいゴスロリ妹！　それじゃあんたは、どんなアニメが良いアニメだって言うのよ？」

　ああ、どうしてこの二人、こんなに仲が悪いんだ…。

「ズバリ、『ハチミツとクローバー』ね」

「ムキーッ！　やっぱりそう来ると思ったわっ！　オサレめ、オサレアニメめ！　オサレ退散っ！」

大変だ。亜季ちゃんが、しぶや目掛けて「豆」を撒きはじめた。
「兄さん、異教徒が暴れはじめたわ。何やら邪悪な儀式を開始したわ」
「二人とも…どうして、同じアニメ好き同士、仲たがいするんだよ？」
「違うわ兄さん。私はノイタミナ枠が好きなだけよ。同じ深夜枠でも『アカギ』は断じて観ないのよ」
「ノイタミナなんて邪宗門が観るものよーっ！　ふざけんじゃないわよ、あたしたちオタクが何十年もかけて作ってきたアニメ文化を、今頃になって横からかっさらっていこうだなんて、そうはいかないわよオサレどもめ！　お台場へ帰れ！」
「…あなたが作ったんじゃないわ」
「黙りなさい、黙りなさい！　あんたなんか、そんなにオサレイケメンが好きなら『夜王』でも観てればいいのよっ！」
「あなたこそ口ではエヴァは名作よと言いながら、実はエヴァの最終回の素晴らしさを全然理解できてないんでしょう。エヴァを真に理解するには、フロイト、ユング、レインといった心理学の知識、およびグノーシス主義や錬金術に関するオカルト知識が必要で…その上、構造主義や記号論についても勉強しないと…あなたみたいな動物化したアキバ系が理解できる作品ではないのよ、どうせ『きゃーっ、カオルくん、かわいいっー』とか言ってただけのクチでしょう」
「だっ…黙れっ！　自分が頭いいからって自慢すんなっ！　何言ってるのか全然判らないのよっ！　バカ、バカ、バーカ！」
「ああ…亜季ちゃん、涙まで流して…おろおろ…」
「兄さん、判った？　このいがみ合いこそが、アニメの歴史そのものなのよ。こんな醜い争いの世界に、純真な兄さんが入ってきてはいけないわ」
「自分で場を荒らしておいて何言ってるのよ、この女超むかつくっ！」
僕は仕方なく亜季ちゃんを後ろから羽交い絞め

にして豆撒きをストップさせた。ああ、亜季ちゃんの背中って、あったかいなあ…腕も柔らかくてふにふにだし…何だかいい匂いがする…くんくん。

「ちょ、ちょっと？　何、身体を密着させてるのよっ？　どさくさに紛（まぎ）れて兄妹二人がかりであたしを襲うつもりなのねっ？」

「ちっ、違うよー、とりあえず豆撒きをやめようよー」

「兄さん、心臓に杭を打ち込むなら今よ」

「あたしはヴァンパイアかっ」

「オサレアニメ」ってなんなの？

アニメでありつつ新しい視聴者層を開拓しようと、二〇〇二年頃より「アキバよりハリウッド」「ラブコメにならない」という要素をあげられる作品が登場しはじめる。『L／R』『プラトニック・チェーン』『ウルフズレイン』などが該当する。しかし、いかんせん「ラブ＆コメディ」を重んじる私は、良作でありながらも深入りできず、同時期放送の『成恵の世界』の能登さまの登場に幸せの黄色いハンカチを掲げてしまった！　この「能登声フラグルート」を辿ったのは私だけではなかったようで、〃オサレアニメ〃は一時期、その姿を消す。

しかし二〇〇五年に入ると、爆発的求心力を持ちはじめた「萌え」へ逆説的なアプローチをする作品として〃オサレアニメ〃が再び登場する。『ハチミツとクローバー』『パラダイス・キス』がそれだ。放送局の狙いは、TVドラマを観ている女性層をアニメに引き込むこと。その戦略からか、放送の際にアニメーションという言葉を使用せず、〃ノイタミナ〃という造語を作り出して我々の頭上に「？」マークを出させたものだ。しかし、作品自体は素晴らしく、その作画クオリティも圧倒的で多くのマニアを唸らせた。だが、良く出来ていたために、逆に「なぜこれほどの作品が深夜なの？」と再び「？」を出させたのは記憶に新しい。

しばらくして……。
亜季ちゃんとしぶやにアニメ談義をやらせるとどちらかが血を見るまで終わらないことに気づいた僕は、必死で二人を分けてようやく事態を沈静化させた。
「というわけで、仲直りしようよ二人とも。僕がおごるから、カラオケでも行かない？」
「…兄さんがおごってくれるなら、行く（ぽっ）」
しぶや…なぜお前が照れる？
「か…カラオケって、あの、ホテルに行くお金がない高校生がエッチなことをする場所でしょっ？そんないやらしい場所になんて、絶対に行かないわよーっ！」
「亜季ちゃん、誤解、誤解、誤解」
そういえば、ラーの神殿にもカラオケボックスがあったような。亜季ちゃんは使ったことがないので知らないみたいだけど。
僕は目を離すとまたすぐケンカをはじめそうな二人を引率して、ラーの神殿へ向かった。で、さっそく猫の店長に尋ねてみた。どうでもいいけど、この店長、なんで猫の着ぐるみに入ってるんだ？
「マスター、カラオケボックスを二時間借りたいんだけど」
「アニソン系の部屋とJ‐POP系の部屋があるよ。どっちがいい？」
「そんなもん、アニソンに決まってるでしょっ！マスター、なんでアニソン以外の部屋なんか置いてるのよっ」
「…私はアニソン以外なら、何でも…」
「まあた、このゴスロリは！」
ああ、またしてもオタク娘VS非オタク娘の不毛な争いが。
どうすればいいんだ。
もちろん僕には、亜季ちゃんの味方をする以外の選択肢がない。しぶやには、後で平謝りしてアイスクリームでもおごってあげればいいだろう。
「じゃ、兄権限でアニソンの部屋に…」
「兄さん、恨むわ」

「それじゃ、あたしがガンダムのテーマソングとエヴァのテーマソングを全部歌ってあげるから。まずは音楽から入りなさいっ！」
「…地獄だわ…」
こうして僕たちはアニソン専用の部屋に案内された。
亜季ちゃんは「アニソン」と書かれた曲名リスト本を独りで独占して、じゃんじゃん曲を入れはじめた。
「どーせ、ゴスロリ妹はアニソン歌えないんでしょうから、あたしが一人でリサイタルを開催してあげるわよ！　聞きほれなさい！　まずは『ケロッ！とマーチ』からいきまーす！」
ところが、しぶやが亜季ちゃんの手からマイクをむんずとふんだくって、
「…あっ、一曲目は、私…アンアンアンアン、アンアンアンアン…」
「うぎゃーっ！　耳が腐るーっ！　J-POPなんか歌うなーっ！」
「あら、どうして。この曲、あなたが大好きなアニメのオープニングテーマよ？　こうしてリストを見ると、意外にオサレなバンドの曲がたくさんあるのね…知らなかったわ」
「本当だ。吉田拓郎やサンボマスターなんかもあるのか！」
「兄さん、それらはオサレとは微妙に違うわ。断じて違うのよ」
「くううっ…！　最近は非オタの若者どもがさっぱりCD買わなくなって、もはやオタクしかCD買わないから…だから、音楽業界の奴らがいろんなアーティストにアニソンを歌わせてるのよっ！お陰で、お陰で、あたしの『ケロッ！とマーチ』があああっ！　アフロ軍曹があぁーーーーっ！」
亜季ちゃんが頭を抱えて血の涙を流しはじめた。
ああもう、亜季ちゃんってちょっとしたことで傷ついて暴れ出すんだから。まったく、手がかかるなあ…。
だが、そこがいい！

アニソンにJ-POP！　って許せるの？

最近のアニメ主題歌はその作品のために作られた楽曲ではなく、人気アーティストの既成の曲、いわゆるJ-POPを起用する傾向が多い。これにはファンからも賛否両論があるようだけど、利点がないというわけじゃない。

例えば、社会人になれば目上の一般人とも、つきあいでカラオケに行かなければならない面倒事も出てくる。そうなると気兼ねなくアニソン縛りができる、気心の知れたオタク仲間とのカラオケとは違って、がんじがらめのルールでの選曲を強いられることになるわけだ。そんな時有効なのがJ-POPアニソンなのである！

B'z、TMR、ポルノグラフティ、サンボマスター、アジカン、浜崎あゆみ、大塚愛、タッキー&翼、吉田拓郎、忌野清志郎、そして三波春夫。これらのアーティストの曲がよもやアニソンだとは夢にも思うまい！

毎週かかさず聴いているわけだから、おのずと耳コピはできあがっているし、なにより「俺はアニソンを歌っているんだ！」という、オタクとしてのアイデンティティを守ることができるのだ。

裏を返せば、すべてのJ-POPがアニソンになるということ。これはアニメが一般文化を取り込んだ、事実上の二次元勝利宣言なのである！　もちろん従来のアニソンナンバーも『ハッピー☆マテリアル』が紅白の牙城に迫るなど、世間に対して好勝負を繰り広げている。年末の国民的番組がアニソン大会になる日も近い！

一曲目こそしぶやが歌ったが、その後は結局、亜季ちゃんのジャイアンリサイタル状態になって

しまった。
　まあ、亜季ちゃんがすっきりしたみたいなので、これでよかったんだ。
「良くないわ兄さん」
「まあまあ…それじゃ家に帰ろうか」
「ちょっと待ったーっ！　羽場、あんた本当に『しりスケ』を観られる環境にあるのっ？　このあたしがお宅訪問してチェックしてあげるわっ！」
「えええええーっ」
　あ、亜季ちゃん…たった一日で、お互いの部屋を訪問し合うなんて…。
「なんて積極的なんだっ！　これが、フラグが立つということなんだねっ！」
「ちーがーうーー！　あたしに抱きつくなあっ、蹴ってやる蹴ってやるうっ！　えいえいいっ」
「いたたたっ」
「兄さん、往来の真ん中でみっともないわ」
　道すがら、亜季ちゃんがぷんぷんと怒りながら説明をしてくれた。
「あたしたちの町では、地上波放送はVHF局とUHF局の二種類に別れているでしょ？　NHKとかメジャー局は全部VHFで、地方ローカル局だけUHFなのよ。で、『しりスケ』はローカルUHF局の『ゆんゆんテレビ』でオンエアされるわけ。ところが、この局、マイナーだから…視聴している世帯がとっても少ないのよ。電波が弱いから、家によってはそもそも受信できないしね」
　何も、手を振りまわして怒気を発しながら説明しなくてもいいと思うんだけど。もしかして僕の部屋に入らないといけないので緊張しているのかもしれない。どきどき…やっぱりかわいいなあ。
「何ニヤけてるのよっ？　あたしの話、聞いてるのっ？」
「聞いてます聞いてます。放送局には、VHSで録画する局とUマチックで録画する局があるんだねっ」
「違うーッ！　Uマチックなんて、何で知ってるのよっ」

「…なぜか父さんが持っていて…」
何のかんの言いながら、マンションに到着した。うちはごく普通のマンションの一室を親子四人で借りている。亜季ちゃんは爪先立ちになると、マンションのてっぺんをきょろきょろと遠目で覗き込んで、
「うーん、Uのアンテナがちゃんと建ってるかどうか、よく判らない〜」
と涙声で言い出した。
「亜季ちゃん、ゆんゆんテレビだったら、僕ら毎朝見てるよ」
「…それを早く言いなさいよっ！」
いたた。また蹴られた。
「そういうわけだから、あなたはもう帰っていいわよ」
しぶやがマンションの入り口に立ちはだかって、前進しようとする亜季ちゃんの身体を手で押し返す。
「イヤよ！　帰れと言われた以上、意地でも部屋にあがりこんで乱暴狼藉(らんぼうろうぜき)を働かないと気がすまないわねっ」
「乱暴狼藉は働かなくていいから、亜季ちゃん」
「とにかくっ。あんたのアニメの視聴スタイルを、徹底的に改造してあげるからっ」
「アニメったって『ドラえもん』しか観たことないんだよなー」
「そんな奴が予備知識もなく『しりスケ』観ようなんて甘い甘い大甘だわっ！」
「…私が兄さんにレクチャーするから、あなたは帰っていいのよ」
「あんたは『ノミなんとか』しか観せないつもりでしょっ！　オタク暦一六年のこのあたしでなければ、恋愛資本主義に汚染されたこいつをアニオタとして覚醒させることはできないのよ！」
「兄をそんなへんなモノに覚醒させないで」
亜季ちゃんは、強引にしぶやの築いた人間バリケードを突破すると、ずかずかと僕の部屋にあがりこんできた。幸いなことに、毎朝しぶやが入っ

てくる部屋なので、エッチな本とかは全部隠してある。よ、よかった。

しかし、亜季ちゃんはいきなりダメ出しを開始。

「まず、テレビが小さいわね！　今時ブラウン管？　しかも一四インチ…今は、最低でも二〇V型ワイド液晶テレビが必須なのよっ」

「えー、どうしてだよ」

「あと、滑りもしないのにスケボとかスノボとか部屋に飾るの、禁止！　とりゃーっ」

「ぎゃーっ、亜季ちゃんっ…窓からボードを投げ捨てないでっ！　ここ六階なんだよっ、下を歩いてる人に当たったらっ…」

「あと、ターンテーブルも持ってないくせにヒップホップのアナログレコード飾るのも禁止！　だぼだぼの服も禁止！　黄色い服、禁止！　おーほほほほ。萌えないゴミは全部捨ててあげるわっ！　ぽーい、ぽーい！」

「…乱暴狼藉だわ…まさしく、乱暴狼藉だわ…」

亜季ちゃんは僕の部屋からオサレっぽいアイテムを全て駆除し終えると、すっきりしたような笑顔で床にごろっと寝そべった。

「やい妹、お茶出しなさいよ。あたしは出してあげたでしょっ」

「…ちっ…毒キノコ入れてやる…」

「羽場。それじゃ亜季様がアニメの観方について教えてあげるから、姿勢を正しなさい」

「亜季ちゃんがだらだら寝そべってるのに、なんで僕だけ」

「あたしは師匠だから、いいのっ」

あいた。またまた足が飛んできた…。

寝たまま足で攻撃できるなんて、まるでブラジルの柔術家だ。

ツウはアニメをどう観るの？

〝オンタイムで、録画で、ＤＶＤで。お前は三度、そのアニメを観るだろう〟～イエス・キリスト～

ぼくは週に四〇本近いアニメを観ているので、各作品三度ずつ観ていたらアニメ版『スーパーサイズ・ミー』状態になってしまうのだが（まあ、既に自販機の『いいこと茶』を「え、『いもうと茶』？」と二度見して、日常生活に支障を来しはじめているけどね！）、それでも繰り返し観てしまう作品が、一クールに一〜二本ある。
二〇〇五年一〇月期は近年まれに見る豊作期だったが、中でも『ARIA The ANIMATION』は平均四回、繰り返し観た。特に素晴らしい出来だった第十一話に関しては、翌週までに六回、年越しのお供にも観て、かれこれ一〇回は観ている。DVDはもちろん予約済み。…これを書いているうちに、また観たくなってきた。また『ぱにぽにだっしゅ！』は、画面上の情報量が多く、とても一回観ただけでは満喫できない。ある時、友達が来た時に観せていたら、既に三度観た回にもかかわらず、新たなツッコミ所が見つかったこ

『ARIA The ANIMATION 1』：最低100回は繰り返し観よう！

とがある。名古屋の名物料理「ひつまぶし」を思い出して頂くと良い。まずは鰻重として、つぎに加薬を足してまぜごはんとして、最後に茶漬けでと三度、素材としての鰻を楽しむ。アニメもあれと同じ。
結論…アニメは単なる「ひまつぶし」で観るものではない。むしろ「ひつまぶし」として観るべきである！

　亜季ちゃんの初級講座を聞かされた僕は頭を抱えた。
　まさか新作アニメの放映本数が四〇本もあるだなんて！
「週に四〇本の新作アニメがテレビで放映されていたなんて、全然知らなかったよ。一本三〇分として、週に二〇時間もアニメ観ないといけないのか…」
「こういう状態なので、現在オンエアされている新作アニメを一人の人間が全部観るのは事実上不可能なのよ。ま、学校に行かずにひきこもるとか、一睡もしないとか、そういう条件をクリアできれば観れるかもしれないけど」
　相変わらず自分の部屋のように堂々とリラックスして腹ばいに寝そべっている亜季ちゃんが、足をじたばたさせながら僕をフォローしてくれた。
「妹、早くお茶菓子よこせ」
「…はい…鹿せんべい…」
「何よこれ、硬いわねぇ。もーっと甘くてほわほわで、柔らかい食べ物がほしいー」
「…はい、那智黒（なちぐろ）…」
「よけい硬いわっ！」
　次に亜季ちゃんはリモコンでテレビの電源を入れると、チャンネルをザッピングしながら、
（この局もゴーストが酷いわねぇ…ろくなアンテナ立ててないわね、電波が減衰（げんすい）しているのかしら。ブースター入れたほうがいいかしら）
と常人には理解不能な暗号をブツブツ喋りはじめた。
　やばい。放っておくと、いつまでもテレビ電波の受信レベルチェックを続けそうだ。
　僕は亜季ちゃんの肩を揺さぶった。

「亜季ちゃ〜ん。『しりスケ』は必ず観るとして、他にどんなアニメを観ればいいのかな？　観てみないと内容判らないし…」
「やん、触んないでって言ってるでしょ？　大丈夫大丈夫。内容なんて、オンエアされてる時間帯で判断できるわよ」
なんだって？
時間帯で内容が判る、だって？

朝、夕方、深夜アニメで違いはあるの？

一般にもお馴染みの夕方アニメの特徴は、少年マンガ雑誌の人気作品のアニメ化が圧倒的に多いことだ。

しかし、現在、萌えシーンで主戦場と言えるのは深夜アニメである。その深夜の傾向として重要なのが「お風呂」だ。『グレネーダー』『グリーングリーン』『円盤皇女ワるきゅーレ』などでは、サブリミナル効果を疑うほどの入浴シーンが数多く見られる。放送時は水面が鏡面のように光り、湯けむりが凄過ぎて何も見えない光学迷彩、いわゆる『GIRLSブラボー』な場合が多々あるが、とにかくお風呂や温泉で、これでもかとゆらゆらたぷたぷしているのが特徴と言えば特徴だ！

さらに最近の注目は朝。この時間帯は低年齢女の子向け（男の子は特撮へはしる）なので、〝女の子が可愛いと思う女の子〟の宝庫になっている。基本的にキャラはコンビ、もしくは「仲良しグループ」で動くので「百合属性」の大きいお兄さん達も虜なのだ。よってキャラ人気、作品過熱度は倍々ゲームで爆発。そうなると、制作側も安心して今までなら深夜枠でしか考えられなかったような作品を、この時間帯に投入できるのだ！　百合属性を一大派閥に押し上げ、乙女回路内蔵の男性（まぁ、私なのだが）から「これはもはや聖書だ」と絶賛された、深夜アニメ『マリア様がみてる』の続編『マリア様がみてる〜春〜』が早朝の放送になったのは、この良い例だ。

「朝　百合咲きて　夕（じゃ）パンを食し　夜　たわわに実る」と覚えよう！

そうか。

朝…女の子向き
夕方…男の子向き
深夜…大きなお友達向き

この三原則さえ頭に入れてしまえばいいのか！
判ってみれば、実に簡単なことだ。
「そうなのよ。ま、オタク道を学ぶんだったら、まずは深夜の萌えアニメから入ってみればいいわ。朝の女の子アニメはまだまだ、あんたにはレベルが高すぎるわね。夕方の男の子アニメはショタ属性に進化しないといけないので、さらにレベル高くなるわよ」
「萌えアニメかあ…でも、萌えって、そもそも、何なの？」
「幼児的な性欲のことよ、兄さん」
「違うっ！　あんたは黙ってなさいっ、ゴスロリ妹！　萌えというのは、ロマン・ロランの言うところの『太洋感覚』なのよ！」
亜季ちゃんがすっくと立ち上がって、天井を指差しはじめた。
「ロマン・ロランって誰だっけ、しぶや」
『人間は性欲だけで生きている、宗教感覚なんて幻想だ』という汎性欲論（はんせいよくろん）を唱えた精神分析学者フロイトと論争した作家よ。ロランは、宗教感覚は断じて性欲が変質した感覚ではなく、太洋感覚とでも言うべき独自の感覚なのだ、と言ってフロイトに反論したのよ」
「そう。萌えとは、いわば宗教！　神なき現代社会に、人々がたましいの安らぎを求めて見出した救いのイコン！　それが萌えキャラ！　…まあ、ようするに、一言で言えば『きゃーっかわいいっ！　超かわいいっ！　胸が苦しい、きゃーっ！』という嬉し恥ずかしいキモチのことね」
「うーん、言葉だけじゃよく判らないな。ここで萌えてみせてよ」
「ザケンナー！　お前らスットコ兄妹なんかに萌

えられないわよっ！　萌えはねぇ、見世物じゃないのよっ！」
僕は、亜季ちゃんの目の前で、しぶやの部屋から取ってきたクマの縫いぐるみを振り振りしてみた。
「きゃーっ！　きゃーっかわいいっ、きゃーっ！」
亜季ちゃんは縫いぐるみをひったくると、ほっぺを思いきりクマのフェルトの生地に擦り擦りしはじめた。
やっぱり縫いぐるみ大好きなんだ。
…ああ、僕もクマになりたい。う、羨ましい…。
「…兄さん、あれ、私の宝物…」
「なるほど…判ったよ、亜季ちゃん！」
「そうよ、このクマちゃんへのあたしの気持ちこそが萌えなのよ！　この何とも言えない至福の恍(こう)惚感(こっかん)っ……！　ドキドキわくわく……！　泣きたくなってくるような純粋なキモチ…！　つまり…愛？　愛ってやつかしら？」
「そうやって目をきゅって瞑(つむ)って『きゃーっ』って悶えている亜季ちゃんって…超かわいい！　やべぇ！　僕…亜季ちゃんに萌えたよ！　胸がっ胸が締め付けられそうだっ！」
僕は、怒った亜季ちゃんのツインテール攻撃に足を取られて、転がされてしまった。
やべえ。凄い照れ隠しだ。
亜季ちゃんマジかわいい。
そうか…僕がへっぽこな表情でじたばた暴れている亜季ちゃんを見ている時に感じているこの何とも言えない切ないキモチが…。
萌え…萌えなんだっ！

「萌え」ってなんなの？　オススメ作品はなぁに？

「かわいい」でも「美しい」でも「好きだ」でも表現しきれない、「萌え」という感情。それはカワイらしい犬や猫を見かけた時の「ク～ッ！」と胸を締め付けられる感情にも似た、「最大限の好意」の表出！

世間で誤解されているのは、「萌え」＝エロと捉えられてしまっていること。確かに萌えはエロと同居可能だが、実際問題、萌えの純度が高くなればなるほどエロはなくなっていく。だって、そうでしょ？　たとえば中学生のとき、ホントに好きな娘やアイドルに欲情できました？　できなかったでしょう！　萌えはあの感覚と似ている。オタクは皆、ホントに好きなキャラには欲情しないのであります！　二次元は三次元よりも崇高なのであります！

　ファンの中で、もはや古典とも称されるアニメ作品の数々は、きっと君が気づかなかった自分自身の「萌え」属性を教えてくれるはずだゾ。「学園もの」はいろんな女の子が出てくるのでとっつきやすいYO！　女子高校生であれば『あずまんが大王』『マリア様がみてる』、中学生であれば『ネギま！』『かみちゅ！』、小学生だと『苺ましまろ』あたりが入門としてオススメ。年齢が下がってきてる？　各世代を網羅したいワガママな君には、『R・O・D』『ああっ女神さまっ』など三姉妹ものもあるよ☆　かわいい男の子のは…って、まだ早いか！

　彼女たちを観ていると、自分が父親、母親、兄、姉、友達…となって、萌えていることに気づく。そう、「いろんな立場から愛でている新しい自分」に気づくはずだ！

　百聞は一見に如かず。まず観てみ？

ボクに萌えってくれますか？

タツオさんが「タツオたん」に!?

なんとなく萌えを理解したような気分になってうっとりしていた僕の肩を、ポンポンとしぶやが叩いてきた。
「兄さん、それは断じて萌えではないのよ。兄さんはこのツイン女をおかずにしているはずよ。萌え対象はおかずにはならないわ、基本的に」
「おかずとか言うなあ！　はっ？　ああっ、あたしってば気がついたら汚らわしい三次元男の部屋にあがりこんでしまっているうっ！　大変だわ、心が、心が汚されちゃううっ！」
「…あなたが強引にあがりこんだんじゃないの」
「してない、してませんっ！　ちゃんとエッチな雑誌を使っておりますっ！　亜季ちゃんをそんなことに使ってませーんっ！」
「って、それはそれで不自然じゃん！　あんた、あたしとつきあいたいんでしょっ？」
「そうよ兄さん、劣情を催さない相手とつきあっても意味がないのよ」
やばい、話を逸（そ）らさないと。
…と思ったけど、亜季ちゃんがまっすぐな瞳で僕をじっと睨（にら）んでくるので、思わず口から本心が。
「正直、亜季ちゃんとエッチなことはしたいと思ってるけど…なんとなく、頭の中で勝手に妄想するのは、悪いことをしているようで…できません…本物じゃないとダメ…」
「ふうん。それで仕方なくエッチな雑誌を読んでるわけ？　…ご、合格とまではいかないけど、まあまあってところね」
亜季ちゃんの表情がちょっと柔らかくなった。ちょっとは好感度のパラメーターがあがったのか？〈↑オタク化している〉
ところが、しぶやが、
「騙されてはいけないわ。兄さんは私の下着をおかずにしているのよ！」
「げげげっ？　あんた、やっぱりシスコン…変態…？」
「ウソだ、ウソだーっ！　しぶや、お前、兄をどうしたいんだーっ？」

アニメ録画編

そんなこんなで大騒ぎしたあと、亜季ちゃんが慌て出した。

「あっもう七時三〇分じゃん！　今日からゆんゆんテレビで『うらぬす☆天気予報　ぐれぇと』がはじまるのよっ！　ちょっとリモコン貸しなさいよっ」

亜季ちゃんがリモコンをいじってゆんゆんテレビにチャンネルを合わせようとした。しかし…、

「あらっ、11チャンネルを押してもゆんゆんテレビが映らないわ」

「…うちでは、ゆんゆんテレビは7チャンネルに登録しているから…」

「ややこしいわねえ。やっと映った、ふう…」

ほっとしたのもつかの間。

恐らく作品内容とまったくミスマッチなオープニングソングが流れたせいだろう、すでに本編開始前から亜季ちゃんのこめかみはピクピクと脈打ちはじめていた。

そして、CM開けの本編開始から数分後…。

「でりゃー」

亜季ちゃんは、僕のテレビを台ごとひっくり返してしまったのだった。

「ああっ、亜季ちゃん、危ないよっブラウン管が割れたらっ」

「嫌な予感はしていたけど、全然原作と違うーーーっ！　声が違うーっ、絵が違うーっ、話も違うーっ！　あたしの、あたしの『うら☆てん』を返してよーう！　あぐうっ、ぐすっぐすううっ」

「何も泣かなくても。ほらほら、ハナが出てるよ。はい、ハンカチ」

「ぐすぐすっ、ちーんっ」

いやあ、亜季ちゃんって泣いててもハナかんでても、かわいいなあ。もう亜季ちゃんになら何されてもオッケーみたいな？　そうか、これが萌えるということか…。

「…兄さん、そのハンカチをどうするつもり？」

「どうもするかっ！」

「はっ？　あたしのハナを採取して、いったいどうするつもり…？　あああ、あんたって男は、どこまで変質者なのっ？」

「誤解だーっ！」

ああ、またまたツインテールで攻撃されて倒されてしまった。

いい加減、別の展開がほしいぞ。

アニメ化決定！　なんでオタクは悩むの？

大好きな漫画がアニメ化されたのを見て、「アレ？　なんかちょっとちがくね？」と思ったことありませんか？

絵がなんか違う、声がイメージと違う、スピード感や「間」が違う…。そういった違和感は愛着のある原作であればあるほど多かれ少なかれ起こること。逆にいい意味で裏切られて「アニメのほうがいいじゃん！」ということも当然あるけどネ！

オタクとは、愛着のある作品がメディアミックスされて、より多くの人の目に触れる機会がおとずれると、「ああ、みんなに作品の良さをちゃんとわかってもらいたい、なるべくいい状態で見せたい」的な、変なボランティア精神を発揮するイキモノなのだ。そこで、オタクは愛着のある原作のアニメ化が決定すると、頭を悩ますわけである。「○○ちゃんは声高いほうがいいんだよな、声優でいうと△△さんあたりがいいかな」「脚本は絶対☆☆先生！」「だれかオリにプロデューサーやらしてくれ！」…、制作スタッフから言わせれば、「オメーはだれなんだよ！」の極大級お世話だ。でも気になるんだからしかたないじゃん！

個人的には原作もアニメも両方観るのがオススメなんだけど、心の保険をかけたければ、アニメ観てから原作読むほうがいいのかもね！　というのは、アニメにあって原作にないシーンはあまりないけど、原作にあってアニメにないものはたくさんあるから、そのほうが発見も多いワケよ！

『うら☆てん』が終わった後（何だかんだ言いながら亜季ちゃんは最後まで食い入るように観ていたのだった）、亜季ちゃんは目を逸らしながら、
「それじゃ、このＤＶＤレコーダーを貸してやるから、今夜からこれ使って深夜アニメを録画しなさいよね」
と小声で言い出した。そして、鞄からどう見ても新品のＤＶＤレコーダーを取り出してテレビ台に設置しはじめた。
…亜季ちゃん、ずっとこんな重いもの持ち歩いてたのか。
「こ、これは、中古のおんぼろなんだからね。ゴミなんだからね。捨てたらお金取られるから、あんたに貸すだけだからね！　ゴミだけど、必ず返しなさいよねっ！　ら、乱暴に使って壊したり放置したりしたら怒るわよ！」
なぜ顔を真っ赤にして力説するのだろう。
「こっ、このＤＶＤレコを借りて使う限り、あんたはあたしの下僕なんだからねっ！　これ、デジタルチューナー入りだけど安物なんだからね！」
「…うちはデジタル放送を受信していないわ」
「何よそれえ？　早く言いなさいよっ、高かったのにっ！　いや安物だけどさっ！」
「っていうか、亜季ちゃん。デジタル放送って何？」
「あーもう、あんた、何も知らないのねっ。一からＤＶＤレコの使い方を教えてあげるわよ！　放送波の種類を理解しないとまともに録画もできないんだから、頑張って覚えなさいっ」

ＤＶＤレコーダーって、どー使えばいいの？

ＤＶＤレコーダーは、放送を受信するチューナー、予約に使うＥＰＧ（電子番組表）、番組を録画するハードディスク、その番組を保存するＤＶＤを入れるＤＶＤドライブの四つが合体した夢のアニメ録画マシンだ。ハードディスクには何百時間も録画できるので、たくさんアニメを録画しておける。しかもＶＨ

Sデッキのようにテープを入れ忘れる心配もない。観終わったアニメはリモコンを使って消せばいいし、消したくなければDVDにダビングして残すこともできる。ハードディスクは、容量が大きければ大きいほどたくさん録画できるぞ。

本田氏レベルになるとDVDレコを積み上げることに……やりすぎ

また、内蔵チューナーによって録画できる放送が違ってくる。
●地上波アナログ……一般の地上テレビ放送。一応、二〇一一年終了予定だ
●BSアナログ……NHK BS1、BS2、WOWOW。こちらもいずれ放映終了する
●地上波デジタル……最近スタートした新スタンダードの地上テレビ放送。内容は地上アナログと同じだがハイビジョンの高画質だ
●BSデジタル／CSデジタル……デジタル方式の衛星放送。BSデジタルはハイビジョンが主流。CSデジタルは多チャンネル。いずれもアニメオタクには欠かせない
最近では二つのチャンネルを同時に録画できる「W録」方式が流行っている。特にアニメは被ることが多く、アニオタは「W録」必須と言える。

やばい。ちんぷんかんぷんだ。
僕は、何の錬金術の授業を受けているんだ？
まさか、電波に種類があるだなんて……！
「DVDレコーダーに入っているチューナーの種類によって、視聴できる放送が違ってくるなんて……難しいなあ」
「どのレコーダーにも地上波アナログのチューナーは必ず入っているわ。だから、あんたは地上波アナログのEPGを開いて予約すればいいのよ。あと、このレコーダーはデジタルチューナーも入っているので、地上波デジタル・BSデジタル・CSデジタル（スカパー！110）も録画できるんだけど…デジタル放送を受信できるアンテナが立ってないみたいね…でも、ベランダにアンテナを立てればデジタルも録画できるわよ」
「うーん、当面は普通に地上波アナログが録画できればいいや」
「えー？　アナログは画質悪いのにぃ。ゴーストも出るしぃ…あと、このレコーダー、W録機って言って二つの番組を同時にハードディスクに録画できるのよ。だから、深夜アニメが重なっても両方録画できるわけ。凄いでしょ」

「…こんな複雑な機械、頭の悪い兄さんに使えるわけがないわ」
「黙りなさいっ！　いいこと、必ずこれで『しりスケ』を録画してチェックするのよっ！　さもなくば…破門よーっ！」
「は、はいいいっ！」
　こうして僕は無理やりＷ録レコーダーを押し付けられ、深夜アニメを観なければならなくなった。
　亜季ちゃんが帰った後、しぶやと二人で三〇〇ページのマニュアルを見ながら、その夜に放映されるアニメを試験的に予約してみた。
「兄さん、裏番組でもアニメやってるわ。そっちも予約しておいて」
「なるほどＥＰＧって便利だなあ。でも画面が小さくて字が読みづらいよ」
「確かに、テレビを大型に買い換えないと厳しいわね…」

翌朝…。

「兄さん、兄さん。もう朝よ。起きなさい」
「うみゅー、眠い…もうちょっと寝かせて…」
「…鼻の穴と口を指で塞いで…えいっ…」
「…ぐえええええっ？　死ぬ、死ぬううっ？」
　いつも通り、しぶやに無理やり起こされた僕は、ＤＶＤレコーダーの電源を入れてみた。夕べ予約したアニメはちゃんと録画されているだろうか…。
ところが…！　ハードディスクの中身は…！
「入ってないーーーーーっ？　砂嵐しか入ってないーーーーっ？」
　ここぞとばかりに、しぶやが僕の肩を揺すって、
「ＶＨＳデッキの予約すらできない兄さんにＤＶＤレコーダーなんて、やっぱり無理だったのよ。諦めて脱オタしましょう！」
「イヤだ、イヤだーーっ！　どうしても亜季ちゃんとつきあいたいんだーっ！　『しりスケ』でこんな失敗をやらかしたら、もうおしまいだよーっ！　誰か、誰か助けてーっ！」

アウアウアー

うわーん
国井さーん
DVD録画が
出来ないよー

わかったから離れろ
まだ仲良くないから
正直対応に困る

ググ

ってか
しぶやちゃん
何か取り返しの
つかない契約
結ばせようと
してないぃ？

…でまぁ 俺が
教えてあげたいのは
山々なんだが

これこの通り
右腕が不自由でね

キャッ
キャッ

いやそんな
名誉の負傷を
負った人みたいに
言われても

心配しなくても
その道で俺より
ずっと詳しい人に
連絡を取っておくから

大船に乗ったつもりで
家で待っていてくれ

フーン

すごい綺麗に
リンゴむいてる！

シュルルルー

ピンポーン

はーい
どなたでー

ガチャ

ドン

録画で困っているんだってね

それなら僕に任せなさい

すいません
間に合ってます

国井代表からの連絡できた本田だから！
あけてあけてぇ！

…えと 銃は玄関でお預かりしてますが

なにその持ってるだろみたいな！

…これは兄が失礼しました
本田先生どうぞ中へ

ガチャ

えーと
それでは…

早速録画の仕方を
教えて欲しいのですが

まあ まちたまえ
物事には順序という
ものがある

これは
気づきませんで

お金の無心じゃ
ないから

ジャラッ

せっかくだから
テレビとかも
揃えたら？

いい環境の方が
亜季ちゃんも
喜ぶだろうし

うーん
亜季ちゃんに
喜ばれるなら……

すごいテレビ……抱いて……

いやそんな
サクセス
ストーリー
ないから

テレビを買うなら
アンテナも
立てないとな…
えーなんか
めんどくさ
そうです
アンテナ
重要なんだよ
うちなんか
４本たってるし
もしかしたら
スパイと
思われてたりね
ジーー
ガタガタ
笑うところ
笑うところぉ！
よし それじゃ
まずはアンテナに
ついて話そう
え？
アンテナ
ですか？
…とまぁ
そんな所かな
じゃ じゃあ
いよいよ録画に
ついてですが
次はタップに
ついて話そう
これ結構重要だよ
ほこりとかがね…
…まだまだ
続きそうね
うわー
録画が出来れば
いいのにーー！

第3章

オレたちどうじん族

NIJIGEN he IKIMASSHO!!

～同人誌編～

Coterie Magazine

季節は春から夏へと移りつつあった。
テレビアニメ化された『しりスケ』は、当初のコアなファンの不安を払拭するような凶悪な原作準拠プラスアルファの悪乗りスラップスティックコメディハードボイルド超大作だった（らしい）。
なんとかＷ録レコーダーの操作方法を覚えることができて無事に『しりスケ』を毎週チェックするようになった僕だったが、このアニメ、何をやっているのかさっぱり理解できない。残念だ…残念だっ……！
なぜ難しいのかと言うと、やはり、パロディだ。パロディネタがあまりにも多すぎて、判らないのだ！　オタク生活の蓄積がなければ、『しりスケ』にちりばめられている無数のパロディを理解することができないのだっ！
また、それだけではなく、ストーリー展開そのものが出鱈目だったり、あらゆるアニメ劇作法のお約束を無視して逸脱している部分があったりと、とにかくハードルが高いのだ。
例えば、なぜ毎回マスコットのひよこが焼き鳥にされたりミンチ肉にされたりして主人公たちに食われてしまうのか、さっぱり判らない。しかも、そのひよこは、翌週になると平然と再生して登場しているのだ。その件について誰もツッコミを入れないし。どうなっているんだ？
「まあ…亜季ちゃんが憧れているペレストロイカちゃんがかわいいということだけは理解できたから、よしとするか…」
『しりスケ』のサブキャラの一人・ペレストロイカちゃんは、ロシア出身の長身美少女。しかし目つきは銭ゲバのように危ない奴。「ソフホーズ」「コルホーズ」という二体の使い魔を使う悪の魔術師で、「日本に渡って、芥川賞作家になる」という志半ばにして倒れた亡き父の遺言を守るために、地球全土から偏差値四五以下の愚民を抹殺しようとしているらしい。って、今の一文だけでいくつ間違いがあるのやら。意味わからん。ちなみにソフホーズとコルホーズは、名前と属性だけは禍々

しいが、見た目は脱力系の猫（みたいなもの）の縫いぐるみだ。
で、ペレストロイカちゃん、通称ペレちゃんは、バカな奴を見つけると発作的に虐殺したくなる異常性格に育ってしまっている。そのためペレちゃんと仲良くしたい男は、みんな必死こいてエセインテリぶるべく小難しい本を読んでは付け焼刃の「頭のいい会話」を試みるのだが、最後はバカを発見する話術に長けているペレちゃんに見抜かれて虐殺されてしまうのである。まあ、翌週になったら殺されたそいつも平然と生き返って元通り生活しているわけなんだが。
ちなみにペレちゃんは『しりスケ』の本筋にはまったく絡んでいない。っていうか、他にも「NASAが進める地球脱出・火星移住計画の陰謀によって消えていく人々」とか「凶悪殺人犯の裁判で行われる精神鑑定を巡る攻防」とか「ニセモノの絵を売っている謎のギャラリー」とか「赤いカーテンの部屋で踊る小人さん」とか「悪い奴を処刑する地獄から来た狸軍団」とか「顔に包帯を巻いて、娘に近づく男を始末して回る謎の親父」といった連中による複数のストーリーが同時にグチャグチャと進行しているのだが、いったいどれが本筋なんだよ？
でも…なんとなく、僕をオタクに改造しようとして暴れている亜季ちゃんと、バカを殺して回っているペレちゃん、どこか似ているような気がしてきた。
それにしても、熱いなー。
僕は半袖のTシャツの胸元をぱたぱたと仰いで、少しでも身体を冷やそうとした。
もう夜なのに、部屋の中が熱気で充満している。
これはきっと、フル稼働しっぱなしのDVDレコーダーと、新たに部屋に導入した三七V型プラズマテレビの熱に違いない。
「そうなのよ、兄さん。プラズマテレビはけっこう熱いのよ」
「わっ、しぶや。勝手にベッドの中にもぐりこむ

なっ」
なぜ、しぶやが僕のベッドの中に潜んでいるのだ？
「…あれほど私が液晶にしなさいと言ったのに…」
「液晶テレビ、高いんだもんー」
「最近はそうでもないのよ。夏は涼しい液晶テレビ、冬はあったかいプラズマテレビを使うのがツウの道よ」
「そんな贅沢なこと、できるかっ」
ああ、本当はバイクを買うつもりでバイトして溜めてきたお金を、すべてプラズマテレビに使ってしまったあっ！
でも、いいんだ。亜季ちゃん、喜んでくれたし。
「しかしテレビ画面が大きくなると、アナログ放送の画質の荒さが気になるな。やっぱりデジタル放送用のアンテナをベランダに立てて、デジタル環境に移行するか…」
「ああ、だから言ったのに。泥沼よ、兄さん」
「まあ、映画のＤＶＤも大画面で観られるようになったし、いいもの買ったよな、うん」
これからは大画面薄型テレビの時代だねっ。
貯金、ほとんどゼロになったけど…。
そろそろ、新しいバイトをはじめないとまずいかなー。
ああっでも、アニメ観るのに忙しくて、働いている暇がないっ！
「だから泥沼なのよ、兄さん」
「いいから、ベッドから降りるんだ」
その時だった。
愛らしいアニメ声の女の子の歌声が、部屋中に響き渡った。
『虐殺！　虐殺！　虐殺！　諸君、私は虐殺が好きだ！　虐殺をしよう、次の虐殺のために虐殺をしよう、次の次の虐殺のために虐殺をしよう！』
机の上で充電中だった僕の携帯が鳴りだしたのだ。着メロは、言うまでもなく『しりスケ』のイメージソング「ペレストロイカのバラード」なのであった。ちなみにこの曲、せっかく作ったのに

テレビではオンエアできないらしい。なお、この歌詞もやっぱり何かのパロディらしいのだが、僕には元ネタが判らない。
とりあえず僕は携帯を手に取って、電話に出た。相手は…やった、亜季ちゃんだ！　亜季ちゃんから、こんな夜遅くに電話がっ！
『あーもしもし、あたしよ。やい下僕、ちゃんとアニメ観てる？』
「テレビも買い換えたし、バッチリだよ」
『ふぅーん（ぴこぴこ）』
なんとなく、亜季ちゃんのツインテールの尻尾がぴこぴこ跳ねている光景が脳内に浮かび上がった。心眼だ。心眼を開いたのだ。あるいはこれが、シャア・アズナブルが言っていた「人の革新」「ニュータイプ」という奴なのかっ？
「違うわ。兄さんのは、妄想っていうのよ。それに…シャアは『シャア』で充分よ、『アズナブル』まで呼ばなくても判るわ」
「僕の思考を読むなっ！　…あ、もしもし。うん、ごめん、妹が横でうるさくて…」
『明日、新しいミッションをスタートするから、そのつもりで貯金しておきなさいよね』
「えっ？　も、もう、テレビ買っちゃったからお金なんてないよぅ。キャッシュで全額払っちゃったんで…」
『えーっ、テレビはちゃんとローンで買えって言ったでしょっ？　オタクライフは毎月の必要経費がバカにならないんだから、つねにキャッシュを手元に置いておかないとダメなのよっ』
「ま、まあ、なんとかするよー」
『明日からは、同人誌の買い出しもあんたに任せることにしたからね！　同人誌よ、同人誌！　いいわね！』
「同人誌っ…？同人誌って、藤子・F・不二雄先生と藤子不二雄A先生が小学生時代に二人で作っていた、あの…？」
『いつの話してんのよっ。今の世の中、オタクたるもの同人誌を集めてナンボなのよっ！』

「そっそうなのかっ？」
『じゃ、明日の一〇時にラーの神殿の入り口前に集合ねっ』
電話が切れた。
こうして、僕はいきなり新たなステージへと連れ出されることになったのだった。
「ダメよ兄さん。同人誌に手を出したらもう、シャバには戻ってこられなくなるわよ」
しぶやが首を横に振り振りして僕をいさめる。
すまない、妹よ。
兄さんは、兄さんは、もう引き返せないんだっ！

同人誌ってなんなの？

同人誌とは、一応の意味合いとしては「同好の人たちが集まって作る本」のことで、華やかなりし文学の時代から続く、由緒正しき表現方法である。商業誌と大きく違う点は、「好きな人が好きな本を作れる」という同人誌の特権をフルにいかした、もんのすごーいミクロな世界をも垣間見ることができるところだ。

俺が以前見つけた「エレベーター本」なんか、その最たる例だろう。その時は、とにかくどんな本なのか興味が湧いてスペースを訪ねてみたんだけど、いざ行ってみたら売り切れていたのには驚かされた。もちろんコアなジャンルだし、発行部数自体少なかったのもあるだろうが、失礼ながら売り切れるとは思ってなかった。どんな本も作る人がいる以上、買う人がいる。マニアの深淵というのは計り知れないよ。表現方法として奥深く、懐が深く、おまけに業が深い。しかし、それこそが同人誌の醍醐味なのだ！

今は既成作品のパロディーが主流の同人誌だけど、とにかく神様と一緒で八百万のジャンルとスタイルがあるし、『月姫』などの作品で有名な「TYPE-MOON」のように、そのクオリティの高さでサークルごとメジャーシーンに踊り出る例もある。そのパイオニア的存在の「CLAMP」がNHKの『トップランナー』に出演したのは記憶に新しい。まさに「NHKにようこそ！」とはこのことなのである！

翌朝、僕はラーの神殿の入り口で亜季ちゃんと合流した。
「あら？　いつものゴスロリ妹は？」
「同人誌の買い出しは暑い、臭い、とか言い出して…家で寝てるよ。今日は本当に暑いしね…しぶやは、暑さに弱いんだ」
「えっ、じゃあ二人きりなの？」
「そうだけど、何か？」
「なっ、何でもないわよ、別にっ！　え…ええっと…そ、それじゃ、さっそく同人誌売り場を案内してあげるかしら？」
なんだか亜季ちゃんの様子が妙だ。右手と右足を同時に前に出して歩いている。
ゴンッ
「ぎゃっ、柱で頭打ったっ？」
「あ、亜季ちゃん、大丈夫っ？」
びしぃーっ！
またしてもツイン攻撃を食らってしまった。
な…なぜ？
「あんたのせいよっ！　あんたが妹をつれてこないから、あたしが緊張しちゃってっ…」
「って意味わかんねーし」
などと怒られているうちに、同人誌売り場に到着した。
僕は目を見張った。なんとなく同人誌と聞くとひっそり店の隅(すみ)っこで取引されているようなイメージがあったのだが…商業誌売り場よりもスペースが広いっ！　見渡す限り、同人誌の山、山、山っ！　そして…お客さんが多いっ…！
「何が店の隅っこで取引、よ。裏ＤＶＤ屋か何かと間違ってるでしょ」
「わっ、亜季ちゃんまで、どうして僕の思考を」
それにしても店内が異常に混みあってるなぁ。これじゃ、しぶやが来ないはずだ。…うん？　あいつ、なぜ同人誌売り場がハードな戦場になっていることを知っているのだ？
やはり、隠れオタクなのか？
「この程度で驚いていちゃダメよ。コミケなんて

もっと凄いのよ！　特に夏コミなんて、そりゃもう暑くて大変なんだからー。狭い会場に何十万人もの人間が詰め掛けるから汗臭くて…うっぷ、思い出した」
亜季ちゃんが口を押さえた。
「だ、大丈夫？　気分悪いの？」
「なっなんでもない、単なる条件反射よっ！　背中を触らないでっ」
「いや、気分悪そうだから、さすってあげてるだけなんだけど…」
「げっ下僕の分際であたしに優しくするの、禁止！」
「えーっ、どうしてー」
今日の亜季ちゃんはちょっと態度がヘンだ。なんというか、あまり凶暴じゃない。いや、これでも通常の女子高生の三倍は凶暴だけど、どことなく優しい表情、よわよわしい態度…頬も赤いし…体調が悪いのかな。
たまには、こういう亜季ちゃんもかわいい。萌える。
さすり、さすり。
「いやーっ！　優しく背中をさすらないでっ」
「荒っぽく、さすればいいの？　ごしごしごし」
「痛い痛い！　さするなって言ってるでしょっ」
「ごめんごめん。ところで…コミケって…何？」
「がーーーーーーーーーーんっ？」
亜季ちゃんの身体が、数メートル向こうまで「ずざざざざー」と遠ざかってしまった。凄い。固まったまま床の上を滑って移動するなんて、超器用だ。
亜季ちゃんは絶望したかのように口をぱくぱくさせ、目に涙を浮かべながら
「あんた、コミケも知らないのっ？　本当に日本人？　いったい今まで、何を勉強してきたのっ？」
「な、何も泣かなくても。そ、そうだ、ラー店長！　秋葉原駅前留学講座をお願いします〜」
うん？　そういえば、ラー店長がいない。まあ店長も（多分）人間だし、お休みの日ぐらいあるのだろう。

コミケってなんなの?

コミケとは、盆と暮れという日本人にとって重要な時期に開催される、日本最大規模の同人誌即売会!

ということは世界最大規模…いや!すなわち宇宙最大規模の同人誌即売会になるのだ!

当日は、自分好みの同人誌を求め、数十万人単位で全国から猛者たちが集結する。それだけの人数が、ながーい行列を作っている様は、まさにインドのメッカ巡礼! 会場の東京ビッグサイトを上空から空撮すれば、まさに某国のマスゲーム! そしてその時おそらく口をついて出る言葉は、「見ろ! 人がゴミのようだ!」に違いない!

『ワンピース』のサンジの夢は、世界中の海の魚が住んでいるという伝説の海・オールブルーを探し出すことだが、俺に言わせりゃコミケは同人誌版オールブル

開場前に並ぶ膨大な人びと。正に「妄想共同体」である

ー。どんなマイナーなジャンルの同人誌でも、そこに行けば必ず出会える！　かつて糸井重里は、赤城山に眠るとされる徳川埋蔵金を「あるとしか言えない！」と力強く言い切った。ならば俺もこう言おう！　コミケにはどんなジャンルだろうと「あるとしか言えない！」と！
　なお開催最終日は男性向けにあたることから「男祭り」とも呼ばれる。年末の総合格闘イベントが「男祭り」を名乗る前から、オタク男性は毎年年末になると「男祭り」に参加していたのだ！

「というわけで、コミケット…通称コミケは有明の東京ビッグサイトで一二月と八月に開催されているのよ。もちろん、コミケ以外にもいろいろな同人誌即売イベントが各所で開催されているんだから。例えば池袋だとサンクリってのがあるわね。でね、でね。そういう総合イベント以外にも、テーマごとに絞ったオンリーイベントというのもあってね…」
　ああー、オタク話をしている時の亜季ちゃんって、本当に楽しそうで、眩(まぶ)しく輝いているなぁ…なんてかわいいんだ。
　ぽこっ。
　殴られた。
「何、あたしに見とれてるのよっ？　人の話をちゃんと聞きなさいよっ」
「あいた。つ、つまり同人誌の即売イベントというのが世界各地で開かれていて、それの親玉みたいな最大規模のイベントがコミケなんだね」
「そうよ。こういう店舗で販売されている同人誌は、一見多いように見えるけど実はこれでもごく少量なの。即売会に行けばもっとたくさんの同人誌がゲットできるのよ。…うーん、あたしの教え方が上手いから、飲み込みが早いじゃないの。あたしってやっぱり天才ね！」
　…夏服の亜季ちゃんって、肌の露出度が当然高くて、春先よりさらに魅力的だ。あっやばい、何か悪い妄想が湧いてきた…ダメだダメだ。
「夏コミはもう申し込みが締め切りになっちゃっ

てるけど、近々サンクリがあるから、申し込んでみる？」
「申し込むって…？」
亜季ちゃんは僕の手を引っ張って、フロアの片隅にある受付カウンターの前まで移動した。うわっ亜季ちゃんの手、柔らかくて汗ばんでいる。どきどきどき。
「そ、即売イベントって、申し込まないと入場できないものなの？」
「カタログだけ買っておけば一般参加で入場できるけど、お宝アイテムを手早くゲットするためには、サークル参加したほうが断然有利なのよ」
「一般参加？　サークル参加？」
はてな。また耳慣れない言葉が…。
「って、いつまであたしの手を握ってるのよ、この変態っ！」
「うわあー、亜季ちゃんが握ってきたんじゃないかあー」

一般参加ってなんなの？

同人誌を買うために即売会に参加することを指すんだけど、この一般参加ってヤツもなかなか奥が深い。
まずは初来日の外国人レスラーのデモンストレーションに使われるような分厚さの、宝の地図ことコミケカタログをひたすらチェック。そして約三万もの数が並ぶ、二・五センチ×三・五センチの小さなサークルカットから、自分の気になる本を探し出す。そして効率のいい買い物ルートを何度もシュミレーションしながら当日に備える。これを前日まで延々と繰り返すのだから、まさに気分は終わらない学園祭『うる星やつら2 ビューティフル・ドリーマー』ってとこだよ。
当日は夏灼熱、冬極寒の過酷な状況下、会場入りまで何時間も並び、さらに大手サークルの同人誌を買うまで何時間も並ぶ。本を買う毎に荷物は重くなり、まるで子泣きじじいを背負っているような感覚にお

ちいる。さらに男性向けスペースでの人の流れ、あれは濁流レベルだよ！　人の流れに巻き込まれ、一メートル先にあるお目当てのサークルに辿り着けないことなんてザラなんだから。

荒行にも近い一般参加だが、これを乗り越えれば脳内麻薬の確立変動が起こり、エンドルフィン湧きっぱなし状態の境地に達する。同人チャクラさえ開けば、君の目の前に押しかけネコ耳メイドが現れる日も近いぞ！

サークル参加ってなんなの？

人は誰しも生まれながらにして同人誌を作る権利を持っている。清らかな想いも邪な煩悩も、すべての妄想と思い入れを表現できる手段が、作り手としての即売会参加。すなわちサークル参加なのだ。

数ある即売会の中、最も抽選の競争率が高いのはやはりコミケ！　申込書に一つでも記入ミスがあると落選してしまうという

大手サークルに並ぶ猛者たち。
日焼けも風邪も、海や山でなくコミケでかかるものだ！

厳しさは、たった一箇所の書き忘れで大変な惨事にあう耳なし芳一を髣髴とさせる。その難関をクリアするとめでたく当選！一般入場者よりも早く入場できるプラチナチケットが送られてくるのだ。売れば人生七回遊んで暮らせるという、ハンター証と同等の価値の入場券。コピー防止の為にほどこされたその特殊な印刷は、ゴート札でおなじみのカリ〇ストロ公国の印刷技術を以ってしても偽造は不可能だ。

サークル入場は一般入場とはまた違った空気を味わえる。いざはじまれば、どすピンク色の妄想飛び交うコミケだが、開場前の凛とした静けさは、まるで日曜日の教会のミサを思わせる厳粛さ。そして開会宣言とともに鳴り響く拍手など、会場全体の一体感を、より満喫できるのもサークル参加ならでは。各種即売会でそれぞれ特色は違っていても、自分の育んできた妄想と思い入れを本に託し、より多くの人の目に触れてもらうという業の深い喜びは、サークル参加者だけに与えられた特権なのである。

新刊完売！　サークル参加者、感謝感激の瞬間である

そうか、サークル参加とは、ブース（場所）を取って自分のサークルの同人誌を売る側に回るということなのか。
「もちろん、サークル参加した以上はちゃんと同人誌を制作していかないといけないから、ただ単に一般参加者より早く中に入りたいからというだけの理由でサークル参加しちゃダメよ。で、サークル参加するには、事前に申込書を提出しないといけないの」
亜季ちゃんは申し込みカウンターの引き出しから、コミケやサンクリの申込書をいろいろ取り出してきた。
「コミケの申込書を正しく書けるようになって、はじめて一人前のオタクと言えるのよ」
「って、難しいよ、これ！　こんな複雑なもの、書けないよーっ?:」
「ちょっとでも書き損じたら落選になっちゃうのよ。厳しいでしょ？　大学入試より困難でしょ？オタク界の恐ろしさ、少しは理解できた?:」
なんて得意げな笑顔なんだ。ああ、オタクの神さま。亜季ちゃんが超かわいいということは再認識できました。もう観ているだけじゃ我慢できない。なんとかして、この先に進むことはできないだろうか。師匠と下僕の関係を超えて、恋愛関係に進むことは…せ、せめて、チューだけでも…あでもそのためには、「伝説の木」の下で告白しなければいけないのがオタク界の掟らしいしっ…いきなりチューなんかしたら、好感度のパラメーターがあっという間にゼロになってゲームオーバーだって言うしっ…！
「とりあえずコクって勢いでカラオケボックスでぱやぱやして、なし崩し的につきあう」という一般高校生の常識が全く通用しない亜季ちゃん。今時、清い交際を続けてちょっとずつ互いの距離を縮めていかなければいけないなんて、実にまどろっこしい…だが、そこがいい！　これこそ恋愛！　性欲だけでつきあうのではない、本当の恋！　ああ、すでに滅び去ったはずの純愛が、オタク界に

は存在した！
しかし…伝説の木というのは、どこにあるんだ？
「それじゃ、これからあんたを同人誌買い出し要員として鍛えてあげるから！　一緒に同人誌売り場を巡回するわよ」
「やったあ！」
しかし、好事、魔多し。
実は、ここからが真の修羅の道だったのだ。
ああ、オタク道、はてしなし…！

同人誌基礎編

亜季ちゃんと楽しくラーの神殿・同人誌フロア巡りをスタートした、次の瞬間だった。
「やぁ、亜季じゃないか！　はーっははははははは」
邪魔な邪魔な邪魔な邪魔なイケメンが現れた！
イケメンといっても茶髪・黒い肌・光り物にホスト服といったタイプではなく、あくまでもオタク界の住人然としたラフなファッションにざんぎり頭、銀縁眼鏡といったいでたちではあるが…。
だがしかし…イケメンに違いはない。っていうか、こんな適当なスタイルなのにイケメンに見えるなんて、マジ男前？　美形？　素材だけで勝利してる？　ぼ…僕なんか滅茶苦茶無理して自分を偽っても角度限定エセイケメンだったのにっ！
呪われろ、眼鏡イケメン！　オタクでしかもイケメンなんて反則だっ！　良いとこ取りじゃないかっ！　天は、天は二物を与えないんじゃなかったのかーっ？
「あれっ、こもるじゃない。何やってんのよ、こんなところで」
がーん。亜季ちゃんが、この眼鏡を『こもる』なんて親しげに呼んでいるっ…？　僕なんか、未だに『下僕』なのにっ？　良くても『羽場』だよ。ファミリーネームだよ。僕にも一応、『もてる』という下の名前があるんですが、皆さん忘れてましたか、そうでしたか。
「亜季ちゃん、この眼鏡、誰？」

「え、えーと…」
「僕かね？　僕はオタク界のレオナルド・ダ・ヴィンチと呼ばれている天才同人誌作家『中野こもる』だあっ！　はーっはっはっはっはっはっ。コミケでは常に壁サークルを主催し、大行列を抱えているスーパースターなのさっ！　君は亜季の友達かい？　サインならあげるよっ」
「か、壁サークルって、何？」
「あっ…あんた、そんなことも知らないであたしの同人誌買い出し部隊に志願したわけっ？」
いや、志願した覚えはないのですが。
「はーっはっはっはっ。僕のことを知らないズブの初心者が亜季の買い出し部隊だなんて、亜季、君も落ちたものだなあ～」
そのアニメのキャラみたいな大げさな喋り方、何とかならんのか。こいつもやっぱり変人だなあ。
「う、うるさいわねー、今、洗脳教育中なんだから。見てなさい、数ヵ月後には凄いオタクとして完成しているはずだからっ」
あっ、亜季ちゃんが僕を庇ってくれた。じーん。頑張って、もっともっとオタク道に邁進しなければ…。（僕、騙されてる？）
「ふっ…それじゃあ、僕も彼を生暖かく見守ってあげるとするよ」
「べ、別に見守らなくてもいいわよっ」
「そうだ、見守らなくてもいい！」
「まあまあそう言わずに。この店のことなら隅から隅まで知り尽くしているからね、僕は。はーっはっはっはっはっ」
さっきから、どうも亜季ちゃんのこいつに対する態度がヘンだ。やたら恥ずかしそうというか、もじもじしているというか…何を言われても伏し目がちにブツブツ言い返すだけだし…。
…まさか…。
亜季ちゃんは、こいつ…中野こもるのことが好きなのでは？
考えてみれば、こいつは顔はイケメン、スタイルはオタク、そして妬ましいことに同人作家界の

スターらしい（知らないけど）。性格がちょっとヘンで人の話を聴かないタイプみたいだが、その程度の欠点、この完璧な外見とステイタスに比べればちっちゃな穴にすぎない……！
それに引き換え、僕は顔は月並み、スタイルは必死でオタクファッションに合わせようと努力しているけどなかなか開眼しきれない中途半端さ、もちろん同人界のことなんか何も知らないし……！ あああ、何も長所がない。何も……！『しりスケ』のストーリーだって、さっぱり理解できないしっ……！ 僕は…僕は思いっきり穴だらけだっ、まるで月面のクレーターのようではないかっ！
どう計算しても、中野こもるの足元にも及ばないっ……！
例えて言うなら、

〈中野こもる〉
戦闘力　90
名声　95
容姿　98
職業　同人作家

〈羽場もてる〉
戦闘力　33
名声　0
容姿　51
職業　下僕

ダメだーっ、絶対に勝てねえーっ！
フロアの床に手を突いてうなだれていると、こもるに肩を叩かれた。亜季ちゃんは…あれっ、いない？ トイレにでも入ってるのかな？
「どうしたんだい、はーっはっはっはっはっ？同人誌の数が多すぎて戸惑っているのかな？」
「…魅力が…僕には、魅力が…」
「魅力？ 同人誌の魅力が理解できないのかい？だったら僕に任せておきたまえ、はーっはっはっはっ」

同人誌のなにに魅かれるの？

商業誌よりも価格は割高で、モノによっては何時間も並ばないと手に入れることができない。そんな同人誌の魅力を、星の断罪者風に四字熟語で表現するならば、ズバリ「てゅーか一期一会？」だ。

見かけた時に購入しなければ、二度と出会うことができない可能性も高いので、現場では財布と相談なんかして悠長に悩んでいるような暇はない。悩むということはその本がほしい証拠!! 買わずに後悔するよりは買って後悔したほうがいい！ というのが俺の信念だ。

もしかしたら同人誌を買うという行為は、偶然の出会いからひと目惚れした相手になりふりかまわず愛を捧げる、エマとウィリアムの関係に似ているのかもしれないよ。人目を偲んでっていう共通点もあるし。

また同人誌ってのは作り手側のトンチ次第で、まだまだ新しい試みができる。俺がやってる、自分で自分のタレント本

これが「妄想私小説」だ！

を作る「本人本」や、好きな二次元キャラとのロマンスを創作する「妄想私小説」なんかは、同人活動で新たなジャンルを開拓したんじゃないかっていう自負があるもん。そんな魅力的な同人誌。俺は臨終の際、末期の水はいらないよ。ただ一冊、俺が未読の同人誌を読ませてくれりゃそれでいいから。

「って、秋葉原駅前留学講座を見せただけじゃないか！　そもそも、僕が言ってるのは同人誌の魅力じゃなくてっ」
「ああ、君も亜季の魅力にメロメロパーンチ、って奴かい？　あいつは顔がかわいいから、とにかく男にモテるんだよねぇ、はーっはっはっはっ。でも、諦めたほうがいいね。亜季はドロドロのオタク以外には何の興味も持てない生粋のオタク娘だからね！　同人誌のいろはも知らない初心者が迂闊に手を出しても火傷するだけさ、はーっははは」
「ぐっ…僕は諦めない…頑張って、立派なオタクになってみせるっ…」
「無理無理。いいかい、オタクというのは、努力して『なる』ものじゃないんだ。オタクに生まれて『くる』ものなんだ。フォースの強さは、ミディ＝クロリアンの数値で決まってしまうんだよっ！　二〇〇年生きて中国武術を極めても、ハンマ星人の血には勝てないんだよっ！　そう…勝負は最初から決まっているのさっ！　亜季とフラグを立てたいのなら、僕ぐらいハイレベルなオタクに成長しないとねっ！　僕を乗り越えなきゃ、亜季ルートには入れないんだよっ！　亜季は『ときメモ』で言えば藤崎詩織ぐらい難易度が高いからね、はーっはっはっはっはっ」
くっ…この野郎、なんというマンガの悪役然とした台詞回しなんだっ。
しかし、全く反論できない。
今の僕には、決定的に足りないものがあるっ…顔はまぁ仕方ないとして…オタク度数が低い、低すぎるっ…！　だいたい、今のこいつの台詞だって、僕でも判るようにレベルを下げてくれている

はずなのに、それでもなお判らないネタが多すぎるっ！　嗚呼…こいつと僕の間には、アムロ・レイとアコースくらいの開きがあるっ……！

「アコースとコズンは別のパイロットだよ、はーっはっはっはっ」

ああ、僕はこのオタクに勝ちたい。たとえオタク道では先行されていても、僕のほうがずっとずっと亜季ちゃんのことを好きなはずだ……！

「ちなみに、マルクスとエンゲルスも別の人間だ」

エンゲルスって…誰？

僕は気を取り直して再び立ち上がった。ここで引き返すわけにはいかない。プラズマテレビ買っちゃったし。いや、そんなことより、こいつは亜季ちゃんの彼氏にふさわしくない！

「まだ僕に無謀な勝負を挑むのかね、はーっはっはっは」

「と、とにかく…お前はまだ亜季ちゃんとつきあってるわけではないんだな？」

「うむ。幼馴染み（おさななじ）だが、まだつきあってはいない。キープ中という感じだな、はーっはっはっ。僕は脳内でも脳外でもモテモテなのでねぇ」

「ぐっ。亜季ちゃんを、亜季ちゃんをキープとか言うなっ！」

思わずこもるの胸倉（むなぐら）を掴んでしまった。

えっと…ど、どうしよう。店内でケンカになったら、出入り禁止。亜季ちゃんにも破門されてしまうよ…ああ…おろおろ。

「ふん、なかなか見所はあるようだね。いいだろう、亜季はちょっと隣のフロアに出かけてしまっているから、僕が代わりに同人誌のレクチャーをしてあげようじゃないか」

「ど、どういうつもりだ」

「名将は敵に塩を送るというじゃないか、はーっはっはっはっ。さあ、僕のレッスンを受けてサイコフレームを完成させ、ニューガンダムに乗り込みたまえ！　戦いは平等な条件でなければ面白くない、勝つ意味もないんだよ。…と言いながら、実は僕の同人誌を自慢したいだけなんだがねっ」

こもるは眼鏡のフレームを指でクイッと押し上げながら、僕を『サークルN』コーナーの前に案内した。
「こっ…このコーナー一角、全部お前の同人誌だというのかっ?」
「はーっはっはっはっ！　その通り！　わがサークルの発行する同人誌は、いずれも一万部を超える！　下手な商業誌で活動するより、はるかに儲かってしまうわけさっ」
同人誌の山、山、山。これが全て、中野こもるの作品だというのかっ…?　しかも、それぞれ一万部以上刷ってる、だって?　あっ…芥川賞作家の新刊だって、数千部という単位なのにっ…?
「これ…もう、同人とかそういうレベルでは…表紙もカラー装丁で美麗だしっ…!」
「君はどうやら、同人誌の世界をまだ甘くみていたようだね。そんなことで亜季とつきあおうだなんて、甘いな…」
「黙れ、僕は絶対に諦めないっ！　とりあえず、お前の同人誌を全部購入して勉強してやるからなあっ！」
「お買い上げ、ありがとうございます、はーっはっはっはっ」
泣きながらこもるの同人誌を片っ端からカゴに入れていく僕。
おや?
その中に、『しりスク～おしりにアナリスク！』というタイトルの本を発見した。表紙に描かれている女の子は、しりスケのキャラクターの一人…っていうか、ペレちゃんではないか。
「これは…『しりスケ』の盗作じゃないか?」
「盗作?　パロディと言ってくれたまえ、パロディと」
「だって、これ、人の作品…」
「違う。君は何も判っていないなぁ…パロディ作品では、どれだけ原作のキャラクターに激しく思い入れできるか、本気でキャラクターを愛することができるか、が勝負なんだよ。君は不器用でバ

カを虐殺することしかできない独りぼっちのペレちゃんに、愛を感じたことはないのか？」
「いや、まあ、ペレちゃんはかわいいけど…」
「原作では『とっぽい虐殺キャラ』という立場しか与えられないペレちゃんを救いたくはないのかっ？　おかしな親父に育てられたばっかりにトンチンカンな性格に育ち、孤独になってしまったペレちゃんに、本当に彼女のことを理解して愛してくれるオタクの彼氏を与えてあげたくはないのかっ？　だがしかし！　原作『しりスケ』にはペレちゃんを救うエピソードを入れる暇などない！　そう、ペレちゃんを救うことができるのは、ファンの脳内妄想だけなんだっ！　僕はっ、僕は脳内でペレちゃんを幸せにしてあげたいんだーっ！　それがパロディ同人の魂なんだっ！」

あっ…熱いっ…！

パロディーってなにがいいの？

現在の同人誌の最大手はこのジャンル。「自分は本編を読めば十分」という輩がいるが、俺に言わせりゃ「お前は同人誌を読まないから平気でそういうことを言えるんだ！」ってことなんだ。
優れたパロディー作品にあるのは、書き手の海よりも深い作品愛。本編で描かれることのなかった行間を深く読み込み、さらにその行間の隙間に書き込みを入れる妄想力の素晴らしさ！　しょせん借り物の題材じゃないかと侮るなかれ。数多くあるパロディーの中には「芸」の領域に達してるものもあるのだ！
思えば俺が同人誌にハマったきっかけは、どんどん不遇なポジションに追いやられる姿を見かねて描かれた、本編ストーリーにまったく綻びを見せない『ドラゴンボール』のヤムチャ本だった。人造人間編。ヤムチャが三年の修行を終えて戻ると、恋人ブルマはベジータとの子供を抱いて待っていた。初期から作品に貢献していたレギュラーキャラとして、そして一人の男として、あまりに屈辱的なストーリー展開！
その同人誌は本作であまりにあっけらかんと描かれていたこの空白の三年間を埋める、大袈裟に言えばヤ

ムチャの人生を救うための、最高にハッピーなエピソードを創りあげていた。
パロディー作品とはなんなのか？　それはまさに妄想の求道者による魂の救済に他ならない！

ぐっ……！

この男、はーっはっはっはっと笑ってるだけかと思っていたが、同人誌に捧げる情熱、ペレちゃんへの愛情は…本物っ……！　本物だっ……！

それにひきかえ、僕は…。

僕はダメだっ…僕は、亜季ちゃんの気を引くために『しりスケ』を観ていただけっ……！　ペレちゃんって亜季ちゃんに似ていてかわいいなあ、とか言っていただけっ……！

ペレちゃんを幸せにする妄想ストーリーを脳内で想像したことなんて、一度もなかった……！

「チキショーッ！　僕は、僕はなんという愚か者だったんだーっ！　ああ、ごめんよ、ごめんよペレちゃん…ペレちゃーんっ！」

僕は血の涙を流しながら、柱に頭を打ち付け続けた。ごんごん。

「判ればいいんだ。まずは僕の魂の同人誌を読んで、脳内妄想とはこういうものだということを学びたまえ。いずれ君も、アニメを観るや否や、脳内で自分だけの萌え話を自在に妄想できるようになる日が来るさ」

「判ったよ…ありがとう、こもる先生！」

僕の中では、彼はすでに「こもる先生」にランクアップしていた。

「で、どういうマンガなんだろう。わくわく」

ぱらぱらっと『しりスク〜おしりにアナリスク！』をめくってみると…、

「これは…エロマンガじゃないかっ！　ペレちゃんを汚すなーっ！」

「いや、だってっ、恋人同士はぱやぱやするものなんだよっ！　これは愛、愛なんだよ！　はーっはっはっはっ！」

「あっ、逃げたっ！」
「もてるくん、また会おう！　さらばだ！」
ちっ、逃げ足の速い奴だ。
…でも、この同人誌は資料として買って帰ることにしよう。うんうん。
やばい。ペレちゃんをおかずに使ってしまいそうだ。しかも描いてる男と思いきり顔見知りだというのに。
ああ、ごめんよペレちゃん…これも、オタク修行の一環なんだよ…！
最初は欲望だけで同人誌を読むことしかできないとしても、いずれは、それが愛に成長し…そして、僕の脳内でもめくるめく萌え妄想話が湧いてくるようになるはずだ…！
そしてその時こそ僕は。
亜季ちゃんに伝説の木の下で告白できる資格を得られるんだ…！
「って、何やってるのよ、あんた？　あれっ、こもるは？」
亜季ちゃんが戻ってきた。
両手にたくさんの同人誌を抱えている。
どうやら、我慢できなくなって自分一人で買い出しに出ていたらしい。
「どっか行っちゃったよ」
「あー、あいつが描いたペレちゃんのエロ同人を買ったのねっ！　まったくもう…ま、あんたも一応若くて健康な男の子なんだし、エロパロ買うなとは言わないけどぉ。他にもいろんな本があるんだから、まんべんなくいろいろチョイスしておきなさいよね」
そう言いながら亜季ちゃんが僕に手渡したのは、ペレちゃんの使い魔「ソフホーズ」と「コルホーズ」が人間に変身した姿を表紙に描いている本だった。
「何これ？」
「ソフ×コルの擬人化やおい本よ。ハードなエロ描写はないから安心しなさい、やおい初心者のあんたでも読めるはずよ」

擬人化って…何？
やおいって？

い…いきなりレベル上がっていませんか、亜季
師匠ーっ！

同人誌のネタってなにがあるの？

一般的な同人誌に対する認識というのは、せいぜい「パロディーでエロい」。つまりはエロパロと呼ばれるジャンルくらいのもの。俺もこの世界に足を踏み入れるまでは実際そう思っていた。しかし今、俺が当時の俺にそんなことを言われたら、ハイアングルのパワーボムで机の上に葬り去っていることだろう。同人誌のことを何も知らない一般社会の中の蛙どもよ！　同人誌ってのはなあ、エロだけがすべてじゃないんだよ!!

例えば、その後のじゃりン子チエ本、モビルスーツ版KANON本、水木しげるタッチのマリみて本、CCさくら&サクラ大戦本、丹下段平ぬり絵、カルト芸人へらちょんぺ本、北海道某町のイメージキャラの妖精本、偽コミケカタログなどなど。これらはすべて俺が所持する、実在する同人誌なのだ。

このように常に新しいネタが誕生している同人の世界で、今、特に俺が注目してるのは擬人化本だ。アンパンマンやコロ助、ガチャピンやムックやケロン人など、人間ではないキャラの擬人化は今までもあったが、最近は備長炭が「びんちょうタン」になったり、大胆にも国をモチーフにした「あふがにすタン」があったり、さらに鉄道、OS、カメラ、タバコなど、自我のない対象に萌えヒトガタを与えて魂を吹き込む、ニュータイプ擬人化に進化している。

この新しすぎる手法により、同人界は森羅万象がネタ元になる新局面を迎えているのだ。

COMIC MARKET CATALOG
新刊あります

どうじんキュン♪
同人誌を擬人化してみた。
キュンは男の子
タンは女の子に使う

「あの…もしかして亜季ちゃん、やおいコーナーに行ってたの?」
「そ、そうよ。わっ、悪い?」
「いや、悪くはないけど…」
「こ、これでも一応腐女子（ふじょし）なんだから、当然でしょ? 大丈夫よ、初心者しかも男の子のあんたに、今すぐやおいに精通しろなんて言わないわよ」
そうか。亜季ちゃんって、腐女子なんだ。
…腐女子って、そういえば、何?
「今さら何言い出すのよっ! やおい好きのオタク娘のことよ!」
「あっそうなんだ、ありがとう。って、どうして僕の心をっ」
「だって、羽場って考えてることが顔に全部出てるんだもん」
そうなのか。それで、しぶやは僕の思考を常に先読みしているのだな。
…ん?
もしかして、亜季ちゃんにも僕の思考が読めるようになったということは…二人の仲は、「とっても仲良し」レベルにまで進行している?
「まあ、出来のいい姉と、バカな弟って感じよね」
「一応、同い年なんですけど…それより、あの中野こもるって、亜季ちゃんの何なの?」
「な、何よ。下僕のくせに、そんなこと関係ないでしょ?」
「関係なくないよっ! 僕は…僕は必ずや、あいつよりも凄いハイグレードなオタクになってみせるっ! 亜季ちゃんとラー店長に誓うよっ!」
僕は思わず瞳に炎を燃やしながら、高らかに宣言してしまった。
周囲のお客さんたちが、じろじろと僕たちのほうに視線を送ってくる。
…そういえば、ラー店長見かけないなぁ。
野良猫と間違われて、保健所に連れ去られたのかもしれない。
「あーもう、店内で恥ずかしいことを大声で叫ぶの禁止っ!」

亜季ちゃは真っ赤になると、僕の手を引っ張ってラーの神殿から出たのだった。
そして。
「…ねぇ、羽場。同人誌をあたしの家まで運んでおいてくれない？」
「いいけど、亜季ちゃんは？　僕だけで亜季ちゃんの家に行くの？」
「あ、あたしは、ちょっとね…その、用事があって…もう、時間が…とにかく、頼んだわよ！」
「あっ、ちょっと？　亜季ちゃん？」
ぴゅーっ。
亜季ちゃんは、とてもとても恥ずかしそうに目を伏せながら、街中の雑踏へと走り去ってしまった。
僕は山ほどの同人誌を抱えながら、言い知れない不安と嫉妬心に駆られるのだった。
（もしかして…こもるとデートとか…あの照れ具合、只事じゃなかった…ううっ…でも、こもるは亜季ちゃんを「キープ」だって言ってたし…まさか、亜季ちゃん、あいつに弄ばれているのでは…？）
メラメラメラ。
全身をドス黒い嫉妬の炎で焼いていると、黒の薄っぺらいノースリーブシャツ一枚に黒い半ズボンという、涼しそうなんだか暑苦しいんだかよく判らない格好のしぶやが、電柱の影からひょっこり顔を出した。
「兄さん、中野こもるは未来の日本を背負って立つ天才オタククリエイターなのよ。諦めなさい」
「うわっ⁉　しぶや、今までどこにいたんだよっ」
「…実は人ごみに隠れて、密かに兄さんを観察していたのよ…ふふふ」
「お前、暑いの苦手なんじゃ…汗だらだらだぞ、大丈夫か？」
「…大丈夫よ…大丈夫…あ、あれ…？　眩暈が…眩暈が…」
「ああっ、しぶや、しぶやっ？」
僕は、暑さにやられて目を回してしまったしぶやをおんぶしながら、亜季ちゃんの家へ向かった。

やおいってなんなの？

やおいの語原は「やまなし」「おちなし」「いみなし」の頭文字で、現在は男同士の愛を描くスタイルの総称。

ここで重要なのがカップリングと呼ばれる組み合わせ。「名前×名前」といった表記で表され、名前が先か後かで攻め受けが決まり、かつてはそれが元で仁義なき女の戦いへと発展することもしばしばだった。ここまでくると、もはやイデオロギー闘争。タチとネコで争うからスタンディング・キャットファイトといったところか？

最近は、カップリングに関しても「美味しければよし！」という風潮で、いろいろなカップリングを取り入れる作家も多く、なかなかグルメ志向の時代になった。ショタと呼ばれる半ズボンの似合う男の子（語原は『鉄人28号』の正太郎くん）もあるくらいだ。やおい好きな女性たちは、自分たちのことを自嘲して「腐女子」と呼ぶが、「茶碗が二つ並んでるだけで、その関係性を揶揄し、やおいがはじまる」というくらいなので、妄想力としてはレベルが高く、かなりのステージなのである。

しかし最近はやおい好きの男も少なくなく、〝腐男子〟というべき層も確認されている。腐女子同様やおい話に興じてみたいが、男同士でそれを語るとそれはたんなるホ……というのが腐男子目下悩みの種なのだ！

同人誌応用編

亜季ちゃんの家へ着くと、初老のお父上が一人で亜季ちゃんの帰りを待っていた。

「おや、君たちは…？」

「あっ、亜季ちゃんのクラスメイトの羽場といいます。背中で寝てるのは、僕の妹のしぶやです。今日は亜季ちゃんの買った同人誌を…」

ぎゅーっ。
背後に「おんぶオバケ」みたいに取り付いているしぶやに、頬を思いきりつねられた。
「いててて、何すんだよっ」
「…兄さん、腐女子の同人誌活動のことを家族にチクってはいけないわ。家族が崩壊してしまうわ」
「そ、そういうものなのか。まぁ、そうかもしれないな…」
「そうなのよ。娘が若い身空でホモマンガに夢中の変質者だと知ったら、お父さんは首を吊らなければいけなくなるもの」
「あの～、うちの亜季が何か?」
しぶやの言葉がお父上に聞こえたらそれこそお家断絶、家庭崩壊、僕は亜季ちゃんに破門されるところだったが、幸いにも亜季ちゃんのお父上は耳が少し遠いみたいだった。
「あ、いえ。何でもありませぬ…亜季ちゃんに届け物を持ってきましたので、ご自宅まで伺いました」
「ああ、ありがとうね。あの子、父一人娘一人の家でワガママに育ったせいか、友達が少なくてねぇ。それじゃ荷物は私が預かっておきますよ」
やばい、袋の中身を見られたら…家庭崩壊っ…
しかも、亜季ちゃんってば、家族がお父さん一人しかいないなんてっ…そのお父さんが、亜季ちゃんが実は重度の腐女子だと知ってしまったら…!
「ダメですっ! この荷物は亜季ちゃん以外には触らせられない最重要物なんですっ!」
僕は思わず目から涙を流しながら同人誌入りの袋を守った。ここでしくじったら亜季ちゃんに成敗されてしまう。
ところがお父さんは何か勘違いしたらしく、じーんと感動して、
「ああ、亜季は何という良い友達を持ったんだろうか。ありがとう、ありがとう」
と僕たち兄妹に手を合わせて感謝するのだった。
い、いや、袋の中身を見たら感謝どころか我々を手討ちにしたくなると思いますが。

同人趣味ってナイショなの？

なかなか一般人には正しく理解をされない同人活動は、現代の隠れキリシタンである。このアクロバティックな趣味は、周囲に対して秘密にしているケースが非常に多い。職場にて、実は同好の士にもかかわらず、お互い同人活動をしてることを知らないということもあれば、母と娘がお互いの同人趣味を知らずに『ハガレン（鋼の錬金術師）』オンリーイベントのロイ×エドスペースでバッタリ！　といったミラクルも勃発しているかもしれない。実生活での同人活動は、人によっては厳戒な自己セキュリティのもとで行われる禁断の趣味なのだ。

このような場合、同人の士の礼儀作法として「優しいシカト」が重要になる。例えばイベント帰りに、一人の女性がゆりかもめのホームで転び、買い込んだ同人誌をぶちまけてしまうという事件が起こったとしよう。一般人ならその困っている女性のため、ちらばった荷物を拾うのを手伝うはずだ。でも同じ趣味を持つ俺らは知っている、その善意がさらに女性を困らせてしまうということを。

つまり、ここでの最善の方法とは「見て見ぬふり」なのだ。俺なんか特殊な職種だから、自分の同人趣味をオープンにしているけど、カタギの場合、周囲にバレたくないという本音もあるだろう。ＴＰＯはオタク同士のなかにこそ求められるもの。「優しいシカト」は同人活動における潤滑なコミュニケーションの一つなのだ。

帰り道も、しぶやは僕の背中に乗っかったままだった。

「重いから、お前もう降りろよ。もう夜だし涼しくなっただろー」

「…ダメ…」

しぶやはなんだか嬉しそうだ。

最近、亜季ちゃんとオタク修行に夢中で、ほとんどしぶやの相手をしてあげなかったからかな。

そうは言っても、僕もしぶやももうお年頃だし、しぶやだって彼氏の一人ぐらいそろそろ出来てもいい頃なんだけど。
「亜季ちゃん、お母さんがいないんだね。お父さん、離婚でもしたのかな…お父さんは仕事が忙しいだろうし、亜季ちゃん、寂しいだろうな…」
「…兄さんは、本当に彼女のことが好きなのね」
「まあね…かなりね…お前は好きな男とかいないのか？」
「…私のレベルにつりあう男なんて、三次元にはいないわ」
「そうか。母さんの教育が悪かったんだろうなぁ」
しぶやは、母さんから「女の子は綺麗に着飾ってうんとかわいくなって、三高の男を捕まえてセレブ婚よ！」という徹底的な玉の輿教育を施されてきた。その反動でしぶやは恋愛と無縁なゴスロリ娘になってしまったのかもしれない。
まあ、それを言えば、僕がどんどんオタク化しているのも父さんの「オタクにだけはなるな！」という教育の反動なのかもしれないが。
僕としぶやは二人、夜空を見上げながら歩いた。
「しぶや、あの星がアキバの星だぞ。僕は、夜空にでっかく輝くアキバの星座の一員になってみせる。そして、亜季ちゃんと幸せなオタク家族を築いてみせる…いや…まあ…築けたらいいなあ…(だんだん弱気に)」
「…兄さん、あれはただの死兆星よ」

一週間が過ぎ、学校は夏休みに入った。
まもなく、亜季ちゃんから「サンクリに出陣するわよ！」という召集令がかけられた。
僕は眠そうなしぶやを連れて、始発電車で東京・池袋まで向かったのだった。
僕たちは、池袋東口のジュンク堂前に集合した。ああ、まだ街全体が霧に覆われていて、カラスがかーかーと飛び交っている…ね、眠い…。
「眠いわ、兄さん」
「ああ、本当に眠いな。何もこんなに早く集まら

なくても…」
　しかも。
　亜季ちゃんは、一時間ほど遅刻して平然と現れたのだった。
「ご苦労、ご苦労！　あたしより先に到着してるなんて、さすが下僕どもね！　ご褒美に、飴をあげるわ」
「…ありがと…はっ？　いつの間に、私までこの女の下僕に…」
「いや、亜季ちゃんが一時間遅れただけなんだけどね」
「そうだっけ？　まぁいいわ、これからサンクリに出陣するわよ！　会場はサンシャインよ、サンシャイン。人気サークルには行列を作らないといけないから、これからカタログをチェックして並ぶサークルを各人に割り振るわね！」
　亜季ちゃんは、すでに付箋をびっしり張り付けたカタログを取り出すと、道端にしゃがみこんでサークルチェックの総仕上げを開始した。
　そんな亜季ちゃんのツインテールを、カラスがくちばしでつんつんと突いてくる。
「やん。羽場、髪の毛触らないでってば」
「カラスだよ、カラス」
「亜季ちゃん、こもるはどうせサークル参加してるんだろ？　あいつからサークルチケット貰えば、早く入れるんじゃないの？」
「冗談じゃないわよ、あいつのサークルチケットで会場に入ったら、最後まであいつの売り子として働かされるジャン！　っていうか、もう売り子係たちにチケット渡してるだろうから、余ってないわよぉ」
　そ、そうなのか。さすが壁サークル、大手は違うぜっ。
「ところで。なんで疲れ果てた顔して道端につっ立ってるの、あんたたち？　夏コミに比べれば人は少ないけど、初体験のあんたたちにとっては、会場はまさに地獄よ。今から英気を養って体力を温存しておきなさい。ほら、地べたに座った座っ

た！」

「…誰かさんに一時間も待たされたから、疲れ果てたのよ…」

「亜季ちゃんは元気だなー。そういえば…亜季ちゃんのお母さんって今、何してるの？」

びしーっ。

久々にツインテールで足払いを食らった。

「…あたしの三次元家族の話は禁止っ！　いいわねっ！」

「ご、ごめん…」

「まったくもう、下僕のぶんざいで…馴れ馴れしいんだからぁ…」

ちょっと無神経だったかな。

亜季ちゃんは、家族の話をしたがらないんだ。

だんだん判ってきた。

亜季ちゃんにとっては、オタク界だけが自分の唯一の居場所。

だから、友達にも彼氏にも、高度のオタクスキルを要求する。

でも、その結果、亜季ちゃんにはほとんど友達がいなくなって…。

あの亜季ちゃんをキープと言っているこもるの野郎と、他は…。

下僕の僕としぶやだけかもしれないんだ。

ああ。

僕はいつになれば、亜季ちゃんの彼氏になれるのだろうか。

もっともっと頑張ってオタク道を究(きわ)めなくちゃ。

もう、亜季ちゃんの寂しそうな横顔は、見たくない…。

ツウは即売会にどう参加するの？

大規模な即売会、特にコミケは現在三日間開催されるのが基本になっているので、参加中の過酷さは、たんなる文化系の集いではない。礼儀を重んじ、妄想以外は心身ともに健康につとめる。即売会とはもはや武

道の領域なのだ。
そのため指南書であるカタログは徹底して読み込むことが必要。当日は時間との闘いでもあるので、効率的な購入ルートを事前にシュミレーションしておくことは必須だ。あと侮れないのが巻末のマンレポ。俺の経験上、ここから素晴らしき本に辿り着けたことも一度や二度ではないのである。
またケタ違いの混雑は避けられないとはいえ、イライラは禁物だ。例えば、三日目の男祭りの殺人的な人口密度では肩と肩がぶつかるくらいは日常茶飯事、それくらいでイラつく輩は俺に言わせりゃまだまだグリーンボーイ。悟りの境地に達した者同士は、よけいな諍いで体力が消耗することを避け、あえてなかったこととして、言葉を交わさず通り過ぎる。これは態度の悪い無視とは違い、通じ合う者同士、アムロとシャアのような精神感応で「あと少し、お互い頑張ろう」とエールを送りあう行為。これこそ新しい礼にはじまり礼に終わるなのだ。
かのブルース・リーの教え「水になれ!」は、コミケ参加者のための言葉だというのは意外と知られていない。

「人の革新」は、ここからはじまる!?

…こ
この解釈は
新しい

何で赤面
してるの?

笑い方
こわっ!

くっくっくっくっ

あっと
いけない

あのサークルに
早く行かないと

え ちょっと
待ってよ
亜季ちゃん!

早い
早いよ!

ううっ完全に
見失った…
もうおしまいだ

同人語を
話せないから
道も聞けない…

いや日本語で
いけるから

あ 兄さん
大丈夫よ
ほらあそこ…

カタログチェック甘かったな…

三平さん！良かった！

実は見失った亜季ちゃんを探してるんですが

うロうロ

あぁ 何言ってんだ 人を探す暇があったら 同人誌を探せ！

…なるほど 否定できない

否定していこうよ！

でも確かに亜季ちゃんならその方が喜ぶかもなぁ

よしそれならやおい本だ！ホモが嫌いな女子はいないぞ！

いやそれは三平さんがその場に張り付きそうなのでいやです

なら俺作の本人本を渡してやれ！

ほら2百部！

なにその無駄な太っ腹！

この辺りは
ペレちゃんの
本がいっぱい
みたいですね

俺たちみたいに
所持金が少ないと
ハッピートラップ
と言った所だがな

…爆死決定ね

しかし
何種類も本がある
サークルさんを
新規に買うのはお金が…

まあ　そうだな
気に入ったら
全種類欲しくなるし
難しい所だな

お！

すいません
ここに並んでるの
全種類ください

えぇぇぇ！
言ってるそばから！

臨機応変になれ！
この本1冊1冊の
値段は割安だった！

そんな良心的な
サークルの心意気に
こちらも答えないで
どうするよ！

カッ

さすが力強い！
少ない所持金を
わかった上で
後悔のない
判断ですね！

…しまった
大富豪じゃ
ないことを
失念していた
正直熱に
浮かされて
買いすぎた
プシュ〜〜
って すっごい
弱そうになった！
ふぅ
いけない
いけない
もてるを
置いてけぼりに
しちゃってたわ
今頃きっと
あたしのこと
心配してる
だろうなぁ
くるっ
ちょっと
どいてください！
あ もてる？
探してくれて—
よし最後の
一冊ゲットだぜ
ずるいですよ
僕のほうが
先に目を
つけてました！
その時の亜季ちゃんは
寂しそうな横顔だったと
後にしぶやは語る

第4章

飾っていいとも！

NIJIGEN he IKIMASSHOI!

～フィギュア・ガレキ編～

Figure & Garage kit

長い夏休みも、中盤に差し掛かった。
僕はプラズマテレビ購入ではたいてしまった貯金を復活させるために、ハンバーガーショップでお肉を焼くアルバイトをしながら、アニメの録画・ラノベ&マンガの購読・同人誌のチェックに余念のない日々を送っていた。
心なしか、亜季ちゃんの僕に対する態度も、ちょっとだけ好意的というか柔らかくなってきたような気がする。
とはいえ、あの中野こもるの存在がどうにも気になって仕方がないのだが…でも亜季ちゃんはあまりプライベートの話をしたがらないので、あいつとどこまで進展しているのか尋ねることもできないし…ああーっ！
いくら僕がプラズマテレビとDVDレコーダーでオタクスキルをアップしたとしても、自分で『しりスケ』の同人誌を描いちゃうような奴に勝てるわけがあるだろうかっ…！
亜季ちゃんは「オタク魂は作り手だろうが受け手だろうが等しく同じよ」「大切なのは魂なのよ」と言ってくれるものの、今まで恋愛資本主義ピラミッドの下層をうろうろ彷徨っていた僕としては、どうしても「作り手＝モテ＝勝ち組」「受け手＝搾取される側」という固定観念を振り払うことができないのだ。
顔だって、こもるのほうが三倍良いしっ…！
金だって、こもるは同人誌で大儲け、こっちはテレビ代で一文無しに逆戻りという状態…ああ…まだ学生だというのに、すでにこんなにも差がついてしまって…あと数年すれば…ああーっ！
ダメだ、僕はダメなんだ。
さりとて、今さら脱オタして元の恋愛資本主義市場に再参戦する意欲もない。そうだよ、別に僕、あんまりスポーツ好きじゃないし…プロレスは好きだけど…服にだって実はさほど興味がなく、ヒップホップだって盆踊りと区別つかないんだ。
趣味の世界ってのは…スポーツだろうがファッションだろうが何だろうが、「本当に好きな奴」が

やってこそ「本物」になれるわけで、かつての僕みたいに「モテそうだから判ってるふりをして真似事をやってる奴」はどうしようもない。一番ダサいのだ。何も残らず、何も身につかず、心の底から楽しめるわけでもない…。
でも、僕はやっと見つけた。自分が本当に楽しめる趣味を…。
それが、オタク…！
っていうか、ペレちゃん？
「ペレちゃんへの愛なら、誰にも負けないぜっ！」
僕は朝っぱらから、部屋の壁に飾ってあるペレちゃんの等身大ポスターに手を合わせて悔い改めていた。
「夕べも、中野こもるのペレちゃんエッチ同人誌をうっかり読んでしまいました。ああーっ、ああーっ。ペレちゃん、こんな愚かな僕を赦(ゆる)してくださいっ！　崇高なペレちゃんを脳内で汚すような真似をしてしまいました！」
（き、気にすることないわ、あんなのただのマンガじゃん。わ、私は別に汚れてなんかいないのよ。もてるのこと嫌いになったりしてないわよ…あ…いっ、いや、元々あんたのことなんか大嫌いなんだったっ！　今のなしっ！　今のなしっ！）
ペレちゃんは、亜季ちゃんに口調が似ている。どうやら、ツンデレという性格らしい。
「ああ、ペレちゃん、ありがとうございまする〜っ！　本当は恥ずかしくてイヤだなぁって思ってるはずなのに、我慢して僕を赦してくれるなんて…なんて心が広いんだっ！」
ぽこっ。
しぶやと亜季ちゃんにWで頭を殴られた。
「んもう、朝から何をやってるのよ？」
「…兄さん…酸素欠乏症に…？」
「あ、おはよう。僕は今、朝の偶像崇拝の途中だったんだ。邪魔されると困ってしまうなぁ」
「…兄さん…だんだん、手段と目的がすりかわりつつあるわ…」
手段と目的？　はて、目的って何だっけ？

「なぁ～にが偶像崇拝よっ！　甘いわね、まだまだ」
負けず嫌いの亜季ちゃんが、むやみに大威張りしながら僕の鼻先に指を突き付けてきた。
「と、等身大ポスターごときで勝ったと思わないでよねっ！」
「いや亜季ちゃん、別に勝ち負けの問題では…僕はただ、『しりスケ』のペレちゃんに夢中なだけであって…ペレちゃんは、ツンツンしてるけど実は心の優しい女の子なんだよっ」
「くっ…いつの間にここまで濃度の濃いドロドロのオタクに進化したのかしら、こやつはっ。かくなる上は、さらなるステージアップにいざなう時が来たようねっ」
…まっ…まだ上があるのかっ？
どこまで深いんだ、オタク道とは？
「いいから、ついて来なさいっ！」
亜季ちゃんが僕の腕に自分の腕を「バロームクロス」の要領でガシッと絡(から)めてきた。
「合体変身でもするの？」
「するかっ！　これからラーの神殿の最上階にあんたを案内してやるのよっ！『死亡の塔』で言えば身長2メートルの黒人カラテ家が待ち受けている、そんなハイレベルな世界なのよ」
そうなのか。いよいよ最上階、ラスボスのフロアに入れてもらえるのか。
「ほらぁ、暑くならないうちに行くわよ」
「…私も行く…」
「うわー亜季ちゃん、引っ張らないでー」
やばい。亜季ちゃんの胸が僕の肘に当たっている。これって、どこのエロゲーですか？
こんな時、僕はどうすればいいんだ。
三次元の世界ではイベントが発生しても目の前に「三択」が表示されるわけではないので、実に困ってしまう。
思わず壁のペレちゃんポスターを振り返ると、
（頑張って彼女とフラグを立てなさいよ）
ペレちゃんが親指を立てて微笑んだ、ような気

がした。
…そうだった、亜季ちゃんと恋愛フラグを立てなくちゃいけなかったのに…亜季ちゃんも最近は僕に優しいし…胸当たってるし…ああでも、中野こもるの存在がどうにも引っかかって…最近ではペレちゃんのポスターに恋愛相談している途中で「僕なんて亜季ちゃんの彼氏に相応しくないっ！ああ、ペレちゃん、三次元の世界に出てきてくれませんか」と泣き言を言い出す始末。
そのたびに、隣にいるしぶやに、
「…兄さん、私より、その紙に印刷されたインクの固まりのほうがいいのね…」
と恨み言を言われるし。
だって、しぶやは「あの女は諦めなさい」としか言ってくれないんだもんなあー。
そんなこんなで、僕はラーの神殿の最上階に拉致…もとい、案内された。
お客さんは一人もおらず、猫のラー店長がしゃがみこんでフロアの床をごしごしと磨いていた。
その着ぐるみ、重くないのか？
「やあ諸君、おはよう…ぜえぜえ…」
ラー店長の中の人の声はとても暑苦しそうで弱弱しかったが、縫いぐるみなので表情は笑顔のままだ。
「おはようございます。ラー店長、このフロア…どうして人がいないの？」
「このフロアは月に数日しかギャラリーに開放していないんだよ。今日は閉館日なんだけど、常連の亜季ちゃんに頼まれたので特別に君たちだけを入場させてあげたんだよ」
「そうよ、あたしはラーの神殿のＶＩＰ客なんですからね！　ちょっとは尊敬しなさいよっ」
ラー店長の顔のレリーフが刻印されたゴールドカードを見せびらかしながら、亜季ちゃんが吼えた。
「ええっ、ＶＩＰＰＥＲだって？」
「違うっ！　ＶＩＰ客っ！　ここはね、ガレキや

ガシャポン、ガンプラといった立体造形モノを展示しているショールームなのよ。もてるも、そろそろ二次元から2・5次元に進化させてあげてもいいかなって認めてあげたから、連れて来てあげたのよ」

に…2・5次元っ？

それは一体、何だ？

僕はフロア中に陳列されているガラスケースの中身を、順番に見学させてもらった。入り口あたりのケースには「赤いザク」とか「アッガイファイト中のアッガイ」といった、思わず「吾輩にも判るでありますゲロゲロゲロ」と呟きたくなるようなナイスなプラモデルが飾られてあったが、進路を進んでいくと徐々にロボットが減ってきて、代わりに人形が増えてきた。

「これは人形だねっ。どれも見覚えがある顔ばかりだなぁ。おおっ、そうか！　アニメのキャラクターが人形になっているんだっ！　すげえ、超すげえ！　奥行きのない二次元キャラが、立体化されているうっ！　そうか、二次元のキャラが三次元化されているから、2・5次元なのかっ」

「そうそう。あんたもなかなか立派にオタクとして成長したじゃないの。どうしてあたしがここにあんたを連れて来てやったか、判る？」

亜季ちゃんは相変わらず僕の腕を捕まえたまま、にこにこ笑っている。

「…等身大ポスターのペレちゃんもかわいいけど、僕はずっと『ペレちゃんが紙から抜け出して、こっちの三次元世界にやってきてくれないかなあ』と妄想していたんだ。その僕に、三次元の世界に降臨したペレちゃんの人形を見せてあげようとしてくれたんだね…ありがとう、亜季ちゃんっ！　本当にありがとうっ！」

「わわっ、抱きつくなっ！　…て、店長と妹が見てるでしょっ」

「お客さん、店内ではエッチイベント禁止ですよ」

「…この女、人がいなければ抱きついてもいい、と言いたげね…」

しぶやの言葉に過剰反応した亜季ちゃんは、ツインテールの尻尾をぴくぴくと震わせながら僕をどーんと突き飛ばした。
「うわあ〜」
「そっ、そんなわけ、ないでしょっ！　やい妹、いいところだったのに邪魔しないでちょうだいっ！」
亜季ちゃんが赤くなったり蒼くなったりしながらしぶやと闘っている間に、僕は順路を進んだ。だんだんケースの中の人形のサイズが大きくなっていく。最初に現れたのはちっちゃな人形だったのに、徐々に等身が伸び、身長も伸び、リアルさを増しはじめているではないか。
「って、あたしの話を聞いてるの、もてるっ？　今の、萌えるところでしょっ？」
「え、何が？」
「あううっ！　フィギュアに魂を奪われて、あたしの萌え爆弾発言をスルーしてるうっ！」
亜季ちゃんが地団太を踏んで床を汚しまくった。
「ああっお客さん、せっかく磨いた床をっ…ごしごし」
そんな亜季ちゃんの後を、しゃがみこんだラー店長が床を拭きながらついていく。
「亜季ちゃん、順路を進むごとに人形がだんだん大きくなっていくんだけど…キャラクター人形にも種類があるのかな」
「ああ、それはね。基本的にはキャラクター人形のことをフィギュアって呼ぶんだけど、中でもちっちゃいのはガシャポンとかカシャポンって言うの。ガシャポンのカプセルに入ってるモノが多いからかしら？　でかいのはガレキって呼ぶことが多いわね。ま、そのへんは秋葉原駅前留学講座でちゃっちゃっと勉強してちょうだいね」

造型物ってなにがあるの？

最近では「アニメ女の子」の立体物を『フィギュア』と言うが、これはこれで『ガレージキット』を指す

のか『ガシャポン』を指すのかわからない。わからなければボクらに聞けば済む話なのだが、なかなかどうして、魅力的な彼女を前にしてうっとりするボクらに「これはガレキですか？　ガシャポンですか？」と聞くのは、それ相応の覚悟が必要だろう。当然のごとく「うるさいな。考えるな、感じろ！」と怒られるのが必定だからだ。

簡単に言うなら箱に入っているのがガレキで、ガシャポンは子供の握りこぶし大のプラ製カプセルに入っていたもの。このガシャポンよりさらに小さく、お菓子など食品のおまけとして付属していれば、『食玩』だ。

他に覚えるべき造型物としては『プラモ』があるのだが、これもこれで奥が深い。『プラモ』＝『模型』と捉えるのは、実は「生兵法は怪我のもと」。「図面があり、パーツもできあがっていて、組み立てるだけ」のプラモは、パーツ削り出しから制作を行う模型人（主にこだわりにこだわりぬく鉄道者が多い）から言わせれば、模型とは別モノだ。艦船や戦闘機といったスケールモデルならまだしも、接着剤も塗装の必要もない、パーツを組んだだけで鑑賞に耐えられるＭＧ（マスターグレード）ガンプラでしかプラモを作った事がないなら、注意だぞ！

いまいちピンと来ないが、まあ、要するに「フィギュア」なんだな？

「でもでも、中野ブロードウェイのまんだらけあたりだと、ガシャポンとガレキとでは売っているフロアが違うから、ちゃんと覚えておいたほうがいいわよ？」

「判ったよ。僕は、これからはセル画や印刷物だけじゃなくて、ちゃんと立体造形物に萌えられるように精進するよ！　これで、ペレちゃんがまた一歩僕のもとに近づいた！」

「…兄さん、亜季はどうなったの」

「はっ？　そうだ、忘れていた。元はといえば亜季ちゃんの彼氏になるためにオタク修行をしていたんだった」

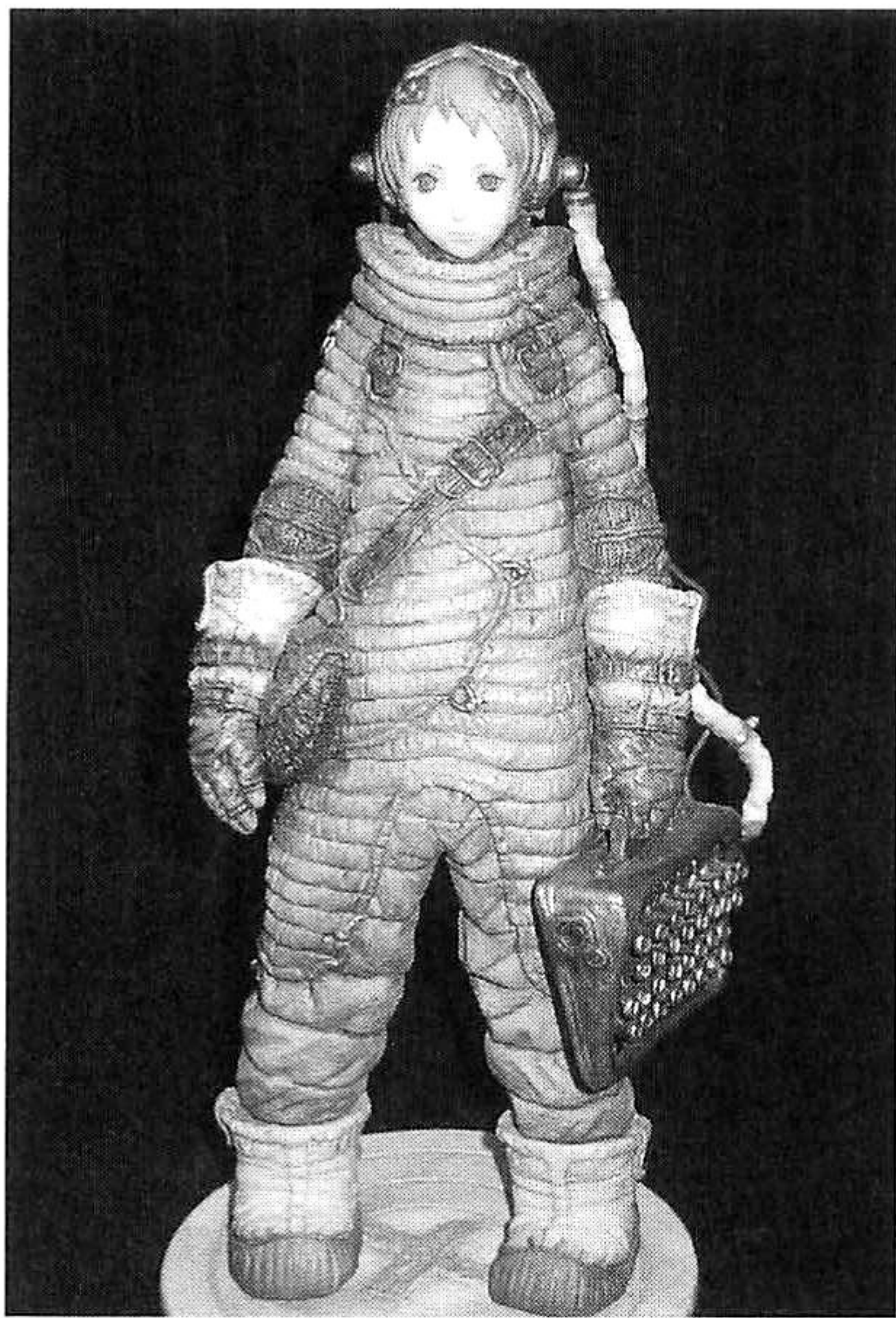
「平然とあたしを忘れるなーっ！」
びしいっ。

久々に、亜季ちゃんのツインテール攻撃を食らってしまった。

ガレキは他となにが違うの？

「はっきりいって作れない」これにつきる！

海洋堂の『焔星（イェンシー）』の後ろ姿なんか原作にのっていないのだ！　参考にしようにも原作で描かれていないのである！　つまり、ガレージキット特有の魅力とは、ひとえに〝原型師〟のセンスが産み出す魔力にある。これはフィギュアにおいても同じことで、キャラの表情はむろん、手足の細かいニュアンス、髪の毛の流れかた、洋服のシワの一本一本まで穴があくほどに見つめ、ため息をつき、「やっぱ、可愛いなぁ」と何度もひとりつぶやいて、アパートの隣人が「どうも、隣のやつのは独り言らしいぞ」と不審に思いはじめた頃、原型師のこだわりとセンスが読み取れてくる。

右足を軽くあげた仕草にふわりとするプリーツ・スカートの裾に「な？　な？　このコはプリーツスカートが似合うと思うだろう、君も」という原型師の声…天使の賛美歌が聞こえてくるのだ。これはもう言葉には出来ない領域。強

芸術であることがお分かりいただけるだろう。
モデルはサークル『LongLong』の原型師小林真氏のオリジナルフィギュア、シンカー

いて言うなら、作品を見た瞬間に「ふひぃ」と、えも言われぬ甘美なる吐息…ひらがなで「ふひぃ」と声をあげさせた原型師が自分にとってのミケランジェロであり、運慶になるのである！　その現代の巨匠達の技術と情熱を堪能できる事こそが、ガレージキットが他と違うと思わせる〝何か〟なのだよ！

「あと、ガレキを制覇すると、その先にはアンティーク・ドールという禁断の世界が広がっているのよ。でも、アンティーク・ドールはまだもてるには早いから、このへんで今日の見学は終わりにしましょうね」
「いや、毒を食らわば皿まで、フィギュアを食らわばドールまで、だよ！　すごく気になるから、そのドールってのも見せて見せて」
「いや、でも、これは…かなりハイレベルっていうか廃人レベルのオタクじゃないとっ…やおい同様、完全に女の子の世界だからっ…」
　おろおろしながら亜季ちゃんは出口の脇にあるガラスケースの前で手を広げ、僕の前に立ちはだかった。何と判りやすいんだ、亜季ちゃん。
「そのケースの中に、ドールがあるんだね？　見せて、見せて」
「うーん、しょうがないなぁ。じゃ、ちょっとだけよ？」
　どーん。
　亜季ちゃんが、ケースの中のドールを僕に見せてくれた。
　それは…、
　身長約六〇センチの、バズーカ砲を担いだペレちゃんを模（かたど）った素晴らしいドールだった。
　なっ…、
　なんと、美しい…！
　まるで地上に降臨した天使みたいに、美しい！
　思わず、僕の双眸（そうぼう）からは歓喜の涙が。
「こっ…これは…これは凄い…素人の僕でも、一目で判るぐらいハイレベル…っていうか、これはもう芸術作品っ…！　このままＭＯＭＡに展示しても不思議じゃないぐらい凄い…！　感動だ、感

動だよ、亜季ちゃん！」
「あー、まあ…ねえ…それじゃ、そろそろ行きましょうか。カラオケにでも」
なぜか亜季ちゃんは歯切れが悪そうだ。
いったいどこの誰がこんな素晴らしい作品を作っているんだろう…作品のデータは、データは…、げえっ？

「夜霧のペレストロイカ」
作者：中野こもる
参考価格：三〇万円

造形物体験編

またしても、僕の前に立ちはだかったオタクの貴公子・中野こもる。
売れっ子同人誌作家の顔を持つだけでなく、まさか、ドールの原型師としても超一流の腕前だったなんてっ…！
あいつは、マジでオタク界のレオナルド・ダ・ヴィンチだっ！
あれでまだ高校二年生だというから恐れ入る。僕より一歳年上なだけなのか…。
チキショーッ！
ダメだ、ダメだ、あんな奴に追いつけるはずがないっ！　ああ、どうして僕は幼い頃からオタク教育を受けさせてもらえなかったんだ！　教育の権利は日本国憲法で万人に保障されているのではなかったのかっ！　親父め！　バカ親父め！　よくも僕を、こんなオタク原体験の少ない無趣味な人間に育て上げてくれたなぁっ！
いっそグレて暴れてやろうか、うらあっ。
帰宅後、親父の部屋に入ってみると、親父は、「あああああ、株が、わしの株が紙切れにいいっ」と泣きながらこたつの中に頭を突っ込んでいるところだった。
「な、何やってるの、親父？」
「わしが買ったＩＴ企業が東証上場停止になって

しまってっ…最高値近辺で買ったから、それはもう計り知れない金額の損失がっ…どの経済誌でもエコノミストが買い銘柄だと推奨していたのにっ！　もうダメだ、わしは死ぬ！　死んで母さんとお前らにお詫びするっ」
「いくらだよ」
「…一〇〇万円…」
「死ぬような金額かよっ！　働いて自分で損失補塡しやがれっ」
「うわー、息子よ、父の尻を蹴り飛ばすとは立派に成長したのう～」
ダメだ、この人はメディアに踊らされ続ける典型のような人なんだ！
とほほ…こんな親父にあたっても仕方がない。
はぁ…しかし、あのペレちゃんのドール、本当に美しかったなぁ…まさしく芸術作品…あんな仏像もといドールが部屋にあったら、毎日心癒されるだろうなぁ…ほしいなあ…。
溜息をつきながら廊下を歩いていると、
くいくいっ、
黒Tシャツの袖をしぶやに引っ張られた。
「…兄さん、私もドールに興味があるの。中野こもるの工房を見学したいわ」
「そうか…あんまりあいつに会いたくないけど、妹にそうおねだりされたら、仕方ないな…亜季ちゃんに頼んでみるか」
「…ありがとう、兄さん」
なぜ、そこで頬を赤らめる？

というわけで、翌日、僕としぶやは亜季ちゃんに案内されて中野こもるの人形工房を見学させてもらうこととなった。
こもるの家は超ゴージャスな典型的「お金持ちのお屋敷」だった。庭の面積だけで、僕の家の数倍はある。その上、工房は本邸とは別の離れになっていた。ほ、本格的だ…！　それにしても。
（なんで亜季ちゃん、こもるの家まで知ってるんだ…っていうか、まるで我が家のようにすいすい

と歩いているし）
ああ、胸がちくちくと痛むよぅ。
本当に幼馴染みなんだなぁ…
それにひきかえ僕なんて、亜季ちゃんの幼い頃のことを何も知らないし…。
あああ、ペレちゃん、ペレちゃんのドールがほしいっ！　こんな僕の心の悲しみを癒してくれるのは、ペレちゃんだけだあっ！
「はい、ここが『コモルの引きこもる城』よ。散らかってるから足元に注意しなさいよ。まったく、なんであたしがゴスロリ妹のガイドをやらなくちゃいけないのよぅ」
口を「3」の字に尖らせてぶーぶー言いながらも、亜季ちゃんは僕たち兄妹をこもるの工房に入れてくれた。薄暗くて散らかっていて、まるで中世の錬金術師の実験場みたいな雰囲気だ。中ではすでに、こもるが粘土みたいなものをこねて素体を作っている最中だった。
「やあ諸君、久しぶりだね。今日は僕が人形を作る現場を見たいんだって？　はーっはっはっはっ」
「高校生の部屋とは思えない広さだな。チキショー、羨ましい」
「マンガは机とトレース台があればなんとか制作できるけど、人形はなかなか厄介だからねぇ。はーっはっはっはっ。おっと、作りかけのパーツには触れないでくれたまえよ」
いや、まあ、小さめのガレキなら何とか僕の部屋でも作れそうだ。ただし、寝る場所が無くなりそうだけど。しかし、アンティーク・ドールは無理だろうなぁ…。

作る部屋はどう確保すればいいの？

作る事を楽しむ場合には、それなりに工作の準備や場所の整備が必要だ。
まず人気女優とか俳優のダメ息子と仲良くなって、巨大な邸宅の地下室を貸してもらえるようにしよう。

その息子がダメであればダメなほど、プラモ作りにはもってこいだ。ラッカー系塗料の散布は、密集型都市ではなにかと問題になりやすい。しかし人気女優／俳優のダメ息子ならば、多少シンナー系溶剤独特の匂いがしたって問題なしだ！　ただ、この方法の場合、多くの著名人のサラブレッド達はガレキやプラモに興味がないので、こちらが作った作品を、ふざけ半分にエアガンで狙って遊んだりする危険性が極めて高い。
　それを避ける意味でも、オタクエリートとしての洗脳が重要になってくる。同世代なら同級生、年上なら家庭教師として、自宅に引きこもりがちのダメ息子の家に「プリントを持って来ました」などと上がり込んで、忘れ物のフリをしてお薦め漫画をおいていこう。まずはジャンプのアクションやマガジンのちょいワル系の漫画がいいだろう。「…つづきって、もうねーの？」とかごにょごにょ言い出したら、奴はもうこちらの手中だ。そこですかさず『ああっ女神さまっ』『ネギま！』『いちご100％』『スクールランブル』でラブコメ洗脳すれば、後は向こうから「『G・A』なら俺、ミントが…」とか言い出す。
　そうなれば「フィギュアほしい」と言い出すのにも時間はかからない!!

「…私、弟子入りしていいかしら…」
　しぶやがいきなり言い出した。
「はーっはっはっはっ。僕は内弟子は取らない主義なんだけど、工房を時々貸してあげる程度なら構わないよ？」
　あああ。しぶや、兄を裏切ってこの工房を取るんだな？　そうなんだな？　ガッデーム。呪われろ、ブルジョア！
「くそっ、部屋がでかいからっていい気になるなよ！」
「もてる、それって完全に脇役の台詞よ」
「だってだって、この完璧オタク超人には僕は何一つ敵わないんだよ！　僕なんてどーせ脇役だよっ！　いくら努力したって、亜季ちゃんとの間にフラグなんて立てられないよーっ！」
　嘆いていると、亜季ちゃんが僕の肩をぽんぽんと叩いてくれた。
「大丈夫よ、あんたにだって勝ってるところもあるわよ」

「えっ？　本当？　いったいどこが勝ってるの？」
「例えば…こもるは、学校行ってないしっ！　つまり、引きこもり！　不登校っ！」
　ドーンッ！
「それは言わない約束じゃないか、亜季！　はーっはっはっはっ！」
「つーまーりー、不登校を続けているうちにオタクスキルをぐんぐんあげたのよ、この男はっ。世の中、何でも完璧にできる超人なんていないのよ、もてる。オタク道を究(きわ)めるためには、何かを捨てなければならないのよ。錬金術で言うところの『等価交換の原則』だわ。あんただって今までオタク趣味以外の何かにエネルギーを使ってきたわけなんだから、別に気にしないでいいのよ」
　そ、そうか。そうなのか。僕が学校に通っている間に、こもるはオタク道を邁進(まいしん)した…それだけのことか…。
　…って、僕、学校で何を学んだんだっけ？
　ぎゃーっ！　モテるためにちゃらちゃらしていただけだったーっ？
「そうだよ、その『オタク趣味以外の何か』の成果がまったく残っていないから、落ち込んでるんだよっ！　うわーっ、僕はなんてダメな人生を過ごしてきたんだあっ！　目を開けて一六年間寝ていたも同然だよっ」
「べ、別にいいじゃん、あんたまだ高校生でしょ？　それに、人間の女の子と恋愛するのだって立派な人生じゃないの」
「はーっはっはっ、それは学校を捨てて二次元の世界へ旅立ってしまった僕へのあてつけかね、亜季」
　恋愛かぁ…でも、亜季ちゃんといつまでもフラグが立たないしなぁ…。
「もう、元気出しなさいよー。ほらほら、フィギュアがいっぱいあるわよっ」
「そ、そうだね。ペレちゃんのフィギュアも各種取り揃えられてるし。ああ、ペレちゃん、僕を救ってください…」

脳内でペレちゃんが僕に囁いてきた。
（亜季にアタックするのよ、もてる！　こもるはオタク道を究めるために恋愛を放棄してるのよ！　今ならまだチャンスがあるわよ！）
（いや、でも、亜季ちゃん超かわいいし…オタク度数高いし…何のとりえもない初心者オタクの僕なんかとはつりあわない…）
（何を言っているの？　あなたにはまだ、命があるじゃない！　命がけで特攻すれば、どんな巨大戦艦だって撃墜できるはずよっ！　さぁ、反物質である私とともに特攻するのよっ）
（ああ、でもでも…ああ、僕は、二次元に逝ってしまいたい…）
「って、何をブツブツ言ってるのよ、この男はっ！」
「…兄さん、やっぱり酸素欠乏症で…」
「おお、脳内でフィギュアと会話を交わしている！　誰に教わったわけでもないのに、フィギュアを愛でる術を自ら体得しているじゃないか。もしかすると彼は天才かもしれないぞ、はーっはっはっはっ」

ツウはどう観て楽しむの？

決められた角度からしか拝顔できなかった彼女たちが、今日からは三六〇度どの角度からも拝顔可能に！

フィギュア鑑賞の醍醐味はこれに尽きる！　正面から見つめ合ってニッコリ微笑むもよし。横から眺めて「おーい！」と声をかけ振り向かせるもよし（ただし手動）。カットにこだわりたければ、ちょいと離れた床から仰ぎ見て、小津安二郎気分を満喫することだってできるのだ。ただし、スカートの下から覗きこんだら、逮捕しちゃうぞ？

楽しみ方で重要なのはコミュニケーション、つまり会話だ。植物が声をかけないとさみしくなって死んでしまうのと同様、キャラの魂の宿ったフィギュアたちも、声をかけなければ当然魂の抜け殻になってし

まう。
　うちのミシェールさん（『R・O・D』）は、オレが帰るなり声をかけると「あらあら、大変でしたわねえ、おかえりなさいませ」と、癒してくれる。ま、こないだは「お寿司の上をとっておいたから、お召し上がりくださいな。あ、ちなみに領収書はこちらに」なんて言われて閉口したけどね！　話かけ過ぎも要注意☆
　でも、こうして会話していくうちに、自分が素敵な「家族」に囲まれていることに気づくはず。さらなるステージでは、別作品のキャラクター同士をおしゃべりさせよう。最近オレがハマッているのは、『あずまんが大王』智ちゃんと『苺ましまろ』美羽ちゃんのイタヅラ元気っ娘対決！　気づくと机がグチャグチャだけど、なんか嬉しい！

「もうダメだ、我慢できない！　こもる先生、僕はどうしてもこの『夜霧のペレストロイカ』たんのアンティーク・ドールがほしいんですっ！　売ってくださいっ」
　僕は、ラーの神殿に飾られていたのと同じデザインのペレちゃんドールを指差しながらこもるに土下座した。
「はーっはっはっはっ。ラーの神殿に飾っているドールは売り物だけど、この工房に置いてあるドールは非売品なんだ」
「じゃ、ラーの神殿のドールを買えばいいのか…でも、あれよりも、こっちのペレちゃんのほうが数倍萌えるんだよなぁ…」
「よく判っているじゃないか。売り物のペレちゃんはアンティーク・ドールの雰囲気を再現してはいるが、今流行りのレジン素材で作られているんだよ。だが、僕が手元に置いてあるペレちゃんは、白磁で作ってある。僕がこの工房で丹念に焼いて作りあげたんだ」
「…ビスク・ドールね」
「げげっ。そんなレアものだったのか…ああっ、世界に一体しかない非売品と聞くと、ますますほ

しいっほしすぎるうっ！」
「んもー、もてるったら、わがままねえー」
「丁寧にメンテナンスしてくれて絶対に汚さない壊さないという約束をしてくれるのなら、特別にタダで貸してあげてもいいよ」
「ええっ本当ですか、こもる先生っ！」
「ちょっと、こもる？　それ大事な人形なんじゃないのっ？」
「残念ながら、人形と魂で会話する才能においては、僕よりも、もてる君のほうに軍配があがりそうだからね。人形も、一番自分を愛してくれる人のもとにいたいだろうし。そのへんは、人間の女の子と同じさ、はーっはっはっはっ」
「あたし、なんだかとっても嫌な予感がするんだけど～」
「そう言うなよ亜季。いつまでも彼がヘコんでいてもいいのかい？　このドールを日々愛でることで、彼はオタクとしての自信と誇りに開眼するはずだよ。そうなれば君だって…」
「わーっわーっ、それ以上喋っちゃダメーっ！、こんの～、お喋り野郎っ！　大往生っ！」
亜季ちゃんが、こもるの首にツインテールを巻きつけた。
こもるは、グエーッと呻(うめ)き声をあげて、窒息したのだった。
ああ、命がけだけど、ちょっと羨ましい…。

メンテナンスってなにをすればいいの？

造型者達にとって最大の敵は〝ほこり〟と〝地震〟だ。ほこりに関しては、これはもう掃除をマメに行うしか手はない。しかし、ガンプラの様にパーツの取り外しができて拭き取れるものは良いが、ガレージキットフィギュアはそうもいかない。微細な彫刻なのでうかつにやってしまうと破損のおそれがあるのだ。

そこで頼りになるのが某大学の考古学教授であられる吉●先生だ。先生の専門はなんといっても墓あばき……失礼。遺跡発掘だ。千年、二千年前の建造物を掘り起こすプロである。その「繊細なハケ使い」なら、脆いレジンキットからほこりを払うなんてことは雑作もないから、この際、思いきってお願いしちゃおう！

地震のほうは、対策は簡単。見えない位置（大概は足の裏）にピンバイスで穴をあける。同じ径の穴を台座部分にもあけて、そこに五〜一〇ミリ切り出した真鍮線を突き刺す。後はフィギュアを立てるだけだ。ガレキの場合は台座を大きくて重い物にかえる。それでも心配な人は地震を止めるエスパーを探し出すしかない。思いのほかそういう人が沢山いて驚くかもしれないが、実はその全部が詐欺師だったりする。ガレキの何倍もする萌えないフィギュア（「ぶつぞう」と呼んでる場合が多い）を無理矢理買わされたりするぞ。気をつけよう！

おねがい☆ティーチャー

こうして僕は、恐れ多くもペレちゃんのビスク・ドールを借りられることになった。こもるは、ヴァイオリンケース型のケースを取り出してきて中に柔らかい布団みたいな素材を詰め込み、ペレちゃんドールをその上に横たえた。
「もし汚れたりしたら治してあげるから、いつでも言ってくれたまえ。はーっはっはっはっ」
「ああ、ありがとう！　夢のようだ！　むしゅめさんは、僕が大切にしますっ！」
「…兄さん…その人形、普段は隠しておいたほうがいいわよ…IT株で一文無しになった父さんが質に入れてしまうかもしれないわ」
「そ、それもそうだな、ガクガクブルブル…」
こうして僕はドール入りのヴァイオリンケースを手に、こもるの工房から引き上げたのだった。
隣には、相変わらず僕の腕に自分の腕を絡めている亜季ちゃん。
「まさか、ガシャポンを飛び越えていきなりアンティーク・ドールにハマるなんて予想してなかったわ。あんた、あたしの予想を超えるオタクねっ」
「そ、そうかな～？　僕ってそんなに偉大なオタクかなー？」
「偉大かどうか知らないけど、ドロドロね。どこまでもオタクね。恐るべきオタクになるわよ、このままじゃ」
「そ、そうか…そ、そうなれば…亜季ちゃんともフラグが…立つかなぁ…はぁ…」
「…んもう…なんて鈍感なのかしらっ…」
「え、何が？」
「な、なんでもないわよっ！　なんでもないんだからねっ！」
どうやら、亜季ちゃんはこもるとつきあっているわけではなさそうだ。こもる本人も、二次元に逝ったとか言ってたし。じゃあ、なんで最初に会った時に「亜季はキープだよ、はーっはっはっはっ」なんて憎まれ口をわざわざ叩いたりしたのだろう？　うーん。
はっ？　あれはもしかして、オタク同士の会話

における「お約束」みたいなものだったのかっ？
　こもるは常に「嫌なお金持ちキャラ」を演じる係担当だったとかっ？
　ああ、だとしたら、僕はなんと愚かだったのだろう。オタクの会話のマナーも知らぬまま、一人で勝手にこもるに嫉妬したり亜季ちゃんとフラグが立たないと悲しんだり…あああ、なんて僕は心が汚れているんだ。一刻も早くペレちゃんドールに祈りを捧げて懺悔しなければ…。
「うん？　そういえば、しぶやがいないぞ」
「あの子は、居残って球体関節人形の作り方をこもるに教わるって言ってたわよ？　もてるってば、ほんっとに人形に夢中で、全然あたしたちの話聞いてなかったでしょ。んもう」
「し、しぶやが男と部屋で二人きり？　だ、大丈夫なのか？　おろおろ、おろおろ」
「シスコンねぇ。こもるは三次元に興味ないから、全然大丈夫よぉ～」
　…それはそれでちょっと怖いぞ。
「あと、お兄ちゃんがオタク趣味に夢中で最近相手してくれないから、どうすれば兄の気を引けるのか教わるとか言ってたわね」
「またまた、亜季ちゃんってば～。冗談が好きだな～」
「はぁ。あたしも教わりたくなってきたわよ、まったく…」
　その後、僕と亜季ちゃんはラーの神殿のカラオケボックスでアニソンを歌いながら夕御飯を食べた。ただし、ペレちゃんドールに肉の匂いがついたら大変なので、お菓子とパスタ以外の食べ物は全部禁止にしたのだった。
「ああ、ペレちゃんをどうやって飾ろうかな。わくわく、わくわく」
「もてる、このあたしとカラオケしてるのに、心ここにあらずって感じね！」
「えっ？　いや、そんなことないよっ！　はぁ、でも…現実の亜季ちゃんとはフラグ立たないし…あああ」

「んもう、まだそんなヘタレたこと言ってるの？　ちょ、ちょっとばかりオタク化教育が成功しすぎたようね…ほらぁ、失意体前屈のポーズで固まっていないで、こっち向きなさいよ」

亜季ちゃんに摑まれて起こされた。さらに亜季ちゃんは、いきなり僕の膝の上に乗ってきた。うわっ、ドールじゃあるまいし、なんてことをっ？

「も、もてるはもうすぐ合格だから、ちょっとくらいなら…したいことしてもいいわよ？　あっあたしは別にそんなつもりじゃないんだけどっ」

「したいことをしていいの？　ゴクッ…じゃあ、ここでペレちゃんを取り出して鑑賞していい？」

「…ばかばかばかーっ！　何言ってるのよっ、あのドールじゃなくて、あたしを観なさいよっ！」

「いや、でも、亜季ちゃんは恐れ多くも人間様だしっ。僕なんかとはつりあわないし」

「あーもうっ、バッカじゃないのっ？　このあたしが、キスぐらいだったらしてあげてもいいって言ってやってるのにっ」

そ、そんなバカな。いったいどうしたんだ、亜季ちゃん？　まさか、レモネードとポッキーの食い合わせで酔っ払ったのかっ？

「ええっ？　あっ、そうか！　これ、夢だったんだ。あわわ、画面に三択が出てこないっ…どうすれば現実に帰還できるんだ、僕はっ？」

「現実だって言ってるでしょうっ！　…あん、もう…携帯が鳴り出した…」

亜季ちゃんは渋々僕の膝の上から離れて、ポシェットから携帯を取り出した。着メロは当然『しりスケ』のテーマソング「屠れ！ぷりぷり子羊！」だった。

『やぁ亜季、もてる君と仲良くしているかね、はーっはっはっはっはっ』

「こもるなのっ？　あぁーっ！　切るわよ、切るわよっ！　あんたのせいで、どんどんもてるがおかしな方向に向かってるじゃないのよっ！　あんたみたいに完全に二次元に解脱しちゃったら、どーすんのよっ？」

『大丈夫さ。ドール萌えの達人にクラスチェンジしさえすれば、彼は君につりあうオタクに成長したという自信を手に入れるよ。そうなれば二人は晴れてステディになることができるよ。はーっはっはっはっ』

「しーっ、しーっ！　聞こえちゃうでしょっ隣にいるのにっ」

『ああそうそう。彼は一度告白して玉砕(ぎょくさい)してる上に、オタクらしいナイーブな少年に変身しているから、次の告白は君のほうからやりたまえよ、さもなくば永久にもてるルートには入れないよ。はーっはっはっはっ』

「…そっそんなこと言えるわけないでしょっ、今さらっ…！　さんざん、あたしのわがままにつきあわせてきたのにっ…！　今さらそんなっ…」

「さっきから真っ赤な顔でこもると何を話してるの、亜季ちゃん？」

「なっなんでもない、なんでもないっ！　えいっ！」

ああっ、亜季ちゃんが携帯を手刀で叩き割ってしまったっ…。

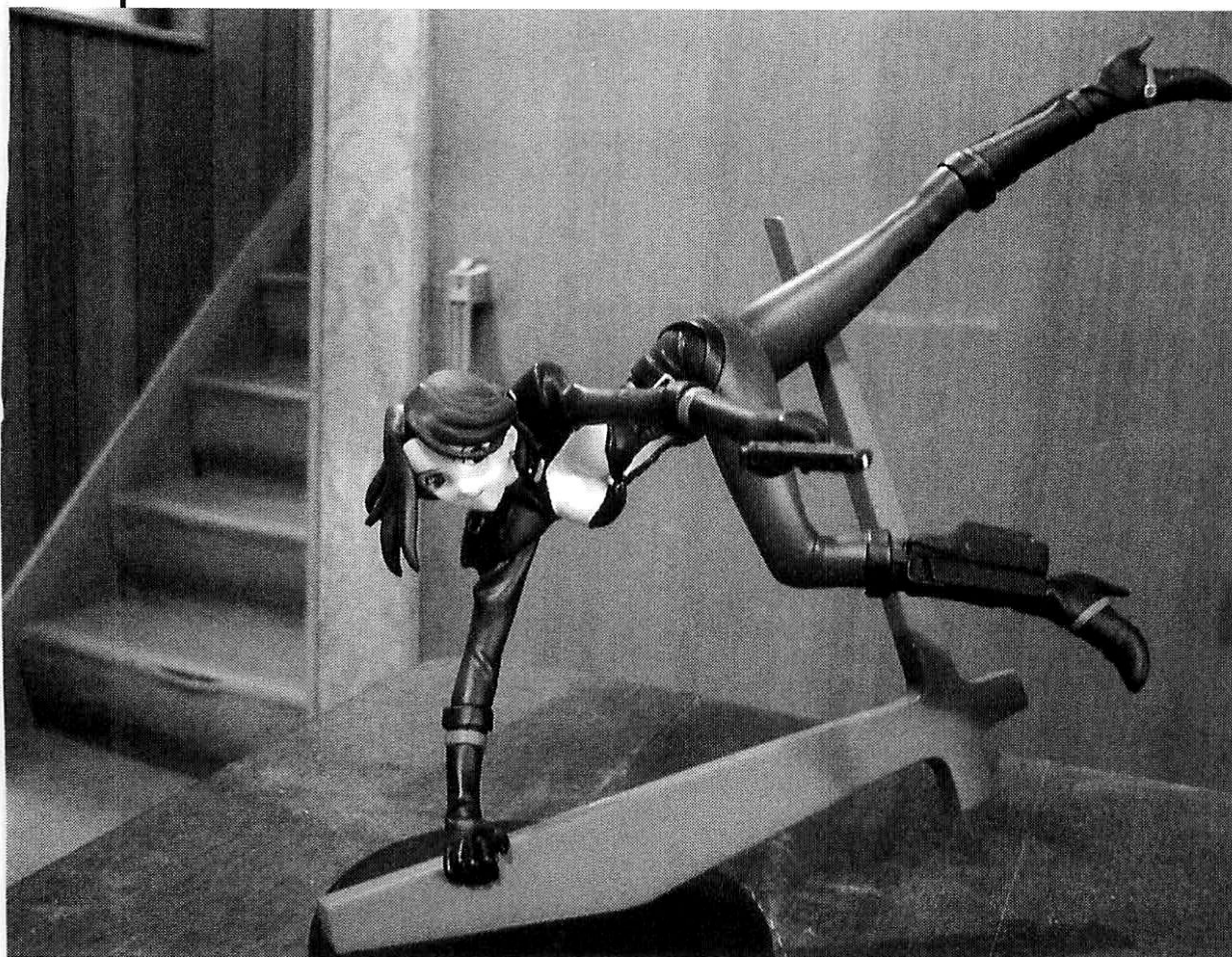
うーん、僕に聞かせられない話だったのだろうか。でも二人はつきあってないはずだし…うーんうーん。

ああ、ペレちゃん。愚かな僕を導いて…。

どう飾ればいいの？

無難なのは展示用ケースへの収納。プラスチックケースなどは階段状に配列できるものもあり、正面からどの娘も眺めることができるのでオススメだ。比較的安価で購入でき、フィギュアたちをホコリや台所油などから守れるほか、二次使用法として亀などを飼う水槽にもできるので、損な買い物にはならない。

しかし、彼女たちをケースという檻に閉じ込めて満足しているようでは、真の愛好家とは言えないぞよ？　フィギュアは持ち運びができ、平面であればどこでも設置可能。んでもって、たまにゃ頭なでなでしてあげたり、握手してあげたりと、三次元だからこそ出来ることを最大限活用すべきなのだ！

玄関に設置すれば、友達なんか連れてきた日にゃ「あら、お友達もご一緒ね、いらっしゃいませ★」と温かい出迎えの声！　ただし、その声が聞こえない友達の場合、その時点で帰ってしまうことがあるので要注意。わびしい食事を作る台所には、『To Heart』のマルチのようなメイド系フィギュアがいれば、一緒に作った感じがして、失敗した時にも「まあいっか」という心の保険になる。コンポの上には『エヴァ』のカヲル。「歌はいいねえ…」と共感してくれる。他にも、テレビの上、出窓、トイレ、本棚の余りスペース、階段、風呂…。
もうおわかりだろう、フィギュアは展示するものにあらず、一緒に住むものなのだ！

「トイレはあっちよ！」 形を利用し、説得力のある場所に置くのが展示道の第一歩。
モデルは『R.O.D』のナンシー・幕張（コトブキヤ製）

結局、亜季ちゃんとはキスできないまま帰宅した。

うーん、僕はやっぱりからかわれていたんだろうか。

でも…そもそも、亜季ちゃんは好きでもない男とキスしたりしちゃいけないんだーっ！　まず伝説の木の下で告白して、それから何度も公園やボーリング場でデートを重ねてから、やっとフレンチキスをできるステージに到達できるんだーっ！

それを、あんなふうに、オタクスキルが上昇したご褒美だとか…王様ゲームみたいに…ああっ、そんな亜季ちゃんは見たくないっ知りたくないっ！

僕は涙目になりながら、ケースからペレちゃんのドールを取り出した。

ああ、ペレちゃん。僕はどうすればいいんでしょうか。

（バカねー。男なら、さっさと亜季を押し倒しなさいよっ）

そんなことは出来ない！　一度玉砕しているのにっ……！

（じゃあ、もう一回コクり直せばいいじゃん！　フラれたら腹いせに道行く連中を虐殺してしまいなさいよっ）

ああもう、ペレちゃん、三次元では虐殺は禁止なんだよ？　もう一回告白するったって、伝説の木がどこにあるのか判らないし…それに…これだけ親しくなったのに、またコクって断られたら、もう亜季ちゃんと友達づきあいできなくなるし…あああああ。

「…ただいま、兄クン」

わっ？

誰だ、誰が僕の部屋に忍び込んで、背後に立っているんだっ？

やばい、ペレちゃんを隠蔽しなくてはっ！

僕はあわててペレちゃんドールをヴァイオリンケースの中に仕舞いこんだ。

家族にはどう隠せばいいの？

親しき仲にも礼儀あり。同士の仲でもヒミツあり。様々な理由があろうが、誰しも見られたくはないコレクションの一つや二つはある。両親と同居ならなおさらだ。となると、多くのフィギュアを隠すにはそれなりの工夫が必要。そこで良いお手本としたいのが『忍者』であり、『忍者屋敷』だ！

❶ ガシャポンはこう隠せ！

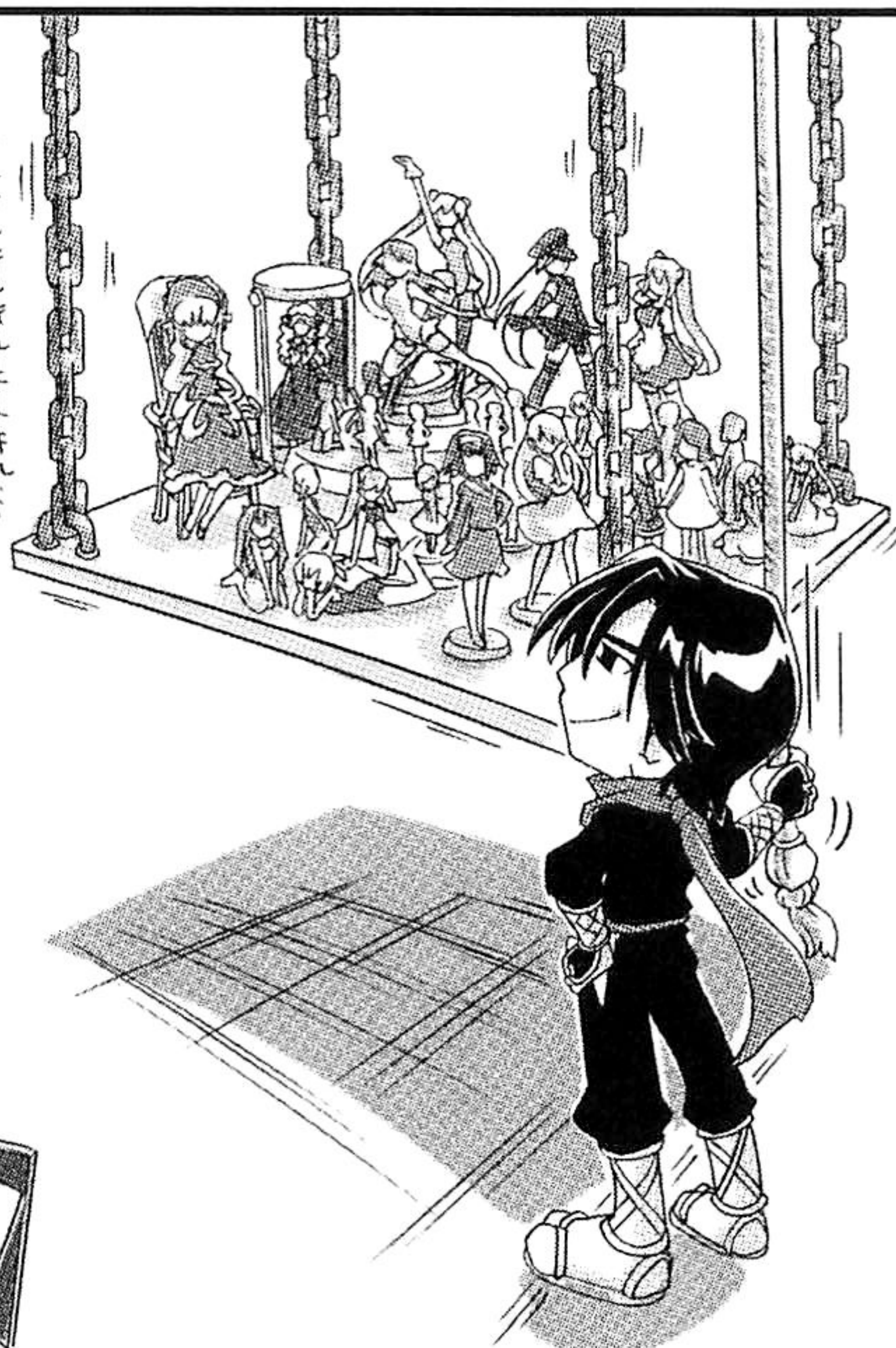
忍法「畳がえしの術」！

お母さんの気配を感じたら、畳をひっくり返して床下に隠せ！

フィギュアのために精進を怠るな！

❷ ガレキはこう隠せ！

あまり振動にさらしたくないのがガレージキット。そんな時、役立つのが「つり天井」だ。ひもをひくとキリキリと天井が下がってくる。最初からここに飾って、見たい時だけ天井をさげるというのも賢いテだぞ！

財力はフィギュアを守るために！

❸ 自分を隠せ！

数も数だと、隠すのに時間がかかる。その場合はフィギュアを隠すのではなく、コレクションの部屋から自分自身が煙りのように消えてしまえばいいのだ！

御神体を隠すのを忘れるな～（涙）

「兄クン、頭から畳を被って何をしているのさ」
「…あれっ…お前は…しぶや？　どっどうしたんだ、その格好、その口調はっ？」
しぶやのファッションが出かける前と変わってしまっている。黒いゴスロリ風味の服で身を固めている点に変わりはないが、スカートがなぜかスパッツに化けているし、上着もフリルとか一切ついていない素っ気無い薄手のシャツに化けている。そして頭にはヘンな帽子。
それに…兄クンって…何だ？
「兄クンって…それ、僕のこと？」
「そうだよ兄クン。今日からボクは、ボクっ子に変身したのさ」
「ぼ…ボクっ子…？」
そういえば、しぶやはこもるに僕の気を引く方法を教わるとか言ってたような言ってなかったような…しかし、その方法がなぜ…「ボクっ子」…？
「三次元ではまず有り得ない『ボクっ子』の妹が現れたら、兄クンは必ずや萌えると…こもる先生に教えてもらったんだよ。ふふふ」
しぶやがニヤリと笑った。ああ、見慣れたしぶやだが、こうして男の子っぽい感じに変身すると、なんだか…新鮮じゃないか！　それに…、しぶや、「いい！　ボクっ子の三次元妹、いい！　グッジョブ！」
「…やった。ツイン女に勝った…ふふふ」
相変わらず声に抑揚がないが、しぶやは喜んでいるらしい。
「さあ、それじゃあペレちゃんドールを飾るのをきりきり手伝うんだ、しぶや」
「…ああ…人形に負けてる…しくしくしく」
相変わらず声にメリハリがないが、しぶやは悲しんでいるらしい。

翌日、僕はしぶやと亜季ちゃんを連れて、ラーの神殿のフィギュアショップコーナーに突撃した。ラーの神殿には、最上階の展示ルームとは別に、地下に常に開いているガレキ・ガシャポン売り場

があるのだ。売り場が狭く、ほとんどの商品が箱入り状態なので、心眼を開いているマニアでなければ購入するのは勇気が要る。

だがしかし！

「ここは、大人買いだーっ！　今日入荷された『しりスケ』ガシャポン第二期シリーズ、箱ごと全部！　っていうか二箱くれーっ！」

「待ちなさいよ、もてる！　あんた、テレビ買ってお金ないんだからっ」

「レアものを引き当てて、かつ、保存用まで確保しておくには、これくらいの投資が必要なんだ！　明日買おうとした時に売り切れていたらどうするんだっ！」

「…兄クン…そんなに買っても、部屋に飾れないよ…ボクの部屋も狭いし…」

「って、しぶや？　なんであんた男の子の格好してるのよっ？　ボクって何よ、ボクって？」

「…教えてあげない…ふふふ…」

「もしかして、こもるがヘンなこと吹き込んだのねっ？　あの電波引きこもり野郎〜！」

大人買いってなんなの？

大人買いとは、豊富な経済力にモノをいわせ、子どもにはできない大量購入をやってのけることである！　そりゃ惚れた作品、惚れたキャラなら買うわ！　ガシャポン一つ取ったって、そのシリーズで全五種類かと思いきや、色違いのレアモノなんかもあったりするから、ちびちび買ってたらいつまでたっても集まらない。せっかく出てたら全部集めるコレクター気質なのがオタクじゃん？　なんなら観賞用と保存用もほしいわけじゃん？　しかも観賞用も二つ揃えて「わーい、双子だ双子だァ」って全作品『双恋』状態にしたいじゃん？　「双恋」に至っては「四つ恋」にしたいわけじゃん？　そりゃ「ええい、ままよ、全員集合！」となるわけであります！　変な言い方をしたら、我慢のきかない「大人気ない買い方」＝「大人買い」でもあるんだけどね。

「大人買い」は、そもそもは子どもが一つ二つ買う低価格な食玩やトレーディングカードなどをガツンと買い込むことを指したが、最近じゃ同人誌の大人買い、グッズの大人買いなど、「もともと大人向け」のものを大人買いする現象も見られる。言ってみればワンランク上がった「老人買い」である。
よく人は、大金を手にしたらなにに使うか、なんてことをウダウダ話題にしてるけど、オレに言わせりゃ愚問だ。大金とは、老人買いの決めセリフ「この棚の、全部ください!」を言うために、手にするものなのだ。

…こうして大量のフィギュアを捕獲したまではよかったのだが。

いざ部屋に帰ってみると、もうフィギュアを陳列するスペースがないことに気づいてしまった。

「…だからボクが言ったのに…くすん」

11人いる！　どうせならフィギュアでサッカーチームをつくろう！
モデルは『月詠』の葉月（ALTER製）と『新世紀エヴァンゲリオン』の綾波レイ（バンダイ製・ガシャポンHGシリーズ）

「何よこの子、指なんか咥えちゃって超かわいいじゃないっ！　…って、それどころじゃないわ！　もてる、あんたフィギュア買いすぎよっ、いくらオタクでも収支のバランスと無理のない返済プランが大切なのよっ！　目を覚ますのよっ」
「…ボク、お前に萌えられても嬉しくない…」
「あたしだって全然嬉しくないわよっ！」
うーむ。僕の部屋は元々狭いので、三七V型プラズマテレビとDVDレコーダーと多数のアニメDVDボックスと、そして何といっても約六〇センチのペレちゃんドールによって空きスペースがほとんど埋め尽くされてしまっている…。ああ、せっかく買った『しりスケ』フィギュアシリーズを、どこへ飾れば良いものやら…。
「しぶやの部屋も、スペースはないんだよなぁ」
「…ごめんね、兄クン」
「しょうがないわねぇ。あたしの部屋なら、まだ余裕あるわよ？　あたしの部屋に飾る？」
「それじゃ、観たい時に観られなくなるしなぁ」
「そんなこと、ないないない！　いつでも好きな時に鑑賞しに来てくれていいからっ！　だから、あたしの部屋にっ」
亜季ちゃんがツインテールの尻尾をぴょんぴょん飛び跳ねさせながら熱心に誘致してきた。
確かに歩いて数分の距離だし、亜季ちゃんが迷惑じゃないなら頼んでいいかな…。
「それじゃ、お願いするよ亜季ちゃん」
「任せておきなさいって！　これから引っ越し開始よー！」
亜季ちゃんが天井を指差した。

引っ越し！　フィギュアはどうするの？

引っ越しにおける究極テクニックとは、ズバリ「引っ越ししない」これに尽きる！　会社の命であれば「単身赴任などできない」と突っぱねよう。ここで重要になるのが説明の仕方だ。間違っても「フィギュア

があるから嫌です」などと凡庸な表現ではいけない。それでは「寝言は寝て言え！」と怒号の中、飛ばされるのがオチ。とにかく向こうに勘違いをさせるのだ！「神尾という女性と一緒に暮らしています。彼女は口も聞けません。耳も聞こえません。身体も…そんな彼女なので籍をいれていません。…僕はそれを願っているのですが…記憶が…彼女の記憶は…もう…」相手はレジン製のフィギュアなので喋らないし、耳も聞こえない。身体も球体関節でなければ動かない。いくらこっちが結婚したいと願っても聞いてくれないのは当たり前だ。しかし、フィギュアと自分の間に立ちはだかる〝次元の壁〟の悲しみと辛さを知っているからこそ「彼女に僕の願いは聞こえない」のであり、これは自分自身にとっても、言われた会社にとっても、実は〝真実の言葉〟になっているのだ！　自分との想い出が愛する彼女の中から消えるというのも、聞かされたほうはせつなさ炸裂。万が一、上司が『鍵っ子』だったとしても、観鈴ちんの設定を間違っている訳ではないから怒られない！　ここまで言えれば転勤命令などへっちゃらだ！

「亜季ちゃん、しぶや、各自、肩にガシャポンを乗せて、羽場邸から有明邸へ移動するように！　作戦開始っ！」

「って、なんであたしまでこんな恥ずかしいことをしなくちゃいけないのっ？　ご近所の目が、ご近所の目がっ」

「亜季ちゃん！　いいかい、ガシャポンの彼女たちだって、僕たちの家族なんだよっ？　家族を人前にさらすのが恥ずかしいなんて…君は本当に彼女たちを愛しているのかあーっ！　僕は、僕は、フィギュアを恥だと思ってるような女の子とはつきあいたくないねっ！」

「ああもう、判ったわよう。なんであたしが……くすん」

「…兄クンのためなら、ボク、我慢するよ…しくしくしく」

　こうして、僕たちは夜陰に紛れて、ガシャポン軍団のお引っ越しを開始した。ぞろぞろぞろ…。

「やーん。これって羞恥プレイじゃないのよぅ」

「ハイホー、ハイホー。ああ、僕は立派なオタク

に成長できた！　もう大丈夫だ、もうワンフェスにだって行けるし、秋葉原にだって突撃できるぞっ！　亜季ちゃん、ワンフェスも案内してねっ」
「…ワンフェスって…確か『フィギュア版コミケ』みたいなイベントだよね、兄クン」
「そーいえば、そろそろワンフェスの時期なんだっけ…でも、その…ワンフェスもいいけど、二人きりでシネコンに映画見に行かない？　夏休みなんだしぃ」
「アニメ映画が上映されたら考えるよっ！」
「いや、ハリウッド映画とか、日本の恋愛映画とか…」
「三次元女優なんか、萌えーんっ！　アニメだっ！　二次元じゃなきゃダメなんだっ！」
「ああもう、そうじゃなくて…その…デート…その…」
萌えるぜ、萌えるぜっ！
ワンフェスが僕を呼んでいるぜっ！
よしっ…デジカメを買って…ガレキを撮影して撮影して、撮影しまくってやるうっ！
「…カメコ道まっしぐらだよ、兄クン…」
「やーん！　なんで、こうなるのよーう！」

フィギュアは家族！　どうつきあえばいいの？

フィギュア達と立派な家族になった暁には、次なるステージ「お散歩」をオススメしたい。愛する家族の一員と、おなじ道を歩き、おなじ風景を見、おなじ空気を吸って会話する。これは自然な流れです。決して周囲の目を恐れることはありません。
「お散歩」をクリアした君には、「お呼ばれ」イベントを推奨する。仲間のフィギュア愛好家の家に招かれ、愛するフィギュア同士を対面させよう。愛する家族の一員に友達を作ってあげて、勝手におしゃべりさせながら、自分たちはお茶でも飲んでその様子を見守る。これも自然な流れです。この時ばかりはATフィールドを取り払って、愛するフィギュアのために一肌脱いであげましょう。

お散歩！　彼女は『カウボーイ・ビバップ』のフェイ・ヴァレンタイン（やまと製）

愛娘と記念撮影！

かくいうオレも、最初はおっかなびっくりだったけど、ある日『おねがい☆ティーチャー』のみずほ先生を友達の家に連れて行き、その友達の『うる星やつら』のラムちゃんとおしゃべりさせてみたところ、なんとみずほ先生がラムちゃんのお隣の星出身だったことが判明！　このミラクルが起こって以来、病みつきになっている。

「お散歩」、「お呼ばれ」。この二つのイベントをクリアした時、君は、あら不思議、ひきこもり生活から脱却している！　愛を注げば、フィギュアも恩返ししてくれるのだ。

にじいも
今日は絶好のワンフェス日和だな
そうですね国井さんいやー楽しくなってきましたよ
あのお二人とも…あたしともてるは別行動いいですか？
俺のために身を引こうとしてるんだね馬鹿だなぁ亜季
1ページ目から好きだった！結婚しよう！
キラーン
馬鹿はあんただ
まあまあワンフェスのことなら俺に任せてよ
お願いしますタツオさん
フガーッ!!

いいですね タツオさん
そうだな この出来には 運慶もあの世で 目を細めているよ
目をそむけて るんじゃないかと 思うんだけど
ホクホク
それじゃ 僕思い切って 買いまー
ちょっとまった もてる君は 着色できないよね？
これは買っても 色は塗られてないよ それでも買うの？
え？ そうなんですか？ いやそれだったら ちょっと今は…
マジですか？ そりゃないですよ 国井さん先に 教えてくださいよ 酷いですよ 買ってから 言うんですもん！
いやお前が 驚くなよ
うわぁああん

しかしタツオさん
こう会場内が
ペレちゃんだらけだと
見るのも大変ですね

そうか？
俺はいくらいても
いいけどな

さすがです！

とりあえず僕は
えっちなやつを…

バカやろう！
男はみんなえっち
それは認める

しかし亜季は
それに輪をかけて
ドえっちなのでした
俺の頭の中では～

何の話を
してんのよ！
何の！

だいたい
ペレちゃんが
ビローンとか
なってるの
見たいのか
お前は！
ありえないだろ！

ないからこそ
見たいです

それもそうだ

終わったー！

…っと
じゃなくて俺は
説得力のある
格好が良いんだよ
それに…

どうせなら着脱式で自分だけが見れたほうがいいだろ？

なるほど自分で脱がすんですね！

ガヤ ザワ ガヤ ザワ

ガヤッ

いやー亜季ちゃん今日は二人で来ちゃったねワンフェスに

はい 二人で来ちゃいました

…ふぅ 満足満足

ねえ アニメ会さんとも別れたことだしこれから食事でも…

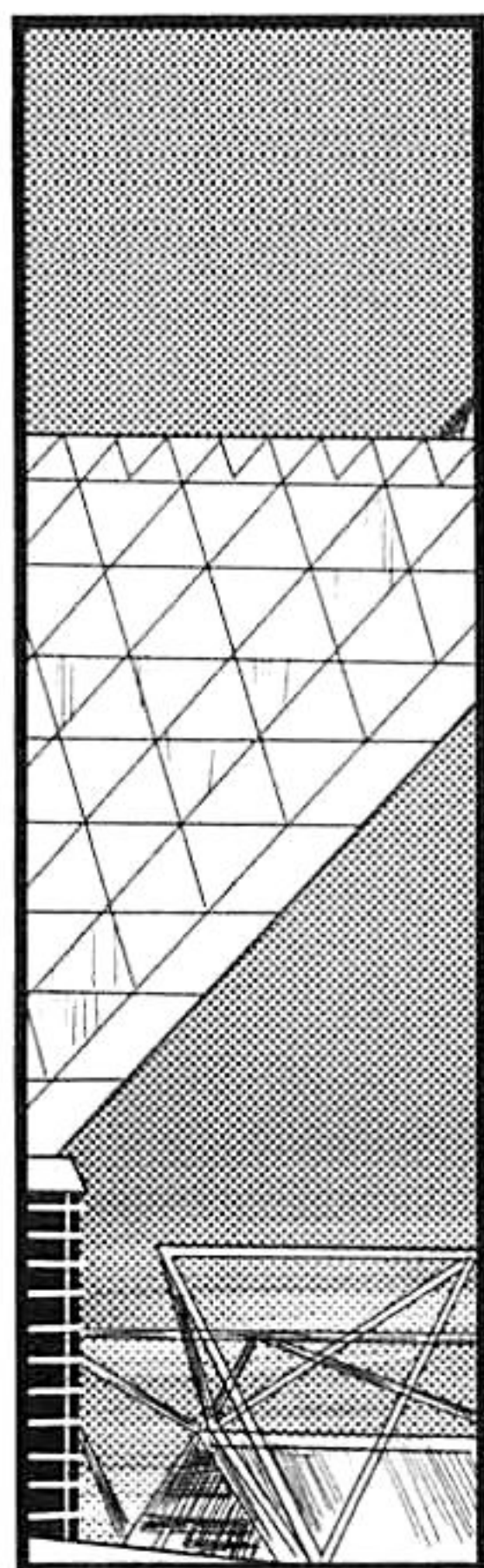
ああぁ！しまったぁ！

え？

ビクッ

見るのに夢中で写真を撮るのをすっかり忘れたぁ！

えーい こうなったらうちのフィギュアでこれからすぐに写真撮影会だ！

ちょっと そんなのいやーっ！

第5章

秋葉原教育委員会

NIJIGEN he IKIMASSHO!!

～聖地・アキバ編～

The Sacred Place "AKIBA"

気がつけば季節が一周して、春が近づいていた。光陰矢の如しとは、まさにこのこと。

しぶやが「ボクっ子」になったり、亜季ちゃんが日曜日になるとどこかへ出かけていってしまうといった不安要素も抱えてはいたが、そんな悩みに迷える僕を癒してくれたのは、例のこもるが制作した究極至高のペレちゃんドールだった。

それにしても…夏休みの間に、亜季ちゃんとオタクスポット以外の場所でもちゃんとデートしておけばよかった。二学期になってからは、亜季ちゃんは日曜日になると姿を消してしまうようになり、なかなか二人で一緒に遊べなくなってしまったのだ。平日の放課後とかはラーの神殿に一緒に通ったりしてるけど、何だか物足りないぜ。

その心の隙間を埋めてくれたのが、ああ、ペレちゃん…ペレちゃんこそは神なき世界に降臨した最後の天使、メシア、救世主、弥勒菩薩様。

「…兄クン、亜季から電話だよ」

部屋の中で最近凝っているヨガのポーズを決めていたら、半ズボン姿のしぶやが電話の子機を持ってきた。

「携帯じゃなくて、家の電話に？　珍しいなぁ。はい、もしもし」

『ちょっとあんた、携帯止まってるじゃないのよ！　何やってるのよー』

「えっ？　そうか、先月もフィギュアとDVDに有り金はたいちゃって、携帯通話料の払い込みを忘れてたかもっ？」

『んもー、お金使いすぎちゃダメよ。それより、今度の日曜日、暇？』

「えっ、日曜日？　うん、暇だよ。ラーの神殿に買い出しに行く予定だけど」

『ダメねぇ。DVDの買い出しは本来は木曜日。なぜならDVDはだいたい金曜日が発売日なんだけど、一日早くフライングで入荷されることが多いのよ。ちなみに、PCゲームの買い出しは金曜日！　日曜日じゃ、初回特典がなくなってるかもしれないでしょ？　っていうか人気作なら初回版

は確実にハケちゃってるわね』
「そうか、そうだったのか！　ありがとう亜季ちゃん、さすが僕のマスターだ！」
『そ、そういう話をしたかったんじゃなくって、次の日曜日、どうせ暇なんでしょ？　あたしとデートしなさいよ』
ええっ？
日曜日に…デート？
まさかっ…、
「だ、だって亜季ちゃん、日曜日は忙しいんじゃなかったの？」
そうなんだよ。もしかしたら、こもるとデートしてるんじゃないのか、日曜日になったらよう、などというイヤな妄想に悩まされたこともたびたびだ。そのたびに僕はペレちゃんドールに祈って懺悔したのだった。
それなのに、日曜日に亜季ちゃんとデートっ…？
『いいから、次の日曜日、朝八時に駅の改札で集合よっ！　あんたも一人前の立派なオタクに成長したから、ご褒美にあたしが秋葉原を案内してあげるわよっ。こ、断る権利はあんたには無いから、そこのところよろしく！　そ、それじゃあねっ』
ガチャッ。
ツーツーツー。
乱暴に電話を叩き切られてしまった。
言葉は乱暴だったが、しかし…秋葉原…ああ、あの、「そこへ行けばどんな妄想も叶うというよ」と言われている伝説のユートピア、秋葉原っ？
こっ…これは夢かっ？
僕はついに…秋葉原へのパスを手に入れたっ…！
「兄クン、僕も遠くから密かに見張ってるから、安心して行きなよ」
「うーん、これは夢か？　とうとう、亜季ちゃんにオタクとして認めてもらえる日が来たということなのか…！　ということは、秋葉原にはもしかして…あの伝説の木がっ？　二人の関係はついにルート入り確定っ？　後はエンディングまで一直線っ？」

「もしかしたら、妹ルートに分岐するかもしれないよ」
ああ、とうとう秋葉原だ。
な、長かった…途中から手段と目的が転倒して本来の目的（亜季ちゃんとつきあう）を忘れかけていたような気もするが、少なくとも途中までは必死で努力していたんだよなぁ。ＤＶＤレコーダーの操作方法が全然判らなかったり、プラズマテレビが目玉飛び出すほど高価だったり…いろんな苦難があった…まぁ途中からは楽しくて夢中になっていたような気がするが、とにかく、僕のオタク修行は終わった。後は、秋葉原で実力を試すだけなのだ。
本当に、人類の新たなる聖地・秋葉原への巡礼を許可されただなんて…。
僕はその夜、興奮してあまり眠れなかったのだった。

翌朝。

「とりあえず黒づくめの服で固めて、通常の三倍大きなリュックサックを装備してと…携帯は復活させたし、ｉＰｏｄの充電も完了、と…そうだ、購入したドラマＣＤをすぐ聞けるようにモバイルＰＣも持って行こう。よし、これで完璧だ」
アキバ初心者ゆえの悲しさ、準備万端すぎて「津山三〇人殺し事件」の犯人みたく重装備した僕は、がちがちに緊張しながら駅へ向かった。
すると、なぜかしぶやが先回りして改札口の前に立っているではないか。
「兄クン、おはよう。ふふふ…」
「ふふふ、じゃないだろ！　遠くから見守ってるんじゃなかったのか？」
「…ボク、秋葉原に行ったことないから、迷子になりそうで怖くて…渋谷や原宿なら詳しいんだけど…」
「しょうがないなあ。おのぼりさんのしぶやを秋葉原に捨て置くのも心配だから、ついてきてもいいぞ」

「ありがとう、兄クン！」
「そういえばお前、いつまでボクっ子キャラを続けるんだ？」
「…なんとなくハマっちゃって…本当の自分をやっと見つけた、って感じ？」
「そんな不思議キャラじゃ、オタクしか寄り付いてこなくなるぞ」
「…兄クンが喜んでくれるなら構わないさ、ふふふ…」
　兄のオタク化を阻止するとか言ってたのに、自分がドロドロのオタクになってどうする。…まぁ、かわいいから、いいや。確かにしぶやは、ボクっ子が異常なほどに似合っている。キャラクターの見立てまで完璧とは、中野こもる、恐るべし。
　でも、今まで亜季ちゃんが日曜日になる度に消えていたのは、やっぱり…こもると会っていたのかなぁ…いやいや、いずれにしても、亜季ちゃんは今日こそボクをアキバにいざなってくれるんだ。
　そして、伝説の木の下でついに…、
「はーっはっはっ、今、僕のことを考えていたねっ？　もてる君！」
　中野こもるが現れた！
「って、どうしてお前がここにっ？」
「…師匠、おはようございます」
「亜季とはアキバで現地合流なんだよっ、彼女は午前中忙しいからねっ。というわけで、午前の間はこの僕が君のアキバガイドになってあげようっ！　喜びたまえ、はーっはっはっはっはっ」
「喜べるかっ！　ああああっ、何か話がうまく行き過ぎると思ったら…デートじゃないじゃんっ！くそっ、もう三次元の女なんか信用できねえっ！」
「そう言わずに、これが最後の試練だから頑張りたまえ。オタクの星は、もう目の前さっ！　はーっはっはっはっ」
「ああああ、悪夢だ、悪夢だああっ。まさか、こもるエンディングが待ち受けているんじゃないだろうなっ？」
「それは、『もてる君、僕たちいつまでも友達だよ

ね？』って感じのエンディングかな？　はーっはっはっはっ」
「あああああ…もうダメだ、もう生きていられないっ……」
「…兄クン、ファイト。それじゃ、レッツゴー……」
こうして僕たち三人は、地上に遺された最後の楽園、伝説の桃源郷、オタクの神さまから与えられた約束の地、聖地秋葉原へ向かったのだった。
あああ、なぜだ、どうして現れてくれないんだ、亜季ちゃん。
いや、遅れるのはいいとして、なぜに、なぜに中野こもるを遣わしたりするんだっ……。

いざアキバ！　ってどこに行けばいいの？

秋葉原へようこそ！　少年、アキバは初めて？　まかせなさい！　僕が初心者のためのガイドを買って出てしんぜよう。まず電気街口改札を出たら左折、ちらし配りのメイドさんをチェキ！　ガン見しつつエスカレーターでラジオ会館、二階のコトブキヤへ。でも買い物はだめ！　かさばるフィギュアは終盤に回そう。あくまで新製品チェキのみ。ハピコロ玩具経由で階段を降りて外へ。向かいのゲーマーズに入店。魅力的な新刊、そしてオリジナル特典チェキに努めよ！　買い物はまだ我慢だ。

二次元と三次元が渾然と一体化した街、それがアキバだ！
モデル／きこうでんみさ さん

いよいよ中央通りへ！　右折したら信号待ちの間を利用してメディアランドでゲームの値段をチェキ。信号を渡りメロンブックスで新刊同人誌をチェキ！　交差点から反対側に渡りとらのあな、アニメイトへ。アニメイトでは萌え系グッズもいいけど、イベント情報も要チェキだ！　次はコスパへ！　一階がガチャポン会館なのでガチャれ！　新作Tシャツに着替えたら自慢げにメッセサンオーを全館回る！　地下のメッセ同人館からエレベーターで最上階へ。このビルは狭いながらもレンタルショーケースやコトブキヤ、イエサブなどが詰まったプチラジオ会館とも言える穴場なのだ。
　こっからはリミッター解除！　買え！　買え！　買え！　メモを片手に！　終わったら裏通りに入り、あきばおーでメディアを買って駅前に。帰るかと思いきやラジオ会館へリターン、Kブックスで締め！　これで君もアキバ六級認定だ！

「こっ…これが…秋葉原っ…？」
　くらーいキモチで駅に降り立った僕だったが、改札口を降りた瞬間から、瞳孔は開きっぱなし。心臓の鼓動もやばい状態。まるでドーピングしすぎた格闘家のような有様（ありさま）になってしまった。
　ありえねえ！
　ラーの神殿よりも巨大なオタクビルが無数に乱立しているううっ？
　あっちにソフマップ、こっちにゲーマーズ、あそこにはとらのあな…メロンブックスにメッセサンオー…いずれも、ネットの中だけで見聞きしていた「伝説の店舗」ばかり！　とてもじゃないが、全部は回れんっ！
　そして、そして、改札のまん前には、あの「バベルの塔」と肩を並べる神話伝説上の建造物「ラジオ会館」の巨大な電飾看板があっ！
「なんじゃあ、こりゃああっ？　本当に日本なのか、ここはっ…まさに夢っ！　夢の街っ！　それにしても人が多いな…」
「…兄クン、迷子になりそうだから手、繋いでていい？」
「しょうがないな、ほら、手…こんなに混んでる

なんて思ってなかったな…」
「…ラッキー。このまま妹エンディングに…ふふふ…」
だから、妹エンディングなんて三次元には無いんだってば。しぶや。
「はーっはっはっはっ、流石だ、もてる君！　秋葉原初登板に、いきなり三次元の妹を同伴するとはねっ！　君こそまさに選ばれしオタクだっ！　さあ、僕がアキバのメインストリートを案内してあげようじゃないかっ」
「亜季ちゃんは～？」
「もう少し待ちたまえ。さあさあ、日曜日のアキバは歩行者天国だからね、気にせず車道を突き進むとしよう！　このあたりは『ナースウィッチ小麦ちゃん マジカルて』の第一話で八頭身モナーが暴れた観光名所なのさっ」
「おお、確かに！　高架の上を、黄色い総武線の車両が走っているうっ！　ああ、ここでコピペ光線が飛び交ったのか…」
「…兄クン、いつの間にそんなアニメまで…」
「あれっ、車道の真ん中で大道芸をやっている人がいるっ？　おおっ、ドールだ、ドールを操っているっ！」
謎の巨漢外国人が、踊りながら小さな人形をくるくると動かしている。どうやって操っているのか、よく判らない。
「ラヴィーッ、ラヴィーッ」
さかんに手を振り振りしているので、多分、手から糸が出ているんだと思うが…見えないなあ。
「よろしくお願いしますー」
今度は、いきなりメイドさんにチラシを手渡された。と思いきや、
「今日から妹喫茶、オープンでーす」
と見知らぬ妹さんに声をかけられた。
凄い。異世界。二次元の妄想がそのまま三次元に飛び出してきたかのような世界だ。恐るべし秋葉原。
まさしく、「開け、夢の扉！」って奴だ。

日曜日のアキバは特別なの？

秋葉原で事件発生！　中央通りis バーニング！　毎週日曜日、万世橋から蔵前橋通りの交差点までの間、俗に言う電気街は歩行者天国になる。それ自体は以前からだが、去年くらいから増えたアキバ系パフォーマー、そしてそれ目当ての観光客で物凄い人出になっている。それゆえトラブルも多い。少年どこだ～って、いた！　チラシ配りのメイドさんに圧倒され失神してる！　確かに今やメイドさんの数が歩行者の数完全に越えてるけど！　こっちではコスプレ少女が縄張り争いの騎馬戦を！　馬役のカメコさんが酸欠で倒れた！　こら、少年！　写メしてる場合か！　撮影は基本オッケーと思っていいけど必ず一声かけな！　さもないと…（ぎゃー！）言ってるそばから盗撮犯が秋葉原ガーディアンエンジェルズによって捕まった。彼女たちの制裁は非情だぞ。犯人はまずDOAの白霞（C2VER）のコスプレをさせられ、盗撮デジカメに上書き撮影。さらに肌色の部分に熱々のおでん缶を押し付けられたあげく、最後はラジオ会館に磔の刑だ！　これはアダム？　いやリリスか！　ああ、今度はどさくさにまぎれ、面白がってオタクを撮影してゲラゲラ笑ってたバカップルが捕まった！

歩行者天国では思い思いのパフォーマンスが見られるぞ。モデル／FICE さん

しばらく往来をゆっくり進みながら楽しんでいると、こちらをクスクス笑いながら携帯で撮影しているDQN(ドキュン)系のバカップルを発見した。
「あの男、完全なA-BOYだよ、A-BOY」
くっ…なんだあいつら、オタクを笑いものにするためだけにアキバまで来たのか？　なんて暇な奴らだ！　自分自身の趣味に情熱を捧げる覚悟がないから、他人を笑いものにしていい気分になろうなんて愚かなことを考えるんだ…！
ああ、そうだ。これは、去年までの僕だ、僕自身の姿だっ…！　僕はあんな恥知らずな心根で、恐れ多くも亜季ちゃんに迫ろうとしていたのか…そうだよ、亜季ちゃんは見た目かわいいから、オタク趣味やめさせれば超最高じゃん、とか考えてたんだっ…ああっ、自分が恥ずかしいっ…きっと亜季ちゃん、深く傷ついただろうなぁ…それなのに、僕なんかと仲良くしてくれるなんて…。
やはり亜季ちゃんは、僕をまだ信用してくれていないんだろうか…。
そりゃそうだ。あんな前歴があるんじゃあ…ううっ…。
「何あの子。男装して兄クンとか言ってるよ、きもーい。くすくす」
…いや、ちょっと待て。
僕はいい。しかし、僕はともかく、しぶやまで笑いものにするとは…、
ゆ…許せねぇ！
「お前ら！　妹をバカにするんじゃねぇ！」
ああ、しぶやが笑われてると思ったら久々にDQN回路が発動してしまった。やばい。僕、もしかして三次元妹属性なのか。そうなのか。
「兄クン、ダメだよ。アキバで暴れたら、オタクのみんなの迷惑になるよ…くすん」
「ちょ。まじ妹？　何こいつら、きんもーっ☆！」
「プギャーッ！」
ダメだダメだ、乙女回路をフル稼働させて落ち着かないとっ…亜季ちゃんだって待ってるしっ…ああでももう、もはや我慢ならんっ！　他人をバ

カにしなきゃ不安で生きられないようなふざけた奴には、夢の街・秋葉原に来る資格はないっ！
ゆるせ、しぶや…ごめん、亜季ちゃん…！
僕は今こそ、アキバを守る鬼になりますっ！
ちぇすとーっ！
バカップルに突撃しかけた僕の背中を、むんずと猫の手が掴んで押しとどめた。
「もてる君、はやまっちゃいかん！　ここは、私に任せておきたまえっ！」
振り向くと、なぜかラー店長が立っているではないか。
もしかして仕事回りですか、それとも趣味の買い出しですか、店長っ？
「なに、この猫？」
「な、なんかやばそうだから、行こうぜ」
「そうは行かんっ、罪も無いアキバ系オタクを笑いものにした貴様らの諸行、言語道断！　この暴れん坊猫侍が、成敗してくれる！　こう見えても私は大金持ちなのでこの程度の乱暴狼藉(らんぼうろうぜき)はもみ消せるのだ、わーっはっはっはっ」
「ぎゃーっ！　猫暴力反対っ！」
「猫ならば、何をしても良いのだ！　天誅っ！」
「ひーっ、お助けーっ！」
バカップルはラー店長に追いかけられて、逃げ出していった。
しかし、何をしに来ていたんだ、あの店長…？
「危なかったね、兄クン。あんなのの相手してちゃダメだよ」
「わ、悪かった。お前まで笑われてるのを見て、つい…」
「…ぽっ…兄クン…それじゃ、いよいよ妹エンディングだねっ！」
「だから、三次元に妹エンディングは無いんだってばっ」
「…ちっ」
あれ？　…こもるの姿が見えないな…。
こんな往来に放置されたら、この後どうすればいいのか判らなくなってしまうよ。おろおろ。

「兄クン、師匠からことづけが…先に、指定した
メイド喫茶に入っておけって。地図を貰ったから、
順路を守ってお店に入ろうよ」
「わざわざ指定してくれるなんて、さすがだな」
「っていうか人の多い日曜日だから、有名店には

あらかじめ予約しておかないと入れないんだよ」
「へえええええーー。四二へぇ」
こうして僕としぶやは、ついに本場・秋葉原の
メイド喫茶に足を踏み入れたのだった！
そこで僕たちは、驚愕（きょうがく）の事態に遭遇する！

A-BOYだって!? 正直オタクはどう思っているの？

アキバ系の若者を指す「A-BOY」という言葉がある。ヒップホップ系の若者を指す「B-BOY」のもじりだが、近年の萌えブームの最中に一般サイドから押し付けられたこの呼び名は、どちらかといえば蔑称だ。まあ度量の広いオタクたちは、それも一つのネタとして楽しんでいる部分もあるし、「オタク」や「腐女子」も、元々はオタクが自らを自嘲する呼び名だったのだから（「オタク」はエッセイストの中森明夫氏が作った造語）全然動じる必要も無い。俺らオタクの中で「オタク」は年月を重ねるうちに一種の称号になっていったのだ。

思い返してみてくれ。一般人が得意げに「俺ってオタクだからさあ」とか言うのを聞くと、無性に腹が立ってこないか？　だいたい俺らにとって「オタク」とは、「たとえ他人に後ろ指さされても趣味に生きる覚悟の称号」に他ならないのだ。そんな覚悟もない奴が軽い気持ちで名乗っていいものじゃないのだ！

もしかしたら「A-BOY」という蔑称も、何年後かは一般人が得意げに「俺ってA-BOYだからさあ」と、ちょっとオサレな肩書きとしてこの言葉を使っているかもしれない。冗談じゃないってんだ！　その時は俺がまた「『A-BOY』とは覚悟もない奴が軽い気持ちで名乗っていいものじゃない」という原稿を書いてやる！

「お帰りなさいませ、御主人様〜。…って、もてる…っ？　ななな、なんで、あんたがここにっ？」
ズガガガーン！
なぜ…なぜ、亜季ちゃんがメイドさんになっているんだっ？
露出度は低いけど、そういう問題じゃない！　亜季ちゃんがメイドさん、亜季ちゃんがメイドさん…メイドさんが亜季ちゃん…、
ぎゃーっ！
パッションっ！　銀河が裂けた、宇宙が泣いた！　どこまでも萌えろよ僕の心、マックス・ハァート！　スプラッシュ・スターッ！
えっ…えいどりあーーーんっ！〈壊れた〉
「ちょ、ちょっと、何じろじろ見てるのよっ？」
やばい。絶対領域を思わず覗き込んでしまったっ！　わーっ、僕のバカーっ！　この目が、この目が勝手にいっ！
「こもるに言われて、ここに来たんだけど…」
「あんのバカ、あたしがバイト終わってから合流する予定だったのにぃ…ううう、恥ずかしい〜」
「…亜季お姉ちゃん、かわいい…ぽっ…」
「もてるならともかく、妹に萌えられても嬉しくないっ！」
「…相変わらず、口は悪い…しゅん」
「いや、本当にかわいいよ！　もっと早く教えてくれたら、毎日でも見に来たのに」
「じょ、冗談じゃないわよ！　はっ、恥ずかしいじゃないのよっ！　いいから、さっさと席に座りなさいよっ！」
無理やり亜季ちゃんに腕を引っ張られて、着席させられた。
周囲のお客さんに見られたら亜季ちゃんが困るんじゃないかと少し心配になったが、よく見ると店内には僕ら以外誰もいない。他の席も全部「予約席」としてキープされていて、そして、どの席にも僕ら以外には誰も座っていない。
「こ、これは一体…？　もしかして、貸し切り状態？　でも、どうして」

「あたしに言われても知らないわよ。いいから、さっさと注文しなさいよ！」
「…御主人様になんて無礼な態度…メイド失格…」
「あああ、判ったわよ！　ご注文は何になさいますか、御主人様？（愛らしい笑顔）」
ドギューム。（心臓が萌え弾丸に撃ちぬかれた音）
亜季ちゃんが、僕のことを、御主人様…、
「って、無限ループで回想するなっ！」
「日頃さんざん虐待されているから、凄まじいギャップでもう萌え死にそうだよ…あうっ鼻血が…」
「…兄クン、それ、萌えてるというより、興奮してるだけ…」
「んもぅ…はい、氷水。あと、二人とも注文はアイスウーロン茶でいい？　紅茶とか入れるの面倒なのよね」
他に誰もいないことに気づいたためか、亜季ちゃんも通常のタメ口モードに戻ってきた。それどころか、よっこらせ、と僕の隣の椅子に座ってきたではないか。も、もうちょっとメイドさんモードでいてほしかったかなぁ。…でもまぁ、やっぱり亜季ちゃんはこうでなくっちゃ。
「もしかして亜季ちゃん、日曜日になるといなくなっていたのは…このメイド喫茶でアルバイトしていたからなの？」
「ま、まぁね…恥ずかしいから、ナイショにしておきたかったんだけど…このお店って時給いいし、メイドさんのコスプレもできるしぃ…」
なーんだ。
僕はてっきり、こもるとデートしているのかと…冷静に考えたら、そんなわけないよな。恋する男って疑心暗鬼になっちゃうものなのねっ。
ああ、自暴自棄にならなくてよかった…。

「でも、アルバイトなら近場の喫茶店でもいいじゃないか。安いけど。もしかして…そんなにお金に困ってるの？」
「そっそういうわけじゃないのよっ、あわあわ」
慌てた亜季ちゃんは、ツインテールの尻尾をぶんぶん振りはじめた。
と、そこに、妙にカン高い例の笑い声が。
「はーっはっはっはっ。よくぞ、数々の試練を突破してこの最終ゴール地点に辿りついた！　今、我々の戦いは終わった！」
「って、ラー店長っ？」
なぜ、この店にラー店長がっ？
恐るべきどんでん返しっ…！
僕は考えた。必死で考えた。これはいったいどういうことなのか。
そして…結論が出た。
謎は全て解けた。
「そうか！…この店も、ラーの神殿の系列店だったんだあっ！」
「違うっ！　そーじゃないでしょっ！」
「…兄クン、もしかして…バカ…？」
「はーっはっはっはっ。この猫のお面を外してみせれば、もてる君にも何が起こっているかが理解できるのではないかな」
ラー店長が、自らの猫のお面をついに取り外したっ！
…店長の素顔は…、
「ああっ、その銀縁メガネは…中野こもるじゃないかっ？」
「はーっはっはっはっ、やっと判ったかね」
「で、なんで店長の格好してるの？　もしかしてお前もアルバイト？」
「兄貴、こいつバカなのよ、正真正銘のバカなのよっ！」
「…兄クン、クライマックスなのにちっとも話が進まないよ…くすん」
まあ、そういうな、しぶや。
…って、兄貴？

誰が、誰の？

「はーっはっはっ。実は亜季は、僕の妹なんだYO！　そして僕は、ずっと中野こもるとラー店長の二重生活をしていたってわけさ！」

「…学校にも行かずに、オタクショップ経営だなんて…終わってるわ、兄貴。しかも、客に顔をさらすのが怖いから、店では常に全身着ぐるみ…」

「はーっはっはっ。そう誉めるな、妹よ」

「誉めてないっ」

えええっ？

なっ…、

なんだってーっ？

「すげえ、ラーの神殿の店長と、天才オタク作家中野こもるが同一人物っ？　どこまで凄いオタクなんだあっ？　マジすげえ！　あんた本当にアキバのレオナルド・ダ・ヴィンチだよっ！」

ぎゅーっ。

亜季ちゃんのツインテールで、首を絞められた。

「そっちかっ！　そっちで驚くのかっ」

「ぐえーっ！」

メイド喫茶！　ツウはどう楽しむの？

今日はライバルに差をつけるワンランク上の楽しみ方を伝授しよう！　まずはお店選び。ご主人さまたるものガイドブックやテレビなんかチェックしてはいけない。我々はあくまでメイドさんにご奉仕される側。まず電気街改札前でメイドさんのお迎えを待とう。待ち合わせ？　そんなことするか！　なので時には終電まで佇むこともありだ。だからこそ運良くチラシ配りのメイドさんがやってきた時の感激もひとしおなのだ！　だが安心するのはまだ早い。そのメイドが本物なのかよく確認しよう。もしも暗黒メイドだった場合、変なイルカの絵を高額で売りつけられる事が多々あるからだ！　チェックがすんだならお待たせ、メイド喫茶へ行こう。

「おかえりなさいませご主人さま。」ここで注意！　席選びも重要だ！　常にメイドさんが視界に入る席を

確保。独占しやすいカウンターなら尚良し。メニューは開かずメイドさんのおすすめを注文。メイドさんが背を向けたら即寝たふりだ！　「ご主人さま～起きてください～」メイドさんに起こしてもらうシーンが再現できるぞ。時には起きた拍子に紅茶をこぼされる、ドジコンボも誘発できる。存在感をアピールできたら長居は無用！　最後の演出として、わざとテーブルに手袋を置き忘れて帰ろう。そう、『エマ』作戦だ！　店の外まで「ご主人さま～忘れ物ですよ～」と届けにきてくれたら、そこは一〇〇点のメイド喫茶。君の大切なお店になるのは間違いないぞ。

メイド喫茶の進化形、妹喫茶も登場している！　要チェックだ!!　モデル／妹系カフェ『NAGOMI』のるなさん（右）と空夏さん（左）

秋葉原基礎応用編

「あっ、もうアガリの時間…あ、あたしはロッカーで着替えなくちゃいけないけど…こもる、二人に余計なこと喋ったら殺すからねっ！」

亜季ちゃんは（大丈夫かしら）と不安げにこっ

ちをちらちら覗きながら、ロッカールームに消えていった。
余計なことというのは、いったい？
「じゃ、亜季も消えたし、さっそく洗いざらい喋ってしまおうか、はーっはっはっはっ」
「…いい根性だね、師匠…」
「余計なことというのは…ああ、亜季ちゃんの家庭事情？」
「そうそう、うちの両親はかなり昔に離婚してしまってね。僕は母方に、亜季は父方に引き取られて離れ離れになったんだよ。でもまあ、家も近いししょっちゅう会ってるから別に問題ないけどねっ。ちなみに実妹だからフラグは立たないのさっ」
そうかあ、三次元には実の兄妹の間にフラグは成立しないってルールがあるもんな。な、なんだあ…兄妹なら、さっさと教えてくれれば、余計な心配しなくて済んだのに…がっくし。
「でも、なぜ秘密にしていたんだ？　初対面の時には亜季ちゃんをキープだとか言って僕を煽（あお）ってたし…？」
「あ、そうそう。うちの家庭事情のことなんかどうでもいいんだ、そっちの話が本筋なんだよ。亜季が僕を兄だと言わなかったのは、こんな引きこもりの着ぐるみマニアの変人が自分の兄だなんて、もてる君に知られたくなかったからさっ。亜季は照れ屋さんだからね、はーっはっはっはっ」
「…笑顔でその自爆的な台詞、さすがです師匠」
「まあ、それもあるけど、実は僕から亜季に『僕の正体をもてる君に教えてはいけない、彼をオタクとして鍛えるために僕は敢えて悪役ライバルを演じてみせよう』と提案したというのもあってね。はーっはっはっは」
「つ…つまり…亜季ちゃんには強力なオタクの恋敵・中野こもるがいる、と思わせることで、僕のオタク修行への動機付けを強固なものにしようと？　…あっ…ありがとうございまするっ！　お陰で、短期間でオタクの階段を昇りまくることができました！」

「『超絶倫人ベラボーマン』におけるブラックベラボーマンの役をロールプレイしたのさ、はーっはっはっはっ」
やべえ、それ知らない。ああ、まだオタク道は、果てしなし……！
いやあ、そうだったのか。
ん…でも？
「いったい、いつから僕が亜季ちゃんに迫ってることを知ってたんだ？　っていうか、最初に亜季ちゃんに告白した後、すぐにラーの神殿に連れて行ってもらってたから…あの時にはもうすでにラー店長と会っていた…そうか、コクってすぐに兄貴に相談してたのか、亜季ちゃんは」
ってことは、最初から亜季ちゃんも僕がオタクになりさえすれば、つきあってくれるつもりだったのかな。やばい、今僕は猛烈に感動している。じーん、と。最初の頃はツンツンがみがみ酷い態度だったけど、実は最初からフラグは立っていたんだ…！　ああ、亜季ちゃん…！
「いや、実はそれ以前から、亜季は君のことが好きだったんだよ。ところが亜季は、オタク男子以外とは全くつきあえない性格になってしまっていたから、僕は密かに『羽場もてるオタク化計画』を練っていたのさっ。その途中で君のほうからいきなり亜季に告白してきたものだから、亜季も僕も大慌てだったよっ！」
「えええええっ」
あっ…亜季ちゃんが…、前から、僕のことをっ？
やべえ。超ツンデレ。ますますハートにズギューンと萌える弾丸が撃ち込まれちまったよ。ああ、亜季ちゃん…！
「…それじゃ、どうして、あんなツンツンな態度で、ハードなオタク修行を僕に課したんだろう」
「一応よかったねっ、兄クン。しくしくしく」
しぶや、なぜそこでゲームオーバーみたいな顔をする。
「亜季は子供の頃から、とにかく見た目がかわい

かっただろう？　だから顔に一目惚れした男の子たちに、さんざん迫られ続けていたのさ。でも、亜季がドロドロの腐女子(ふじょし)でカップリングの組み合わせのことばかり話す女の子だと判ると、ほとんどの男は退いてしまって亜季の前から消えていった…」

　そりゃそうだよなあ。僕だっていきなりやおい話をあのマシンガン口調でぶっぱなされたら、退いたかも…い、いや、僕は耐えたかもしれない。でも、いきなりやおいはハードル高いよなぁ。

「しかし、高校に入ってすぐ…亜季が腐女子でも構わない、と言ってくれた男の子が現れてね。そいつはB系で亜季とは全然趣味があわないタイプだったんだけど、それでも亜季は『兄貴、聞いて聞いて！　やっとあたしの顔じゃなくて中身を好きになってくれる男の子が現れたのよ！』と、とてもとても喜んでいたものさ。ところが、最初のデートを翌日に控えた放課後、亜季は偶然立ち聞きしてしまったんだ。その男が、友達に『あいつ頭の中ドロドロのオタクでキモいけど、顔と身体だけはいいからなー、適当に話あわせてさっさと処女いただいちまうわ』って笑いながら自慢しているところを。…それから亜季は、男性恐怖症になってしまい…」

「…亜季お姉ちゃん、かわいそう。しくしく…」

「…ひっ…酷い話だ…亜季ちゃんが、かわいそうだ…ああでも、僕だって人のこと言えないかも…ああああ…」

　僕は乙女回路を亜季ちゃんのキモチにシンクロさせてしまった。ずきずきと胸が痛んだ。

「まあ、その男は亜季に手を出す前にラー店長の天誅を受けて裁かれたんだがね」

　おお、良い兄さんだ。でも…まさか、埋めたりしてないだろうな。

「で、その後、亜季は、クラスメイトの君のことを好きになってしまった」

「うーん。僕、何か亜季ちゃんの好感度を上げるようなイベント、起こしてたかなぁ」

「…兄クンが良いことをしている姿…思いつかない…」

しぶや、思いつけよ。

いや、僕もまったく思いつかないが。

「普段はいいかげんで軽い奴なのに、妹にはとても優しくしてあげている姿に惚れたそうだ。妹が廊下で不良に絡まれている時に、一目散に突撃していった姿がかっこよかったとか何とか」

「…兄クンに悪い虫がつかないように周りをうろうろしてたのがやぶ蛇になってしまったなんて…しくしく…」

そ、そんなことあったっけ?

しぶやのことになると何も考えずに行動してるから、記憶にない。

うわーっ、恥ずかしい。

「しかし君もまた、見た目はあの男と同じ非オタのB系でチャラチャラしたDQNっぽい男の子だった。趣味もアキバ系とは正反対。どうしよう…と亜季は悩んだ。好きだけど、またやおい趣味を否定されて嫌われるのが怖い。口では気にしないと言われても、本心は身体目当てだったりしたらもっと怖い。悩む亜季を救うために、僕は『羽場もてるオタク化計画』を提案したわけさ。そんな時に、君のほうから亜季に告白してきたわけさ。亜季は『嬉しいけど、でも、興味の無い彼を無理やりオタク趣味につきあわせるなんて、できない』と戸惑ったが、僕はこう言って亜季をアジってけしかけた。『本当に彼が君のことを好きなら、喜んでオタク趣味を共有してくれるはずさ! 何も気にすることはない!』とね。はーっはっはっはっ。その後の展開は、君も知っての通りだ」

そ…そうだったのか…亜季ちゃん、そんな悲しい思い出が…それなのに、オタクでもなんでもない僕を好きになってくれたのかっ…うわあああああんっ。

「というわけで、君は僕の与えた試練を全て乗り越えて、ついに秋葉原にゴールインした! いまや君はドールと二次元で脳内会話する力を身につ

けた最強のオタクだ！　この僕を超えるハイレベルのオタクになった君こそ、亜季の彼氏に相応しいっ！　はい、これが駅前秋葉原留学コースの合格証書だ。授業料は月末までにきちんと振り込んでくれたまえよ、はーっはっはっはっ」

　ちっ。授業料はしっかり徴収されるのね。まあ、さんざんアニメ会の世話になったし、しょうがないか。この授業料がアニメ会の手に渡り、秋葉原のグッズへと還元されていくのだ。ああ、素晴らしきかな、オタク経済。まるでガンジス河の如き無限の営み、永遠の輪廻。

「でも…やおい話って、全然していなかったよ、亜季ちゃんは。男の子向けのオタク話ばかりだったよ」

「それは、亜季のほうも無理してオタク男の趣味を勉強して君にあわせていたからさ。いきなり男の子にやおいはハードルが高いので、萌えとかそっち系の男の子ワールドを君に覚えさせると亜季が言い出してね。だから、実は彼女もほとんど一から男の子オタクの世界を勉強していたんだよ、君が修行している影で」

　じーん。どこまで僕を泣かせれば気が済むんですかっ、亜季ちゃんはっ…そうか、僕は一人じゃなかったのか…！

「あと、二学期から日曜日ごとにメイド喫茶でアルバイトしていたのは、君にデジタルチューナー入りのDVDレコーダーをプレゼントするためさ。あれは全額ローン払いだったんでね」

「えっ？　あれって、使い古しのゴミじゃなかったの？」

「まさか。あれは売値二〇万円の超高級最新型だったのだよ、はーっはっはっはっ。オタク修行に入門した君のために、亜季が一番使い勝手の良いフラグシップモデルを一二回分割ローンで買ったのさっ。亜季の家は家計が苦しいから現金を用意できなかったんだね」

　ドギューン…！

　ああもうダメだ。立っていられない。

亜季ちゃん、いぢらしいっ…なんて良い子なんだっ…！

あんな良い子が、僕なんかを好きにっ…。どこの萌え話ですか、これはっ？

いけねえ。僕なんかに、亜季ちゃんの彼氏になる資格なんか無い。いけねえよ！

「あっ…兄クン、どこへ」

「も、もう、僕には亜季ちゃんに会わせる顔がないっ…！　僕は…彼女に…僕のためにアルバイトまでさせておきながら、こもるとデートしてるんじゃないかとかそんなことばかり妄想して、亜季ちゃんを疑ってばかりだった…！　亜季ちゃんのこと、わがままな女の子だとばかり…！　僕は、僕は、このまま秋葉原から去ってしまうよっ…！さようならっ！」

「はーっはっはっ、そっちはロッカールームだよ」

「えっ？」

げっ。なんとお約束な。

ロッカールームの中には、メイド服を脱いで下着姿になっていた亜季ちゃんが…。

「きゃーっ、なんで堂々と入ってきて覗いてるのよーっ！　エッチ痴漢バカ変態！　死ね！」

「ぐえーっ！」

こうして僕は、頚動脈（けいどうみゃく）への亜季ちゃんのツインテール攻撃で失神させられたのだった。

僕が失神している間に、どうやら亜季ちゃんはこもるも倒したらしかった。こもるが全部ぺらぺら喋ったことをしぶやから教えられて、激怒したらしい。

まあ、ともかく…、

やっと亜季ちゃんと二人きりで、秋葉原の街を歩く瞬間がやってきた。

こもるとしぶやは、僕たちの姿を遠巻きに観察しているらしい。というのは、周囲に気を配ると時折ちらちらと猫の着ぐるみの陰が視界の隅っこに入ってくるのだ。まあ、あまり気にしないこと

にしよう。
「あ、あのね…さっき、兄貴が言っていたことは、あれ、全部兄貴が書いているゲームシナリオの話だからっ！　あいつ、現実とシナリオの区別がついていない電波だから、全部忘れていいのよっ！」
亜季ちゃんは怒ったような顔でそう言う。ああ、かわいいなぁ…。
「はいはい。そうだよね」
「あーっ、何よその言い方はっ？　あんた、あたしの言うこと信じてないでしょっ」
「信じてるよ信じてるよ」
「んもう〜…ま、いいわ。それじゃ、午後はあたしが秋葉原ガイドをしてあげるから」
メイド服から春服に着替えた亜季ちゃんが、僕に腕を絡めてきた。
おお、なんということであろう。フハッ。
隣に亜季ちゃん、見渡す限りのオタク仲間、そしてオタクグッズの山、山、山。ここは法悦境か、桃源郷か。
「亜季ちゃん、あっちの行列は何？　クレープでも食べるの？」
「ああー、あれはゲームの体験版の無料配布じゃないかしら？　今日発売の新作かもしれないけど、日曜日だしねぇ」
「あっちの人だかりは？」
「ああ、声優が来てるのよ。トークショーよ、トークショー」
なるほど、いろいろあるんだなー。

発売日になぜ行列ができるの？

やあ少年！　上野で会うなんて偶然天使！　僕は見ての通り新作ゲームを買うための列に並んでるんだよ。

は？　上野にショップはないぞ、これは秋葉原への行列だよ。行列の長さに作品への期待と人気が現れて

るよな〜。ネットで買えばいいじゃないか？　それじゃ特典が付かんだろ！　アキバではそのお店限定の特典が多々ある！　どこで買うか嬉しい悲鳴だろ？　中には全部買う猛者も。同じソフトで棚が埋まるんだ、美しい…。

でもこんな後ろのほうじゃ買えないかもしれないじゃないかって？　それは大丈夫、予約してるから！　ぶっちゃけ並ばなくても買えるよ。じゃあ時間の無駄じゃないか？　確かに…それは正論だよ、でもそれでも。それでも僕らは並ぶんだ！　なぜならっ、そこに行列があるから！　二次元であの娘が僕を待ってるんだ！

「♪　僕らはみんな並んでる。新作ゲームが欲しいから並ぶんだ♪　僕らはみんな並んでる。限定というコトバに弱いんだ。予約カードを太陽に透かしてみれば〜、真っ赤に流れるオタの血潮〜。大人だって腐女子だってカエル宇宙人だって〜みんなみんなオタクなのだ〜友達なんだ〜♪」

え？　ソフトに決定的なバグが見つかり回収？　発売延期？　ぎゃふんっ!!

アキバのイベントってなにがあるの？

秋葉原では四六時中なんらかのイベントが開催されている。サイン会に握手会。トークライブにミニコンサート、聖杯戦争にアリスゲームとまさに多種多様！　中でもおすすめは、声優さん参加のアニメDVD発売記念イベント！　という訳で、今日は君をイベントに連れてってあげよう。…着いたぞ〜。びっくりしたろ、まさかおでん缶の自販機の下が核シェルターになっているなんて。ここならどんな邪魔が入ることもない。狭い？　馬鹿！　間近で見れるって事じゃないか！　このアットホーム感こそ肝なのだ。

今日の作品は今期一番の話題作『デレキス』！　知らないのもしょうがない。那覇ちんすこうテレビなるケーブルでしかやってないからね。きゃ〜、はじまった！　W野沢キター！　ヒロインの双子中学生役のW野沢だ！　知らないの？　W野沢って言ったら野沢○智と野沢○子に決まってるじゃないか！　「ゴメンし

てね兄先生×2」出た、決め台詞！ なっち〜!! マ〜シャ!! え、全然萌えない？ 見ろこのオーディエンスのとろけそうな笑顔を。お前も瞳を閉じ、心眼を開け！ さすれば君にもツインテールのおでこ娘が見えてくる！ いざ、二次元へ！

各ショップでいろいろなイベントがあるので、しっかりチェックしておきたい。モデル／桜川ひめこさん

オタクショップだけでなく、電気屋もたくさんあるし…駅の裏側には巨大な量販家電ショップもあるらしい。いやぁ、ゆりかごから墓場まで、生涯オタク生活の必需品が全部揃うわけか。…秋葉原…なんて恐ろしい街っ…。

「そうだ亜季ちゃん、ＤＶＤレコーダーのお返しに、僕のプラズマテレビあげるよ」

「えっ？ な、何言ってるの？ あっあんな高い

もの貰えないってばっ！　それに、デジタルチューナー入りのレコーダーと組み合わせて使わないと、勿体無いわよ」
「いやまあ、そのうち一緒に暮らすことになったら、また組み合わせて使えるようになるんだから問題ないよ」
「あ、それもそうね。…って、なんであたしがあんたと一緒に暮らさなきゃいけないのよっ、調子に乗るんじゃないわよ！　むっきーっ！」
「ぐえーっ」
ああ、なんかもう、怒らせるためにわざと調子に乗った行動をしているような…。
「そんな高額なもの貰ったらかえって気が引けるから、あれをプレゼントしてちょうだいよ」
「あれって？」
亜季ちゃんが指さしてる先は、キャラクターグッズのお店のショーケース。中には、小さなクマのパペットが飾られていた。
「あれ？　これ、アニメ会の国井さんが手に嵌めていた奴に似てるような…？」
「そうだっけ？　あたし、これ超気に入ったんだけど」
そうだ、亜季ちゃんも縫いぐるみを観ると人格が変わるタイプだからなー。縫いぐるみに萌えてきゃーっきゃーっ言ってる亜季ちゃんは、やばいぐらいにかわいい。買ってあげよう。
「お兄さん、これ下さい〜」
「お客さん、それって、うちの代表の片腕だよー。売れないよー」
あれ？　店番している人、どっかで見たような？　微妙に沖縄弁っぽいイントネーションにも聞き覚えがあるような…。
「あたしがほしいって言ってるのよ！　売ってよ、売りなさいよっ！」
「ぎゃーっ！　店内で暴れないで、お客さんっ！　売ります、売りますっ」
…こうして、亜季ちゃんはクマのパペットをゲットした。

それから、片手にパペットを嵌めて、片手は僕の腕に絡めて、という…学校では絶対に許されないスタイルで亜季ちゃんは秋葉原を巡回したのだった。

キャラクターグッズってなにがあるの？

人気作であれば、今はグッズといっても「ない物はない」くらいに品物の幅がある！　そのため、結構作品からではなく、グッズに一目惚れしてその後で本編（作品）に入る事が多々ある。

想い出深いのが『夜が来る！』の七荻鏡花の巨大バスタオル。一枚五〇〇〇円という、『あたしンち』のお母さんが聞いたら激怒しそうな値段のバスタオルなのだが、それはバスタオルとしてこのバスタオルを見るからだ!!　金髪、ツインテール、ツンデレ、オーバーニーソックス…しかも制服。そんなパーフェクトにさらにパーフェクトを重

これを御神体といわずしてなんと言おう！
『夜が来る！』七荻鏡花のビッグタオル〈COSPA製〈現在品切れ〉〉

ねちゃった、プラモ狂四郎のガンダムも裸足で逃げる完璧さの七荻鏡花サマである。そんな鏡花サマの1メートル以上ある一枚の肖像画、もしくはポートレイトと思えば、五〇〇〇円なんて安い安い。タオル生地に鏡花サマの美しいお姿が描かれた瞬間、これはバスタオルであってバスタオルではなくなっているのだ。
　購入した時はタイトルも鏡花サマの名前すら知らなかったので、バスタオルを出発点に原作であるパソコンゲームを買い、パソコンがないのでファンブックを買い、OVA化されていたのでそれも手に入れ、それでも「やはり本人達（原作）に逢いにいかなければいけない」と、ついにはパソコンまで購入したものだ。こうなると感覚的には、パソコンのほうがよほど鏡花サマのグッズだったと告白しておく！

　いつの間にか、夜になって、そして空には月が昇っていた。
　やばい、面白すぎて時間を忘れていた。
　ああ、亜季ちゃんと二人で回る秋葉原が、こんなに楽しいものだとは。一人でも超楽しい世界だけど、隣にもう一人親友がいるともっと楽しい。いや、親友っていうか…も、もう、僕の彼女…なんだろうか？
「あー、楽しかったー。また一緒に巡回しようねっ」
「う、うん。亜季ちゃん、僕も来週から、日曜日の午前は秋葉原でアルバイトするよ。で、午後は一緒に街を回ってデートしようよ」
「い、いいわよ？　あんたも、合格証書貰ったんだし…い、一応、正式につきあってあげてもいいかしら…？　あ、でも…」
「でも、何？　まだこの上、ミッションが？」
　こ…これ以上ハードなミッションって…想像つかねえ。
　ガクガクブルブル。

「もう一回ちゃんと告白し直しなさいよ。なし崩しっぽいのってダメなのよ、あたし。ちゃんとイベントが発生しないと恋愛とは言えないわ、後から回想する時にイベントを思い出せないと寂しいじゃない」

　いやまあ同感だけど。で、でも。

「ま、また、僕から？　このあたりには、伝説の木が生えてないし…あうあう」

「あんたから告白するに決まってるでしょっ！　なんで、あたしがあんたなんかに告白しなきゃいけないのよっ！　あんた、ちょっとばかりオタクスキルをアップさせたからって、調子に乗りすぎよっ！」

　いやあ、亜季ちゃんってかわいいなあ。

　でも…一度でいいから、亜季ちゃんから好きですって言われてみてぇ…！　あああ、叶わぬ夢と判っているからこそ、人は、夢に向かって突き進まなければならないものなのでしょうかっ？　太陽に向かって飛び続けたイカロスの如くっ？

　うわーっ！　そんなイベントが発生したら、僕はもう、死んでもいいっ！　っていうか即死する！　亜季ちゃん告白イベントのためなら、死ねる！　メフィストフェレスに魂売ってでも発生させてぇっ！

　もし、もしそんな二次元みたいな夢のイベントが起きたら…この世は、この現実の世界はもう、三次元ではなくなって、そして、永久に「2・5次元」になるんだろうなぁ…あああ…。

「そ…そんなにあたしから言ってほしいの…？」

　あっ。もしかして顔に全部出てた？

　亜季ちゃんは、もじもじしながら目を逸らしている。

　でも組んだ腕は離そうとしない。

　今なら…道端だけど、人通りも減ったし…、

…ラー店長もしぶやもいないみたいだし…、

…ペッパーライスでも食ってるのかな。

「…あ、あたしは言ってあげないけど…クマに代わりに喋らせるわ」

亜季ちゃんが、空いているほうの手に嵌めていたクマのパペットをぴょこっと僕の鼻先に突き付けてきた。クマが口をぱくぱく動かしながら、へンな鼻声で喋りはじめた。

『亜季ちゃんはもてる君のこと、ホントは大・大・大好きなんだよー。だから、亜季ちゃんのこと、ずっとずっと、いっぱい愛してあげなきゃダメだよー』

なっ……、

……、

……、

しばらく僕は目を点にして固まっていた。

その間、亜季ちゃんも固まったまま、

（あたしってば…な、なんてことを…）

と言いたげに顔を真っ赤にしていた。

これは…ふ、普通に告白するより、ずっと恥ずかしいではないですかっ？

ああ、これが2・5次元だ。この世は世知辛い三次元なんかじゃない。僕の前に今、二次元の扉が開かれた！

秋葉原は…2・5次元の世界なんだ！

2・5次元ってなんなの？

二次元と三次元の恋愛は、プロレスと総合格闘技の関係によく似ている。昨今、総合のリングでプロレスラーはなかなか結果を出せないでいるが、それだけで総合のほうが優れていると断言はできない。一見同じように見えながら、まったく異なるルールのもとで行われる二つの競技は、文字通り次元が違うのだから。

二次元に三次元のルールを持ち込むのはナンセンスだし、その逆もしかり。電車男にオタクからの卒業を迫ったエルメスや、怪奇映画コレクターである芦屋小雁と結婚する際、その貴重なコレクションを手放させたあげく最後は離婚してしまった斉藤とも子など、なぜ愛を傲慢なルールで縛ろうとするのか？　そ

れで名勝負が生まれると思っているのか？　がんじがらめのルールの中で行われた猪木×アリ戦は世紀の凡戦と酷評され、猪木は莫大な借金を背負い、アリは自ら決めたルールのせいで左足に血栓症を患い、選手生命を縮めることになった。

なぜ愛する者のすべてを受け入れられないのか？『めぞん一刻』の五代くんが惣一郎さんの墓前で言った「あなたもひっくるめて、響子さんをもらいます」をなぜ理解できないのか？　２・５次元とは「プロレス＝二次元＝ファンタジーファイト」と「総合格闘技＝三次元＝リアルファイト」を別物と認識した上で両立できる精神のこと。そしてその二つの次元を認めた上で、俺は大声でこう言いたい。「俺はプロレス（＝二次元）が好きなんだ！」と。

ああ、恐るべきは、秋葉原の魔力。きっと、あの街の磁場みたいなものに亜季ちゃんの脳波は影響を受けてしまったのだ。あんなこっぱずかしいこと…普通でも、できねえ…ましてやツンデレで照れ屋の亜季ちゃんが…ああ、思い出しただけで…、

「思い出すなっ！」

エルボーをみぞおちにクリーンヒットされてしまった。

げほっげほっ。

僕と亜季ちゃんは今、中央線の電車のシートに並んで座っている。

一週間が過ぎた。

あの後、固まって動けなくなってしまった僕と亜季ちゃんの身体を、どこかから湧いてきたラー店長としぶやが分けて、お互いに持ち帰った。

翌日は恥ずかしくて学校に行きたくなくなってしまったが、しぶやに無理やり拉致されて教室に叩き込まれてしまったのだった。

亜季ちゃんのほうも同じ心境だったらしく、その日一日はお互いに目を合わせることもできなかった。

…まあ、二日目になると、朝から何事もなかったかのように会話できるようになったのだが…。

今日は日曜日だけど、秋葉原見学ではない。
午前中は秋葉原でお互いにアルバイトしていたのだが（亜季ちゃんはメイド喫茶、僕はドールショップ）、午後は自由時間なのでデートすることにした。でも、秋葉原を二人で歩くと先週のことを思い出すから恥ずかしい、と亜季ちゃんが言い出したので、今日は池袋に行くことにしたのだ。
「池袋には乙女ロードっていう道があってね、全国から選ばれし腐女子たちが黙々とその坂を上っているのよ。何、その目は？　あんた、腐女子の趣味にはつきあいたくないって思ってるのっ？」
「い、いや、そんなことは。ただ、どんな恐ろしい街なんだろうと…」
「秋葉原ほど大きくないから、そんなに気にしないでいいわよ。ま、男が一人で歩いていたら目立つけど…ちゃんと彼女つきなんだし、問題ないわよぉ」
「そ、そうだねー」
「あんたはもうあたしの彼氏なんだから、これからはあたしの腐女子趣味にもさんざんつきあってもらうんだからねっ！　キモイとか言ったらヌッ殺すからねっ！」
「ガクガクブルブル」
ああそうだ。僕が覗いてきた世界は、男の子オタクの世界だけだった。せいぜいドール趣味が女の子オタクと被（かぶ）ってる程度だった。
しかし、オタク世界は広大だわ。まだ僕の前には、乙女ロードという広大なマトリックス空間が開けているのだ…！
嗚呼、オタク道、果てしなし。
「ま、あんただってペレちゃんのドールに萌えつつ、あたしとつきあってるでしょ？　あたしの腐女子趣味もそれと一緒だから、あたしの脳内やおいキャラに嫉妬したりしちゃダメよ。お互いの脳内にはあんまり干渉しないようにしましょ」
「ちょっと妬（や）けるけど、そうだよねー」
「…もてる×こもる、なんて描いてみたら楽しいかしら…やっぱり、こもるが受けで…」

「それだけはやめてくれ、はーっはっはっはっ」
隣の車両からなんとなく聞き覚えのあるカン高い声が聞こえてきたが、気のせいだろう。

アキバ以外に聖地はないの？

僕の今年の目標は秋葉原に引っ越し念願の週七アキバを実現することでーす！　でもアキバがホームグラウンドになった場合、休日僕はどこに行けばいいんだ？　そ・こ・で、秋葉原以外のオタクの聖地を挙げてみよう！

まずトップバッターは中野。駅北口に広がる一見普通の商店街中野ブロードウェイ、しかし一歩踏み込めばそこはカオスの塊!!　一階を鬼隠し編に喩えるなら二階から上はまさに皆殺し編（？）と、とにかく怪しげな店でごった返している。中でも一番の勢力を持っているのが曼荼羅家。最近は冥土迦符恵なる癒しを目的とした尼寺も多数できて候。

そして池袋。賛謝院六〇の西側に広がるのが乙女ロード。そこまでの道のりは決して楽ではない！　虎ノ穴から襲いかかる猛獣の群れ、賛謝院六〇直進行軍、鬼夜婆倉嬢四死舞との死闘、そして富樫の死…そんなこんなでやっとたどり着いた乙女ロード。君の前に最後の関門が立ちはだかる。清らかな乙女達を外界から守るべく魔法の茨で守られてるのだ。でも案ずることはありません。ここまで辿りついたあなたならそれを解く呪文を知っているはず。さあ、ニンテンドーDSのタッチペンを取り出し描いてごらん。合言葉はそうBL（ハート）。

電車を降りた。
二人で手を繋いで乙女ロードを進んでいくと、どこからどう見てもしぶやにしか見えない男の子（の格好をした女の子）を発見した。しぶやは、エヴァンゲリオン零号機みたいなやる気のない前傾姿勢で、ゆるゆると同人誌ショップへ入っていく

のだった。
「あれって、しぶや…やっぱりオタクだったんじゃないか！」
追いかけていって声をかけようとした僕を、亜季ちゃんが止めた。
「しっ！　見てみぬふりをしてあげなさい。そのうち、お兄さんにもカムアウトしてくれるわよ」
「…そうだね。しぶやのためにも、これからはやおいの勉強に励むことにするか」
「あんた、やっぱりシスコンよね～」
「そ、そうかなぁ？」
「いいんじゃない？　あたし…妹に優しいお兄さんって、好きよ…」
ああ…亜季ちゃん…なんて優しい笑顔なんだ。
うっ？
目が合ってしまった。
またしても、お互いの顔を見合ったまま固まってしまった。
乙女ロードの真ん中で。

ああ、やばい。
僕たちの前にはまだ、長い長い乙女坂が続いているというのに。
なんでこんなにかわいいいんだ亜季ちゃん。
僕を萌え殺す気か。
あああ固まった。動けない。
…先に動いたほうが、やられる！
そんな感じで固まってしまっている。
横を通る腐女子の皆様に、ジロジロと見られてしまっている。
こんな時に限って、ラー店長も来てくれないしっ。
（このへん、現実っぽい）
ああ、頼むしぶや、早くこの兄を助けに来てくれっ…！

僕と亜季ちゃんの2・5次元オタクライフは、
これからはじまるんだ。

いつまでオタクを続けるの？

「いつまでオタクなんか続けるつもりですか？」

僕はこんな意地悪な質問を三次元女にされたら、親指を胸に突き刺しすかさず答える。「この命尽きる時まで！」と！　相手がポカンとしたら二の太刀で「ちなみに来世は美人三姉妹の末っ子に生まれかわって謎の暗黒騎士軍団との壮絶な戦いに巻き込まれるも、なんと敵の首領は幼稚園時代の幼馴染み、あきひろ君で…」と萌え話を続ければ相手は戦意喪失確実！　僕はこれで数々の修羅場をかいくぐってきた。

そんな僕も今年で三二。ふと考える。もし将来ひょんな事から父になり、思春期になった娘（血のつながりは問わず）に秘蔵の一八禁同人誌を見られ「いつまでオタクなんか続けるつもりなの！」と言われた時、本当に同じように答えられるのか。それは即バッドエンド逝きだろうかと。

そんなことは…絶対ない！　その秘蔵本がいかにいい作品なのかを一晩、いや何年かかってでも理解してもらう。逆に、可愛い一人娘（魔族及び妖精でも可）の部屋からやおい同人誌を見つけた時でも、「これ…お父さんも持ってるぞ！」と言える度量を持ったでっかい男に僕はなる！　そして七〇歳まで生き、老人視点でギャルゲーをやりながら死ねたら本望だ。

一生オタク！

我が人生にただ一片の悔いも無し!!

1カ月後
ついにアキバに来たんですねもてる君
どがっ
どがっ
どがっ
ここは僕に任せてください
それじゃ何かゲームでも見ましょうよ
そうしたいのは山々なんですが…
僕としたことが足を負傷したようですこれはメイド喫茶に行くしかありません
いたいよー
選択肢ないんだ
最近はこのメイド喫茶がぴかいちなんですよ～
あ ここは…

おかえりなさいま…
うわっ！
…えと お
お帰りなさいませ
比嘉ご主人様
見ましたかもてる君
僕くらいになると
名前で呼ばれるんですよ
フッ
わ わざわざ下界に
お帰りなさいませ
天上天下唯我独尊
もてる大ご主人様
どれだけ
通ってるんですか
あなたぁぁ！

あーご注文は
お決まりでしょうか
1話にして相続争いで
亡くなるご主人様

なにその嫌な
オリジナルアレンジ！

それじゃ注文は
亜季ちゃんの
スクミズの
おひたし

亜季ちゃんの
季節の下着
盛り合わせ
ひとつー

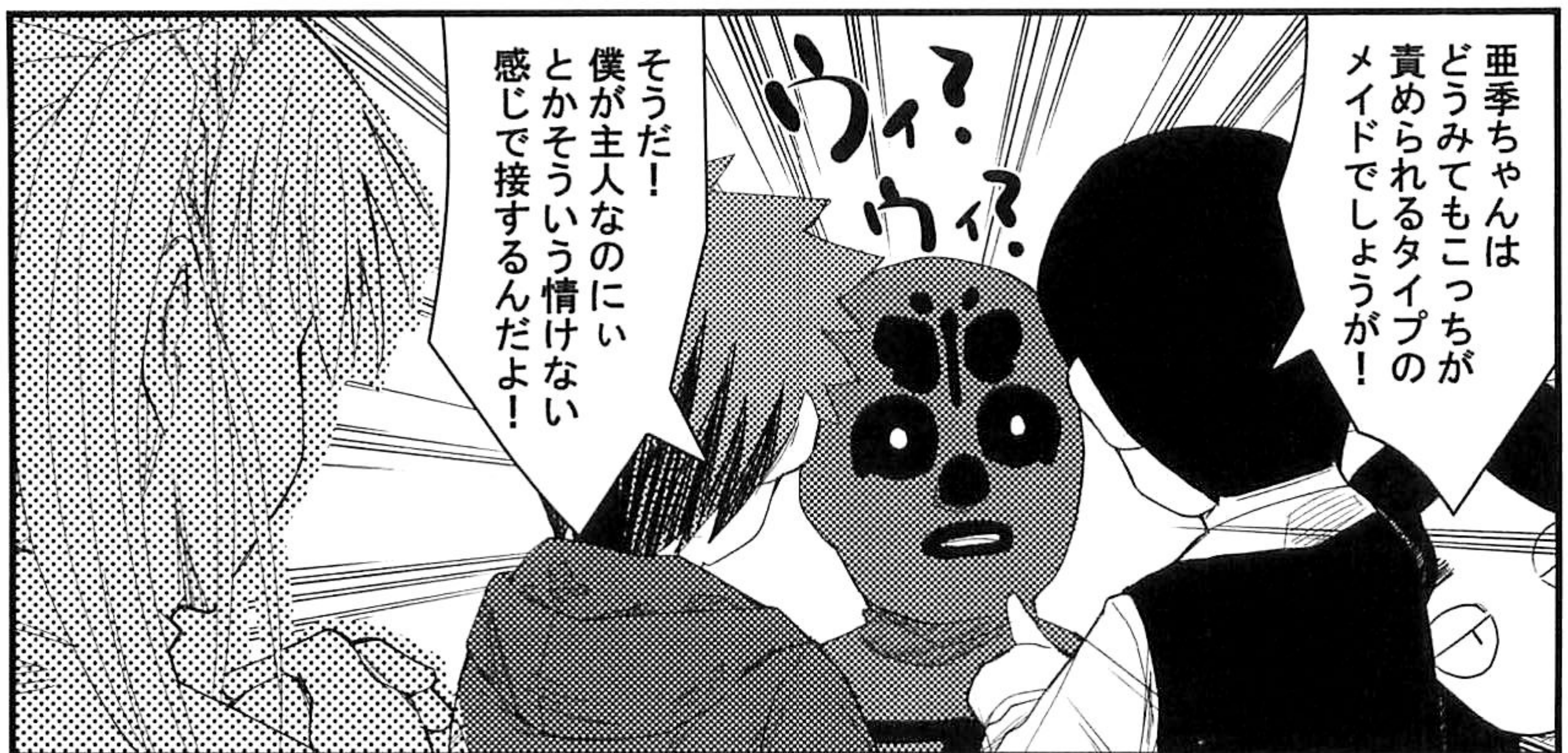
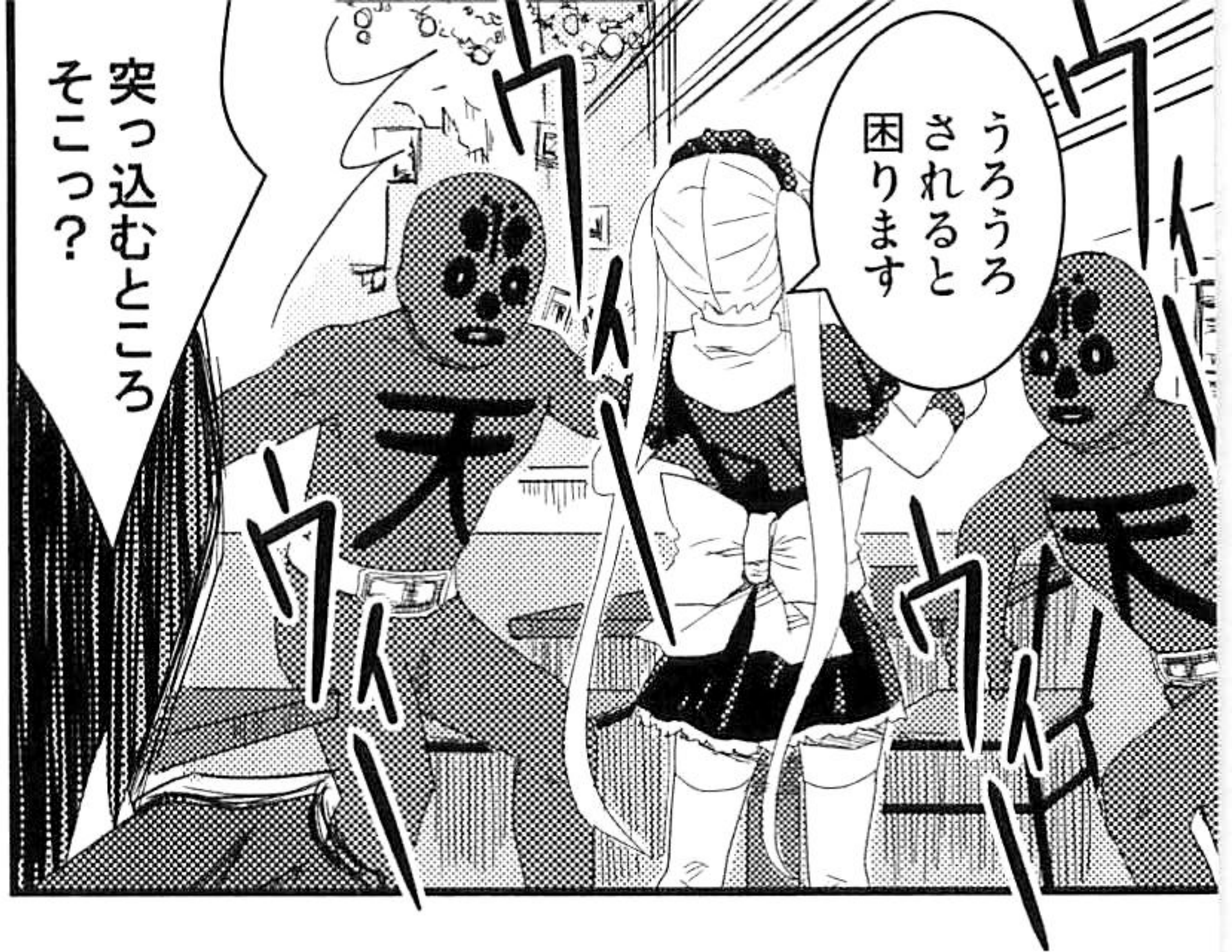
オレンジジュースふたつ
限界まで薄めといてーー！

ほらっさっさと
飲んで帰ってよ！

もてる君のせいで
亜季ちゃん
怒っちゃったじゃ
ないですか

おひたしに
言われたく
ありません

ちょっ
ちょっと
ご主人様！

ウィーー
うろうろされると困ります
突っ込むところそこっ？
ウィー俺たちご主人様ー
キャッ
こらっ お前なにやってんだ！
二人ともあたしを助けようと必死になって…
亜季ちゃんはどうみてもこっちが責められるタイプのメイドでしょうが！
ウィ？ウィ？
そうだ！僕が主人なのにぃとかそういう情けない感じで接するんだよ！

さらに2カ月後

メイドさんが好きだ
妹キャラが好きだ

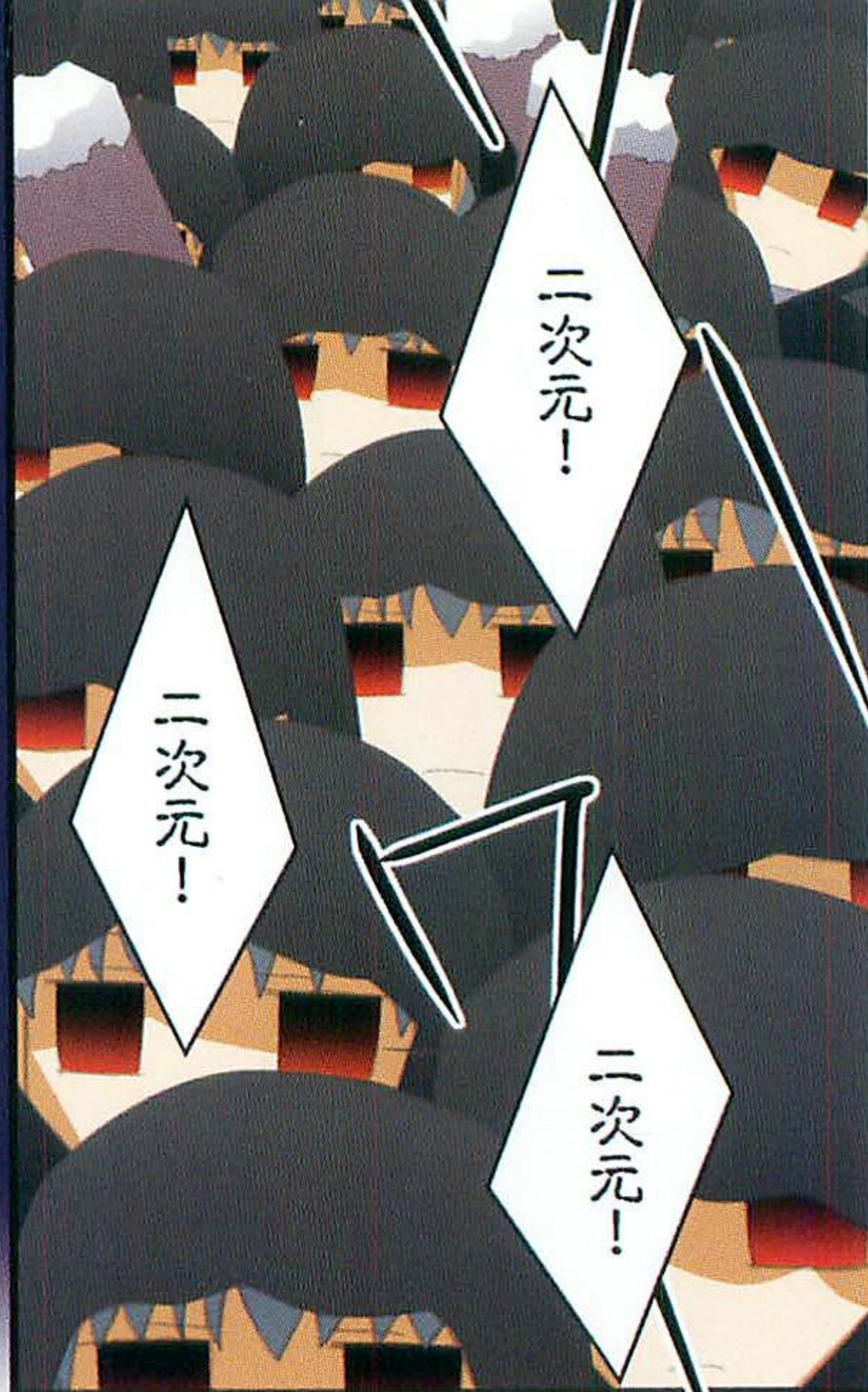
ツンデレが好きだ
メガネっ子が好きだ

みんな
俺は萌えキャラが
大好きだ!

女装っ子が好きだ
女性化少年が好きだ

このアキバに現れた
キャラクターが大好きだ!

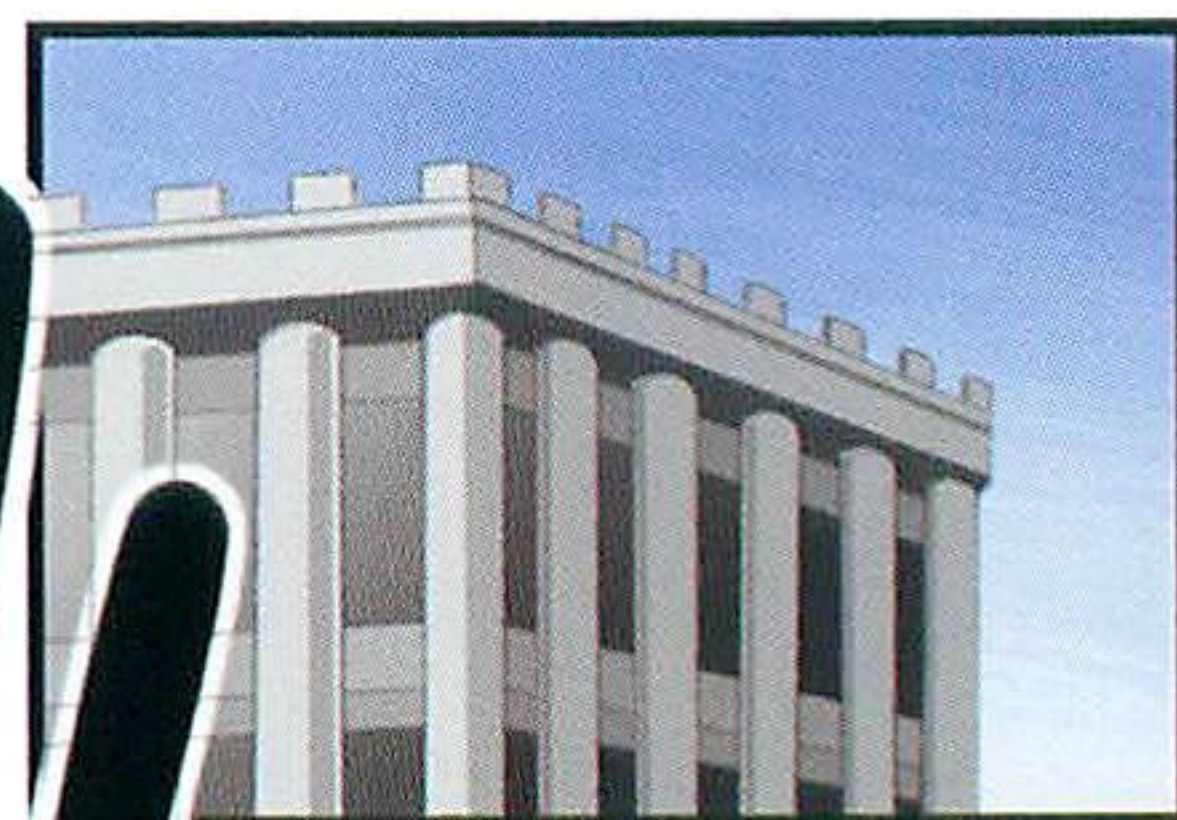
Sofmap

俺は二次元を
天国のような二次元を
望んでいる!

二次元！

二次元！

二次元！

そうだ二次元だ！
二次元への解脱を！

一心腐乱の
大解脱を！

兄チャマが
大変なことに

大変なのデス

まず
あんたが
大変だ

ワンワン探偵みたいな格好してどうしたのよ？
もてる君に何があったんだい？
…兄チャマは二次元に解脱してしまったのデス
解脱？
きっかけは女性化少年キャラに萌え始めたことデシタ
羽場
うっ…
か かわいい…でも元は男の子だし友情を裏切るわけにいかないし…
友情ある前提がもうアウトだから
でも今は女の子だかわいければ萌えて良いのだ
あいまいな態度をとることのほうが彼を傷つけるに違いないのだから…
かっこわるっなに言われてもかっこわるっ

次に女装少年に萌え出しマシタ…

羽場

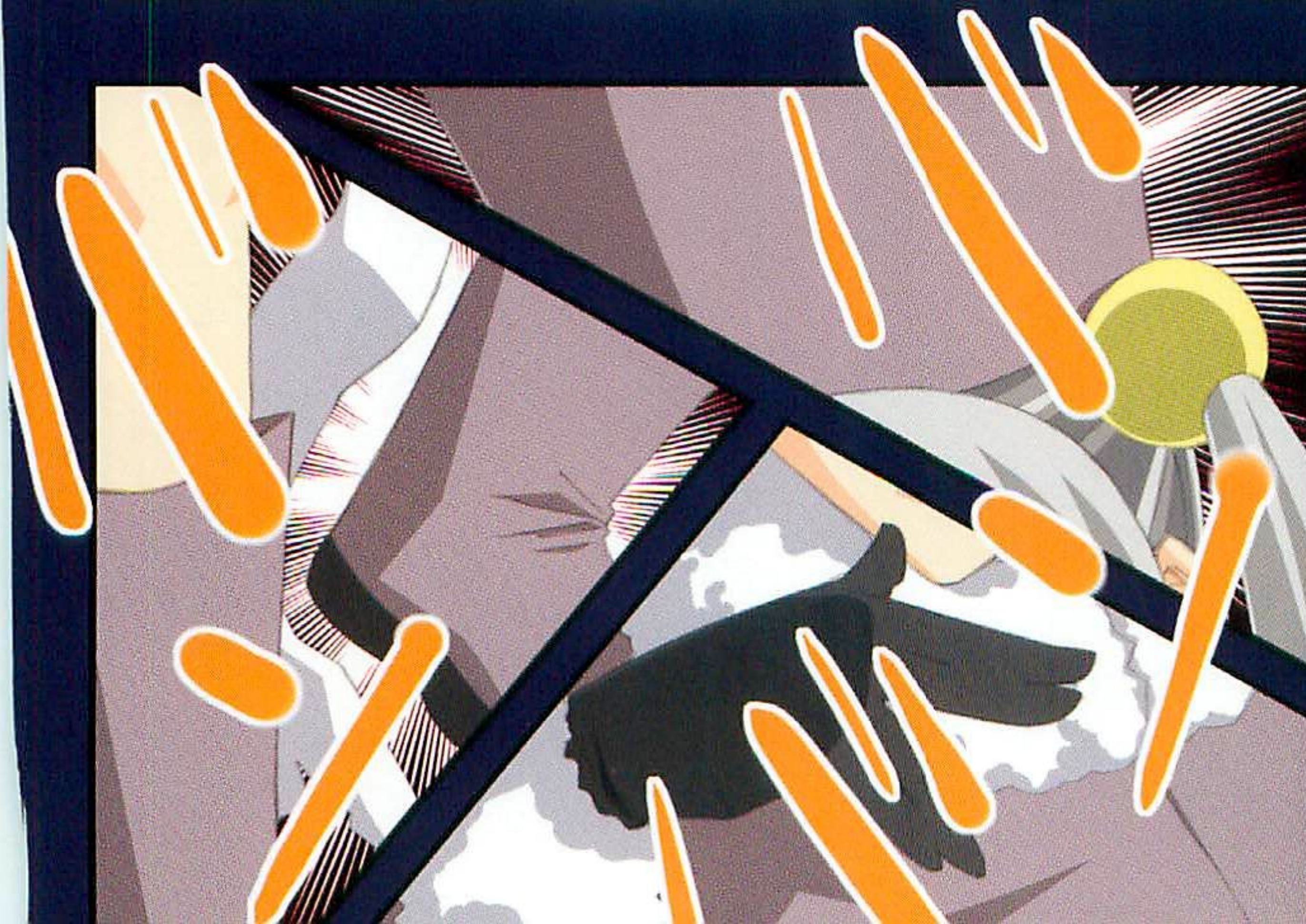
ううっ…

ここの子パンツ脱いだらぱおーんなんだよな

かわいく言おうとして生々しくなったから

でっでもかわいいから萌えて良いのだかわいいは正義だ

僕なら彼を抱きしめることもできる…そして…………………………

こわっ無言とかこわっ

その次の段階でついに兄チャマは二次元に解脱したいと言い出して…

あああ今
僕とペレちゃんが
一体に…

しっしかし
顔が邪魔だ!
どこから見ても
僕の顔だ!

僕は自ら
かわいい
二次元キャラに
なりたいのに

三次元の身体が
邪魔をする
んだーっ!

パリッ

ポリッ

って その辺で
止めなさいよ!
暴走しちゃってる
じゃないの!

いやボクも
ニューキャラに
変身したり
襲いかかる敵を
ちぎっては投げ
ちぎっては投げ

…この手はもう
汚れてしまったの

せんべい
かすじゃん!

困りますよ
着ぐるみで店内を
歩かないでください
常識でしょそんなの

ドッドッ

あんただけには
言われたないわ

ジロッ

着ぐるみではない！
俺はペレストロイカちゃんだ！

ドン

この声っ
もてるなの？
あんた
やりすぎよ！

馬鹿も〜ん
そいつが
ルピンだ〜

言いたい
だけでしょ
それ！

…しかし
危惧してたことが
ついに起きマシタ

兄チャマ
初めて一つの事に
はまったから
暴走してしまって…

わははは
俺はついに二次元に解脱してペレちゃんと身も心も一体化したのだ！
三次元のアナログ女どもよさらばだ！
あ すいません
警察ですか
不審者がいましてですね…はい
猟銃的なものを
決断早っ！
兄貴
あんたのせいよ
なんとかしー
くるっ
なにわかりあってんのよ！
ワイワイ
し 仕方がない
ヒョイ

脱オタだ！

脱オタすれば三次元の女の子にモテモテと吹き込むんだ！

列車男

そして大人のキスができる特典付と言って

さらにこれを幸運のツボとかなんとか言って売るのだにゃー

店長そんな口調したことないし！

そんな汚れた大人のキスなど不要っ！

俺は自分自身に萌えるという究極の悟りを今手に入れたのだ！

あーん二次元キャラよりあたしの方がかわいいに決まってるのにーっ！

兄チャマを脱オタさせるための闘いは今始まったばかりなのデス

《巻末特別付録》

オタの国から 2006 巣立ち

―果てしないオタタク侵略会議!―

二〇〇六年、地球に桜が舞い散る季節のある晴れた日曜の午後…。アニメ会軍団と特別軍事（？）顧問の本田きゅんが一同に会し、オタクの地位向上について作戦会議が行われた。
会議は挨拶がてら〝今日のぼくの属性〟の紹介からはじまった。「ボクっ娘の良さを再認識」「スパッツ娘ってアリだわ」といった大事な報告が出てくるのでなかなか本題にたどり着かない。そのうち「PGガンダムGP01Fb、右腕まで組み上げました！」「『灼眼のシャナ』の最新刊を読み終えました！」など と、ヒネリのないブログ日記のようなユルい報告になってゆく。
そんなカエルの宇宙人達もあきれる作戦会議をしていると、もう午後三時。ここでモアちゃん…モアちゃん役に仕立てたメンバーが「おじさまラブラブ～」「いっぺん死んでみる？」などと能登さまの声マネをしながらお茶をふるまう。当然、似ていないので「アンタじゃ物足りない」と、お茶うけのお菓子が板野サーカスで乱舞することに…。
本会議より長いお茶会が終わると窓の外には見事な満月。さすがに焦った一同はいよいよ本腰を入れる。前回の会議では「いかにしてより多くの三次元人に眼鏡をかけさせるか」という議論が繰り広げられた。最終的には、奥様達が好む韓流俳優や再出発を試みる女性アイドル達にかけさせる作戦が提案され、メンバーが光学迷彩を着込んで楽屋に忍び込んではメガネをおいてくる『砂漠の眼鏡作戦』を展開した。これを読んでいる読者の皆さんは、その成果がどんなものか既に御存じの筈だ。
一応の成功を思い出した一同は、今回パーツである〝メガネ〟だけでなく、ファッション全体について熱い談義をかわしはじめる。
…会議開始からすでに数時間が経過。果たして、今夜中におわるのか!?

国井　本日の議題はファッションに決めました！

　ファッションについていろいろ、いま考えるべきではないのか！　以前から我々の服装を変えろと、要するに、オサレ雑誌にあるような「カッコいい服」をオタクも着るべきじゃないかと周りが言ってきているけれども、そうではないだろうと。好きなもの着て何が悪い、と思った次第です。

本田　そうですよねえ。ユニクロ、カッコいいじゃないですか、安いし。今日着ているの、凄くあったかいのに八八〇円ですよ。でもこの服、ユニクロですらないんですよ。ブロードウェイの隅っこで買ってきた、なんだかよくわからない中国製です。

三平　ユニクロじゃないじゃない！　まあ、大抵のものは、中野ブロードウェイで揃うんです。

本田　そうです。今日着ている服、全部ブロードウェイですよ。上から下まで一万円いかないです。ところでいわゆる「アキバ系ファッション」って、あれは純粋にアキバで活動するための機能を追求した結果、今日の姿になったわけじゃないですか。ですから、変えたら逆に大変ですよ。

三平　よく釣具店で売っているジャケットとかありますよね。ポケットがいっぱいついていて、すぐにいろんなところからアイテムを取り出せる、非常に秋葉原向きのもの。

国井　買ったものを入れるというのが、まず絶対条件にあるからね。

三平　そう。衣類にポケットがついているんじゃなくて、ポケットに衣類がついているんですよ。地肌にポケットじゃおかしいですもん、「我々は有袋類か」という話になってしまいますから。

タツオ　バッグにしても、やっぱりパソコンと同じで「容量が大きい」ということが最優先ダヨね！なにせ我々は家を出る前に、絶対に必要のないものまでシミュレーションをして出ていくわけじゃな

いですか。「もし道端であの人に会ったら、あれを見せなきゃ」みたいな。

三平　（笑）。そうそう。長いスパンで妄想するわけですよ。我々は伝道師なわけです！

一同　（笑）。

本田　いまの渋谷とか原宿のファッションって、現実の生活と遊離しちゃってるじゃないですか。イメージ先行で「雑誌でこういうことをやっているから、それを着る」みたいな感じで、実用性がないんですよ。ファッション雑誌やテレビが発信した情報を記号として刷り込まれているだけなんです。女装ロックの創始者デヴィッド・ボウイは昔『ファッション』という歌を歌って、そういう人たちをバカにしてましたよ。「右向けと言われれば右を向く連中だ」と言って。

タツオ　本当に一般の方々のファッションと言っても、オレらの解釈だと「キムタク」だの「妻夫木聡」だののコスプレだと思うんですよ。違いと言えば、一般の方々は「カッコいい」が基本軸にあるんですけど、僕らは「便利」がファッションの基本軸ですよね。

比嘉　僕らは一人ひとりが「ファッションリーダー」ですから。

三平　同人誌のジャンルで言うなら「オリジナル創作作品」ですよね。

本田　ファッションの自立ですよね。

二〇世紀初頭のドイツにも、バウハウスという合理主義・機能主義に根ざしたデザイン運動があったわけですよ。これは、デザインというものを大衆のために取り戻すという運動でしたから、もとは。いまから見るとオシャレっぽく見えるけど、当時はそうだったんですよ。当時は都市が近代化されて大衆消費文化が広がりつつあったので、「機械的な、大衆のためのデザインを創るのだ」と。まあ、元

祖ユニクロみたいなもんですよね。

一同　へえ〜っ。

タツオ　本田さんが提案するオタクファッションは、どういうものですか。

本田　いま言ったように、機能的にアキバとかで活動しやすければ何でもいいんですけど、個人的には黒が好きなので、僕はとりあえず黒ずくめです。でも、紫や迷彩も捨て難いですよね。まあ、自分がカッコいいと思えばいいわけですよ。他人の目を気にしたファッションなんて、無駄無駄無駄ァ、です。

三平　迷彩は、確かに秋葉原で比率は高いですよね。俺も好んで着ますけれども。機能の面で言うと、日本では完全に必要ないですよね（笑）。

タツオ　じゃあなんで流行ってんの？（笑）。

三平　いや、カッコいいと思っているんですよ（笑）。あとは、もし急に『北斗の拳』みたいな世界になったりしたら、もう着の身着のままで出なきゃいけないわけですよ。そのときにこれが…。

タツオ　ああ、やっぱ機能的なんだよね。シミュレーション能力が高いんだよ、我々は。

三平　服は好きなものでいいんですよ。要は「指図をするな」と。オタクでもブランドが好きだったら、別に着ていいんです。ただ、「このブランドものを着ろ」だとか、押しつけがましいことは言うなと。

本田　ただ、アルマーニのスーツはアキバで活動しづらいですね。

比嘉　ポケットがついてないですからね。ブランドって意味ないじゃないですか、機能上は。

三平 ないない。オレらで「ブランド」と言ったら、ナムコとかハドソンだから。
タツオ 比嘉くんは、なんかさ、もうパッと見ですごいステージの高そうなオタクなんだけど。
比嘉 はい。きょうも『キミキス』のシャツを…。
三平 （ジャケットの中を見せて）俺も、今日着てきましたよ。『あずまんが大王』の大阪Tシャツを。これは、江戸っ子は裏の羽織に気を遣うということで。
本田 ハハハハ。全員、萌えシャツなのに生地が黒いというのがいいですよね。でも、街中でこういうシャツを見ると、「あっ、いま、このキャラが流行っているな」とわかりますよね。
三平 名刺代わりですよね。「ああ、あなたはこのキャラが好きなんですか。私はこういう者です」みたいな。
本田 もうニュータイプですよね、見て解り合えるという。
三平 秋葉原で擦れ違った瞬間に、「おっ！」と思うよね。一瞬立ち止まって、「ピーン！」と。
一同 （笑）。
タツオ 萌えシャツから広げると、オタクにとっての小物はなんですかね？ 非オタクの方々って、なんか男向けのピアスとかネックレスとかアクセサリーまであるじゃないですか。
比嘉 アクセサリー的なもので言うと、ストラップですかね。僕、やってますよ。はい、かわいいストラップ二個。
本田 あっこれは、『苺ましまろ』の…げっ、みんなストラップ持ってますね（笑）。
タツオ 僕らは、このストラップを見るだけで会話できるから、自己紹介する必要がないんですよ。

単に猫を二つつけている人だったら、「ああ、気が多い人なんだな」とわかるじゃないですか。

比嘉　どのキャラとどのキャラを組み合わせているかというのも、その人の主義主張というのがわかりますよね。カミーユとマークIIにするのか、カミーユとゼータにするのか。その組み合わせで、「あっ、こいつはわかってる」と。これこそファッションですね。

本田　それはコーディネートというやつですね。

三平　ここへきて初めてファッション用語らしい単語が出てきたような…。コーディネーター（笑）。

本田　僕が知っている数少ないファッション用語を総動員しています。

一同　（笑）。

三平　他に、オタクにとっての小物といえばバッヂですね。コミケとかに行くと、もう服なのかバッヂなのかわからないような…。

タツオ　ああ、いるいる！　ああ、そうだ（笑）。あれは鎖帷子みたいなものですね。ただ、バッヂが丈夫なのかどうかはわからないですけど。

本田　いやいや、護身ですよ。本当の意味の護身ですよ、あれは。

国井　でももし襲われたら、キャラクターに当たってしまうと辛いから、自分のほうが当たりに行くという…。

三平　バッヂを庇って死んでいく（笑）。

タツオ　指輪とかもしないですよね、みんな基本的に。

比嘉　指輪とかしたら本が傷つくじゃないですか、プラモも作りづらいですよ。

タツオ　うん、邪魔ですね。三平さんメガネっ娘好きだよね。メガネを「アイウェア」とかオシャレっぽく言う風潮をどう思う？

三平　却下、メガネはメガネです。でも、個人的にメガネは全肯定してます。ただ、あざとさが見えた瞬間にメガネは死ぬんです。

国井　「あざとさ」？　「伊達」ってこと？

三平　いや、違います。なんか、流行りに流されてメガネをかけるという計算です。ただ、俺はすごくメガネが好きなんです。だから、俺の中で葛藤がすごくあるんです。確実に魅力が三割増ぐらいになるんです、メガネをかけると。

国井　（笑）。いまはオシャレな人たちで、サングラスもメガネの延長線上にあるでしょう。でもメガネはメガネだよね。

三平　サングラスは、やっぱり「日差しが強い」「目を合わせたくない」みたいなときにかけるものだと思います。そして、ちっちゃいオシャレなメガネは、魔法使いの先生しかかけちゃいけないことになっているんです！

　メガネにはやっぱり「生きるメガネ」と「死ぬメガネ」というのがありますね。メガネもやっぱり機能性重視なんですよ。目が悪いからかけているだけであって、メガネありきで小物として扱ってほしくないんです。それは「死んだメガネ」「あざといメガネ」なんです！　ただ、好きなんです、メガネが。だから、その葛藤がね…オレってやつは不甲斐ないいんだよ…。

国井　誰かこいつを止めろ！（笑）。

本田　メガネかけたらトップアイドルみたいな世界になってきましたからね。漫画雑誌のグラビアも、メガネ巨乳っ子だったりしますから。ちょっと前までただの巨乳っ子だったのに、巨乳の水着でメガネなんですよ、いまは。そうすると売れるという…。

三平　正直、買ってないですよ。買ってないですけど、見たいですね、見てみたい。でも、もうブームは落ち着きますよ、心配しないでください。流行を追いかけているだけなんです、一般人は飽きっぽいから…。メガネを一度かけたのなら、もう死ぬまでメガネをつけなさいと言いたい！

あなた方ね、メキシコのルチャリブレってご存知ですか？　メキシコのマスクマンの…。

本田　ああ、ルチャは生涯、人前では絶対にマスクを取らないんですよね。

三平　あれは本当に重いんです。エル・カネックというレスラーが藤波辰爾と日本でシングルマッチをマッチメイクされたんですけど、勝手に日本側に「これはマスク剥ぎマッチで、負けたらマスクを剥ぐ」と言われて、なんと国外逃亡したんです。

一同　（笑）。

三平　だって、剥ぐということは死ぬということですからね。本当のファッションというのはそういうものですよ。メガネをかけるなら、メガネバンドまでしろということですよ、常に。

タツオ　外せないように（笑）。オタクステージの高い比嘉くんは他になにかこだわっていることとか、ないの？「カバンは襷がけできるやつがいい」とか。

比嘉　カバンは基本リュックなんですけど、両がけのものより片がけのほうがいいですね。なぜなら、クルッと回せるので。

タツオ　でもさあ、やっぱ容量が小さいじゃん。なんかすげえ子供抱いてるみたいに膨らんでいるときがあるじゃん。面倒くさくないの？

比嘉　いや、全然。あれは、まだ序の口ですよ。僕は常にコミケ状態ですから。

三平　比嘉君に俺が感心しているのは、キャリーを引いてくるとこですね。あれは機能的ですよ。地球に荷物持ってもらっているみたいなもんですよ、あれはホントに。地球に身を委(ゆだ)ねているわけです、すごいエコロジスト！

国井　「地球を着ている」んだ。カッコいいね。『週刊地球の着方』（笑）。

タツオ　エコロジーと言えば、オタクは物を大事にしますよね。普通のファッションは回転が早いじゃないですか。春物とか、夏物とか…。着るものの持続時間が長いことを僕は言いたいです。例えばTシャツ一つ取っても、オタクは首回りヨレヨレになるまで使うわけですよ。

比嘉　確かに！　僕は高校のときに買ったやつをまだ着ていますよ。

タツオ　いや、それはひどい！

国井　（笑）。あと、同じ形のものを買うよね。流行りは関係なく。

本田　そうそう。僕がユニクロを好きなのは、みんな同じデザインだからです。この「ひたすら同じデザインの服を集める」というスタイルは『パタリロ！』で覚えたんです。

国井　『おぼっちゃまくん』や『かりあげクン』もそうでしたね。かりあげクンはいつも同じスーツを着ていて、「おまえ、ちゃんと着替えろよ」と部長に言われるんですが「彼らは何もわかっていない…」と。タンスを開けたら同じスーツがバーッと並んでいて。

三平　我々は植田まさしスタイルなんだね（笑）。

国井　だから、オタクは同じのをずっと着ていると思っていて、それがイヤだと言う人が多いんですが、違うんですよ。同じ服をいっぱい持っているんですよ！　そこを理解していただきたい。

本田　それが粋（いき）ってやつですよね。オシャレしていなさそうに見せかけて、オシャレみたいな。

比嘉　キャラぶれしてないということですもんね。

国井　そういうこと、そういうこと（笑）。

本田　決して、アニメのキャラクターがいつも同じ格好しているから、真似をしてるというわけではありません。…たぶん。

三平　コミケ前とかに急にアニメのキャラクターのファッションが変わってしまったら、コスプレイヤーが大慌てですからね、ほんと。同人作家さんたちも、もう入稿は終わっているわけですから。

本田　そうですよね。エウ○カとかはそのへん考えてなかったですよね～、見る度に姿かたちが変わっていくじゃないですか。服は一張羅でしたが。…まあ、エウ○カは羽が生えた状態が一番かわいかったですね。

一同　（笑）。

本田　オタク趣味自体、八〇年代からバブル時代にかけてのモテ趣味とは逆で、誰かに評価されるためにやるものじゃなく、自分が楽しむためにやるものですから、必然的にファッションもそうなるわけですよ。「己のスタイル」を確立すればいいということです。

タツオ　やせ我慢はしなくていいと思うんですよ。だから、僕は基本的に自分の良さを特化していけ

ばいいと思うんです。で、自分の良さを特化していくことを追求した男が、我々の身近に…。

三平　亀子のぶお…もう最高ステージに立ってますね。針が振り切れちゃってます。ここまでくれば、彼は『スタジオ・ボイス』の表紙を飾れると思うんです。

本田　なんかMOMAに行ったら、こういうオブジェありそうじゃないですか。もうファッションを通り越してコンセプチュアル・アートの世界に行ってますよ。

国井　自分の好みを突き詰めると、やっぱり「アート」になるんですね。すごいですよね、「ここまできたか」という…。

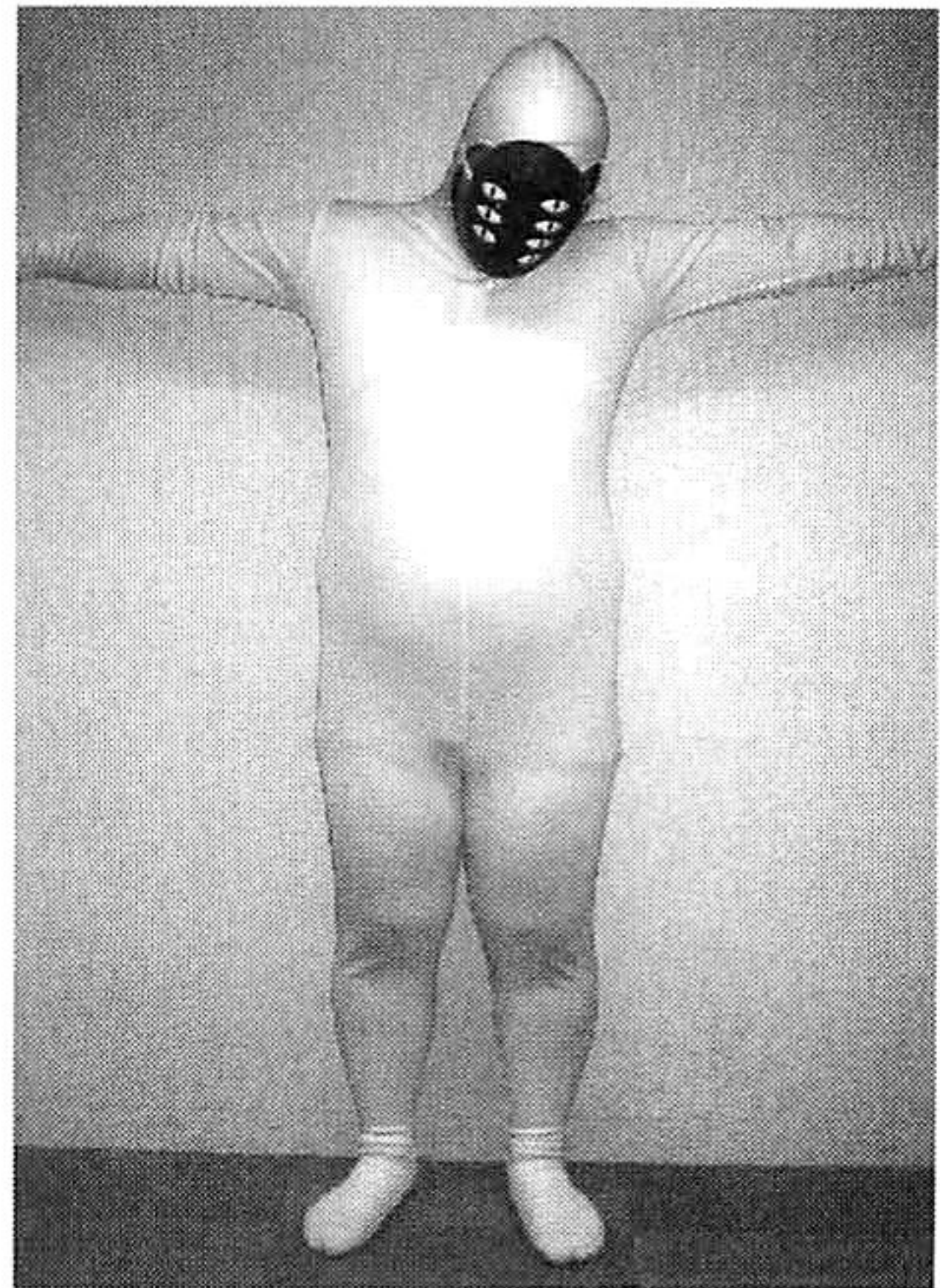
本田　そうですね。だから、いわゆるオシャレ系を僕があんまり真似したくないのは、とにかく雑誌で見た記号をそのままコピーしてやっているからなんですよ。亀子さんのは、もはやゲルニカみたいになってるじゃないですか。すごい根源的な衝動を訴えてきますよね。

国井　これは…見たことないもんな～（笑）。「なんかメッセージあるんだろうな」と深読みしちゃいますよね。

本田　村上隆さんのフィギュアの価格が、ニューヨークですごく高くなっているじゃないですか。それと同じように海外に持っていって「アート」だと言い張れますよ、たぶん。向こうの人たちは本気にしますよ。ええ、「いまの日本の最先端は、これです」と言えば。

タツオ　最先端（笑）。これは、ちょっとヤバい…。

ただね、ここで注意しなきゃいけないのは、ファッションを追求することと、コスプレをすることは別だということです。この格好をして普通の街中を歩けるのであれば、それはもうファッションで

これが、いまの日本の最先端だ！
漢・竜子のぶお

す。決まった場所でしかできないのならコスプレです。これはコスプレだポポ！（興奮のあまり語尾がおかしい）

三平　これで街中に行ったら、都市伝説ですね。絶対都市伝説ですよ！　俺、親戚にいたらイヤだなあ、この人。でもまあ、見ようによっては、和服着用のものなんかは和製ゴスロリですかね？　いや「ゴシック」までですか、「ロリ」までは…（困）。

比嘉　「ゴシックホラー」という感じですね。

タツオ　（笑）。ただね、日本の着物自体、もしかしたら喪男（もおとこ）のためのファッション、喪ッショナブルなのかもしれない。着物って結構機能的なんですよ。物もいっぱい収納できて、着やすいですし。僕らがいま着ている洋服、極論すればアメリカ的なファッションの真似、アメリカのコスプレなんですから。

本田　ジェームス・ディーンとかのハリウッド映画に刷り込まれたわけですね。とりあえず車に乗って、ジーンズ穿（は）くんだと。それで、石原兄弟とかが出てきて、こうなったわけですよね。そもそも、ジーンズだって最初は労働者が穿く機能的なズボンだったのに。ジーンズこそはアキバ系ファッションの源流ですYO！

タツオ　誤解していただきたくないのは、僕らは「これをやれ」と言っているわけではないということですね。ファッションというのは、あくまで真似するもんじゃないポポ！

国井　辿り着いた先がこれであっても、まあいいじゃんと。

本田　真のファッションには敗者はないんです、全員勝ち組なんです。つまり、ファッションチェッ

カーみたいな評論家がテレビで「あの人はイケてる、あの人はダサい」とか「ぷぎゃー」とか言うじゃないですか。それはもう、すべて間違いなんです！

一同　ああ～、いいこと言いますね。

タツオ　一人ひとりが文化であると。「ダサい」「カッコいい」はみんなが決めることじゃない、自分が決めることだと。

本田　「オレがルールブック」というやつですよね。

タツオ　ただ、亀子くんだけダサいですけどね（笑）。

三平　というか、ダサいとかじゃなくて、なんか奇怪なんですよ。奇妙奇天烈ですよね。これは、いつの時代にもいません。

国井　ファッションを追求した末の、バッドエンディングですね。

一同　（爆笑）。

三平　ＣＧ回収率を一〇〇％にしたかったんですよ。で、突き詰めてこうなったと。

タツオ　まあ亀子くんは例外としても（笑）、脱オタとは逆に、形からオタクに入ろうとするのも間違いだと思うんですよ。やっぱりバッヂにしてもバンダナにしても、そのもの自体に愛があるからつけるわけじゃないですか。

本田　そう、ストラップも自然に増えていく。バッヂが大事なんじゃなくて、そこに印刷されているキャラクターで選ばないといけないんです。

三平　たぶん、あれもよ～く見ると、我々がわからない法則性が各人にあるんでしょうね。このキャ

ラとこのキャラは仲が悪いから、ちょっと離すみたいなのがあるわけですよ。

タツオ　そうでしょうね（笑）。しかし繰り返しになりますが、オタクファッションでいいんですよ。みんながオタクであることを恥ずかしくないと思ってくれれば、オタクの人権も回復していくわけです。森永先生が『朝まで生テレビ』に出て、オタクについて滔々（とうとう）と語ったら笑われるわけですよ、女性に。まだまだ差別してもいーやという対象がオタクなんだポポ！

本田　「オタク」と「キモメン」ですね。別に恥ずかしくないので、胸を張って「オタク趣味が好きだ」と言っていればいいんですよ。卑屈になっているから笑われたり、バカにされたり、モテなくなったりするわけなんですよ。世の中、ちょっとでも弱そうな奴を見つけたら攻撃してくる卑怯な人間がいっぱいいますから、隙を見せちゃダメなんです。

三平　うん。見てくださいよ、亀子なんか立派なもんじゃないですか。

本田　彼がミラノコレクションに出たらモテモテですよ（笑）。

三平　これが出たときは、たぶんミラコレ最終回ですよ（笑）。

国井　オサレに分類されていたファッションも取りこんで克服すると、もうホントに秋葉原だけでなく、各地を制圧できそうですよね。議題を移して、勢力拡大のために、次の一手をどう打つか話し合ってみましょう。

タツオ　秋葉原がいまみたいにオタクの聖地になったのは、結構奇跡的な出来事だと思うんです。例えば昔、文学運動で白樺派と言われていた人たちが「新しき村」という共同体を、同じ思想を共有している人たちで作ろうとして大失敗したんですよ。いま秋葉原は自然発生的にそうなっているわ

けですから、まずはアキバを独立国家にすべきじゃないかと僕は思いますね。

本田　アキバ王国。ということは、やっぱり国井代表が最初の王。あるいは、国井さんが暗殺されて三平一族が…。ああ、そうか、バチカン市国みたいにすればいいんだ。日本政府に頼んでアキバだけ独立の領土として認めてもらって、観光地にしてしまえば。

三平　（笑）。いま池袋が、言ってみれば第二のオタクの街になりつつありますよね。池袋も自然発生ですよね。昔から実は多かったんですよ、イベントもやっていましたし。中野もブロードウェイという一大施設がありますね。

本田　惑星が生まれてくるようなものです。もわーっといろいろ集まってきて、気がついたら大きな塊になっていたと。

タツオ　杉並区もアニメの区にしようとしていますね、あと練馬！

本田　じゃあ、『練馬大根ブラザーズ』はオタク誘致計画だったんですね！

三平　あと、早口で言うと「ネリま」が「ネギま」に聞こえるという。

本田　そのうち「ネギま！区」に…。

三平　「ネギま！区」になった瞬間、ブレイクしますよ。「ネギま！区エヴァンジェリン町」とか。

国井　ああ、民族大移動がはじまるな。いいねえ、区役所とか楽しそう。

タツオ　練馬や杉並は地方から出てくるオタクの受け入れ口になってほしいと思いますね。やっぱり、秋葉原は高いですからね、地価が。

比嘉　でも秋葉原や東京で固まるのもいいんですけど、みんなが今いるところで布教活動をして、オ

タクを増やしてくれればと思いますね。オタクになったときに周りにお店がなかったら、せっかく生まれても死んじゃいますから。各地でオタクを増やせば、沖縄から僕みたいに東京に逃げ込む人も減るわけですよ！

三平 逃げ込んだんだ、上京じゃなかったんだ（笑）。

比嘉 上京じゃないんです。「沖縄にはアニメがねえ！」と言って。「アニメがねえ、フィギュアもねえ、メイドがどこにも走ってねぇ」って（笑）。

国井 「オラこんな島やだ」（笑）。

本田 あれは北国の歌じゃないですか（笑）。でも、オタク文化は、一つ拠点ができると結構集まってきますからね。ブロードウェイだって、『まんだらけ』が入る前は何もなかったですから。ほとんどゴーストタウンみたいだったから。

三平 それが、いまやちょっと栄えちゃっていますからね。

本田 あれは『まんだらけ』の社長がいろんな人を呼んだらしいですよ、「お前もやれ、お前もやれ」と。そういう人が一人出てくれれば、村興し、町興しはできますよ。

三平 昔、普通にアニメを見ていた中学の頃は、オタク文化がこんなにでかくなるとは思わなかった。ジブリや押井監督が一般層にもワッと訴えかけたものはあったけれど。

本田 それはありましたけど、ホントにマニア向けの市場がそのままでかくなりましたよね。つまり、作品数も制作者もお金を使うファンも全部増えたということです。

僕は以前『映画秘宝』で切通理作さんと童貞映画対談というのをやりましたけど、なんで日本は映

画界にオタクの才能が集まらなくて、みんなアニメ界やゲーム界に行ってしまうのかという話題になったんです。それは単純にお金の問題ですよ。市場に金があるから作り手が食えるわけです、アニメや漫画、ゲームは。日本では、映画だとなかなか食えない。ハリウッドと差がついたのは、ハリウッドに行けばとにかく食えるわけです。結局、それは大勢のファンがいて、お金を使ってくれるからですよね。

国井 そこは結構重要です。オタクは働かないというイメージを持たれているけど、逆なんですよ！働かなきゃ買えないから、みんな死ぬほど働いているんです！　だから、これを読んでいる若者がいたら、働けと言いたい！

三平 ある一定のオタクレベルに達した人は、もう国がお金を出さないとダメですよ。補助金、援助金。税金は免除。あと、月々のお小遣い。

本田 それ、「働きたくない」と言っているのと同じじゃないですか（笑）。

国井 扶養されてるだけじゃないですか（笑）。

三平 そうだ、借金とかに関しても徳政令を出してもらいましょう、そうしましょう！

一同 （爆笑）。

本田 「そうしましょう」って、国庫が破綻してしまいますよ（笑）。それ、三平さんの個人的な願望じゃないですか！

比嘉 でも、僕らの納めている消費税はすごいですよ。

本田 ああ、この間真紅様（『ローゼンメイデン』）のスーパードルフィーを買ったら、消費税だけで

一万二〇〇〇円ぐらい取られました。

比嘉　ねえ。こういうことですよ。やっぱり国が悪いよ、国が。出てこい、小泉！

三平　我々にお金が入って、それを業界に還元すると。だから国が買ってくださいと。

タツオ　それ位にして（笑）。まあ、二次元ものの業界はお金が循環しますから。三次元世界でガッツリ働いてきたお金をこっちの世界に投入していけば、どんどん我々が生きやすい世界になっていくということだポポ！

比嘉　みんな一緒に頑張ろうという気になりますよね。

タツオ　しかし、まだこの国では二次元に行けない人が多いと思うんです。それは、男性と女性ぐらいくっきりしている差だと思うんですが、「にじいき」できる人は増えていきますかね？

本田　二次元に行けない…ああ〜、地球の重力に魂を引かれた人ですね。ニュータイプかオールドタイプかということでしょうね。我々全員ニュータイプですからね、僕は『月刊ニュータイプ』読みははじめてかれこれ二一年ですから。

タツオ　それはもう、古いじゃないですか（笑）。

本田　いやつまり、二一年前から僕はニュータイプだったわけですよ。で、いまやその『ニュータイプ』で連載を持つほどのニュータイプになって…。

三平　『ニュータイプ』の定義がよくわかんないよ（笑）。

本田　ニュータイプというのは、電波をピピッと飛ばして脳内会話ができ、二次元に行ける人ということです。ヒトの新しいコミュニケーションツールとしてオタク文化と二次元があることを、長年に

わたって象徴し続けている言葉ですね。

いまは、ホントにインターネットのお陰で、人間の意識は全部変わろうとしているわけですよ。だから、必然的にオタク、二次元に行ける人は増えていくんじゃないですかね。昔は、オタク趣味を共有するのがホントに大変で生きづらかったですけど、いまやネットのおかげで毎週『にじいき』を聞ける世の中になって…僕が若い頃にこうだったら、ホントに楽しかったはず。

三平　リアルケロロ軍曹みたいな人たちの話を毎週聞けてしまう（笑）。

タツオ　まあ、想像するのはお金もかからないことですしね、楽しい作業だと思います。

本田　ただ、極めようと思うと、結局お金が必要になっちゃうところがありますね。でも、フィギュアを買うお金がない間は、絵でもいいわけですから。そもそも、人間の歴史は想像力の歴史ですからね。想像しないものは形になりませんし。

国井　ええ。妄想、空想、想像ですから。これらの定義は曖昧なので、オタク道入門者は気にせず妄想でいいんですよ。そのあと空想に行ってもらうと。

駅前秋葉原留学講座では五つのジャンルを取り上げましたけど、一番引っかかったところ、好きなところを追求してもらえばいいわけです。全部を追求するのは、ちょっと無理ですから。好きなものから、いずれ想像にひっくり返ってくるはずです。

タツオ　そういう人が増えれば、二次元に行ける人が多数派を占める、すばらしい世の中になると。

ところで、あと二〇年後位には、オタクのおじいちゃん・おばあちゃんが出てくると思うんです。例えば、三平さんがおじいちゃんになりました。それで、亡くなりましたと。

三平　死んだか（笑）。

タツオ　そうしたら、蔵書の同人誌はどうしますか？

三平　同人誌版・ココロ図書館を死ぬ前に作ります。でも、そんな金があったら同人誌買っちゃうかな…。

本田　なかなか貯金できないんですよね。コミケで同人誌の売り買いをするときに、図書館税を何％か入れて一箇所に集めるというのは？

三平　ああ～、それは面白いですね。そうか、その手があったか…。

タツオ　でも、ホントにオタクのおじいちゃん、おばあちゃんはどうなるんですかね。いまのお父さん、お母さん世代でいますよね。たぶん、死ぬまでオタクだポポ！

三平　やめられないですよね。大体、なろうとしてなれるものじゃないですから。気がついたらなっていたという…たぶん、体質かもしれないですね。

本田　人間のゲノムの中に多分七個ぐらいオタクになる遺伝子があって、それが全部揃ったらオタクになるんじゃないでしょうか。そのうち、濃いオタク同士が結婚して、ミュータントみたいな超人まで登場したりして（笑）。

三平　小学生の同人誌作家とか出てきちゃってね。天才同人誌作家。

本田　出てくると思いますよ～。親がもう蔵書を何千冊も持ってたりする環境からは。だって、手塚治虫さんだって、親がオタクなんですよ。宝塚近辺に住んでいたお金持ちなんですけど、家に映写機があったんですよ、戦前なのに。それで延々オタク映画を見せて、さらに宝塚歌劇にちっちゃい息子

を連れていってたんですよ。「ほ〜ら、女の子がみんな男装してるよ〜」みたいな。

三平 『リボンの騎士』はそうやって生まれたんだ!

本田 それに加えてディズニー映画を見せるわけですよ。それでああなったんですよ、ほんとのオタク養成教育ですよ。

タツオ コミケに子供を連れていくのと一緒ですよね。

本田 そうなんですよ。だから、どんどん刃牙(バキ)みたいにすごいのが出てきますよ。僕は、世代的にみてその先駆けじゃないかと。だって、奥さんは脳内妻ですからね。想像力を高めてフィギュアを巨大化して、ついに一〇〇キロのカマキリと戦えるようになったわけですよ。まあ、みんながみんなこっちにこなくてもいいですけど、今でもすでに日本人の何パーセントかは二次元の人としか結婚できない体質のはずです。だから、今後はもっとすごいのがどんどん出てきますよ〜、楽しみですね。日本だけじゃなくて、全世界にいるはずですから。

国井 我々としては、そういうまだ見ぬ子たちを楽しみに…。

三平 神の子たちよ…。

本田 どうなってしまうんでしょう。我々はやはり、地球を滅ぼそうとしているんでしょうか(笑)。

三平 そんなことはないですよ。だって「エヴァ」でも適格者のことは「チルドレン」って言ってましたからね。

国井 じゃあ、やっぱり滅ぼすんじゃないですか!(笑)。

著者略歴

本田　透（ほんだ　とおる）

1969年神戸生まれ。作家、評論家。Webサイト「しろはた」初代管理人。三次元ではいろいろあった上に喪男だが、そんなことより二次元では妻がいて真紅様がいて大変にぎやかしい。小説『アストロ!乙女塾!　僕は生徒会長に恋をする』（集英社）『本当は萌えるグリム童話』（ワニブックス）、エッセイ『電波男』（三才ブックス）、評論『萌える男』（筑摩書房）など著作増殖中。

アニメ会

1999年に芸人の国井咲也と三平×2がお互いの萌闘気を知り、意気投合して結成したトークユニットで、精力的にライブを開催。2005年に他の三人（サンキュータツオ／沖縄の比嘉／亀子のぶお）と構成作家みやじまこが加入し、国井が代表に就任。6人で『R.O.D』の紙姉妹や『よつばと!』の綾瀬三姉妹を奪い合う血みどろの抗争を繰り返しながら、執筆や声優など、活動の幅を広げている。

二次元へいきまっしょい!
にぷいき

2006年6月1日　初版第1刷発行

著者
本田 透・アニメ会

発行者
栗原幹夫

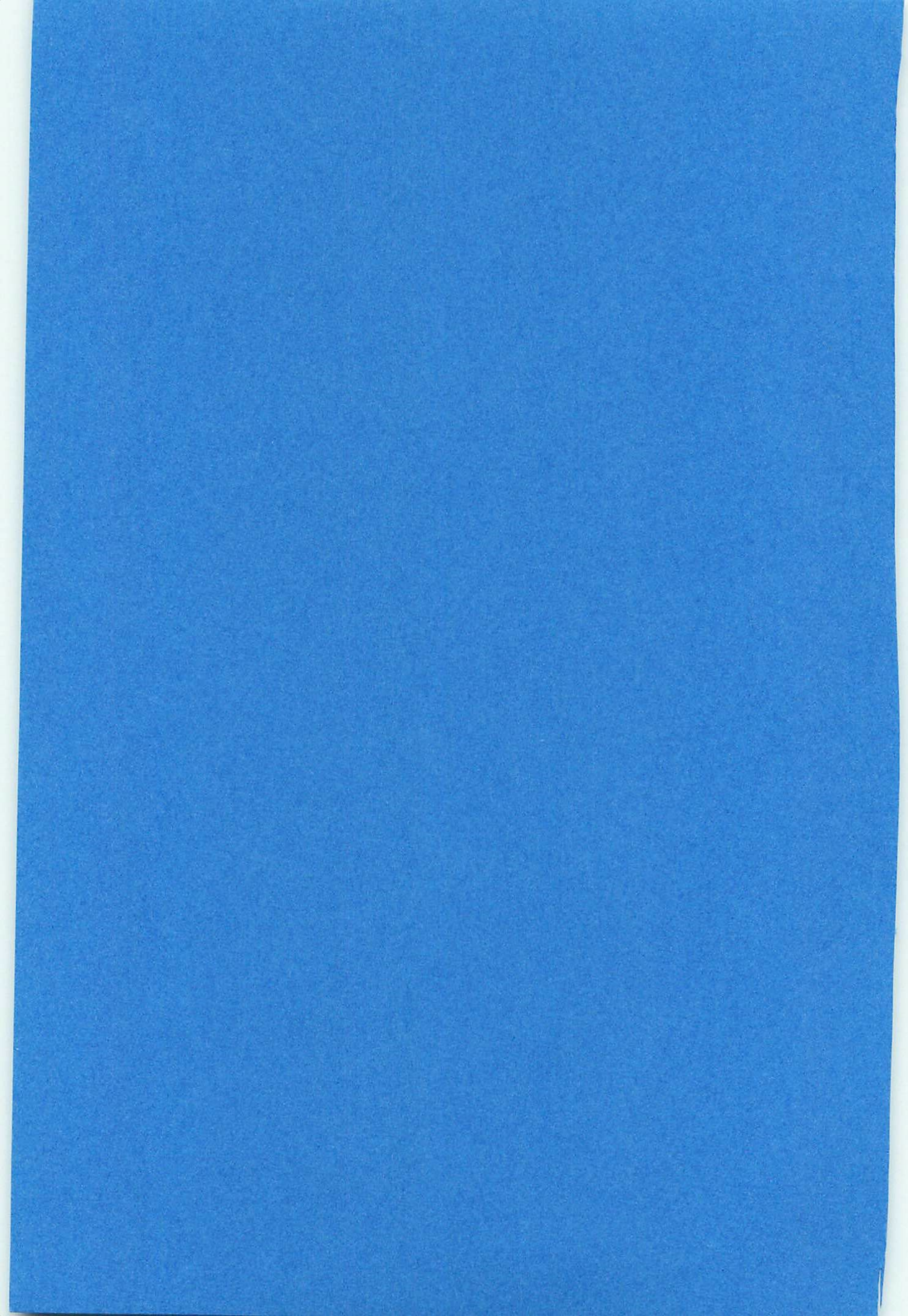
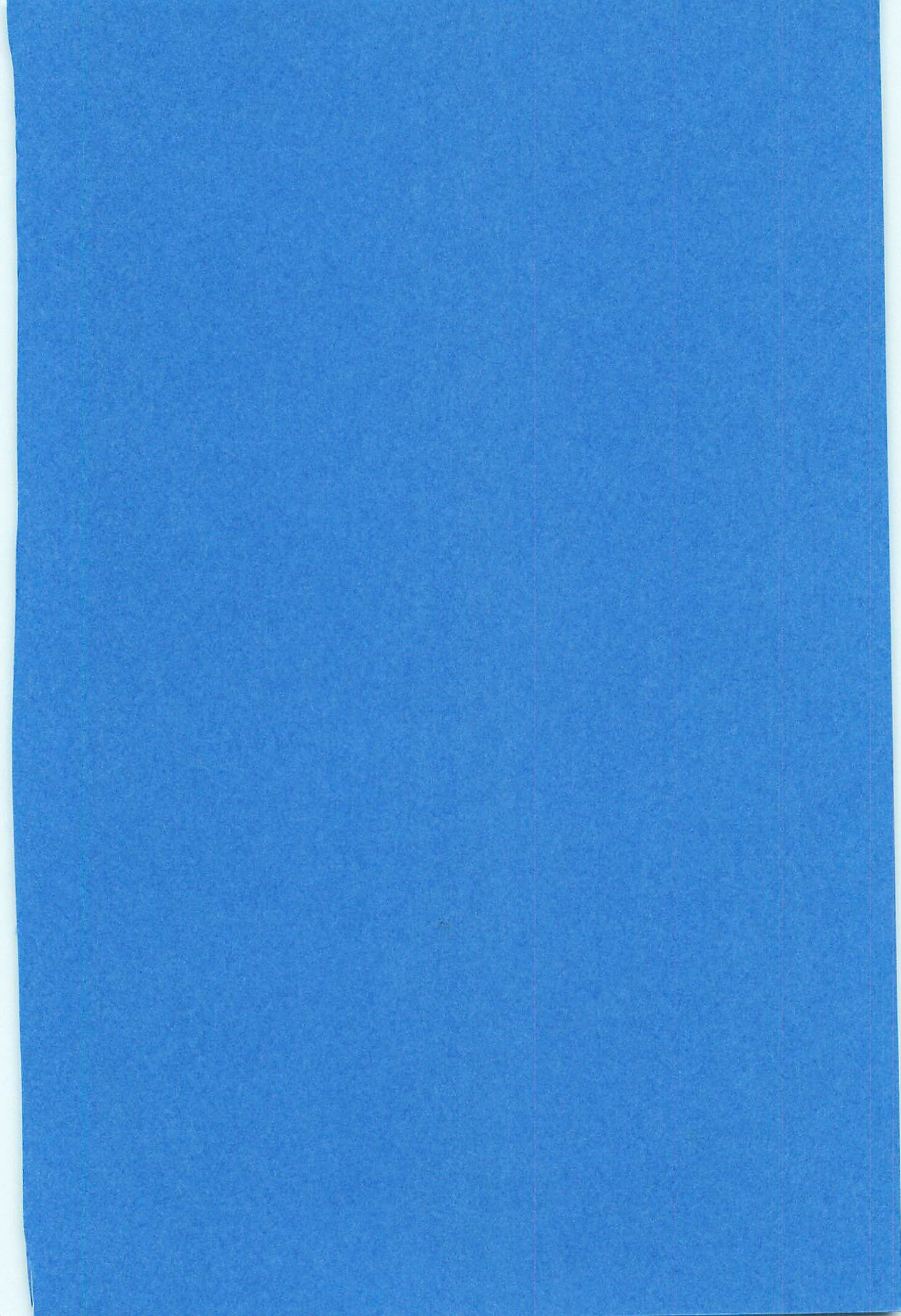
発行所
KKベストセラーズ
〒170-8457　東京都豊島区南大塚2-29-7
電話／03-5976-9121（代）　振替／00180-6-103083
http://www.kk-bestsellers.com/

印刷所
近代美術

製本所
積信堂

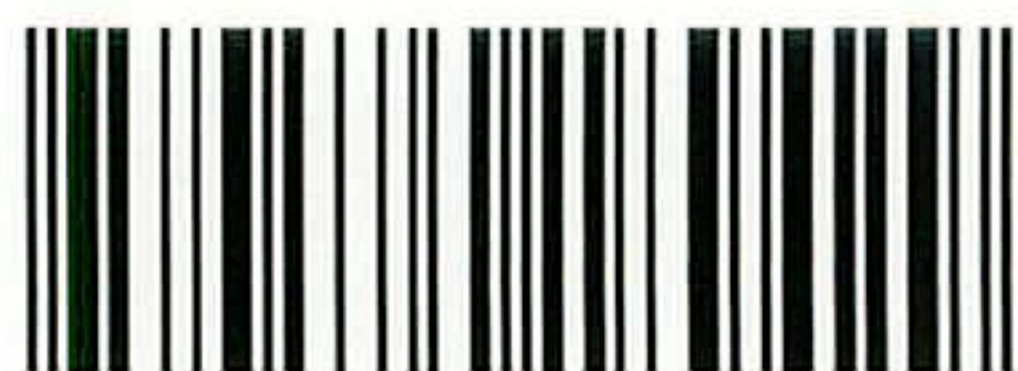
本文DTP
三協美術

装丁＋本文デザイン
小松 昇
（Pencil Studio）

ISBN4-584-18942-0　C0095

本田　透 HONDA,Tohru

1969年神戸生まれ。作家、評論家。Webサイト「しろはた」初代管理人。三次元ではいろいろあった上に喪男だが、そんなことより二次元では妻がいて真紅様がいて大変にぎやかしい。小説『アストロ! 乙女塾!　僕は生徒会長に恋をする』(集英社)『本当は萌えるグリム童話』(ワニブックス)、エッセイ『電波男』(三才ブックス)、評論『萌える男』(筑摩書房)など著作増殖中。
本書籍ではライトノベルを担当。

アニメ会 ANIME-KAI

1999年に芸人の国井咲也と三平×2がお互いの萌闘気を知り、意気投合して結成したトークユニット。『To Heart』のマルチなど、キャラを奪い合うケンカを繰り返しつつ精力的にライブを開催。2005年に他の3人と構成作家みやじまこが加入。国井が代表に就任し、今度は6人で『R.O.D』の紙姉妹や『よつばと!』の綾瀬三姉妹を奪い合う血みどろの抗争を繰り返しながら、執筆や声優など、活動の幅を広げている。
本書籍ではコラムを担当。
(左より順に、亀子のぶお／沖縄の比嘉／国井咲也／三平×2／サンキュータツオ)

9784584189429
1920095014296
ISBN4-584-18942-0
C0095 ¥1429E
定価：本体1429円＋税
KKベストセラーズ

高校の同級生・亜季ちゃんに恋心を抱いた羽場もてるは、果敢にアタック！　しかし会話が成立しない…そう、彼女はオタクだったのです！「モテる」ためだけに、ちゃらちゃらと生きてきた人生をスパッと否定された、もてる。彼は亜季ちゃんと仲良くなりたい一心で、立派な二次元オタクになることを志す。亜季ちゃんに師匠になってもらいオタク道を突っ走るが、オタク道は予想以上に厳しく険しいロング＆ワインディングロードだった。二人の仲ははたして…感涙必至のビルドゥングス＆ラブ・ロマン、ここに参上!!

ああっ、オタクってなんて楽しいんだ!! ∩(・ω・)∩

NIJIGEN he IKIMASSHOI!

HONDA,Tohru × ANIME-KAI

KK-Bestsellers